

『福音の回復』 第一巻

【「神の福音」の真実（基礎編）】

あいさつ

牧師になって40年が経過した。駆け出しの頃、求道者には、「神はあなたをそのまま愛しています」と言い、クリスチャンには、「神に愛されたければこうしなさい」と暗に言っていた。片や無条件で愛されると言い、片や無条件では愛されないと言っていた。勿論、この矛盾には気づいていたが、仕方がないと思っていた。しかし、この矛盾を抱えたまま牧会を進めるのは良くないと思い直し、罪とは何なのか、人が救われるとはどういうことなのか、それらの答えを知るために聖書と真剣に向き合うようになった。その中で見えてきたのは、福音を伝える従来の神学の表現には限界があるため、誤解が生じ、福音を正確に伝えることが難しくなっているということであった。

例えば、人間が持つ永遠性（魂）と有限性（体）との矛盾が「不安」を生じさせ、その「不安」が罪の原因になっていることが解き明かされた昨今では（キェルケゴール）、アダムが犯した最初の罪、いわゆる「原罪」が遺伝したから人は罪を犯すという従来の神学の表現は意味不明でしかない。これでは、福音を正確に伝えることは難しい。

そこで、今一度「神の福音」を精査し、福音を正確に伝えることを目指すことにした。「義認」、「聖化」、「栄化」という言葉で表現されてきた従来の福音を、現代人にも理解できる福音の表現に翻訳し直すことを試みた。従来からある定式化された表現は用いず、それを別の言い方に焼き直してみた。そうしたことから、本書のタイトルを『福音の回復』とした。これは別段、新たな教理を打ち立てるということではなく、聖書に書かれていることの意味を正確に伝えるものである。本書はあくまでも、聖書は神の靈感によって書かれた神の言葉だと信じ、神は三位一体であると信じ、イエス・キリスト以外に救いの名はないと信じる信仰を土台にするものである。尚、『福音の回復』は全四巻から成り、その基礎となるのがこの第一巻である。

2024年9月1日

神木イエス・キリスト教会

主任牧師 三谷和司

前書き

キリストは罪を取り除くために来られた。「キリストが現れたのは罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています」（Ⅰヨハネ 3:5 新改訳聖書第三版）。それゆえ、罪を取り除くのが「神の福音」である。ならば、罪とは何なのか。そもそも、なぜ人は罪を犯してしまうのか。そうしたことの理解が曖昧であれば、罪を取り除く福音を伝える私たちの表現も曖昧になり、さらにはそれを聞いた人にも福音に対する誤解を生じさせてしまう。そこで、どのような誤解を生じさせてしまうのか、実際にあった伝道集会での話を基に物語を創作したので、それを読んでみてほしい。

『伝道集会での出来事』

大きな会場で、キリスト教の伝道集会が行われた。
始めに賛美を歌い、いよいよ説教者の登場である。
彼は、汚れたグラスを高々と掲げ、こう叫んだ。

**この汚れたグラスは、あなただ！
あなたもこのグラスのように、内側も外側も、罪で汚れきっている！**

それから、説教者は汚れたグラスをテーブルに置き、
右手でハンマーを高々と振り上げ、叫んだ。

**このハンマーは、神の正義だ！
罪で汚れてしまった者に対する、神の怒りだ！
あなたの罪は罰せられ、あなたは滅ぼされなければならない！**

こう叫んだ説教者は、
汚れたグラスめがけてハンマーを振り下ろそうとした。
ところが、その瞬間、もう片方の手がテーブルにあった鍋を取り、
汚れたグラスを覆い隠した。
ハンマーは鍋に激突し、鍋は大きく傷ついてしまった。
だが、汚れたグラスは助かった。そこで、説教者は次にこう叫んだ。

この鍋こそ、イエス・キリストである！

この方が、あなたの罪の罰を代わりに受けてくださったので、
神の怒りも収まった！

だからイエス・キリストを信じれば、罪の罰が赦され、救われる！

この説教を聞いたある少年は思った。「汚れた者をやっつけようとする神は、
何と恐ろしい方なのだろう」と。少年はすっかり神に怯えてしまった。

また他の少年はこう思った。「イエス様が犠牲にならなければならないほど、
自分は罪深い者なのだろうか」と。少年はすっかり自分に落胆してしまった。

さらに他の少年はこう思った。「イエス様は、結局何をしてくれたのだろう。
神の怒りを鎮めてくれたのは分かるが、神を怒らせた僕の罪は何も変わって
いない。グラスは汚れたままだ」と。少年はすっかり希望を失ってしまった。

以上が、『伝道集会での出来事』である。この伝道集会では、従来からある定式化された表現で福音が語られていた。この表現からは、イエス・キリストが私たちのために犠牲になってくれたという感動は伝わってくる。しかし、同時に、自分は「汚れたグラス」であって、神を怒らせている「ダメな者」という印象を聞く側に強く持たせてしまう。自分自身を「ダメな者」とさげすませ、何をすれば「良き者」になれるのかという不安を抱かせてしまう。それだけではない。信じても本当に天国に行けるのかという、将来に対する恐れも持たせてしまう。これでは、肝心の罪を取り除く福音が何も伝わらない。伝わってくるのは、神を怒らせた罪の罰が帳消しになるということだけであって、罪そのものから贖い出される希望は全く伝わらない。そうすると、罪の処理は自分の努力でしなければならないのだと思ってしまう。

このように、罪の理解が曖昧だと、福音を伝える表現も誤解を招くことになる。特に、現代はそうである。というのも、現代社会に於いては、罪の理解も罪の原因の理解も、格段に進歩したからである。どうして人は罪を犯してしまうのか、そうした罪の理解は人間理解の進歩と共に深くなり、それは「不安」にあることが分かっている。では、なぜ人は「不安」を覚えるのか。それは、人が異なる二つの思いに支えられているからである。一つは魂が発信する「永遠性」への思いであり、もう一つは体が発信する「有限性」への思いである。この二つの思いは相容れないので、人はどちらを信じれば

よいかと「不安」になり、見える安心を求めて罪を犯す。具体的に言えば、人は「永遠性」の世界を知っているのに、この世界は「有限性」であり、死に向かっているので「不安」を覚え、生きる安心の獲得を巡って争ってしまう（罪を犯す）。死にたくないいと思っても、死の現実が人を「不安」にさせ、神ではなく見える安心をむさぼらせてしまう（罪）。したがって、人を支える相容れない二つの思いから生じる「不安」が、人にとっては「罪」を生む装置になっている。この仕組みを分かりやすく解き明かしたのが、実存主義哲学の先駆者であるキェルケゴール（1813-1855）であった。

そこで、聖書に目を向けると、聖書も相容れない二つの思いに人は支えられていることを教えている。一つは「肉の思い」であり、もう一つは「御霊の思い」である。「肉の思いは死（有限性）であり、御霊による思いは、いのちと平安です（永遠性）」（ローマ 8:6 新改訳聖書第三版 ※（ ）は筆者が意味を補足）。そうすると、人は「不安」を覚えて当然なので、罪を犯したくて犯しているのではないということになる。罪を犯しているのは、もはや私ではなく、相容れない二つの思いから生じる「不安」が、私のうちに住み着いている「罪」ということになる。「ですから、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです」（ローマ 7:17 新改訳聖書第三版）。そうであれば、罪は病気という扱いになるので、罪人は病人ということになる。現に、イエスは罪人を病人として扱われた。

「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」

（マルコ 2:17 新改訳聖書第三版）

つまり、私たちは罪を犯すから罪人なのではなく、罪人（病人）だから罪を犯すということである。このことをイエスは知るがゆえに、次のように言われた。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ 11:28 新改訳聖書第三版）

これが、イエスの語られた福音である。イエスは、罪人のことを「疲れた人、重荷を負っている人」と言い、その罪の処理については、「わたしがあなたがたを休ませてあげます」と言われたのである。ここに、神の福音がある。このイエスの表現は、人間理解の進歩に伴い罪の理解が深くなった今日の私たちにも、誤解なく伝わってくる。

しかし、私たちは人間理解の不足のせいで、先述した物語『伝道集会での出来事』のように福音を語ってしまい、イエスが語られた福音の表現を曲げてしまう。しかも、自分の見ている世界が真実だと思い込んでいるため、福音を曲げていることにも気づかない。無意識のうちに、「人間的な標準」で人を知るように、神も知ろうとしてしまうので、「神の福音」の真実を曲げてしまう。その結果、『伝道集会での出来事』のような福音を語ることになる。こうした現象を理解するために、次に『太陽と子ども』という例話を創作したので、読んでみてほしい。

『太陽と子ども』

子どもは「太陽」を見たとき、こう思った。

「太陽」は、何て小さいのだろう？

「太陽」はなぜ、ぼくの周りを回っているのだろう？

子どもは家に帰ると、早速そのことを親に話した。すると親はこう言った。

「太陽」から見ると、人間の方が遙かに小さいのだよ！

「太陽」から見ると、人間が「太陽」の周りを回っているのだよ！

子どもは驚いた。というのも、自分は今まで自分の見ている世界が真実だと思ってきたのに、それは真実ではないと知ったからである。

この例話は、人の見る世界が真実とは限らないことを知ってもらうために書いたものである。ここでの「太陽」は「神」の比喻であり、「神」から見る世界が真実であることを示している。しかし、人は自分の見ている世界を真実だと思ってしまう。そして、この世界の「人間的な標準」で人や神を知ろうとしてしまう。その「人間的な標準」には「罪には罰」という基準があるが、その基準で「神の福音」も知ろうとする。そのような基準で見れば、神は人の罪には怒って罰を与える方となるので、『伝道集会での出来事』のような福音表現をするしかなくなる。だが、それは自分の周りを「太陽」が回っていると思っていたこの子どもと同じである。そこで聖書は、「人間的な標準」で人を知るように、神のことを知ろうとすることがないようにと警告している。

「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」（Ⅱコリント 5:16 新改訳聖書第三版）

この警告に従って「人間的な標準」を排除し、「神」から見る世界を真実とするのであれば、キリストが私たちの罪のために十字架に架かり、「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」（ルカ 23:34 新改訳聖書第三版）と祈られた以上、神は人の罪に対しては「罪には罰」ではなく、「罪にはあわれみ」を抱くことが分かる。そうであれば、『伝道集会での出来事』のような福音表現にはならない。こうした聖書の読み方こそ、ルターが標語に掲げた「聖書のみ」の読み方である。それは聖書に書かれていることを「人間的な標準」ではなく、聖書で解くということである。ならば、「人間的な標準」を、どう排除すればよいのか。

その一つの手段は、人間理解を深めることである。例えば、近代に於ける人間理解の礎を築いたカント（1724-1804）は、「理性」の限界を証明し、人が持つ問いの答えは神を信じる信仰でしか得られないとした（『純粋理性批判』）。つまり、真実は聖書でしか知り得ないということである。そのおかげで、努力すれば何でも知り得るとした「人間的な標準」が排除された。このカントの教えを基に、キェルケゴールは、罪の原因は「不安」にあることを突き止めることができた。すると、罪はどうすればよいのかという新たな問いが生じるので、キェルケゴールは、「不安」による「絶望」が信仰と結びつくことで解決すると、すなわちイエス・キリストを信じる信仰で解決するとした（『キリスト教への修練』）。このように、人間理解を深めることで罪の理解も深まり、これまでの「人間的な標準」も排除され、真実な福音が見えるようになる。

まことに真実は、神の目に映る姿である。にもかかわらず、人は人間の目に映る姿を真実としてしまうので、神の目に「然り」と映る「神の福音」が見えなくなる。それゆえ、『伝道集会での出来事』でのような表現をすることになる。そもそも聖書は、人は自分の「真実な姿」を認識することができず、曇った鏡に映る自分を見ているにすぎないことを教えている。それは、『太陽と子ども』の例話の子どもと同じである。

「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ているが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。」（Ⅰコリント 13:12 新改訳聖書第三版）

したがって、人の悲劇は、人の目では自分の「真実な姿」が認識できないにもかかわらず、自分が見ている姿を自分の「真実な姿」だと思い込んでしまうことにある。神の目に映る自分の「真実な姿」が見えないにもかかわらず、周りから言われる姿を自分の「真実な姿」だと思い込み、傷ついていることが悲劇である。その様子は、アンデルセン童話の『醜いアヒルの子』と何ら変わりがない。そこで最後に、私なりの表現で要約した『醜いアヒルの子』の物語を読んでみてほしい。

『醜いアヒルの子』

“アヒルの中で生まれたひな鳥がいた。そのひな鳥は、アヒルの子として育てられた。ところが、アヒルの子にしては見た目が灰色で、他の仲間と違っていた。それで、その子は仲間からいじめられるようになった。育てた母親も、愚痴を言うようになったので、その子は自分を醜いアヒルの子で、生きる価値のない「ダメな者」だと思い込むようになった。そして、ついにその場所を出て行く決心をし、当てもなく旅を始めた。だが、行く先々でも馬鹿にされ、嫌われたので、アヒルの子はますます自分を価値のない「ダメな者」と思うようになり、ついには死にたくなってしまった。そんなある日のこと、アヒルの子は美しい白鳥の群を見た。あまりの美しさにもっとそばで見たいと白鳥に近づいた。すると、そこで湖面に映る自分の姿を見た。何とその姿は、あの美しい白鳥と同じであった。自分は醜いアヒルの子ではなく、美しい白鳥だったことに気づいたのである。”

この物語での最大の悲劇は、アヒルの子が自分の「真実な姿」を知らなかったことにある。私たちの最大の悲劇も、これと同じである。私たちも、周りから言われる自分の姿が真実だと思い生きているからである。しかし、それはあくまでも人間の目に映る姿であって、神の目に映る姿ではない。神の目に映る姿が人の「真実な姿」であり、それは神に似せて造られた姿であって、「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて」(創世記 1:26 新改訳聖書第三版)、その姿は「神の子」なのである。「私たちは、今すでに神の子どもです」(I ヨハネ 3:2 新改訳聖書第三版)。神に愛されている「良き者」である。だが、人はその事実を知らずに生きている。その結果、罪を取り除く「神の福音」を、誤解を招く表現で語ってしまう。

例えば、罪を犯す者を見て「ダメな者」と決めつけ、罪を取り除く福音を、「ダメな者」を「良き者」にする話にし、「罪を悔い改めよ」という説教をしてしまう。しかし、少なくとも新改訳 2017、新共同訳、聖書協会共同訳には、「罪を悔い改めよ」というフレーズは一箇所もない。「悔い改めよ」はあっても、「罪を悔い改めよ」は一箇所もない。しかも、「悔い改めよ」の原文の意味は「向きを変えなさい」であって、向きを変えて神のもとに来なさいという「招待」である（これについては本文で詳しく説明する）。ならば、聖書は罪を取り除く福音をどう表現しているかといえ、例えば、人は神に似せて造られた「良き者」なので、「良き者」から「良き者」へと変えられていくという話で表現している。

「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。」
(Ⅱコリント 3:18 新改訳聖書第三版)

「栄光から栄光へ」とは、「良き者から良き者へ」であって、「ダメな者から良き者へ」ではない。しかし、人は自分の姿を見て、アンデルセン童話の『醜いアヒルの子』と同じように、自分は愛されない「ダメな者」と思い込んで苦しんでいるため、罪を取り除く福音を「ダメな者から良き者へ」と表現してしまう。

そこで、本書は進歩した人間理解を参考にすることで「人間的な標準」を排除し、聖書に書かれていることの意味を聖書で知ることを目指した。それにより、「神の福音」の真実を現代人に正しく伝えることを試みている。そのため、「義認」、「聖化」、「栄化」といった従来の表現は用いず、現代人にも分かるように、進歩した人間理解に基づく表現に置き換えた。そういう観点から、タイトルを『福音の回復』とした。それは四巻から成り、本書はその第一巻である。第一巻の副題は、【「神の福音」の真実（基礎編）】であり、これを基に第二巻では「神の福音」の真実をさらに掘り下げていくので、副題を【「神の福音」の真実（応用編）】とした。さらに第三巻では、第二巻で生じ得る神学の疑問に深く答えていくので、副題を【深く学びたい人のために】とし、第四巻では聖書を深く理解することを可能にした哲学の話をするので、副題を【哲学と聖書】とした。全てはこの第一巻を土台に話を展開していく。

表記について

『福音の回復』での聖書の引用は新改訳聖書第三版を使用する。そうでない場合は、その都度聖書訳名を表記する。ただし、その場合の聖書箇所の変換は、新改訳聖書第三版の変換を基に本書独自の「略語」を用いる。例えば、新共同訳は「コヘレトの言葉」と表記するが、新改訳聖書第三版は「伝道者の書」とするので、本書は「伝道者」と記す。以下、『福音の回復』で引用した聖書箇所の変換の一覧である。

－旧約聖書－

本書の「略語」	新改訳 第三版 新改訳 2017	口語訳	新共同訳 聖書協会共同訳
創世記	創世記	創世記	創世記
出エジプト	出エジプト記	出エジプト記	出エジプト記
レビ記	レビ記	レビ記	レビ記
民数記	民数記	民数記	民数記
申命記	申命記	申命記	申命記
ヨシュア記	ヨシュア記	ヨシュア記	ヨシュア記
士師記	士師記	士師記	士師記
I サムエル	サムエル記第一	サムエル記上	サムエル記上
II サムエル	サムエル記第二	サムエル記下	サムエル記下
I 列王記	列王記第一	列王紀上	列王記上
ネヘミヤ	ネヘミヤ記	ネヘミヤ記	ネヘミヤ記
ヨブ	ヨブ記	ヨブ記	ヨブ記
詩篇	詩篇	詩篇	詩編
箴言	箴言	箴言	箴言
伝道者	伝道者の書	伝道の書	コヘレトの言葉
イザヤ	イザヤ書	イザヤ書	イザヤ書
エレミヤ	エレミヤ書	エレミヤ書	エレミヤ書
エゼキエル	エゼキエル書	エゼキエル書	エゼキエル書
ダニエル	ダニエル書	ダニエル書	ダニエル書
ホセア	ホセア書	ホセア書	ホセア書
アモス	アモス書	アモス書	アモス書
ミカ	ミカ書	ミカ書	ミカ書

－新約聖書－

本書の「略語」	新改訳 第三版 新改訳 2017	口語訳	新共同訳 聖書協会共同訳
マタイ	マタイの福音書	マタイによる福音書	マタイによる福音書
マルコ	マルコの福音書	マルコによる福音書	マルコによる福音書
ルカ	ルカの福音書	ルカによる福音書	ルカによる福音書
ヨハネ	ヨハネの福音書	ヨハネによる福音書	ヨハネによる福音書
使徒	使徒の働き	使徒行伝	使徒言行録
ローマ	ローマ人への手紙	ローマ人への手紙	ローマの信徒への手紙
I コリント	コリント人への手紙第一	コリント人への第一の手紙	コリントの信徒への手紙一
II コリント	コリント人への手紙第二	コリント人への第二の手紙	コリントの信徒への手紙二
ガラテヤ	ガラテヤ人への手紙	ガラテヤ人への手紙	ガラテヤの信徒への手紙
エペソ	エペソ人への手紙	エペソ人への手紙	エフェソの信徒への手紙
ピリピ	ピリピ人への手紙	ピリピ人への手紙	フィリピの信徒への手紙
コロサイ	コロサイ人への手紙	コロサイ人への手紙	コロサイの信徒への手紙
I テサロニケ	テサロニケ人への手紙第一	テサロニケ人への第一の手紙	テサロニケの信徒への手紙一
II テサロニケ	テサロニケ人への手紙第二	テサロニケ人への第二の手紙	テサロニケの信徒への手紙二
I テモテ	テモテへの手紙第一	テモテへの第一の手紙	テモテへの手紙一
II テモテ	テモテへの手紙第二	テモテへの第二の手紙	テモテへの手紙二
テトス	テトスへの手紙	テトスへの手紙	テトスへの手紙
ヘブル	ヘブル人への手紙	ヘブル人への手紙	ヘブライ人への手紙
ヤコブ	ヤコブの手紙	ヤコブの手紙	ヤコブの手紙
I ペテロ	ペテロの手紙第一	ペテロの第一の手紙	ペトロの手紙一
II ペテロ	ペテロの手紙第二	ペテロの第二の手紙	ペトロの手紙二
I ヨハネ	ヨハネの手紙第一	ヨハネの第一の手紙	ヨハネの手紙一
II ヨハネ	ヨハネの手紙第二	ヨハネの第二の手紙	ヨハネの手紙二
III ヨハネ	ヨハネの手紙第三	ヨハネの第三の手紙	ヨハネの手紙三
ユダ	ユダの手紙	ユダの手紙	ユダの手紙
黙示録	ヨハネの黙示録	ヨハネの黙示録	ヨハネの黙示録

聖書 新改訳 第三版：新日本聖書刊行会 発行

聖書 新改訳 2017：新日本聖書刊行会 発行

聖書 口語訳：日本聖書協会 発行

聖書 新共同訳：日本聖書協会 発行

聖書 聖書協会共同訳：日本聖書協会 発行

- ✠ 本書は研究論文ではないので、引用や参考文献の表記はその都度文中で行い、文献での番号は以下の「凡例」に従う。加えて、日本語の翻訳があるものは翻訳表記とし、翻訳がないものは原典表記とする。

凡例（第一巻で引用した書籍の記号について）

◆ カント

- ❖ 『純粋理性批判』BXVI とあれば、「B」は第二版、ローマ数字「XVI」は序言の段落、その箇所がアラビア数字であれば頁数
- ❖ 『実践理性批判』A128 とあれば、「A」はアカデミー版カント全集第5巻、「128」は頁数
- ❖ 『たんなる理性の限界内の宗教』A126 とあれば、「A」はアカデミー版カント全集第6巻、「126」は頁数
- ❖ 『諸学部之争い』W273 とあれば、「W」は Immanuel Kant Werkausgabe. Band XI. Herausgegeben von Wilhelm Weischedel. Suhrkamp 1964 Frankfurt am Main. 版、「273」は頁数
- ❖ 『『理論と実践』準備原稿』A140 とあれば、「A」はアカデミー版カント全集第23巻、「140」は頁数

✠ 以上の凡例の詳細は、岩波書店の「カント全集」に記載されている

◆ シェリング

- ❖ 『啓示の哲学』14-244 とあれば、「14」は息子編集版全集14巻、「244」は頁数

◆ キェルケゴール

- ❖ 『不安の概念』（348）とあれば、（348）は「セーレン・キェルケゴール全集」第二版第四巻に於ける頁数（Søren Kierkegaard Samlede Værker Udgivne af A. B. Drachmann, J. L. Heiberg og H.O.Lange. Anden Udgave. Fjerde Bind. Kjøbenhavn. Gyldendalske Boghandel, Nordisk Forlag.1923.305-473 に於ける頁数）

『福音の回復』 第一巻
【「神の福音」の真実（基礎編）】

— 目次 —

【「神の福音」の真実（基礎編）】……14 頁

第一章 人の「真実な姿」……16 頁

- 「認識の仕組み」 — 17 頁／
- 「人の造り」 — 30 頁／
- 人の「真実な姿」 — 40 頁／

第二章 人に何が起きたのか……51 頁

- 「罪」を可能にするもの — 51 頁／
- アダムの罪が「死」を招いた経緯 — 57 頁／
- 「死」と「罪」との関係 — 65 頁／
- 「理性」には限界がある — 72 頁／
- まとめ — 77 頁／

第三章 人の抱える問題の真実……82 頁

- 究極の問題 — 83 頁／
- 現実の問題 — 93 頁／
- 全体のまとめ — 102 頁／

第四章 福音の「第一ステージ」……105 頁

- 「第一ステージ」 — 107 頁／
- 「霊の体」はいつ着せられるのか — 127 頁／
- 「霊の体」について — 135 頁／
- 「イエス・キリストを信じる信仰」による義 — 148 頁／
- 「救い」にまつわる総括 — 163 頁／

第五章 福音の「第二ステージ」……………183 頁

- ― 「第二ステージ」のあらまし ― 185 頁／
- ― 「信仰」の成長 ― 189 頁／
- ― 「キリストによって捕らえられた」 ― 195 頁／
- ― 「真理」に従う ― 202 頁／
- ― 「聖霊」が助けてくださる歩み ― 207 頁／
- ― 「悪霊」との戦い ― 214 頁／

第六章 福音の「第三ステージ」……………235 頁

- ― 神からの「肯定」を拒む理由 ― 236 頁／
- ― 「第三ステージ」の流れ ― 247 頁／
- ― 神は決断を迫る ― 260 頁／
- ― 神と人との距離を縮める ― 270 頁／

第七章 「アダムとエバで検証」……………278 頁

- ― 「第一ステージ」の検証 ― 278 頁／
- ― 「第二ステージ」の検証 ― 282 頁／
- ― 「第三ステージ」の検証 ― 292 頁／
- ― 聖書の読み方の基本 ― 301 頁／

第八章 総括……………308 頁

- ― 「人の造り」の総括 ― 311 頁／
- ― 「罪の有様」の総括 ― 323 頁／
- ― 「神の福音」の総括 ― 329 頁／
- ― 水のバプテスマを受けるまでの話 ― 341 頁／
- ― 「永遠のいのち」を持っている ― 351 頁／

【「神の福音」の真実（基礎編）】

人は聖書に書かれている教義に目を向け、それを論じることで「神の福音」を明らかにしようとする。例えば、信じるだけで救われるという教義に目を向け、「神の福音」は信仰による義であるとする。無論、それは間違いではないが、では、信じるとはどういうことなのか。義とはどういうことなのか。そもそも人が救われるとはどういうことなのか。一体何から人は救われるというのか。救われたなら何が変わるのか。こうした問いに答えられなければ、教義は知っていても「神の福音」の真実を知らないということである。ならば、どうすればそれを知ることができるのだろう。

「神の福音」の真実を知るには、神が造られた人の「真実な姿」と、人の「現状の姿」との違いを正確に知る必要がある。両者に違いがあれば、その違いを埋めるのが「神の福音」となるからである。もし人の「現状の姿」が、神が意図して造られた人の「真実な姿」と同じであれば、神は人に対して何もする必要はないので、そもそも福音は存在しない。だが、神が人に福音を啓示されたということは、そこには違いがあるということを意味する。ならば、どのような違いがあるというのか。その違いこそ神の目から見た人の問題であり、それが分かれば「神の福音」の真実も知ることができる。つまり、教義に目を向ける前に、人の「真実な姿」に目を向け、神の目から見た人の問題を特定するのである。それが分かれば、人の問題を解決する「神の福音」の中身も見えてくる。それから教義に目を向ければ、教義の意味も見えてくる。



ならば、神が造られた人の「真実な姿」は、どのような姿なのだろう。それは、神が最初に人を造られた際の姿であり、神が「良し」とされた姿である。それは聖書に、「良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです」（エペソ 2:10）とあるように、罪を犯さない姿である。それに対し、人の「現状の姿」といえば、罪を犯す姿である。この違いを埋めるのが「神の福音」ということになる。しかし、これではあまりにも表面的であり、「神の福音」を伝える表現も表面的なものに終始することになる。

そこで、本書は人の「真実な姿」を「人の造り」のレベルで知り、それが「現状の姿」の造りと一体どこがどう違うのか、どこが違うために人は罪を犯してしまうのか、それを知ることを目指す。そうすれば、「神の福音」も深く、具体性を以て知ることができる。このことは車の修理に重ねると分かりやすい。車が事故で大きくへこみ、動かなくなったとする。それで車のへこみを直し、何とか「うわべ」を元どおりにしたとする。ならば、車は動くだろうか。無論、動かない。では、どうすれば動くのか。それには車の正確な造りを知る必要がある。それを知ること、初めてどこが問題で動かないのかが分かり、修理ができる。同様に、「人の造り」を知ることなくして、人を元どおりにする「神の福音」の真実も知ることはできない。知らなければ、人は自分の努力で「うわべ」を良くし、自分は罪人ではないというふりをするしかない。それをしたのが律法学者であり、パリサイ人たちであった。つまり、「神の福音」の真実を知る上で重要なのは、一にも二にも「人の造り」の理解である。その上で、初めて福音の中身も正確に知ることができる。

今日、病気の人に、「お前が罪を犯したから、罰が当たって病気になったのだ」と言い、「病気を治したければ罪を悔い改めよ」と言ったなら一笑に付されてしまう。なぜなら、現代では、人が病気になってしまう原因が解明されてきているからである。人間の仕組みが、昔と違って格段に分かってきたので、「お前が罪を犯したから、罰が当たって病気になったのだ」では全く通用しない。これは、人間の罪に対しても同じことが言える。現代では、人間理解も格段に深くなり、なぜ人が罪を犯してしまうのか、その原因も明らかになっている。そのため、「あなたにはアダムが犯した原罪があるから、あなたは罪を犯してしまう」では通用しないのである。

このように、大事なことは人の「真実な姿」と、人の「現状の姿」の違いを、「人の造り」のレベルで正確に知ることである。そうしてこそ、「神の福音」の真実が見えてくる。そこで、本書は格段に深くなった人間理解を参考に、神が造られた人の「真実な姿」を「人の造り」のレベルで知り、同時に、人の「現状の姿」も「人の造り」のレベルで知り、一体どこがどう違うために人は罪を犯してしまうのかを明らかにする。そのことで、罪を取り除く「神の福音」の真実を明らかにし、現代にも通用する福音表現とすることを目指す。それが、第一巻【「神の福音」の真実（基礎編）】である。では、人の「真実な姿」を「人の造り」のレベルで知ることから始めよう。

第一章 人の「真実な姿」

人とは何なのだろう。それは、何かを認識し、思考する者である。ならば、人はどうして認識ができ、思考ができるのだろうか。ここではその仕組みを、格段に深くなった人間理解を参考に探っていく。それを探ることで思考を可能にする「人の造り」を知り、そこから人の「真実な姿」を知ることを目指す。まず、聖書が「人の造り」について何と言っているかを見てみたい。聖書は、次のように教えている。

「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。」（創世記 2:7 新改訳 2017）

聖書は「大地のちり」と「いのちの息」で人が造られたことを教えてはいるが、これだけでは、「体」から入ってくる情報を認識し、思考できる仕組みまでは分からない。だが、人間学を牽引する哲学を参考にすると、その仕組みがよく分かる。哲学は、人はなぜ「体」からの情報を認識し、思考できるかを探求し、それに必要な「人の造り」を明らかにしたからである。それを参考にすれば、聖書の教える「人の造り」の意味も知ることができ、人間理解にまつわる誤った「人間的な標準」も排除できる。

その哲学では概ね、何かを認識し、思考する意識を人とし、それを「精神」とする。ならば、何かを認識する仕組みはどうなっているのだろうか（認識論）。その仕組みの基礎を解き明かしたのが、プラトン（BC427-347）と弟子のアリストテレス（BC384-322）である。その後、彼らの認識論は次第に様々な形に発展し、複雑化した。その中、カント（1724-1804）が登場し、人間の認識は単に経験によるものだけでなく、先天的な枠組み（カテゴリー）を通して行われると考えた。ここに、認識論は画期的な転換を迎え、その後の哲学に大きな影響を与えた。ここでは、そのカントの成果を参考に、「認識の仕組み」を私なりの言葉で大まかに説明することから始めたい。その仕組みが分かれば、「人の造り」も見えてくるので、「人の造り」を教えた先の創世記 2:7 の意味も知ることができる。そうすれば、人の「真実な姿」も明らかになる。ただし、哲学の話は難解でもあるので、読み進めていくうちに理解できないと思われたなら、その場合は第一章を読み飛ばし、第二章から読み進めることも可能である。

－「認識の仕組み」－

目の前に赤いバラがあったとしよう。それを「赤いバラである」と知ることが、認識するということである。では、目から入ってくる情報に対し、どのようにして「赤いバラである」という判断が下されたのだろうか。それが「認識の仕組み」であるが、ここではカントの成果を参考に、その「認識の仕組み」を私なりの言葉で簡単に説明していく。まずは、認識の流れからである。

❖ 認識の流れ

最初は、認識の「対象」となる情報が目から入り、それが心に映し出される。次に、映し出された「対象」が何であるかを知る段階に移る。ただし、それが何であるかを知るには「物差し」を必要とする。言い換えれば、それが何であるかを判断するための基準を必要とする。それがあって、初めて「対象」が何であるかが分かり、「赤いバラである」という判断を下すことができる。以上が認識の大まかな流れであるが、次に、この流れを詳しく説明したい。

最初は、認識の「対象」が心に映し出されるが、それには「対象」を心に映し出す器官が必要になる。それを「感覚器官」(体)と呼ぶ。そして、心に映し出された「対象」を「像」と呼ぶ。つまり、「感覚器官」は、「対象」となる情報を心に映し出せる「像」に変換するのである。それはちょうど、カメラが「対象」の情報を画面に映し出せる「像」に変換するのと同じである。カントは、心に映し出すための変換形式を「直観」と呼んだので、ここでもそう呼ぶことにする。こうして、「対象」の情報が「直観」を通過することで、心に映し出せる「像」になる。

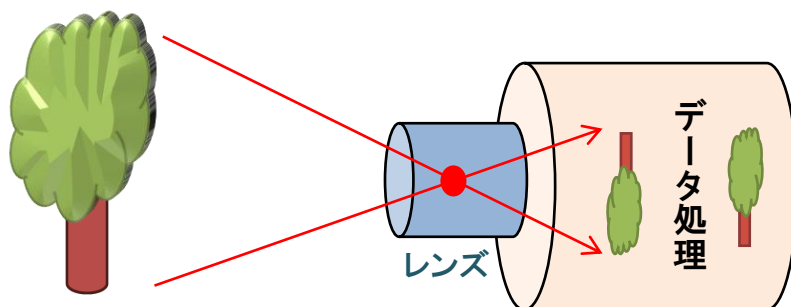
では、心に「像」が映し出されたのなら、すぐに認識できるかということそうではない。その「像」が何であるかを知るには、予め何らかの基準を持っている必要がある。「像」が大きいのか小さいのか、それは植物なのか動物なのか、そうした判断を下すには、先に大きいとは何か、小さいとは何か、植物とは何か、動物とは何か、といった基準を必要とする。それがなければ、それは単なる「像」であって、そこからは何の判断も生まれない。カントはそうした認識を可能にする基準を「カテゴリー」とし、さらには認識が成立するための基準や枠組みを総称して「概念」と呼んだ。すなわち、何かを認識するには、予め「概念」を持っている必要があるということであり、認識の「対象」となる「主語」に、予め持っていた「概念」が「述語」として結びつくということである。プラトンは、予め持っている「概念」を「イデア」と呼び、それがあっ

て初めて心に映し出された「象」を認識できるとした。そこで彼は、何かを認識するというのは、知っていたことを想起することだとした（想起説）。

このように、認識の流れは、「対象」が「直観」によって心に「像」として映し出され、その「像」が予め持っていた「概念」によって認識されるという順序で進む。では次に、この流れを分かりやすくするために、カメラの仕組みに重ねて説明したい。

❖ カメラの仕組み

カメラの前に「大きな木」があるとしよう。しかし、カメラは小さいので、「大きな木」のままではカメラの画面に収まらない。そこで、カメラにはレンズが付いていて、「大きな木」の情報をカメラの画面に収まる大きさの「像」にする。その際、「像」は逆さまに映るので、カメラは「データ処理」を行い、逆さでない「像」として認識する。



人の認識の流れもカメラと同じである。レンズが「感覚器官」の「体」に当たり、カメラ本体が「像」を映し出す「心」に当たる。人の場合、「体」から「対象」の情報が入り、それが「直観」を通過することで、心に映し出せる大きさの「像」になる。その「像」を「概念」によって認識することが、カメラの「データ処理」に当たる。

このように、認識の流れは、「直観」によって「像」が心に映し出され、それを「概念」によって認識するという流れになる。そのためには、人は生まれながらに「直観」と「概念」を持っている必要がある。それによって初めて認識ができ、思考が可能になる。この認識の作業を重ねていくことで、認識に必要な「概念」は増え続け、より詳細な判断を下せるようになる。これを「経験」を積み上げていくという。

この認識の流れから、重大なことが二つ見えてくる。一つは、カメラは「大きな木」をそのままの姿で認識しているのではないということである。「大きな木」は立体であるが、それを平面にし、しかも小さくして認識している。人も同様である。人の場合は、「対象」を「直観」を通して心に映し出せる姿に変え、さらにはそれを「概念」

を通して認識している。それは、「対象」の「真実な姿」を無条件で認識しているわけではないことを意味する。ということは、私たちは自分のことも「対象」として認識するが、その場合の自分の姿は、「直観」と「概念」を通して認識しているのであって、それはもはや自分の「真実な姿」を認識しているわけではないということである。喩えるなら、私たちは鏡にぼんやり映る自分を見ているだけであって、一部分しか知らないということである。それは真実なので、聖書も次のように教えている。

「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。」（I コリント 13:12）

そして、この認識の流れには、絶対に見落としてはならないことがもう一つある。それは、電気が流れないとカメラは動かないように、認識の流れには、それを支え動かす運動が必要だということである。「対象」を持たせ、持たせた「対象」を「直観」を通して心に映し出させ、それを「概念」と結びつけるには、それをする運動が必要である。その運動は手にした「対象」を「主語」とし、そこに「述語」を結びつけるので、こうした運動を本書は「統合運動」と呼ぶ。すなわち、何かを認識するには「直観」、「概念」、「統合運動」、この三つの要素が不可欠となる。

- 1：体からの情報を心に映し出す働き（**直観**）
- 2：映し出された像を判断する物差し（**概念**）
- 3：「直観」と「概念」を結びつける運動（**統合運動**）

そこで、ここからは認識に必要な三つの要素の正体を見ていく。それが分かれば、「認識の仕組み」も「人の造り」も正確に分かり、人の「真実な姿」を知ることができる。人の「真実な姿」が分かれば、人の「現状の姿」との違いが分かり、違いを埋める実際の「神の福音」も分かる。では、最初は「直観」の正体からである。

❖ 「直観」の正体

認識の「対象」となる情報が「体」から入るということは、情報は必ず「体」の制約を通過するということである。その制約によって、「対象」は初めて認識が可能な「像」となる。その制約をカメラに喩えると、カメラが「大きな木」を認識する場合、その「立体の像」を認識できる大きさの「平面の像」に変換するが、この変換が「体」の制

約に当たる。カントは、その制約を「直観」と呼んだ。ここでは、その「体」の制約である「直観」の正体を探る。それを探るには、認識の流れを逆から見ていく必要がある。人が普段している認識は、あくまでも「概念」での思考なので、そうした思考によって下された判断を排除する。すると、「直観」によって描かれた「像」だけが残るので、その「像」も排除する。そうすれば、最後に残るのは「像」を心に映し出させた「直観」となる。では、「直観」の正体を探っていこう。

目の前にあるバラを見た人が、「これはワインのように赤く、形も小ぶりで、実に美しい。香りも良く、本当に心が和む」という判断を下したとしよう。ここから「概念」による思考を排除するのである。まず、「ワインのように赤く」であるが、そもそも「赤い」とは、目に映る色を経験的に分類し、そこから「赤い」という「概念」を作り、それに添って「赤い」としたにすぎない。ゆえに、「赤い」は排除する。次に、「形も小ぶりで」であるが、これも同様に、目に映る大きさを経験的に分類し、そこから「小ぶり」という「概念」を作り、それに添って「形も小ぶりで」としたにすぎないので、これも排除する。同様に、「実に美しい」も、「香りも良く」も、「本当に心が和む」も、経験から作られた「概念」による思考となるので排除する。こうした「述語」を排除していくと、最後はバラという「像」（主語）だけになるが、これをバラだと決めたのは人間の「概念」なので、それすらも排除する。

すると、そこには排除できないものが最後に残る。それは、目の前にバラが存在するために必要な「空間」である。「空間」を排除すれば、そこにはバラは存在しなくなるので、これはどうしても排除できない。それに加え、バラを見ることを可能にする「時間」も排除できない。「時間」を排除すれば、バラを見るという行動ができなくなるので、これも排除できない。

このことから、「体」の制約である「直観」の正体が明らかになる。それは「空間」と「時間」である。すなわち、人が何かを認識するには、「空間」という形式と、「時間」という形式の両方を必要とするということである。ならば、「空間」とは何なのだろう。それは体積のことであり、人は体積を持たないものを認識できない。ならば、「時間」とは何か。それは変化であり、人は変化しないものも認識できない。例えば、リンゴが木から落ちたとしよう。人はリンゴが落ちるという変化は認識できるが、その変化を超高速カメラで撮影し、それを一コマ一コマ見てみると、そこには認識できない静止したリンゴしか映っていない。つまり、人は静止したものを「時間」で結びつけ、それを「変化」として関連づけることで、初めて認識できる。人は「時間」の中

で変化し続けているので、「時間」に支配されずに立ち止まっているものは認識できないのである。立ち止まったと思った瞬間、それはもう「過去」になってしまうので、「時間」に支配されずに立ち止まっている対象を認識することは、人にはできない。

このように、「体」の制約、すなわち「直観」の正体は、「空間」と「時間」である。認識の「対象」となる情報は、「空間」と「時間」という形式を通過することで、初めて認識が可能な「像」になる。それを、人が持っている「概念」と結びつけることで認識が可能となる。では、次に「概念」の正体を見てみたい。

❖ 「概念」の正体

「体」が持ち込む情報に対し、それが何であるかの判断を下すために使うのが「概念」である。その「概念」には、二種類ある。一つは、生まれた時には持っていたものであり、予め知っていた「認識の形式」である。もう一つは、経験によって獲得したものである。例えば、「体」が持ち込む情報に対し、「これは小さくて、かわいい犬だ」という判断を下したとする。その場合、「小さくて」という判断は、目に映る大きさを経験的に分類し、そこから「小さい」という「概念」を作り、それに添って「小さくて」と判断したにすぎない。「かわいい」も「犬だ」も、同様である。それらは、経験によって獲得された「概念」である。ならば、経験とは別に、予め知っていた「認識の形式」の「概念」は何なのだろう。何の経験も持たない赤子であっても何かを認識する以上、経験には全く頼らない認識に必要な「概念」を人は持っていることになるが、それは一体何なのか。それこそが最初に使う純粋な「概念」であり、経験を可能にする「概念」である。ここでは、その一つ目の「概念」の正体を知る作業をする。

経験を可能にする「概念」を知るには、私たちが何かを心に描く際に使用する「概念」の中に、経験では得られない「概念」があるかどうかを探ればよい。つまり、経験したことのない内容であっても、いや、経験できない内容であっても、それとは無関係に、何を認識し思考できるのかを探ればよい。そうすれば、経験を可能にする、予め知っていた純粋な「概念」の正体分かる。

例えば、人は「時間」や「空間」の制約を無視したことは経験できない。そうであっても「時間」や「空間」を無視し、経験できない未来に行ける自分、過去に行ける自分、宇宙のどこにでも行ける自分を認識でき（思い描くことができ）、それを自由に思考できる。それだけではない。経験できなくても、何でもできる自分も認識でき（思い描くことができ）、それを思考できる。空を飛べる自分、世界の頂点に立つ自分、お

金持ちになった自分など、見える世界では経験不可能な情報であっても、自由に思い描くことができる。このように、私たちは制約された現実をよそに、制約されない「自由」を思考できる。ということは、私たちは「空間」と「時間」に制約されない「自由」を、何でもできる「自由」を初めから知っていたということになる。

さらには、人は経験できない死後の世界も認識でき（思い描くことができ）、死後の世界を自由に思考できる。死んでも生きられる自分を認識でき、そこでの暮らしを自由に思考できる。そのようにして、私たちは終わりが来るという「時間」の制約を無視し、「時間」の制約を受けない「永遠」を認識し、思考できる。ということは、私たちは「永遠」を初めから知っていたということになる。

他にもまだある。人は経験したことのない平和な世界も認識でき（思い描くことができ）、それを自由に思考できる。平和に思いを馳せ、戦争がない世界を自由に思考できる。暴力も、争いもない世界を思考できる。理想の家族関係や、理想の友好関係も思考できる。だが、経験による認識では、思い描く理想の世界の認識は夢でしかない。これは、経験しなくても真実な「愛」の姿を思考できるということなので、私たちは真実な「愛」を初めから知っていたということになる。さらには、見えない神のことも思考できる。であれば、「神」を初めから知っていたということになる。

このように、この世界では収集できない「自由」、「永遠」、「愛」、「神」の情報について、私たちは思考できる。この世界では経験できない対象であっても、それを想像できる（認識し、思考できる）。そうである以上、これらは予め知っていたということになる。それゆえ、「自由」を求め、「永遠」を求め、「愛」を求め、「神」を求めることができる。というより、それとの統合を目指して生きている。これこそが、経験（認識）を可能にする、予め持っていた純粋な「概念」の正体である。

さらに言えば、「自由」、「永遠」、「愛」、「神」、それらは全て聖書に書かれている「神の属性」にほかならない。つまり、「神の思い」が予め人に刻印されていたということである。そうであるからこそ、刻印された「神の思い」は心の声となって、「人を愛しなさい」と語ってくる。それは「道徳命令」であり、誰かから言われたものではない。初めから知っていることであり、それに従うか従わないかの選択をするのが人間であって、その選択こそ、人間が持つ唯一の自由である。そこで、この刻印された心の声を発している場所を、哲学者たちは「魂」と呼んだ。その「魂」は「神の思い」を人

に教えるので、それが純粋な「概念」となって、経験が何もない赤子であっても認識ができ、思考ができるのである。では、最後に「統合運動」の正体を見てみよう。

❖ 「統合運動」の正体

何かを認識するには、最初に認識する「対象」を持つ必要がある。ならば、「対象」を持つとはどういうことなのだろう。例えば、何かを食べたいという要求が私から出てくれば、食べ物が認識の「対象」となる。このことから、「対象」を持つというのは、自分の中心から何らかの要求が出ていることの証しだと分かる。要求があるから、「対象」を持つことができる。つまり、認識することを裏で動かしているのは、私たちの中心から出ている要求である。ここでは、その要求の正体を探る。それを探るには、私たちは一体、何を認識の「対象」にしているかを調べればよい。そうすれば、要求の正体を知ることができる。

では、考えてみたい。私たちは何を認識の「対象」にしているだろうか。それは、この世界にあるあらゆるものである。あらゆるものが認識の「対象」となり、私たちはそれらを知ること、この世界を知ろうとしている。それは、世界のあらゆるものと、無条件で結びつこうとしているということであり、結びついて「一つ」になろうとしているということである。それゆえ、私たちは世界の生き物を認識の「対象」とする。そして、それらの生き物の共通点を見つけようとして思考し、生き物の共通点から生き物を「動物」、「魚」、「昆虫」などといった具合に分類し、「対象」を「一つ」にまとめようとする。また、私たちは世界の人間を認識の「対象」とし、その共通点から人間を、「男」、「女」、「大人」、「子ども」といった具合に分類し、「対象」を「一つ」にまとめようとする。この事実から、私たちの中心にある要求が見えてくる。その要求とは、無条件で結びつけようとする「統合運動」である。私たちの中心に、「一つ」にしようとする「統合運動」があるからこそ、認識の「対象」を「一つ」にまとめようとし、私たちは思考するのである。

まことに「統合運動」によって私たちは「対象」を持つことができ、「対象」を持ったなら、私たちの中心にあるものと「対象」を結びつける作業に入る。その中心にあるものが、先に見た純粋な「概念」である。それと「対象」とを結びつけようとすることが認識であり、思考である。それは「対象」を「主語」とし、そこに純粋な「概念」を「述語」として結びつける作業である。そのようにして、同一にすることが認識であり、その作業が思考である。そして、「主語 + 述語」という同一にする作業を通して新たな「述語」が生まれる。すると、次の「対象」の「主語」には、新たに生まれ

た「述語」の中から結びつくものを選ばれるようになる。これを繰り返すことで、純粋な「概念」による「述語」は豊かになっていき、認識も思考も豊かになっていく。こうした認識の作業を動かしているのが、「統合運動」なのである。

もう少し丁寧に説明すると、「統合運動」は、予め持っている純粋な「概念」と、「体」が持ち込む情報を何でも無条件に接着しようとする。「統合運動」は、「体」の制約である「直観」で知り得た「対象」を、何であれ、純粋な「概念」と結びつけようとする。それは、何でも無条件に接着する「万能接着剤」のようなものである。そのため、人につながっている世界の全てが「統合運動」の「対象」となる。「体」が持ち込む世界の情報の全てが、「統合運動」によって「一つ」に結びつけられる「対象」となる。それは実質、「対象」と「対象」を結びつけるということでもあるので、「統合運動」は、「対象」となる世界の情報から共通点を探り、「一つ」にしようとする。すると、その共通点が新たな「概念」となる。例えば、世界に生息する多くの草花の情報から、「植物」という「概念」が形成される。これが「言葉」となり、新たな「述語」となる。こうして、「統合運動」は手にした「対象」を「主語」とし、新たに形成された多くの「述語」の中から、それに合うものを選び結びつけるようになる。これを繰り返しながら、予め持っている純粋な「概念」との統合を目指す。

つまり、「統合運動」は人に認識する「対象」を持たせ、それを純粋な「概念」と結びつけることで認識を生じさせ、思考へと導いている。言い換えれば、「統合運動」は人の「精神」を支え、動かしている。このことから、「統合運動」には次のような特性があることが分かる。**第一に**、「精神」は常に何かを認識しているため、それは変わらず在り続ける「不動の運動」ということ。**第二に**、「精神」は常に活動しているので、それは太陽のように休むことなく自らが動き続け、「精神」を動かし続ける「動者の運動」ということ。これによって、人は常に新しい情報を探求し続けることができる。**第三に**、「精神」を特定の方向に動かすので、それは明確な目的や方向性を持っている運動ということ。水が高いところから低いところへ流れるように、この運動も目的地を持っているからこそ、「精神」を動かすことができる。これらの特性を総合すると、「統合運動」は目的地を知る「不動の動者」としての性質を持つ。

この「不動の動者」という概念は、アリストテレスが宇宙の原因となった神に対して使った概念であり、この概念は神の性質を言い表している（『形而上学』第十二巻）。つまり、人である「精神」を支え動かしている「統合運動」は神の属性であり、人は神に支えられているということである。そして、プラトンやアリストテレスは「魂」

を、この「統合運動」が行われる場所として位置づけた。カントは、この「統合運動」を「純粋構想力」と呼び、彼もこの働きを担う場所を「魂」とした。

「われわれは純粋構想力を、すべてのアプリアリな認識の根底にある人間の魂の根本能力としてもつのである。」(『純粋理性批判』A124「カント全集4」
岩波書店 198 頁)

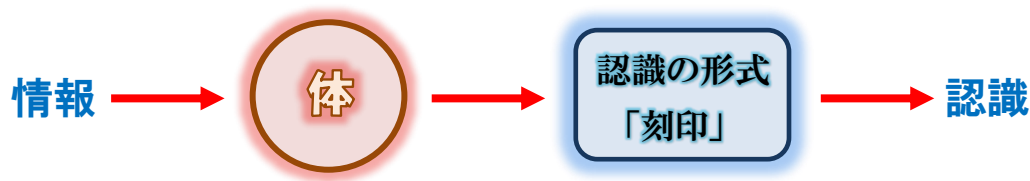
このように、「統合運動」の正体は、神の属性を持つ「魂」である。人である「精神」が「体」からの情報を認識し、思考できるのは、神から出た「魂」に支えられているからである。その神は無条件で結びつける「愛」なので、「神は愛です」(Ⅰヨハネ 4:16)、神から出た「魂」は「一つ」になる愛の運動を展開する。「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください」(ヨハネ 17:21 新共同訳)。それは、神と「一つ」になることを目指すので、この御言葉の続きに、「彼らもわたしたちの内にいるようにしてください」(ヨハネ 17:21 新共同訳)とある。つまり、神から出た「魂」が人の土台となり、目指すべき神の純粋な「概念」を人に発信し、神を慕い求めさせているということである。「神よ、わたしの魂はあなたを求める」(詩篇 42:2 新共同訳)。これが「統合運動」の正体である。では、以上の話を基に、「認識の仕組み」の総括をしよう。

❖ 「認識の仕組み」の総括

人が何かを認識できるのは、予め何かを知っていたからである。「体」の収集する情報が、予め知っていたことと結びつくから認識ができる。そこでプラトンは、何かを認識するというのは、思い出すことだとした。「魂」が学んで知っていたことを想起することだとした。これを「想起説」といい、彼はそのことを端的に述べている。

「しかも魂はあらゆるものをすでに学んでしまっているのだから(中略)——探究するとか学ぶとかいうことは、じつは全体として、想起することにほかならないからだ。」(『メノン』81 C,D 岩波文庫 48 頁)

これこそが、「認識の仕組み」の公理である。人には、認識に必要な「認識の形式」が「刻印」されているということである。それゆえ、「体」を通して情報が入り込めば、その情報は、予め「刻印」されていた「認識の形式」を通過するので、人である「精神」は認識に至る。その流れを図にすると、次のようになる。

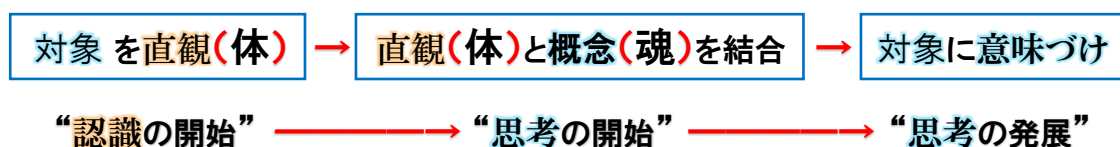


プラトンは、この「刻印」された「認識の形式」を「イデア」（概念）と呼んだ（『国家』第七巻）。彼によれば、「イデア」は物事の本質であり、現実世界とは異なる理想的な存在を指す。一方で、彼の弟子のアリストテレスはそれを批判的に発展させて「形相」と呼び、「形相」は物事の本質を意味し、それは身体に結びついているとした。

いずれにせよ、プラトンもアリストテレスも、人間を動かしているのは物事の本質であり、その本質が存在する場所を『魂』と位置づけた。これに肉付けをしたのが、カントである。彼は、「対象」を「主語」とし、その「主語」に「述語」を結びつけることが認識であるとした（『純粋理性批判』）。それは「対象」と「概念」を一致させようとするのであって、それにより「対象」の「主語」に「述語」を結びつけることができるとした。手にした「対象」を、自分が持っている「概念」で比較し、両者の一致を図ることができるとした。カントは、その行為が認識であり、思考であるとした。

さらに言えば、そもそも「対象」（主語）を持つということも、そこには判断があるので、判断した「主語」と、判断した「述語」との結合が認識となる。その判断で使われるのが、「魂」による純粋な「概念」であり、経験によって得た「概念」である。そこでカントは、情報を「直観」した時点から認識は始まるが、その認識を可能にするのは、「直観」（体）と「概念」（魂）を結合する思考によるとした。

「概念なき直観や直観なき概念は、認識となることはない。そもそも対象が認識されうるのは、ただ両者が結びつくことによつてのみである。すなわち、対象が直観によって与えられ、概念によって思惟されることをとおして認識が可能となるのである。」（『理論と実践』準備原稿 A140 「カント全集 18」 岩波書店 279 頁）



つまり、カントは、人が認識し思考できるのは全て、二つを一つに統合しようとする「統合運動」に支えられているからとしたのである。「この「概念」のもとにおいて、

多様の総合における統一が必然的となる」（『純粋理性批判』B104 「カント全集 4」岩波書店 154 頁）。カントは、その「統合運動」を「統覚の超越論的統一」と呼び、それから生まれる認識に必要な「概念」を「表象の客観的規定」と呼んだ。

「すなわち、そこから認識が生じうるかぎりのすべての表象の客観的規定の諸原理——こうした諸原理のすべてが統覚の超越論的統一の原則から導出されている」（『純粋理性批判』B142 「カント全集 4」岩波書店 212 頁）

さらに、カントは「統合運動」を自分の一つの意識に取りまとめる「純粋構想力」とし、これを人間の「魂」の根本能力とした。この「魂」が持つ「純粋構想力」のおかげで、「主語」は制約である「述語」と結合するとした。

「われわれは純粋構想力を、すべてのアприオリな認識の根底にある人間の魂の根本能力としてもつのである。純粋構想力を介して、われわれは一方における直観の多様を、他方における純粋統覚の必然的統一の制約と結合する。」（『純粋理性批判』A124 「カント全集 4」岩波書店 198 頁）

こうして、プラトンもアリストテレスもカントも、神から出た「統合運動」を展開する場所を、「魂」と呼んだのである。「魂」には刻印された「認識の形式」（概念）があり、加えて太陽のように自らによって動き続け、人をある目的に向かって動かし続ける運動があったとした。そのおかげで、人は認識でき、思考できるとした。ゆえに、認識で最重要なのは「統合運動」であり、それは神から出た運動なので、神と「一つ」になることを目指す。このことについては、聖書も、「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです」（ローマ 11:36 新共同訳）と教えている。この運動が、人である「精神」を、すなわち人を根底から支え、動かしている。したがって、人は神の中で生き、動き、また存在しているということになる。「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」（使徒 17:28）。

この話はパソコンに喩えると分かりやすい。パソコンのキーボードから情報をいくら入力しても、予めパソコンにソフトがインストールされていなければ、入力した情報は何の意味も持たない。情報への意味づけは、予めインストールされていたソフトが行う。このソフトが「認識の形式」に当たる。そして、そのパソコンを動かしているのは「電気」である。「電気」がなければ動かない。この「電気」が、「魂」の展開する「統合運動」に当たる。つまり、キーボードからの情報とソフトと「電気」がなけ

ればパソコンは機能しない。同様に、情報を持ち込む「体」と「認識の形式」と「統合運動」がなければ、人である「精神」も機能しないのである。

このように、人が何かを認識できるのは、情報を持ち込む「体」と、「認識の形式」を以て「統合運動」を展開する「魂」とを持っているからである。この「統合運動」のおかげで認識の「対象」を持つことができ、「対象」の情報は「魂」の持っている「認識の形式」と結びつくことができる。そのことで認識が生じ、思考ができる。平たく言えば、それを知っているから認識ができ、思考ができるということである。例えば、「人間とは何か？」と思考できるのは、人間について予め知っているからである。そうしたことから、この仕組みはプラトン以来「想起説」と呼ばれてきた。

ただし、人が認識する「対象」の「像」は、「対象」が持っている「真実な姿」ではない。それはあくまでも、「真実な姿」が「空間」と「時間」という形式を通過した際の「現象」が、さらに人の「概念」を通過しているので、人が認識しているのは「真実な姿」ではない。そこで、これについても見ておく必要がある。

❖ 「真実な姿」ではない

人は誰もが、自分の見ているものは本物であり、それこそが「真実な姿」だと思い込んでいる。しかし、それは「真実な姿」ではない。「真実な姿」とは、何の制約もない状態での姿であって、カントはそれを「物自体」と呼んだ。カントの大発見は、まさしくここにある。人が認識しているのは「直観」と「概念」を通過したものである以上、それは「物自体」ではなく、「現象」にすぎないとしたことである。確かに、私たちが見ている「像」は「空間」と「時間」に条件づけられていて、それを「概念」によって見ているので、それは「物自体」ではなく、「現象」ということになる。

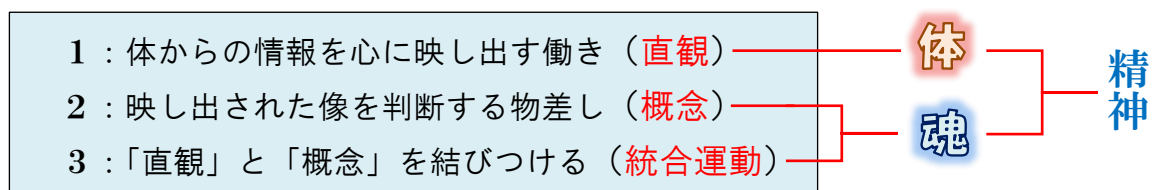
また、人は「体」の制約から、「空間」にも「時間」にも支配されないものは認識できない以上、体積を持たない「霊」や、変化しない「永遠」を認識することはできない。その「霊」とは神のことであって、「神は霊である」(ヨハネ 4:24 新共同訳)、「永遠」も神のことなので、「永遠の神」(創世記 21:33)、人の「体」では、神を認識することができないのである。そうすると、神は「信仰」で知るしかないということになる。これも、カントの大発見であった(『純粋理性批判』)。しかし、人は何としても神を「感覚器官」(体)で認識しようと、勝手に神の像を造ってしまった。

このように、認識しようとする「対象」は、必ず「直観」と「概念」を通過するので、もはやそれは「対象」の「真実な姿」を認識しているわけではない。それは、変化する「現象」を認識しているにすぎない。自分が持つ「概念」で認識しているにすぎない。だが、人は自分の認識を真実だと思い込んでいる。そこから様々な「人間的な標準」が生まれてきた。そうすると、「人間的な標準」は、変化しない真実を教える聖書からすると覆いとなるので、聖書は次のように警告する。

「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」（Ⅱ コリント 5:16）

したがって、この「人間的な標準」を排除できれば、「人の造り」の真実を教えている聖書の意味も分かるようになる。大事なことは、人は真実を認識しているのではないということである。真実は、聖書でしか知り得ないのである。

以上が、カントの成果を参考に、私なりの言葉で説明した「認識の仕組み」である。それを一言でいえば、次のようになる。まず、認識は「対象」を心に映し出すことから始まる（直観）。この作業をするのが「**体**」である。次に、心に映し出された像を、人である「精神」は「概念」で判断する。これが認識である。その際の「概念」を提供し、「精神」に認識させるために「精神」を裏で動かしているのが「**魂**」である。したがって、人が何かを認識するには、「**体**」と「**魂**」が不可欠であるというのが、「認識の仕組み」の概要である。



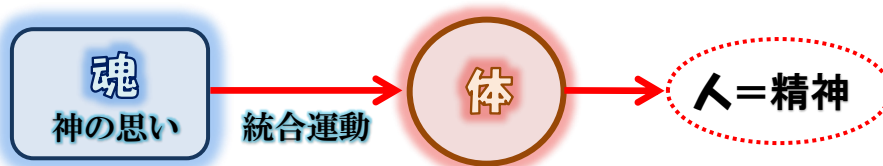
この結論から、「人の造り」が明らかになる。そこで次に、ここで知り得た「認識の仕組み」を基に、その仕組みを可能にする「人の造り」を見てみたい。

－「人の造り」－

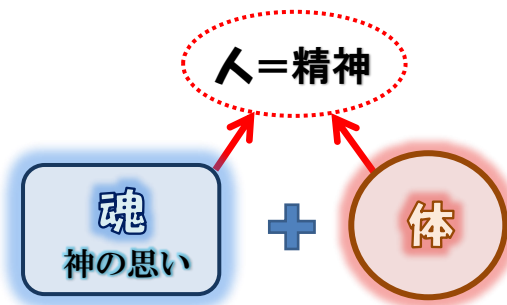
人とは、「体」の感覚器官から入ってくる情報を認識し、思考する「精神」である。ならば、それを可能にする「人の造り」はどうなっているのだろうか。それを知るために、「認識の仕組み」を見てきた。そして、分かったことは、人の中には予め「刻印」された「認識の形式」があるということである。その形式の原本は、「自由」、「永遠」、「愛」、「神」であって、それらは全て「神の属性」であり、「神の思い」である。つまり、「神の思い」を発信する基地が、予め人には備えられているということである。この基地のことを哲学者たちは「魂」と呼んできた。認識は全て、この「魂」の働きから始まっている。このことから、認識を可能にする「人の造り」の概要が見えてくる。

❖ 「人の造り」の概要

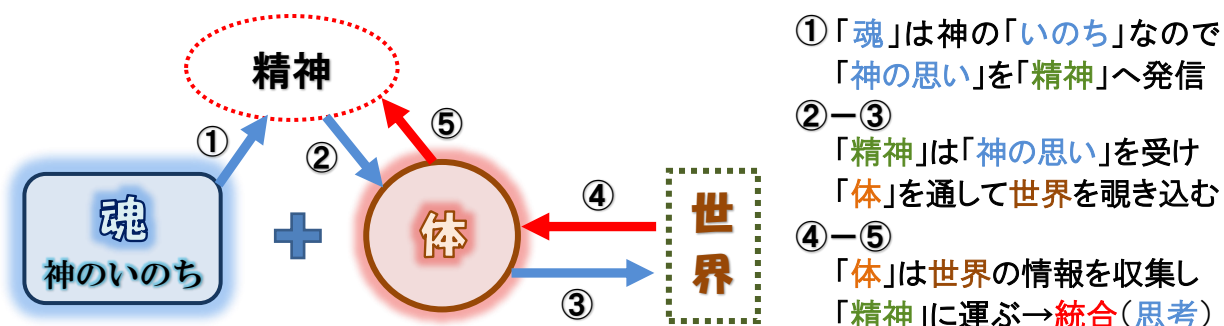
ギリシャで始まった哲学はカントによって重要な転換を迎え、その後は「ドイツ観念論哲学」として発展した。そこでは、概ね次のように考えられた。「魂」が「神の思い」との「統合運動」を展開し、その運動によって「体」が情報を持ち込む。すると、情報は「統合運動」の「対象」となり、「統合運動」はその「対象」と「神の思い」とを結びつけようとする。ここに認識が生じ、思考する「精神」が機能するようになる。この「精神」が人である。この説明を図にすると、次のようになる。



ただし、上記の流れはほぼ同時であり、「魂」が「統合運動」を開始すると同時に、「精神」の中では、「体」が持ち込んだ情報を「神の思い」と結びつける作業が始まる。「魂」が「神の思い」を「精神」に発信し、そこに「体」が情報を持ち込むことで、「精神」は思考するのである。その様子を図にすると、以下のようなになる。



また、「魂」が「統合運動」を開始すると同時に「精神」も起動するので、次のような説明も可能である。「魂」は神の「いのち」の部分なので、「神の思い」を「精神」に発信する。すると、「精神」は「体」を通して「世界」（大地）を覗き込んで情報を収集し、それを「魂」から受け取った「神の思い」（自由、永遠、愛、神）の情報と結びつけようとする。そのことで、「精神」は情報を認識し、思考ができる。



どの説明であろうと、人である「精神」は、「魂」と「体」によって機能するということである。「魂」が「神の思い」を発信し、その「神の思い」との統合を目指すので、「体」が持ち込む情報を「神の思い」と統合しようとし、思考する「精神」が機能する。全ては、神の「いのち」と同族の「魂」が「神の思い」を発信し、その思いとの統合を目指すことによる。そうである以上、人の土台は「神」ということになる。

以上がカントの成果を参考に、哲学者たちの異なる考えを私なりにまとめた「人の造り」の概要である。この概要で重要なことは、人である「精神」と「魂」とは別であるということである。何かを認識するには、すなわち人である「精神」が機能するには、情報を収集できる「体」と「魂」とが必要であり、「体」がなければ、人は存在しないということである。そして、このことから、人間理解に対する誤った「人間的な標準」を排除できる。その標準とは、「魂」を人とし、人は「体」がなくても「魂」だけで生きられるとすることである。その標準では、「精神」と「魂」は同じであって、それは「体」がなくても単独で認識が可能であるとする。日本語には、人である「精神」を「魂」に置換し、「魂が叫ぶ」、「魂を込めた作品」、「船乗りの魂」といった表現があるが、そこでの「魂」は、真実な「私」を言い表す言葉として使われている。しかし、「人の造り」によると、「私」は思考する「精神」であって、それを支えているのが「魂」であり、「体」である。ゆえに、「精神」と「魂」は全く別のものである。そこで、「魂」を「私」とする「人間的な標準」を排除してみると、冒頭で取り上げた、聖書が教える「人の造り」の御言葉の意味が分かる。次に、それを見たい。

❖ 聖書が教えている「人の造り」

聖書は、「人の造り」を次のように教えている。

「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた（貸し出された）。それで人は生きるものとなった（精神は機能するようになった）。」（創世記 2:7 新改訳 2017）※（ ）は筆者が意味を補足

これは本章の冒頭で取り上げた御言葉だが、この御言葉だけでは聖書が言わんとする「人の造り」の意味がよく分からなかった。しかし、哲学の成果で知り得た「人の造り」を参考にするなら、その意味が見えてくる。

ここで「いのち」と訳されているのは、ヘブライ語の「ハイイーム」[חַיִּים]で、これは複数形である。このことから、これは三位一体の神の「いのち」を言い表していることが分かる。そして、「息」と訳されているのは、ヘブライ語の「ネシャーマー」[נֶשְׁמָה]で、それは「霊」、「魂」とも訳せるので、「いのちの息」とは、神の「いのち」の「霊」であり、「魂」を言い表していることが分かる。つまり、神は先に造った「体」に、ご自分の「いのち」の部分を「魂」として吹き込まれたということである。それにより、生きる人が誕生したという。「それで人は生きるものとなった」。「魂」は神の「いのち」なので「神の思い」を発信し、「体」はそれに動かされて情報を収集し、その情報と「神の思い」とを結びつけようとして認識が起き、思考する「精神」（人）が機能する。この御言葉は、そうした「人の造り」を説明している。

魂「神の思い」を **発信** → **体**「情報」を **収集** → **思考する** **精神**

まさしく人は、三位一体の神の「いのち」によって生きられる者である。それで三位一体の神は、人をご自分たちに似せて造られたと言われたのであった。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて」（創世記 1:26）。

以上が、哲学の成果で知り得た「人の造り」を参考にしたことで見えてくる、聖書が教える「人の造り」である。この造りで大事なことが二つある。一つは、神は人をご自分に似せるために、ご自分の「いのち」を人の「体」に吹き込まれたということである。ご自分の「いのち」の部分を、人の土台に据えられたということである。それは、ご自分の「いのち」を人に貸し出されたことを意味するので、聖書は、「神の種がその人のうちにとどまっている」（I ヨハネ 3:9）と教えている。もう一つは、人であ

る「精神」が機能するには、「体」が必要ということである。神の「いのち」の部分である「魂」には、それを納める「体」が必要であり、その「体」によって情報が取り込まれて認識が生じ、「精神」が機能する。そうである以上、「体」を失えば「精神」は機能できないので、人は滅びるしかない。これが聖書の教えている「人の造り」であり、このことから「魂」と「精神」とは別であることが分かる。

❖ 「魂」と「精神」とは別である

聖書が教える「人の造り」によれば、思考する「精神」には実体がない。それで聖書は「精神」を「霊」とし、ギリシャ語の「**プネウーマ**」[πνεῦμα]で表現した。それは「魂」ではないので、「魂」はギリシャ語の「**プシュケー**」[ψυχή]で表現し、両者を区別した。「あなたがたの**霊（プネウーマ）**も**魂（プシュケー）**も体も」（I テサロニケ 5:23 新共同訳）。そして、実体としてあるのは「魂」と「体」だけなので、イエスは、「**体**は殺しても、**魂**を殺すことのできない者どもを恐れるな」（マタイ 10:28 新共同訳）と言われた。まことに「精神」である「思惟」は、「魂」と「体」とが織りなす機能である。カントも、「思惟は、それ自身としてみれば、単に論理的機能である」（『純粋理性批判』B429 「カント全集5」岩波書店 122 頁）と述べている。このように、「魂」と「精神」とは別である。それは、次の御言葉からも分かる。

「わたしの**魂（プシュケー）**は主を**あがめ**、／わたしの**霊（プネウーマ）**は救い主である神を喜びたたえます。」（ルカ 1:47 新共同訳）

「魂は主を**あがめ**」とあるが、「**あがめ**」の原文は「メガリュノー」[μεγαλύνω]で、「大きくする」という意味である。つまり、「魂は主を大きくする」ということであり、「魂」は神と人との距離を縮め、人の中で神の存在を大きくする運動を展開することが書かれている。その運動のおかげで、「わたしの**霊**」は神を喜びたたえることができるということである。ここでは「わたしの**霊**」と訳されているが、それは当時、「精神」という単独の言葉がなかったので、目に見えない「精神」には「**霊（プネウーマ）**」という言葉が割り当てられていたからである。そのことは、次の御言葉からも分かる。

「あなたがたは**霊（プネウーマ）**を一つにしてしっかりと立ち、心（**プシュケー**）を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており、」（ピリピ 1:27）

ここでは「**プシュケー**」が「心」と訳されているが、それは「魂」を意味する言葉であり、「**霊**」である「精神」（**プネウーマ**）とは完全に区別されている。他にも、「魂（**プ**

シュケー)と精神(プネウーマ)」(ヘブル4:12 私訳)とあるように、ここでも「精神」と「魂」とは完全に区別されている。哲学の成果を参考にすると、聖書に書かれている「人の造り」の意味を、こうして正確に知ることができる。

だが、旧約時代は、人間の側が「精神」と「魂」とは一つであると考えていたため、「精神」だけを言い表す言葉がなかった。そこで、「ネフェシュ」[נֶפֶשׁ]という言葉が、「精神」と「魂」を区別することなく使われていた。例えば、次のように。

「心を尽くし、精神(ネフェシュ)を尽くし、力を尽くして、あなたの神、
【主】を愛しなさい。」(申命記6:5)

これは新改訳聖書第三版の訳だが、そこでは「ネフェシュ」が「精神」として訳されている。しかし、新共同訳は「魂」という意味に訳している。

「あなたは心を尽くし、魂(ネフェシュ)を尽くし、力を尽くして、あなたの
神、主を愛しなさい。」(申命記6:5 新共同訳)

「ネフェシュ」は、このように「精神」とも「魂」とも訳せる。とはいえ、「魂」は神の「いのち」の部分であり、その「魂」によって機能するのが人である「精神」だと知り得た今日に於いては、加えて、「精神」を言い表す単独の言葉が今日はある以上、「ネフェシュ」は文脈から「魂」か「精神」かを区別し、正確に訳す必要がある。例えば、次の「ネフェシュ」は明らかに「人」である「精神」を指している。

「わたしの魂(ネフェシュ)は恐れおののいています。主よ、いつまでなのでしょう。主よ、立ち帰り／わたしの魂(ネフェシュ)を助け出してください。
あなたの慈しみにふさわしく／わたしを救ってください。」

(詩篇6:4-5 新共同訳)

それでも、「精神」と「魂」を異なる言葉で言い表している例もなくはない。次の御言葉は、息、風、といった目に見えないものを意味する「ルーアツハ」[רוּחַ]を使って、目に見えない「精神」を言い表し、「魂」は「ネフェシュ」で言い表している。

「私の魂(ネフェシュ)は夜にあなたを慕い／私の中の霊(ルーアツハ)があなたを捜し求めます。」(イザヤ26:9 聖書協会共同訳)

この御言葉は、神の「いのち」である「魂」が神を慕い求める運動を展開するので、私である「精神」も、神を捜し求めることができることを教えている。

このように、聖書が教えている「人の造り」は、「魂」と「精神」とは別である。プラトンもアリストテレスも、「魂」を「神の属性」としたが、新約聖書は、彼らが知り得た「魂」の概念を共通の基盤とし、人は「魂」と「体」から成る「霊」（精神）であることを教え、当時の人たちに分かりやすく宣教したのであった。そこでは、哲学で生まれた概念が、神から啓示された「神の言葉」の意味を深く知る共通の基盤になっていた。そして、その概念が共通の基盤になれた背景には、哲学で知り得た「神」についての概念が、聖書が教える「神」についての概念と一致したという経緯があった。その神についての概念とは、「ある（存在）」である。では、それも見ておこう。

❖ 神は「ある（存在）」である

人は神によって造られたので、神を知ろうとする。それはそのまま、世界の「始まり」を知りたいという欲求に発展し、そこには「始まり」となる何かがある（存在）」となった。そこで、パルメニデス（BC520 頃-450 頃）は「ある（存在）」について、こう考えた。「ある（存在）」とは何か、すなわち「あるものとは何か？」について考えれば、それは何から生じてきたのかという疑問が生まれる。そうすると、それが生じる前は、「あるもの」はなかったことになるので、それはもう「あるもの」ではない。そうである以上、「あるもの」とは生まれもしないし、終わりもしないものであり、それは常に「ある」のであって、変化などしない。さらには、部分も持たない。部分を持てば欠けているのであって、「ある（存在）」にはならない。

こうして、パルメニデスは、「ある（存在）」とは存在する原因を自分自身に持ち、他のものからは何の影響も受けない無制約であり、「ある」は「ある」ということになるとした。それを彼は、「すなわち（あるものは）あるということ」と言った（[断片 8] 山本光雄訳編『初期ギリシア哲学者断片集』岩波書店 71 頁）。つまり、「存在が存在し、非存在は存在しない」ということであり、ここに変化しない「ある（存在）」という人類最初の考えが生まれた。その「ある（存在）」は全ての「土台」なので、その後の哲学では、「ある（存在）」を「神」の概念とした。これは、モーセが神に、「彼らは、『その名は何ですか』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか」（出エジプト 3:13）と尋ねた時、神が答えた自らの概念と同じである。

「わたしは、『わたしはある』という者である。」(出エジプト 3:14)

無論、モーセに語られたこの神の言葉は、哲学が辿り着いた「神」の概念「ある (存在)」よりも遙か昔に語られたものなので、人がようやく神の概念に辿り着いたということになる。哲学が辿り着く以前から、神は自らの概念を「ある (存在)」として教えてこられたのである。そして、イエスもご自分について、次のように語られた。

「まことに、まことに、あなたがたに言います。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』なのです。」(ヨハネ 8:58 新改訳 2017)

ここで、イエスをご自分のことを『わたしはある』と言われた。つまり、ご自分は神であると言われたのである。こうして、聖書の教える神の概念と、人が知り得た神についての概念とが重なったので、「人の造り」の理解も先述したように重なり、それを共通の基盤とする宣教が、イエスによって開始されたのであった。

このように、神は「ある (存在)」であり、それは「土台」を意味する。人の「体」には、その神の「いのち」、「ある (存在)」が吹き込まれたので (魂)、それが人の「土台」になっている。そこで、改めて「土台」の役割について考察してみたい。

❖ 「土台」の考察

人とは思考する「精神」であり、思考を積み重ねていくことで人格が形成されていく。譬えるなら、それは「家」を建てるようなものである。しかし、「家」を建てるには「土台」が必要であり、「土台」がなければ「家」を建てられないように、人の中にも「土台」がなければ、思考を積み重ねることはできない。「土台」がなければ、思考は単発で終わり、そこでは人格が形成されていかない。それだけではない。思考の積み重ねを継続することで文明も発達するが、それもできなくなるので文明自体も持ち得ない。

さらに言えば、「土台」がなければ始まりもない。始まりがなければ、「過去」、「現在」、「未来」の区別ができない。そこではいつも「現在」になり、時の流れを知ることができない。ただ、瞬間を思考し、生きるだけとなる。それは、動物のようである。動物は「過去」を悔やむことも、「未来」を思い煩うこともなく、文明を築くこともできない。というのも、動物には神の「いのち」(土台)が吹き込まれていないからである。神の「いのち」が吹き込まれたのは人だけであり、神が「土台」となって人を造られた。ゆえに、人間は「過去」、「現在」、「未来」の区別ができ、文明も築ける。

ちなみに、「地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもの」(創世記 1:30)とあり、動物にも「いのちの息」が据えられているかのように訳されているが、これは誤訳である。この箇所へのヘブライ語は「ネフェシュ・ハッヤー」で、同じ言葉が創世記 1:24 にもあり、そちらは「生き物」と訳されているが、この訳が正しい。

このように、「土台」は最も重要である。私たちは当たり前のように「過去」、「現在」、「未来」を区別し、当たり前のように思考を積み重ね、当たり前のように人格を築き、文明も築いているが、それができるのは、私たちの「体」の中に「土台」が吹き込まれているからである。その「土台」は、イエス・キリストである。「土台とはイエス・キリストです」(I コリント 3:11)。言うなれば、「私たちはキリストのからだの部分」(エペソ 5:30)であり、神がぶどうの木であれば、私たちはその枝なのである。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」(ヨハネ 15:5)。まことに「土台」となる「ある (存在)」が、すなわち神の「いのち」の部分が、人の「体」には貸し出されている。それを「魂」と呼ぶ。そして、「土台」の神は「愛」なので、「愛の運動」を展開する。

❖ 「愛の運動」

人の「土台」である神は、三位一体の神である。それは異なる「位格」を持つが、「一つ」となる運動で結びついている一つの実体である。ゆえに、神は「一つ」となる「統合運動」を、人の「土台」である「魂」でも展開する。それを「愛の運動」といい、その運動は「土台」の神と人とを「一つ」にしようとする。「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください」(ヨハネ 17:21 新共同訳)。それは、まさしく神から出た運動であって、神に向かっているのである。「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです」(ローマ 11:36 新共同訳)。つまり、「魂」は人に対し、神を慕い求めさせている。「神よ、わたしの魂はあなたを求める」(詩篇 42:2 新共同訳)。さらには、その運動は人と自然をも結びつけ、ありとあらゆるものを「一つ」にしようとする。そのような「愛の運動」を、人を支えている「土台」の「魂」が展開するので、私たちは心の奥で、「人を愛しなさい」、「自然を愛しなさい」という声を聞く。その促しによって私たちは思考し、目標を設定して生きている。それゆえ、みな「一つ」になれるコンサートやスポーツに参加し、そこで「一つ」になれると感動を覚える。

このように、「愛の運動」は「統合運動」であり、それはあらゆるものを「土台」の神と「一つ」にしようとする。そのため、「体」が情報を持ち込むと、その情報は「統合

運動」が「一つ」にしようとする「対象」とし、そこに思考が生じる。この思考が人であり、「精神」である。したがって、人となる「精神」が先に存在したのではない。先に存在したのは神である。神が大地のちりで「体」を造り、その中に「愛の運動」を展開するご自分の「いのち」を吹き込まれたことで、思考する「精神」、すなわち人は誕生した。「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった」（創世記 2:7 新改訳 2017）。

ここで重要なのは、人が実存するには、自分を支えてくれている「土台」の「魂」と、「魂」を据える「体」が不可欠であるということである。ということは、「体」が機能しなくなれば「魂」を失うことになるので、「肉体の死」はそのまま人が滅びる時となる。実は、これこそが人の究極の問題であり、それは見てきたように、「人の造り」を正確に知ることなしには知り得ないことである。なぜなら、「人間的な標準」では「魂」が人なので、人は死んでも「魂」だけで生きられるとするからである。すると、人の究極の問題は分からないままとなるので、人の問題を解決する「神の福音」も分からないままとなる。そこで、「人間的な標準」を排除するために、注意深く「人の造り」を見てきた。では、総括をしよう。

❖ 総括

聖書の教える「人の造り」は、次のとおりである。神は初めに大地のちりで「体」を造り、そこに神の「いのち」を吹き込まれた。それが「魂」であり、「魂」は神の「いのち」の部分なので、「体」の中で「愛の運動」を展開する。それは、「一つ」に結びつける「統合運動」である。この運動によって「体」が情報を持ち込むようになり、その情報が「統合運動」の対象となる。すると、どのように統合すればよいかとなり、思考する「精神」が機能する。この「精神」が「人」である。聖書はそのことを、「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り（体）、その鼻にいのちの息を吹き込まれた（魂）。それで人は生きるものとなった（精神が機能するようになった）」（創世記 2:7 新改訳 2017 ※（ ）は筆者が意味を補足）と教えている。したがって、聖書によると、人とは「魂」と「体」によって機能する「精神」である。

ところが、「人間的な標準」では「魂」が人であるため、それに従えば聖書の教える「人の造り」の真実是不分らない。しかし、ここでは哲学の成果によって、人間理解に対する「人間的な標準」の誤りを排除することができ、聖書の教える「人の造り」の真実を知ることができた。それによると、「魂」は神の「いのち」であり、そこには「神の思い」が「刻印」されていて、それが「認識の形式」となっていた。そこに「体」

が情報を持ち込むので認識が生じ、人である「精神」が機能するのである。そうであれば、人を支え動かしているのは「神」という結論になるので、聖書は、「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」（使徒 17:28）と教えている。

つまり、私は神の「いのち」である「魂」に生かされている者であり、私の中に神が生きておられるということである。「キリストが私のうちに生きておられるのです」（ガラテヤ 2:20）。その神は「愛」なので、「神は愛です」（Ⅰヨハネ 4:16）、「魂」は「愛の運動」を展開する。それは父と子と聖霊の神が互いを無条件で「肯定」し合う一体性であるように、「愛の運動」は神と「一つ」にする「統合運動」である。「それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです」（ヨハネ 17:22）。この「統合運動」のおかげで、人は人との一致を目指すことができ、平和を愛することができ、人類共通の道德規範を持つことができる。要するに、思考する「私」が機能するのは、全て「魂」が展開する「統合運動」によるのである。これが聖書の教えている「人の造り」であり、それは哲学の成果によって知り得た「人の造り」と一致する。

正確に言えば、「人の造り」に関する創世記の記事はモーセによって書かれたが、それはプラトンやアリストテレスが「人の造り」の概要に辿り着くよりも遙か以前なので、ようやく人の側が聖書の教える「人の造り」を理解できるようになったということである。というより、彼らが創世記の記事を何らかの形で知り、それによって彼らの考えが生み出されたと考えた哲学者もいる（フィロン）。どちらにせよ、哲学の成果は、聖書を聖書の言葉で解く上での参考になるので、ここではそれを使って聖書が教えている「人の造り」を見てきた。尚、哲学の成果の詳細については、『福音の回復』第四巻で詳しく述べる。

さて、ここまでの話は、ようやく「人の造り」が明らかになったというだけである。正確に言えば、人である「精神」が機能するために必要な「認識の仕組み」の造りが分かったというだけで、「神」から見た人の「真実な姿」が分かったということではない。そこで次に、明らかになった「人の造り」を基に、人の「真実な姿」を探っていく。それが分かれば、人の「現状の姿」とどこが違うのかが「人の造り」のレベルで分かるので、一体何が人に起きたから人が罪を犯すようになったのか、その原因を正確に特定できる。そうすれば、罪を取り除く「神の福音」も具体的に見えてくる。では、いよいよ第一章が目指す、人の「真実な姿」について見ていこう。

－人の「真実な姿」－

人の「真実な姿」については、二つの考えがある。一つは、人の「認識の仕組み」から知り得た現状の「人の造り」を、そのまま人の「真実な姿」とする考えである。これは、理性で納得のいく話である。もう一つは、神が人を造られた際の人の様子から、その様子を可能にする「人の造り」を人の「真実な姿」とする考えである。聖書はその様子を、「人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった」（創世記 2:25）と教えているので、恥ずかしいと思わずにいられた「人の造り」を人の「真実な姿」とする考えである。これは、理性で納得のいく話ではない。ゆえに、一般には前者の考えが支持される。しかし、前者の考えでは、神が罪を犯すように人を造られたことになってしまうので、それはあり得ない。では、どうして現状の「人の造り」では罪を犯すのか、その理由は、先述した「認識の仕組み」を掘り下げれば見えてくる。そこで、話はそこから始め、人の「真実な姿」を知ることを目指す。

❖ 「認識の仕組み」を掘り下げる

先述した「認識の仕組み」を掘り下げると、次のようになる。人とは、何かを認識し、思考する「精神」である。認識するためには、「概念」が必要である。その「概念」の原点は、神の「いのち」の部分である「魂」が発信する「神の思い」である。その神は「永遠」であり、「神の思い」も「永遠」という特性を持つ。この「永遠」が純粋な「概念」となり、「精神」はこれを使って「体」が持ち込む情報の認識を開始する。それは、「魂」が発信する「永遠」の概念と「体」が持ち込む情報を「一つ」にしようとする作業である。「魂」は「神の思い」を発信すると同時に、その思いと世界を一つにしようとする「統合運動」を展開するので、その運動により「精神」が動かされ、「魂」が発信する「神の思い」を「述語」とし、「体」が持ち込む世界の情報を「主語」として「一つ」に結びつけようとするのである。ここに認識が起き、思考となる。

だが、ここに問題が生じる。「神の思い」の特性は変わらない「永遠」であっても、「体」が持ち込む世界の情報は変化し続ける「有限」なので、この二つは結びつかないのである。「体」が収集する情報は「有限」であるが、人が持っている純粋な「概念」の特性は「永遠」であり「無限」なので、「有限」とは「一つ」になることができない。人を支えている「魂」は神の「いのち」であり、その神は「統合運動」を展開し、「すべての人を一つにしてください」（ヨハネ 17:21 新共同訳）と願っても、神は「無限」でありながら、人の体は「有限」であるため「一つ」になれない。これはつまり、「主

語」と「述語」が結びつかないことを意味し、行き止まりを意味する。行き止まりになれば認識は止まるはずなのに、なぜか認識が続く。そこで、次のように考えられる。

「無限」と「有限」は「一つ」にならない。それでも「魂」が展開する「統合運動」は、太陽の動きを止められないのと同じように、誰にも止められない。したがって、無理にでも結びつこうとする。そのため、「体」が収集する「主語」（有限）に、最初の純粋な「述語」（無限）を無理に結びつけてしまう。それは、「主語」の「有限」を、「無限」として見なしてしまうということではあるが、そのおかげで「精神」は認識し、思考を続けることができる。しかし、それは「述語」の「無限」に、「主語」の「有限」を無理矢理結びつけているため、その認識は虚構であるというのが、カントの思想を引き継いだフィヒテの考えである（『全知識学の基礎』）。こうした考えに基づき、人の認識は虚構であるため、人の認識の底辺には必ず「不安」が横たわっているとしたのである。彼はこの「不安」が、罪の源泉であるとした（『不安の概念』、『死に至る病』）。つまり、彼らの考えを総合すると次のようになる。

自分を支え動かしている「魂」によって、誰であれ「永遠」という純粋な「概念」を持っている。「永遠」を知った「精神」は「体」を使って世界を覗き込み、「永遠」を探し回る。そして、それと結びつこうとする。ところが、この世界には「永遠」はなく、あるのは「死」である。それで「不安」を覚える。だが、「不安」には耐えられないので、この世界に架空の「永遠」を仕立て、それを「主語」にし、そこに「述語」（永遠）を付けることで、虚構の「安心」を目指すのである。これが「偶像礼拝」であり、罪である。このことを、さらに別の視点から説明すると次のようになる。

誰であれ、「魂」によって、「永遠」という純粋な「概念」を持っている。「永遠」とは神のことであり、それは変化しない不動である。「イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません」（ヘブル 13:8 新改訳 2017）。ところが、「体」が持ち込む情報は「有限」であって、それは変化し続ける。そこで、人は変化しない「永遠」に、変化し続けるものを無理にでも結びつけようとする。例えば、恋に落ちると、「これが永遠に続くように」と言って、恋と「永遠」を結びつけ、それにしがみつく。また、楽しみを手に入れたり、賞賛を手にしたりとすると、それと「永遠」とを無理に結びつけ、「これが永遠に続くように」と言ってしがみつく。しかし、どんなに頑張ってもそれは一時的なもので、やがて離れていく。そうなれば、再び何かにしがみつき、「これが永遠に続くように」と言って、あたかも自分と「永遠」とが結びついたかのように思い込む。こうして、何かのしがみついても失い、また何かのしが

みつく。この繰り返しである。そのため、この作業は「空の空」(伝道者 1:2) でしかなく、失ってしまうことへの「不安」が常に付きまとう。それでも、人は変わらない「永遠」を「魂」によって知っているので、そして「魂」は「永遠」に向かって人を動かすので、「永遠」を見える世界の何かに求め、その何かにしがみつかずにはいられなくなる。このむさぼりがそのまま「偶像礼拝」になり、「このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです」(コロサイ 3:5)、罪の行為になる。ここに苦しみの原因がある。

人は苦しみの本当の原因を知らない。そのため、例えば原因は人にあると思ってしまい、人を憎んでしまう。だが、苦しみの本当の原因は、「永遠」である神と結びつくことができないことにある。「有限」に遮られ、心を「永遠」の神に向けられないことにある。この状態が「罪」なので、聖書は「罪」を言い表すのに、「的が外れている」ことを意味する「ハマルティア」[ἁμαρτία]を使う。つまり、神から出た「魂」は人の「土台」となり、人を神に向かわせる運動を展開するので、「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです」(ローマ 11:36 新共同訳)、そしてその運動は誰にも止められないので、人は自分が暮らす世界の「有限」の何かを神の「永遠」に仕立て、無理矢理にでも結びつこうとするが、それは偽物なので人は苦しむということである。この苦しみを覚える状態が「罪」であって、人はその苦しみのから目を背けるために、快楽をむさぼってしまう。これが「罪の行為」である。

このように、「主語」に「述語」を結びつけることで認識に至るが、人が手にする「主語」は「有限」であり、人が生まれながらに持っている純粋な「述語」は「永遠」であり「無限」なので、そこでは「一つ」となる結びつきは不可能でしかない。そこで、「主語」の「有限」を、無理にでも「無限」と見なし、結びつけてしまう。しかし、それは長くは続かないので、結びつく先を次から次に変え、変化しない「永遠」を探し回る。このような事情から、何かと結びつこうとすることで生じる人の認識には常に「不安」が伴う。その「不安」が苦しみである。ここに、見える安心をむさぼる「罪の行為」の源泉がある。今では誰もが見える「安心」を目指して生きているが、それは誰もが「不安」を覚えているからである。キェルケゴールはこの仕組みを突き止め、「不安」の解決はキリストを信じる信仰にしかないとした(『キリスト教への修練』)。以上が、「認識の仕組み」をさらに掘り下げた話である。すなわち、現状の「人の造り」では人は「不安」を覚える以上、罪を犯すしかない。この事実から、現状の「人の造り」を人の「真実な姿」とすると、一体何が問題なのかは明らかである。

❖ 何が問題なのか

現状の「人の造り」は、「無限」の「魂」と、「有限」の「体」とに支えられている。キェルケゴールは、この「無限」(魂)を「霊的」と言い換え、「有限」(体)を「肉的」と言い換え、「人間」を次のように定義した。「人間は霊的なものと肉的なものの総合である」(『不安の概念』(348) 岩波文庫 71 頁)。つまり、人である「精神」は、神から出ている「永遠」の運動を展開する「魂」と、「死」に向かう「有限」の運動を展開する「体」とに支えられているということである。それは、全く異なる認識に支えられていることを意味する。一つは、神から出ている「永遠」の運動による認識であり、聖書はこれを「御霊による思い」という。もう一つは、「死」に向かう「有限」の運動による認識であり、聖書はこれを「肉の思い」という。このように、「肉の思い」は「死」(有限)に起因し、「御霊による思い」は神の「いのち」(永遠)に起因するので、聖書は、「肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です」(ローマ 8:6) と教え、「肉の思いは神に対して反抗する」(ローマ 8:7) と教えている。

まことに、人は相反する思いに支えられているので、現状の「人の造り」では「不安」が生じてしまう。聖書は、この「不安」を「死の恐怖」と言い換え、「一生涯死の恐怖につながれて」(ヘブル 2:15) と表現する。「死の恐怖」は見える「安心」をむさぼらせるので、「安心」の獲得を巡っての争いが生じる。したがって、「死の恐怖」という「不安」が「罪の行為」の源泉になっている。すると、人を造られたのは神である以上、現状の「人の造り」を人の「真実な姿」とするなら、神が「不安」を覚える姿として人を造り、「罪人」にしたことになる。現状の「人の造り」は「無限」と「有限」とに支えられているので「不安」を覚えるしかないが、それが神の造られた人の「真実な姿」となれば、神が人を「罪人」として造られたことになる。そうすると、罪を取り除く「神の福音」は詭弁にしかならないので、現状の「人の造り」を人の「真実な姿」とすることは誤りである、という結論になる。これが指摘したい問題である。

ところが、理性の納得を優先し、現状の「人の造り」を神が造られた人の「真実な姿」とする人たちは、人が罪を犯すのは自らの自由意志によるとし、神は決して人を罪人として造られたのではないとする。しかし、「無限」と「有限」とに支えられている「人の造り」では必ず「不安」が生じる以上、見える安心をむさぼる罪は、自由意志でどうにかなるというレベルの話ではない。パウロも、「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです」(ローマ 7:15) と言い、自分の力でどうにかなる話ではないとする。それゆえ、「それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みつ

ている罪なのです」(ローマ 7:17) と言い、罪を犯すのは私ではなく、「私のうちに住みついている罪」とする。これは、現状の人の姿 (人の造り) に問題があるから、私は罪を犯すということである。神は、その罪と戦われる以上、罪を犯すしかない現状の人の姿は、神が造られた人の「真実な姿」にはなり得ないのである。ならば、人の現状の姿は何なのか。人の現状の姿は、神が造られた人の「真実な姿」に「死」が入り込んだ姿である。人の「真実な姿」が、アダムの子によって入り込んだ「死」に制約された姿である。「無限」であった人の「体」と世界が、入り込んだ「死」によって「有限」になった姿である。聖書は、その出来事を次のように説明している。「ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り」(ローマ 5:12)。

このように、人間学である哲学の進歩は罪の原因を明らかにした。それは、「不安」である。その「不安」は、「無限」を知りながら「有限」しか確認できないことで生じる。平たく言えば、「永遠のいのち」を知りながら、「死」の現実しか確認できないことで生じる。すなわち、見える安心をむさぼってしまう罪の原因は、「死」の現実にあるということである。聖書はこの考えを支持するので、「死のとげは罪であり」(I コリント 15:56) と教えている。そうである以上、原罪があるので罪を犯すという話は通用しない。原罪とは、アダムが最初に犯した罪のことであり、その際の彼の「罪性」が人類に遺伝したので、人類は罪を犯すようになったとする話である。これはもう、現代では通用しないのである。そもそも聖書が教えているのは、アダムの原罪に伴い「死」が入り込んだので、その結果、人は罪を犯すようになった、ということである。

「それゆえ、ちょうど一人の人を通して罪がこの世に入り、罪を通して死が入り、まさしくそのように、全ての人たちに死が広がった。その結果、全ての人が罪を犯すようになった。」(ローマ 5:12 私訳)

尚、この私訳は Joseph A. Fitzmyer による英訳を日本語にしたものである。この英訳は、新約聖書のギリシャ語辞書としては最も学術的に優れているとされるドイツ語の Walter Bauer の辞書を、Danker 監修の下で英訳された第三版の 365 頁に記載されている。詳しくは、『福音の回復』第三巻で述べる。

こうして聖書は、現状の「人の造り」は、人の「真実な姿」ではなく、「真実な姿」に「死」が入り込み、「罪人」になった姿であるとする。ならば、人の「真実な姿」はどうなっているのだろう。ここから先は、それを見ていく。そこで思い出してほしいのが、現状の人の「認識の仕組み」では、人の「真実な姿」を認識できないということである。人は、元来の情報を、「時間」と「空間」の制約を通過させ、経験で獲得した

多くの「概念」と結びつけて見ている。そのため、人の「真実な姿」は聖書でしか知り得ないというのが、先の「認識の仕組み」で分かったことである（本書 28 頁「真実な姿」ではない）。そこで、ここからは聖書が教えている人の「真実な姿」を見ていく。その姿は、神が最初に人を造られた際の姿を指すので、その時の人の様子を知る必要がある。それは、人とは「精神」であり「意識」の総合なので、その時の人の様子を知るとは、その時のアダムとエバが何を意識していたのかを知ることである。それが分かれば、その意識を持つのに必要な「人の造り」が分かるので、それが人の「真実な姿」になる。では、何を意識していたのかを見てみよう。

❖ アダムとエバは何を意識していたのか

人とは、「魂」が促す「統合運動」により、「体」が情報を持ち込み、「魂」が発信する「神の思い」という物差しを以て、それが何かを認識し、思考する「精神」である。ただし、認識するのに使う物差しの「神の思い」は変わることがないので、「しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない」（Ⅰペテロ 1:25）、人が何を認識し、何を意識するかは、「体」が持ち込む情報に左右される。人の「体」が「神の思い」を確認できる情報を持ち込めば、「平安」を意識できるが、確認できない情報ならば「不安」を意識することになる。今日に於いては、「体」が持ち込む情報は何であれ「有限」であり、その「体」では「無限」である「神の思い」を確認できないので、「不安」を意識するしかない。ならば、神が造られた際の人も「不安」を意識していたのだろうか。アダムとエバは、一体何を意識していたのだろうか。それを知るには、彼らの「体」が持ち込める情報が何であったかを知ればよい。そこで、聖書を見てみると、そこには次のように書かれている。

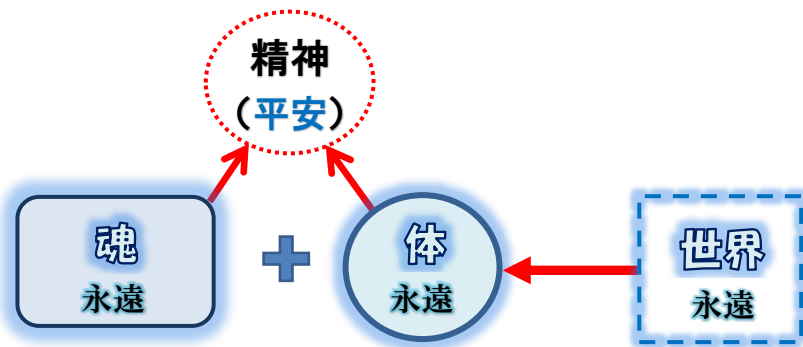
「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。」（創世記 1:31）

「非常に良かった」ということは、人の「体」が持ち込む世界の情報の全てが、「魂」が発信する「神の思い」を「肯定」するものであったということである。「神の思い」は「無限」であり、変わることのない「永遠」なので、それは人の「体」も世界も同じ「永遠」で造られていたということである。要するに、神が造られたものの中には、「神の思い」を「否定」するものは何もなかったということである。そうであれば、この時の人は「平安」を意識していたことになる。また、人の「体」も「永遠」であったとなれば、同じ「永遠」である神に支えられている自分を認識できていたことになる。それは、神に無条件で愛されている自分であり、いつも神に「肯定」されている

自分の姿である。この推論が正しければ、人は裸であっても、恥ずかしいとは思わなかったことになる。というのも、恥ずかしいという思いは自己を「否定」する思いだからである。そこで、聖書を見てみると、次のように書かれている。

「人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった。」（創世記 2:25）

人は裸であっても、恥ずかしいと思わなかったという。これは、神に無条件で愛されている自分を人は認識でき、「平安」を意識していたことを証ししている。そこには、自分を「肯定」する思いしかなく、「否定」の思いは一切無なかったことを証ししている。つまり、神が人を造られた当初は、人は「魂」が発信する「神の思い」を、「体」が持ち込む情報でも確認できていたということである。「神の思い」と「体」が持ち込む情報とを、そのままで「一つ」に結びつけることができ、それは虚構の結びつきではなく真実な結びつきであったということである。その「神の思い」は、キリストが十字架で明らかにされたように、人を無条件で愛する「愛」に集約される。その「愛」を、「体」が持ち込む情報でも確認できていたということである。それは、人の「体」も世界も、神と同じ「永遠」であって、「非常に良かった」からこそ可能であった。



これこそが、神が「良し」とされた人の姿であって、神から見た人の「真実な姿」にほかならない。それは神のように良いものを思考する姿であり、まさに人の「真実な姿」は神に似た者であった。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて」（創世記 1:26）。その姿を可能にするには、「体」も「世界」も永遠性の神を否定しない永遠性でなければならなかったので、神はそう造られたのである。「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」（創世記 1:31）。この永遠性の造りこそが人の「真実な姿」であって、それは「良き者」としての姿である。では、「良き者」であることの事実を、さらに見てみよう。

❖ 「良き者」である

土地のちりで造られた「体」に、神の「いのち」の部分が貸し出されたのが人である。「神である【主】は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた」（創世記 2:7）。その「いのち」は「魂」と呼ばれ、それが「神の思い」を発信することで人を生かしている。ゆえに、人の土台は神であり、人は神の部分である。「私たちはキリストのからだの部分だからです」（エペソ 5:30）。神が「ぶどうの木」であれば、人はその「枝」である。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」（ヨハネ 15:5）。したがって、本体の神が「良い神」である以上、その本体の部分である人は、紛れもなく「良き者」ということになる。つまり、人は良い行いをする者として、キリストにあって造られた者なのである。

「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」（エペソ 2:10）

このように、人の「真実な姿」は「良き者」の姿であり、神と同じ「良い行い」ができる者として造られた。そこで、神はご自分の「いのち」を人に貸し出し、人が「神の思い」を確認できるように、世界も非常に良いものとして造られたのである。まことに人の「真実な姿」は、「良き者」で間違いはない。それは「罪人」の姿ではなく、「義人」の姿にほかならない。このことから、人の「真実な価値」も見えてくる。

❖ 人の「真実な価値」

人は神の「枝」として造られた以上、「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」（ヨハネ 15:5）、人の価値は神の価値を共有する。その神は「不変」であって、その輝きはあせることがない以上、喩えるなら人は誰もが世界に一つしかない「ダイヤ」である。それで神は、「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」（イザヤ 43:4）と言われた。まことに、人の「真実な価値」は、神が持つと同じ価値であり、それは「不変」である。つまり、神の目には、人は永遠の「肯定」であって、初めから神に受容されている非常に「良き者」なのであって、それは何があっても変わることがないのである（不変）。

「人の真実な価値」 = 非常に「良き者」 = 永遠の「肯定」 → 「不変」

以上が人の「真実な価値」であり、ここから神に於ける「善」と「悪」が見えてくる。

❖ 神に於ける「善」と「悪」

神が造られた世界は、「非常に良かった」（創世記 1:31）。そこには、神の「永遠」を否定する「有限」は存在していなかった。神の「いのち」を否定する「死」は全くなかった。このことから、神に於ける「善」と「悪」が決定する。「善」は、神の創造を「肯定」する「永遠性」の運動であり、それは神の「いのち」への「肯定」であって、「いのち」である。「悪」は、神の創造を「否定」する「有限性」の運動であり、それは神の「いのち」への「否定」であって、「死」である。

「善」 = 「肯定」 → 「永遠性」の運動 → 「いのち」

「悪」 = 「否定」 → 「有限性」の運動 → 「死」

このように、「善」とは、神の創造への「肯定」であり、「悪」とは、神の創造への「否定」である。前者は「永遠性」の運動であり、後者は「有限性」の運動である。前者は「いのち」であり、後者は「死」である。前者は「平安」であり、後者は「不安」である。このことから、人の「真実な姿」と「現状の姿」との違いが明らかになる。

❖ 人の「真実な姿」と「現状の姿」との違い

神は自らの創造の全てを、「非常に良かった」（創世記 1:31）と言われた以上、人が暮らす世界も人の「真実な姿」も、神の「永遠性」の運動に支配された「善」であり、ゆえに、人は神と同様に「良い行い」しかできない「良き者」であって、「義人」である。これが神の創造である。しかし、人の「現状の姿」は「有限性」の運動に支配されているので、それは「悪」であり、「良い行い」ができない「罪人」である。人を支えている「魂」は同じであっても、現状の人の「体」と人の暮らす世界は、神の「いのち」を「否定」する「死」に支配されている。それで、人は「不安」を覚えるしかなく、そのせいで見える安心をむさぼる「罪人」になっている。この違いを埋めるのが「神の福音」である。ここまで分かれば、「神の福音」の方針は決定する。

❖ 「神の福音」の方針

「神の福音」は、人の「真実な姿」と「現状の姿」との違いを埋めるものである。そして、人の「真実な姿」は「義人」であり、人の「現状の姿」は「罪人」である。したがって、「神の福音」は「罪人」を「義人」にする話である。ただし、人の「真実な姿」は罪を犯さない「良き者」なので、罪を犯すという「現状の姿」は、あくまでも「良き者」が病気になったという扱いになる。本来のあるべき姿が機能しない事態を、病気というからである。そうである以上、「神の福音」は「ダメな者」を「良き者」にす

る話ではなく、不変の価値を有する、すなわち神の栄光を輝かせている「良き者」を癒やし、「良き者」としての栄光を回復する話になる。それが「神の福音」の方針であって、これは「病人」を癒やすのと同じである。「病人」の本来の姿は「健康」なので、病気を癒やすのと全く変わらない。喩えるなら、人は「ダイヤ」であり、それに泥が付いたので、その泥を洗い流して元の輝きに戻すのが「神の福音」ということになる。

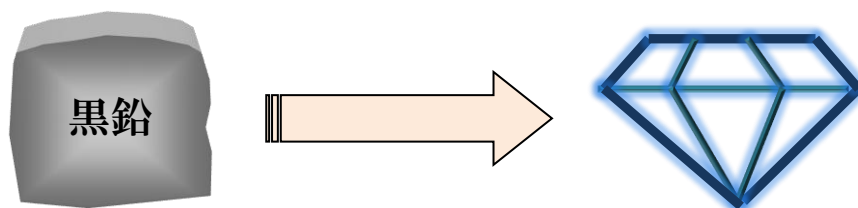


このように、人の「真実な姿」は神の栄光を輝かせた「良き者」なので、「良き者」から「良き者」へと、栄光から栄光へと、神は「良き者」に付いた泥を洗い流しながら、主と同じ姿が現れるようにしてくださる、というのが「神の福音」の方針になる。

「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。」

(Ⅱ コリント 3:18)

「栄光から栄光へ」とは、「○から○へ」ということであって、「×から○へ」ということではない。「良き者から良き者へ」であって、「ダメな者から良き者へ」ではない。それは、神にとって、人はご自分のいのちさえ惜しくないほどに愛したい「良き者」である、ということである。ところが、アンデルセン童話の『醜いアヒルの子』のように、人は自分の現状の姿を見て、自分は愛されない「ダメな者」と思い込んでしまった。そうになると、行いを頑張ることで神に愛されようとするので、神は「ダメな者」を訓練し、神に受け入れられる姿にするのが「神の福音」だと思えてしまう。喩えるなら、人は「黒鉛」であり、神がそれを叩いて神に愛される「ダイヤ」に変えるのが、「神の福音」だと思えてしまう。しかし、それは全くの思い違いである。



この思い違いが、「罪を悔い改めよ！」という表現を生んでしまった。というのも、「罪を悔い改めよ！」というフレーズは聖書に一箇所もないからである。あるのは、た

だの「悔い改めよ」であり、それは「メタノエオー」[μετανοέω]の訳であって、意味は「反省せよ」ではなく、「向きを変えよ」である。神のもとに来なさいという意味である。医者が病人に対し、「私のもとに来なさい」と言うのと同じである。それゆえ、イエスは「罪人」を「病人」として扱われたのであった。

「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」(マルコ 2:17)

ということは、人の罪を背負われたイエス・キリストの十字架は、人を癒やすためであったということになるので、そのことも聖書は教えている。

「キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた。」(I ペテロ 2:24 新改訳 2017)

すなわち、「神の福音」は「ダメな者」を「良き者」にする話ではなく、「良き者」を癒やし、「良き者」の栄光を回復する教えなのである。このように、人の「真実な姿」が分かれば「神の福音」の方針が決定する。尚、「罪を悔い改めよ！」の誤解については、『福音の回復』第二巻で詳しく説明する。

さて、現時点までで分かったことは、人の「体」と人が暮らす世界は、もともとは「永遠」であったのが、現状では「有限」であるということである。つまり、「死」が入り込んだということである。その結果、「義人」は「罪人」になったということである。ならば、どのようにして「死」が入り込んだのだろうか。それを明らかにしない限り、「神の福音」の実際は見えてこない。どうすれば人は癒やされるのか、その具体的な治療は見えてこない。そこで、次章は、人の「真実な姿」に一体何が起きたのかを見ていく。何が起きたから、人は「義人」から「罪人」になったのか、その経緯を明らかにする。そのようにして、罪の原因を特定する。そうすれば、罪を取り除く「神の福音」の真実も明らかになるからである。

第二章 人に何が起きたのか

人の「真実な姿」は、神と同じ「良い行い」をする「義人」であることが分かった。「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです」(エペソ 2:10)。ならば、人の「現状の姿」はどうだろう。神とは異なり、「悪い行い」をする「罪人」である。では一体、人の「真実な姿」に何が起きれば「罪人」になるというのだろうか。ここではそれを明らかにする。そのためには、「罪」を犯すことを可能にするものは何かを先に見ておく必要がある。話はそこから始めよう。

－「罪」を可能にするもの－

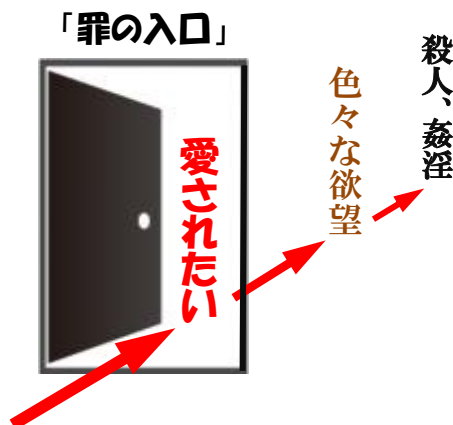
心理学は、人の心と行動を科学的手法によって研究する学問である。それゆえ、心理学を使えば、人が罪を犯すことを可能にする心の状態は、どうでなければならないかを探ることができる。心にどのような願望があれば、人は罪を犯してしまうのかを知ることができる。結論を言えば、それは「愛されたい」という願望である。「愛されたい」と思うから、その願望が満たされないと反社会的な行動に出てしまう。「愛されたい」と思うから、互いを比べ、嫉妬してしまう。その嫉妬が争いを引き起こし、時として、反社会的な行動や犯罪に繋がっていく。例えば、「愛されたい」という願望から、職場では誰が上司から愛され出世できるかを巡って競争が起き、それが原因で他人を誹謗中傷する行動に出る人もいる。さらにエスカレートすると、名誉毀損やハラスメントなどの犯罪に発展することもある。そこで 20 世紀を代表する心理学者の一人、アルフレッド・アドラー (1870-1937) は、この「愛されたい」という願望を「承認欲求」と呼び、この欲求が人の全ての行動を支配し、それが人を苦しめる様々な行動にも結びついているとした。それゆえ、苦しみから自由になりたいのであれば、「承認欲求」とは対極の「嫌われる勇気」を持つ必要があることを説いた (参考：岩見一郎、古賀史健著『嫌われる勇気』ダイヤモンド社)。

このように、心理学に耳を傾けるのであれば、罪を犯すことを可能にするものは「承認欲求」ということになる。それは、「愛されたい」という願望である。つまり、「愛されたい」という願望が「罪の入口」ということになる。にわかには信じがたいかも

しれないが、科学的手法に立つのであれば、そうなる。そこで、「愛されたい」という願望が「罪の入口」になることを検証してみたい。

❖ 「罪の入口」

罪というと、何を思い浮かべるだろう。一般に罪というと、反社会的な行動を思い浮かべるだろう。「殺人」、「暴力」、「不正」、「詐欺」、さらには家庭を壊す「姦淫」といった行為を思い浮かべるだろう。クリスチャンならそれに加え、「酩酊」、「遊興」、「憤り」、「争い」などが加わるかもしれない。ならば、そうした罪は一体何が原因で生じるのか。原因としてすぐに思い浮かぶのは、「色々な欲望」だろう。欲望が原因で罪が生じると誰もが思う。しかし、ここで重要なのは、なぜ「色々な欲望」が生じてしまうのかという点である。心理学の成果によると、「色々な欲望」の出所は、「承認欲求」、すなわち「愛されたい」という願望である。「愛されたい」という願望が、「色々な欲望」をはらませる「罪の入口」となり、人が一般に思い浮かべる罪の行為に発展する。



では、どうして「愛されたい」という願望が「罪の入口」になるのか。それは次の流れを知れば容易に理解できる。まず、「愛されたい」という願望を満たすには、すなわち人からほめられるには、人の期待に応える必要がある。そうすると、人の期待がそのまま心を拘束する「ねばならない」という「律法」になるので、「律法」を達成することでほめられ、愛されようとする。こうして、人の中に「律法」の達成を欲する「欲望」が生まれ、人から良く思われるための「色々な律法」が、そのまま「色々な欲望」になる。ならば、「色々な欲望」を持つとどうなるのだろうか。

例えば、子どもは親から「愛されたい」と思うので、親が子どもに有名大学に行くことを期待すれば、子どもは「有名大学に行かなければならない」と思うようになり、それが子どもにとっての「律法」になり、「欲望」となる。その場合、その子は手にした「律法」で人の価値を判断するので、有名大学を出た者には「好意」を抱き、そう

でない者には「敵意」を抱くようになる。つまり、「律法」を達成したいという「欲望」を持つと、人に対して「好意」か「敵意」を抱くようになるということである。この原理を聖書も支持するので、「敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです」(エペソ 2:15) と教えている。そして、「敵意」が様々な罪の行為に向かわせ、最悪「人殺し」にまで発展させてしまう。このように、確かに「愛されたい」という願望は、この場合だと「有名大学に行きたい」という「欲望」をはらませ「敵意」を抱かせるようになるので、「愛されたい」という願望が「色々な欲望」をはらませる「罪の入口」ということになる。では、これで間違いないか、この話をもう少し具体的に検証してみたい。

子どもは親から愛されるために、「有名大学に行かなければならない」という「律法」を持つと、「有名大学に行きたい」という「欲望」をはらませる。すると、その時点から激しい競争が生まれる。競争に勝たなければ有名大学には行けないので、必ず競争が起きる。すると、同じ受験生はライバルとなり、戦うべき敵となる。互いを比べ、「ねたみや争い」が生じるようになる。その中、競争に負けてしまうと、激しい悔しさや嫉妬に襲われる。それを放置すると、最悪「人殺し」にまで発展する。このことから、確かに「愛されたい」という願望が、「色々な欲望」をはらませる「罪の入口」になっていることが分かる。聖書も、カインとアベルを例に、このことを教えている。

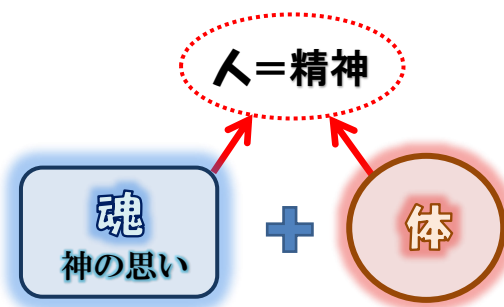
カインは「愛されたい」という願望から、すなわち少しでもほめられたいという欲求から、神に対し、「少しでも良い捧げ物をしなければならぬ」という「律法」を持った。そして、「律法」を達成することで、神の愛を独り占めにしたいという「欲望」をはらませた。そこで、彼は一生懸命働き、自分の捧げた物で神に認められようとした。同様に、弟のアベルも一生懸命働いて神に捧げ物をした。ところが、神はアベルの捧げ物の方に目を留められたので、カインはひどく怒り、悔やしがった。「それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた」(創世記 4:5)。彼はなぜ怒ったのか。聖書は、「律法」が「怒り」を招くことを教えている。「律法は怒りを招くものであり」(ローマ 4:15)。つまり、彼は、「律法」を持ち「欲望」をはらませたことで「怒り」を覚え、弟を殺してしまったのである。「カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した」(創世記 4:8)。

このように、「罪の入口」は「愛されたい」という願望である。その願望が原因で、「殺人」などの罪の行為が生まれている。「愛されたい」という願望である「承認欲求」が「色々な律法」を心に持たせ、それがそのまま「色々な欲望」をはらませ、様々な罪の行為につながっていく。ゆえに、「愛されたい」という願望が「罪の入口」であり、そ

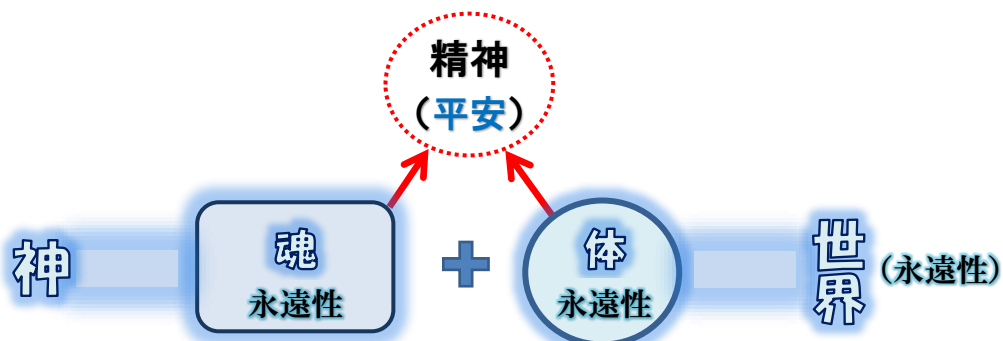
の願望から生じる「律法」が「罪の力」なのである。聖書もこの流れを支持するので、「罪の力は律法です」（Ⅰコリント 15:56）と教えている。ならば、一体どこから、「愛されたい」という願望が生まれたのだろう。これを解くカギが、まさしく「人の造り」にある。「人の造り」が分かれば、その起源も容易に分かる。では、それを見てみよう。

❖ 「愛されたい」という願望の起源

人とは「精神」であり、それは神の「いのち」に根ざす「魂」と、「魂」を納める「体」によって機能する。「魂」が発信する「神の思い」を、「体」が持ち込む情報で確認しようとすることで意識が生じ、「精神」は機能する。これが「人の造り」である。

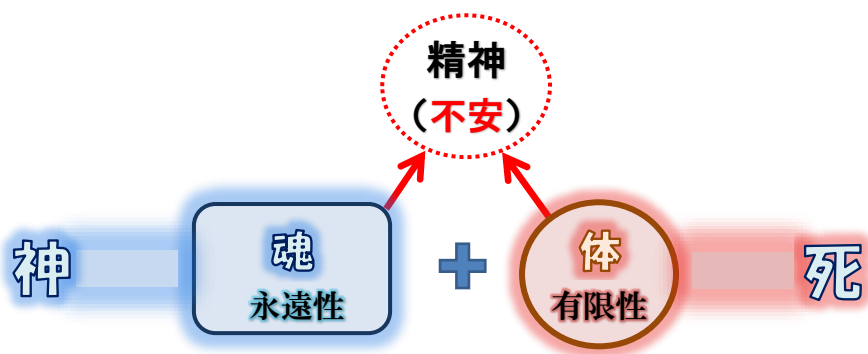


そして、人の「真実な姿」は、「魂」が発信する「神の思い」を、「体」が持ち込む情報で確認できる姿であった。確認できる「神の思い」は「愛」である。「神は愛です」（Ⅰヨハネ 4:16）。「愛」とは、神が三位一体であるように、すなわち互いを無条件で肯定し合い「一つ」であるように、人の存在を無条件で肯定し、神と「一つ」になる運動である。「それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです」（ヨハネ 17:22）。その「愛」を、すなわち無条件で愛されている自分を、認識できるのが人の「真実な姿」であった。それゆえ、「人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった」（創世記 2:25）とある。これは、その時の人は、神に愛されている自分を完全に認識できていたことを示している。その時の人の「体」と世界は、「永遠性」の神を認識できる「永遠性」であったことを示している。そうである以上、そこには「愛されたい」という願望は全くなかった。



では、どうすれば「愛されたい」という願望を持つようになるのだろうか。それは、「魂」を介して神からの「愛」を知っている、すなわち無条件で愛されている自分を知っている、そのことを「体」を通して確認できなくなればそうなる。無条件で愛されている自分を認識できなくなれば「不安」になり、何としても「体」を通して、無条件で愛されている自分を認識しようとするので、それが「愛されたい」という願望を引き起こす。ならば、人の「体」に何が起きると、「体」は神からの「愛」を確認できなくなるのか。それはつまり、何が起きれば、人の「体」は神を認識できなくなるのかである。それこそが、「愛されたい」という願望の起源にほかならない。

「人の造り」を知るなら、人の「体」が神を認識できなくなる出来事を知るのも簡単である。神は「永遠性」なので、人の「体」が「有限性」になり、「有限性」の情報しか収集できなくなれば、「永遠性」である神を認識できなくなる。神に無条件で愛されている自分を認識できなくなる。人の「体」と「体」の暮らす世界が、「永遠性」から「有限性」になれば、つまり「いのち」に向かうのではなく、「死」に向かうようになれば、「いのち」である神との間に「隔ての壁」が出来てしまい、「魂」を介して知っている神を認識できなくなる。そうなれば、人である「精神」は「不安」を覚え、「愛されたい」という願望を抱くようになってしまう。

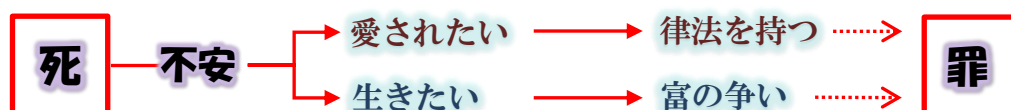


このように、「愛されたい」という願望は、人の「体」と人の暮らす世界が「永遠性」から「有限性」に変わらない限り、発生しないのである。「いのち」の支配から、「死」の支配に変わらない限り、「愛されたい」という願望は生じようがない。ということは、「死」が入り込むという出来事が起きたということである。神と人を「分離」する「死」が入り込んだので、人は「不安」を覚えるようになり、神の命令「愛せよ」に逆らう「愛されたい」という願望を持つに至り、「罪人」になったということである。ところで、「罪の入口」は「愛されたい」という願望だけではない。実は、もう一つある。それは「生きたい」という願望である。

❖ 「生きたい」という願望

罪の行為には、富を巡る争いがある。その争いは戦争にまで発展する。人は少しでも多くのお金を欲し、多くのお金を持つことで安心を得ようとする。こうした罪の行為を牽引しているのが、「生きたい」という願望である。「生きたい」という願望があるので、生きるために必要な富を欲する。「生きたい」という願望があるから、生きるために必要な物資を巡って争ってしまう。石油、鉱山資源、穀物、水、そうした物資を巡り争う。それは全て、「生きたい」という願望があるからである。したがって、「生きたい」という願望も「罪の入口」になっている。

それでは、「生きたい」という願望はどこから生まれたのだろうか。これも「死」からである。「いのち」の喜びを知る者に、それを否定する「死」が入り込むと、「生きたい」という願望が生まれる。神が造られた最初の世界は非常に良く、「非常に良かった」(創世記 1:31)、そこには「いのち」の喜びしかなかったのも、そこに「いのち」を否定する「死」が入り込むと、「生きたい」という願望が生まれる。この願望は「富の争い」を持たせ、人を神から引き離す「罪」に誘導するのである。そして「死」は、先述したように、神に無条件で愛されている自分を認識できなくさせるので、「愛されたい」という願望を生み、愛されるための「律法」を持たせ、「罪」に誘導する。



このように、「罪」を可能にするのは、「愛されたい」という願望であり、「生きたい」という願望である。この二つの願望は、「死」が入り込んだことに起因する。無論、これは聖書の教えるところなので、人の「真実な姿」に「死」が入り込んだことで、人は「罪人」になったことを聖書は教えている。「罪が死によって支配したように」(ローマ 5:21)。そして、その「死」は、神が人を創造されたあと、アダムの罪に伴い入り込んだことも教えている。「一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように」(ローマ 5:12 新共同訳)。したがって、人に何が起きたのかの答えは、「死」が入り込んだ、である。このことは前項でも触れたが、問題は、アダムの罪が「死」を招いた経緯である。それが分らないと、罪を取り除く「神の福音」も曖昧になるので、次は「死」を招いた経緯を検証する。

－アダムの罪が「死」を招いた経緯－

聖書によれば、人の「真実な姿」は非常に「良き者」であった。「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」(創世記 1:31)。だが、「死」が入り込んだことで「罪人」になったという。その「死」は、聖書によると、アダムがエバと一緒にいたとき、二人が「蛇」に欺かれ、アダムが罪を犯したことで入り込んだという。ならば、どうしてアダムが「死」を招いたのだろうか。アダムが罪を犯したことで、どうして「死」が入り込んだのだろうか。そもそも罪と「死」の関係はどうなっているのだろうか。この答えは勝手に想像するのではなく、聖書の教えで紐解いていく必要がある。そこで、アダムが「蛇」に欺かれて罪を犯すに至った経緯と、アダムが罪に伴い、どうして「死」が入り込んだのかを聖書で見ていく。そのことで、人を「罪人」にしてしまった「死」の出所を明らかにする。そうすれば、人の「現状の姿」と人の「真実な姿」の違いを埋める「神の福音」の中身も見えてくる。

❖ 罪を犯すに至った経緯

アダムの「体」には、神の「いのち」が貸し出されていた。「その鼻にいのちの息を吹き込まれた」(創世記 2:7)。それは「魂」と呼ばれ、アダムの土台は「魂」であり、神であった。神とは「一つ」であった。喩えるなら、「魂」は神が人に蒔かれた「種」であった。その「種」からは、—— 例えばヒマワリの「種」からはヒマワリの芽しか出てこないように——、そこからは「神の思い」しか出てこなかった。そのため、アダムは単独で「神と異なる思い」(罪)を持ちようがなく、神の「種」から出たアダムは罪を犯せなかった。「だれでも神から生まれた者は、罪を犯しません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです」(I ヨハネ 3:9)。つまり、アダムは「神の思い」を肯定する「善」しか知らなかったのである。「善悪」は知らなかった。それは神がアダムに言われた、「善悪の知識の木からは取って食べてはならない」(創世記 2:17) から明らかである。この神の言葉こそ、アダムの中に「悪」がなかったことを証ししている。それはつまり、「神の思い」を否定する「神と異なる思い」を、アダムは持っていなかったということである。

では、そのような者に罪を犯させるには、すなわち「神と異なる思い」を持たせるには、どうすればよいのか。それには「悪」となる「神と異なる思い」を、あたかも「神の思い」かのように装い、「悪」を「善」として信じ込ませるしかない。これを「欺く」というが、悪魔は「蛇」を使って、この欺きに成功したので、アダムもエバも罪を犯

してしまった。ゆえに聖書は、「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように」（Ⅱコリント 11:3）と教えている。ならば、悪魔は「蛇」を使って、どのように欺いたのだろう。

聖書によると、神が造られた動物の中で最も賢かったのは「蛇」であった。「主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった」（創世記 3:1 新共同訳）。「最も賢い」ということは、あのチンパンジーよりも賢かったことになる。このことから、この当時の「蛇」は、人と最も親しい関係にあったことが容易に想像できる。しかも、この時の「蛇」の姿は今日のように忌み嫌われる、地を這う姿ではなかった（創世記 3:14）。それで、悪魔は人と親しい「蛇」を操り、人の言葉を優しく語らせれば、人はそれを容易に信じてしまうと考えたのである。この悪魔の策略はまことに上手いき、人は「蛇」が語る優しい言葉を神からの言葉として受け取ってしまった。つまり、「蛇」が語った内容を理解し、同意したわけではなく、ただ信じてしまったということである。アダムとエバにしてみれば、それは「神の思い」を「肯定」する「善」を選択したつもりであった。なぜなら、彼らは「善」しか知らなかったので、「善」にしか反応できなかったからである。しかし、それは偽装された「善」であって、「神と異なる思い」であり、「悪」の選択であった。

こうして、人は見事に欺かれてしまった。聖書はその様子を、「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように」（Ⅱコリント 11:3）と解説している。ここでは「エバを欺いた」とあるが、それはエバが先に禁断の実を食べたからである。しかし、この時、アダムはエバと一緒にいたので、「蛇」がエバに語るときはいつも、「あなたがたは」（創世記 3:4）として語っていた。したがって、実際には、アダムもエバと一緒に欺かれたのである。以上が、聖書の教える、人が罪を犯すに至った経緯である。

ちなみに、「最も賢いのは蛇であった」（創世記 3:1 新共同訳）の部分を、新改訳聖書第三版は、「蛇が一番狡猾であった」と訳している。「蛇」のことを「一番狡猾」であったと、悪い意味に訳している。だが、この箇所へのヘブライ語は「アールーム」[עָרוּם]で、旧約聖書では 11 回使われているが、そのほとんどは「賢い」という良い意味で使われている（箴言 12:16、12:23、13:16、14:8、14:15、14:18、22:3、27:12）。したがって、「蛇」に対する「アールーム」という形容も、良い意味で使われたと推測するのが自然である。ヘブライ語で書かれた旧約聖書をギリシャ語に訳した七十人訳聖書も（イエスの時代は七十人訳聖書が使われていた）、この箇所の「アールーム」を「プロニモス」[φρόνιμος]と訳している。その意味は、「分別のある」、「思慮深い」、「利口な」であって、それは良い意味である。

さらに言えば、「蛇」が登場する手前に、「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」（創世記 1:31）とある以上、この箇所「アールーム」を「狡猾」という悪い意味に解す訳は、文脈を無視することになる。そうしたことあつてか、新改訳聖書第三版の改訂版である新改訳 2017 では、創世記 3:1 の当該箇所が、「ほかのどれよりも賢かった」と良い意味に改訳された。そもそも「蛇」が「一番狡猾」であつたなら、人は「蛇」を警戒し、心を許すことはなかつた。だが、「蛇」は人と親しい関係が築ける「最も賢い」良い生き物であつたからこそ、人は「蛇」の語る言葉を信じてしまった。では、話を戻そう。

このように、聖書は、アダムとエバが罪を犯すに至つたのは、「蛇」に欺かれたからであることを教えている。正確に言うと、二人が欺かれて罪を犯した瞬間というのは、「蛇」が、「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか」（創世記 3:1）と問い、それに応答した時であつた。なぜなら、人の土台は神であり、人と神とは「一つ」だったので、「神は、ほんとうに言われたのですか」という言葉に応答し、神のことを論じることが、神を自分の外に置く行為になるからである。それは神と分離することであり、この「分離」が「罪」である。つまり、悪魔は「蛇」を使い、この時点で人に罪を犯させ、神から人を引き離していた。

さらに言えば、「神は、ほんとうに言われたのですか」と、それは神に対して疑問を持たせようとした言葉なので、それに人が応答することは決定的に「神と異なる思い」を持ったことになる。それはまさしく罪であつたが、彼らには避けようがなかつた。というのも、「蛇」は最も人と親しい関係にあつた神の被造物だったので、「蛇」が語ることは何であれ、「悪」ではなく「善」として聞こえてしまったからである。しかし、いくら欺かれたとはいえ、アダムは「神と異なる思い」を持つという罪を犯してしまい、禁断の実を食べてしまった。そして、その罪に伴い、今日の「有限性」、すなわち「死」が入り込んだことを聖書は教えている。「罪によって死が入り込んだように」（ローマ 5:12 新共同訳）。そこで、どうして罪を犯したことで「死」が入り込んでしまったのか、今度はアダムの罪と「死」の関係を明らかにしてみたい。

❖ どうして「死」が入り込んだ？

神はアダムに、「それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ」（創世記 2:17）と言われていたが、人と最も親しかった「蛇」はアダムとエバに、「あなたがたは決して死にません」（創世記 3:4）と、「神と異なる思い」を優しく語った。こうして、人は「蛇」

に欺かれ、アダムとエバは「神と異なる思い」を「神の思い」と思い、信じてしまった。その結果、実を食べてしまった。

そこで、思い出してほしいことがある。人は神の部分であって、「私たちはキリストのからだの部分だからです」(エペソ 5:30)、神と「一つ思い」で結ばれた関係にあったことを。それは、人の中には「神の思い」を「否定」するものは何もなく、「神の思い」を「肯定」する「善」しかなかった、ということである。だが、そこに「神の思い」を「否定」する「悪」(神と異なる思い)が入り込んでしまった。するとどうなるかは、火を見るよりも明らかである。そうすると、もう「一つ思い」で結ばれた関係ではなくなり、そこに「隔ての壁」が出来てしまう。したがって、人が「蛇」に欺かれて「善」ではなく「悪」を持ってしまったことで、自動的に神との間に「隔ての壁」が出来てしまったのである。この神との「隔ての壁」が、すなわち神との「分離」が「死」であり、それが人の「罪」となった。「死のとげは罪であり」(I コリント 15:56)。

そもそも神は「善」なる方なので、いかなる「悪」であっても、その量や内容に関わりなく拒否される。そのため、アダムは食べるという一つの点で罪を犯しただけであっても、「善」なる神からすれば全てを犯したのと同じであった。「律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです」(ヤコブ 2:10)。それゆえ、人が何であれ「悪」を持ってしまうと、「善」しか所有されない神との間には自動的に「隔ての壁」が出来てしまう。それは、人の「体」が神を認識できない「有限性」になってしまうということであり、「体」が属する世界も「有限性」になってしまうことを意味する。その「有限性」は「死」を運命づける運動なので、この出来事を「死」が入り込むという。

このように、「死」は、人が「蛇」に欺かれ、「神と異なる思い」(悪)を持ってしまったことで、すなわち罪を犯してしまったことで、自動的に入り込んでしまった。それゆえ聖書は、「罪によって死が入り」(ローマ 5:12)と教えている。そして、人を欺いた「蛇」は悪魔に操られていたので、聖書は悪魔こそが「死」を司る者とする。「死をつかさどる者、つまり悪魔を」(ヘブル 2:14 新共同訳)。ということは、入り込んだ「死」は、罪を犯したことに対する神からの「罰」ではなく、罪に連動した「出来事」であったことになるので、聖書はそのことにも言及している。

❖ 「死」は神からの「罰」ではない

罪とは、神の言葉を信じないことを指す。「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」(ヨハネ 16:9 新共同訳)。それは、「神と異なる思い」を持つということである。そして、神と人とは「一つ思い」の関係にあったので、すなわち人は神の枝として造られていたので、「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」(ヨハネ 15:5)、人が罪となる「神と異なる思い」を持ってしまうと、そこに「永遠性」の神を遮る「有限性」(死)の壁が自動的に出来てしまう。したがって、禁断の実を食べてもよいとする「神と異なる思い」を持つ罪を犯せば、「有限性」という「死」を招くことは予想可能な出来事であった。それで、神は人に対し、「それを取って食べる時、あなたは必ず死ぬ」(創世記 2:17)と言われたのである。

そうすると、「死」は罪に対する神からの「罰」、すなわち神による「報い」ではなく、罪に対する予想可能な「報酬」ということになる。時給 1000 円で 8 時間働けば 8000 円の「報酬」を予測できるが、それと同じ予想可能な「報酬」ということになる。このことは大変重要なので、聖書は次のように教えている。

「罪から来る報酬は死です。」(ローマ 6:23)

ここで「報酬」と訳されている箇所原語は「オブソーニオン」[ὀψώνιον]で、それは当然予想される結果を意味する。例えば、毒キノコを食べれば、「死」を招くことは当然予想される結果なので、その「死」を言い表す場合は「オブソーニオン」を使う。それに対して、予想ができない第三者の判断によるものは、「アンタポドシス」[ἀνταπόδοσις]、あるいは「ミストス」[μισθός]といった「報い」を意味する言葉を使う。さらに言えば、その「報い」の中身を罪に対する「罰」として言い表すのであれば、「ティモーリア」[τιμωρία]という言葉もある(参考: 織田昭編『新約聖書ギリシア語小辞典』教文館 322 頁)。しかし、ここでは「報い」ではなく、ただの「報酬」を意味する「オブソーニオン」が使われているので、入り込んだ「死」は罪に対する神からの「罰」ではなく、それはただ予想可能な出来事であったことを示している。つまり、「罪から来る報酬は死です」とは、その手前に書かれていた、「ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り」(ローマ 5:12)の言い換えである。「罪によって死が入り」を、「罪から来る報酬は死です」と言い換えたにすぎない。したがって、この御言葉は、罪の「罰」として「死」が入り込んだという意味では決してない。実際、アダムが食べるという罪を犯した直後、一体何が起きたかを見れば、「死」は「報い」(罰)ではなく「報酬」であったことが容易に理解できる。

「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」（創世記 3:7）

二人は罪を犯すと同時に、二人の「目は開かれ」とある。それは、二人が外だけしか見えなくなったということであり、自分の内側を見る目が閉ざされたことを象徴的に表現している。要するに、人の内側には神の「いのち」があつて、神が人を支えていたが、その神を人が認識できなくなったということである。それゆえ、「目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った」とあり、自分の外側しか認識できなくなったことが強調されている。ここには、罪に伴って人の体が自動的に「永遠性」である神を認識できない「有限性」に変化したことが、すなわち「死」が入り込んだことが、見事に綴られているのである。この様子からも、「死」は神からの罰（報い）ではなく、罪に伴う「報酬」（予想可能な出来事）であつたことが十分に分かる。

ちなみに、人は「死」と聞くと勝手に「肉体の死」を想像するが、それは「人間的な標準」の考えにすぎない。神はアダムに、「それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ」（創世記 2:17）と言われた以上、食べた「とき」に起きた先述の「出来事」が、神の言われる「死」である。これは、聖書に書かれていることは聖書で解くという読み方であり、宗教改革で叫ばれた「聖書のみ」の実際である。それは「人間的な標準」を排除することであり、排除すれば神意が見えてくる。では、結論に移ろう。

このように、聖書によれば、人の中に入り込んだ「死」（有限性）は罪を犯したことに對する神からの「罰」ではなく、罪に連動した「出来事」であつた。つまり、人の「死」に對し、神は全く関与していなかったということである。それで神は、人が食べるという罪を犯したことに伴い「死」が入り込み、人が自分の裸を知るようになった様子をご覧になると、「あなたが裸であるのを、だれがあなたに教えたのか。あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか」（創世記 3:11）と聞かれたのである。神を認識できなくなり、自分の裸しか知り得なくなる「死」（有限性）は、食べるという罪に連動して起きる「出来事」だったので、「あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか」と聞かれたのであつた。仮に、「自分たちが裸であることを知った」という「出来事」が、すなわち「死」が入り込んだことが、神からの「罰」であつたのなら、神は、「あなたが裸であるのを、だれがあなたに教えたのか」ということは、決して聞かれなかった。神は偽りを述べることなどできないので、そ

の場合は、「お前たちが罪を犯したので、罰として、自分たちが裸であることを知るようにした」と言われていた。しかし、そのようには言われなかった以上、神は人の「死」に全く関与していなかったことは疑う余地もない。

ところが、人には「罪には罰」という「人間的な標準」があるので、それに惑わされ、アダムが罪を犯したと聞けば、自動的に神の「罰」を連想してしまう。そのせいで、アダムが犯した罪を見た神は怒り、「罰」として「死」を与えたと思ってしまう。先に見た、「罪から来る報酬は死です」（ローマ 6:23）も、そのように解してしまう。しかし、大事なことは自分がどう思うかではなく、聖書に何と書かれているかであり、聖書の教えに合わせて自分の考えを修正する勇気である。それこそが、「人間的な標準」で人を知るように、神を知ろうとはしないことの実際になる。「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません」（Ⅱコリント 5:16）。したがって、「死」は神の「罰」ではなかったというのが結論になる。さて、「死」が入り込んだことで、人の中には「魂」が展開する「肯定」の運動に加え、死に支配された「体」が展開する「否定」の運動が加わってしまった。その結果、人は神の「いのち」を肯定する「善」と、それを否定する「悪」も知るようになった。

❖ 「善悪」を知るようになった

悪魔は「蛇」を使って人を欺き、罪を犯させたので、人には罪を犯したという意識は全くなかった。ただ、罪によって自分の外側（裸）しか認識できなくなり、そのことで「恐れ」を抱いただけであった。「それで私は裸なので、恐れて、隠れました」（創世記 3:10）。しかし、「恐れて、隠れました」の箇所は一般に、罪を犯したことによる意識から「恐れ」を抱き（罪責感）、人は隠れたと解される。だが、ここに書かれているのは、裸を恐れたであって、それ以上でも以下でもない。ただし、本人には罪を犯した意識がなくても、罪を犯したことで「死」が自動的に入り込み、その「死」は神の「いのち」の「善」を否定する「悪」だった。それで、神は「死」に支配された人をご覧になると、人は「善悪」を知るようになったと言われたのである。

「見よ。人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るようになった。」

（創世記 3:22）

ここで神は、人は神のように、「善悪を知るようになった」と言われた。このことから、神は「悪」を知っていたことが分かる。とはいえ、それは「悪」をご自分の外に

知っていたということであって、ご自分の中に「悪」(死)が住み着いているということではない。それゆえ、神は「悪」を知っていても、その影響を内側では全く受けない。そもそも神は、何ものにも影響を受けない「絶対的な精神」なので、たとえ人と同じ「死の体」を身にまとったとしても、「悪」に屈することはない。実際、神は人と同じ「死の体」の制約を背負い、地上でイエスとして活動されたが、罪は犯されなかった。「罪は犯されませんでした」(ヘブル 4:15)。しかし、人の場合の「悪」を知っているというのは全く事情が異なる。なぜなら、人である「精神」は不動の「絶対的な精神」ではなく、成長過程にある変動の「精神」なので、その「精神」を支えている「体」の影響を直接受けてしまうからである。その「体」が、神の「いのち」を否定する「死の体」になったので、「魂」が発信する肯定の思いに対し、それを否定する「悪」の思いも持ってしまう。そうなれば、人は「肯定」(善)と「否定」(悪)との狭間に立たされ、どっちつかずになる。その状態が「不安」であり、そこから人は見える安心をむさぼるようになる。それが罪の有様となるので、神が言われた、「見よ。人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るようになった」(創世記 3:22)とは、人が善悪を知ったことで「罪人」になったことを言い表している。

余談だが、神はどうして人に「死」が入ったあとでも、人と会話することができたのだろう。この時点では、人はすでに神を認識できない「有限性」の体になっていたのだ。今日の私たちと同様、「永遠性」なる神とは会話ができなかったはずである。だが、アダムとエバは神と会話できた。それは、神の側が人と同じ「有限性」を身にまとい、人の前に現れたから、としか言いようがない。でなければ、会話などできない。したがって、この時の神は、人となって来られた、あの「イエス・キリスト」の型であったことが分かる。「人となって来たイエス・キリスト」(Iヨハネ 4:2)。

さて、ここではアダムの罪が「死」を招いた経緯を見てきたが、その「死」によって、人類は神の「肯定」を「否定」する思いを持つようになり、「善悪」を知るようになった。そのことが人に「不安」を覚えさせ、罪を犯させることになった。つまり、人は入り込んだ「死」によって「罪人」になったのである。まさに「不安」は「死」の「とげ」であって、それが「罪」であった。「死のとげは罪であり」(Iコリント 15:56)。それは全て、悪魔の仕業による。では、今一度、入り込んだ「死」と私たちの「罪」との関係を見てみたい。そのことで、罪の原因を明らかにしたい。そうすれば、その罪を取り除く「神の福音」の真実も見えてくる。

－「死」と「罪」との関係－

聖書は、人の「真実な姿」に「死」が入り込んだので、人は「罪人」になったことを教えている。「罪が死によって支配したように」（ローマ 5:21）。さらに聖書は、その「死」は、神が人を創造されたあと、アダムの罪に伴い入り込んだことを教えている。「一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように」（ローマ 5:12 新共同訳）。そこで、ここでは「死」が人を「罪人」にしたことを具体的に見ていく。それによって、私たちが犯す罪の原因を明らかにしたい。

❖ 人は「罪人」になった

人の土台は神の「いのち」であり、それは「魂」と呼ばれ、「魂」からは神の愛が流れ出ている。「神の愛が私たちの心に注がれているからです」（ローマ 5:5）。その愛は、人の存在を「肯定」し続ける運動であり、変わることもない「永遠性」である。ところが、悪魔の仕業によってアダムが罪を犯し、その罪に伴い「死」が入り込んでしまった。それは人の存在を「否定」し続ける運動であり、滅びに向かわせる「有限性」である。この「有限性」は「永遠性」とは相容れないので、「有限性」となった「体」では、「魂」から流れ出る「永遠性」、すなわち神の愛は見えない。それは、神から「肯定」され続けている自分を、すなわち無条件で愛されている自分を、感覚器官（体）では認識できなくなったということである。これが「不安」を引き起こす。

しかし、人は「不安」には耐えられないので、何としても「不安」を排除しようとする。その「不安」は、無条件で愛されている自分を感覚器官では認識できなくなったことによるので、何としても愛される自分を感覚器官でも認識しようと、誰もが愛される自分を、自分の力で目指し、「不安」を排除しようとする。だが、この生き方が神の目には「罪」であった。なぜなら、それは自分の力を頼り、神の力を頼りとはしないからである。「罪」とは、まさしく神を頼らないことであり、信じないことである。「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」（ヨハネ 16:9 新共同訳）。要するに、「死」が入り込んだことで人の中に神を頼らない「罪」が住み着いてしまい、人は「罪人」になったのである。では、この話を具体的に見てみよう。

「死」が入り込んだことで、人の存在は「否定」され、最後は地上から消滅する運命になった。そのため、自分は何者なのか、どこから来てどこへ行くのか、何のために生きているのかといった問いがつかまとうことになった。その問いの下では、まるで自分は価値のない者である。そこで、誰もが自分の価値の獲得を目指し、自分の存在を

自力で「肯定」しようとする。それは、周りから少しでも良く思われるということである。これが「愛されたい」という願望であり、「承認欲求」である。つまり、「死」が入り込み、神から「肯定」されている自分を、すなわち神から無条件で愛されている自分を認識できなくなると、そこには「愛されたい」という願望が生じ、人は少しでも周りから良く思われるための努力を始めるということである。確かに、アダムとエバも、「死」が入り込み、自分に注がれている神の愛を認識できなくなった途端（自分の裸しか認識できなくなった途端）、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作り、周りから少しでも良く思われるための努力を開始した。

「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」（創世記 3:7）

とはいえ、少しでも自分が良く思われるためには、相手の期待に少しでも多く応える必要がある。そうすると、その期待はそのまま「ねばならない」という形式の「律法」になる。例えば、「頭が良くなければならない」とか、「容貌が良くなければならない」とか、「お金持ちでなければならぬ」とかいった具合に、周りの人たちの期待が自分を拘束する「律法」になる。こうして、誰もが「律法」の達成を以て自分の価値を得ようとするようになったのである。そうすると、「律法」を達成できない自分を見れば、自分は価値のない「ダメな者」となるので自分を愛せなくなる。また、同じ「律法」で隣人も見るので、「律法」を達成できない隣人を見ると、価値のない「ダメな者」と裁き、愛せなくなる。これこそが、神の戒め「愛せよ」に逆らう「罪」である。

このように、入り込んだ「死」が私たちの「罪」の源泉となった。その「罪の力」が「律法」となり、人を神の戒めに逆らう「罪人」にしてしまった。そこで聖書は、「死のとげは罪であり、罪の力は律法です」（Ⅰコリント 15:56）と教えている。では、この話を、赤ちゃんから大人になるまでの経緯で見たい。

❖ 赤ちゃんから大人に

人の土台は神の「いのち」であり、その神は「愛」なので、人は神に無条件で愛されている中にある。ところが、入り込んだ「死」のせいで「体」は「有限性」になり、もう感覚器官では「永遠性」の神に愛されている自分を認識できなくなった。人の土台の神については、想像することしかできなくなってしまった。この状態は人を「不安」にするので、人は愛される自分を探し、その自分を見つけることで、「安心」を得

ようとしてしまう。そして、その状態は、この世界に生まれた時から始まるので、赤ちゃんは生まれると同時に「不安」の中であって泣き叫び、愛される自分を探し始める。その中、母親に抱かれ、愛される自分に出会って「安心」する。その時の赤ちゃんは、無償で愛される。

しかし、赤ちゃんが成長し、何かができるようになってくると、親は自分の子に何かを期待するようになる。だが、親の期待に応えられないと、親からは愛されなくなっていく。そうしたことから、その子にとっては、親の期待が、「ねばならない」という形式の「律法」になる。例えば、その子が学校に行くようになると、親は自分の子に良い成績を期待するようになるので、その子は、「成績が良くなければならない」という「律法」を持つようになる。すると、その子は「律法」を達成できない自分を見ると、自分を「ダメな者」と否定し、自分を愛せなくなる。親も「律法」を達成できない我が子を見ると怒りを覚え、愛せなくなる。それだけではない。その子は同じ「律法」で人も見るので、「律法」が達成できない周りの人を見ると愛せなくなる。そうしたことを繰り返しながら「律法」は増大していき、大人になっていく。

このように、人類に「死」が入り込んだことで、人は神に愛されている自分を認識できなくなったので、生まれた時から愛される自分を目指すようになった。それには周りの期待に応える必要があるので、その期待が「律法」になり、「律法」による「行い」で愛される者を目指すようになった。しかし、一旦「律法」を持ってしまうと、「律法」に違反する相手に「敵意」を覚えるので、これが神の戒めである「愛せよ」に逆らわせる。こうして、入り込んだ「死」が人に「律法」を持たせ、その「律法」が「敵意」を生じさせ、「敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです」（エペソ 2:15）、人を神の戒め「愛せよ」に逆らう「罪人」にしてしまったのである。「死のとげは罪であり、罪の力は律法です」（Ⅰコリント 15:56）。だが、そうになると、神からの「律法」も「罪の力」なのかとなるので、それについても触れておきたい。

❖ 神からの「律法」

人を裏で支え、動かしているのは「魂」である。その「魂」は神の「いのち」なので、「魂」は「神の思い」を発信する。その思いは「神と人を愛せよ」であり、その命令は本来であれば、何の重荷にもならなかった。「神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません」（Ⅰヨハネ 5:3）。しかし、「死」が入り込むと人の行動は制約され、「神の思い」を完全に実行することは不可能となった。「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのでは

なく、自分が憎むことを行っているからです」(ローマ 7:15)。その結果、「魂」からの「神の思い」は重荷となり、心を拘束する「律法」となった。

神はその事情を分かっておられたので、ならばと、敢えて達成不可能な「律法」を言葉で啓示されたのであった。例えば、「だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです」(マタイ 5:28)とし、心に思うだけでも、行為に至るのと同じ罪を犯しているとした。それはつまり、人に腹を立てるだけでも、人殺しになるということであった。「兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません」(マタイ 5:22)。それだけではない。神の前では一つでも「律法」を達成できなければ、それは全てを達成できないのと同じであるとした。「律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです」(ヤコブ 2:10)。そうすると、誰一人「律法」を達成することは不可能なので、「律法」の行いで神に愛される義を得ようとするなら絶望するしかない。では、どうすれば神の義が得られるのか。それはもう、神にあわれみを乞うしかない。「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」(ルカ 18:13)。そこでイエスは、神にあわれみを乞うことを信仰とし、この信仰で神の義が得られるとしたのである。「あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました」(ルカ 18:14)。

つまり、啓示された神からの「律法」(聖書)は、全ての人を罪の下に閉じ込めるためであり、「しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました」(ガラテヤ 3:22)、そのことで「律法」の行いに関係なく、信じる者を義と認めてくれるキリストへ導くためであった。「律法は私たちがキリストへ導くための私たちの養育係となりました」(ガラテヤ 3:24)。そのキリストは、入り込んだ「死」が「律法」となって、「敵意」という「隔ての壁」を人に築かせたので、「敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです」(エペソ 2:15)、その「隔ての壁」を、人を無条件で愛していることを明らかにした十字架の死で打ち壊すことで、「敵意」という「律法」を廃棄されたのである。「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です」(エペソ 2:14-15)。こうして、キリストが「死」による「律法」を終わらせられたので、信じるだけで人は義とされることになった。

「キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。」(ローマ 10:4)

したがって、神からの「律法」は、どうにもならない病気に気づかせてくれる検査器具である。なぜなら、神の「律法」は、まことにどうにもならない罪に気づかせてくれるからである。そのおかげで、神のあわれみを求めることができ、キリストのもとに行くことができる。そうである以上、神からの「律法」は「罪の力」ではない。それは「罪の力」を知る検査器具であり、「しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです」(ローマ 5:13)、それによって、罪を赦すキリストへと人を導く。こうした事情から、聖書は「死」から出た律法を「罪の律法」と呼び、神から出た律法を「神の律法」と呼ぶ。「ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです」(ローマ 7:25)。確かに、私たちは心では「神の律法」に仕え、肉では「罪の律法」に仕えている。だが、「神の律法」は私たちをキリストの恵みに導いてくれる。その恵みは「罪の律法」を終わらせ、「神と人を愛せよ」に集約される「神の律法」の成就に向かわせてくれるのである。

「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためにではなく、成就するために来たのです。」(マタイ 5:17)

このように、「死」が入り込んでからは、人は愛されるための「律法」(罪の力)を持つようになり、「律法」の達成によって愛される自分を、すなわち神からの義を目指すようになった。そのため、神から啓示された「律法」に対しても、それを達成することで義を目指す。例えば、「私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております」(ルカ 18:12)といった具合に、である。そこで、「律法」の行いで義を目指す「罪の力」を終わらせるために、神は達成不可能な「律法」を言葉で啓示されたのであった。ゆえに、それは「死」が生んだ「律法」とは異なる。

以上で、「死」と「罪」との関係も明らかになった。「死」が入り込むと、どうして人は「罪人」になってしまうのかが分かった。そのことによって、人に何が起きたのかが確定した。それは、「死」が入り込んだということである。「死」が入り込んだために、人の「真実な姿」は病気になり、「罪人」になった。私たちの罪の原因は、悪魔の仕業で入り込んだ「死」にあった。罪の原因は、「死」が入り込んだ「死の体」にあった。それでパウロは、「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」(ローマ 7:24 新改訳 2017)と言っている。そうになると、人の中に「死」を持ち込んだ悪魔の起源が問題になる。

❖ 悪魔の起源

神が天と地を創造された際、そこには神に起源を持たない悪魔という「闇」の存在があったことが聖書に記されている。「はじめに神が天と地を創造された。地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり」(創世記 1:1-2 新改訳 2017)。その「闇」(悪魔)が「蛇」を使ってアダムとエバを欺き、「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように」(Ⅱコリント 11:3)、そのせいで人は罪を犯してしまい、その罪に伴って「死」が入り込んだと聖書は教えている。「罪によって死が入り」(ローマ 5:12)。したがって、「死」が入り込んだのは悪魔の仕業によるので、聖書は「死」を司る者を悪魔とし、「死をつかさどる者、つまり悪魔を」(ヘブル 2:14 新共同訳)、「神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです」(Ⅰヨハネ 3:8)と教えている。

ならば、「闇」である悪魔はどこから来たのか。それに関しては、聖書は沈黙するので分からない。だが、昔から、墮落した天使が悪魔になったとされてきた。その理由として、イザヤ 14:9-15 が挙げられてきた。しかし、それはバビロンの王に対する話である。また、エゼキエル 28:12-19 も根拠にされてきたが、それはツロの王に対する話である。それでも、これらの聖書箇所と、「罪を犯した天使たちを」(Ⅱペテロ 2:4 新共同訳)、あるいは「その住まいを見捨ててしまった天使たちを」(ユダ 1:6 新共同訳)とを紐付けすることで、これらの聖書箇所は、天使が墮落して悪魔になったことを教えているとされてきた。ところが、紐付けされた箇所の教えは、天使が墮落して悪魔になったという話ではなく、悪魔がアダムを欺いて罪を犯させたように、天使も欺かれ、罪を犯したという話である。それゆえ、「その住まいを見捨ててしまった天使たちを」(ユダ 1:6 新共同訳)の続きに、そうした天使たちとは別に悪魔が登場する。「モーセの遺体のことで悪魔と言い争ったとき」(ユダ 1:9 新共同訳)。よって、天使が墮落して悪魔になったという話は人の勝手な想像でしかない。

そもそも聖書は、悪魔は神の被造物ではないことを明確に教えている。神が造られた被造物は、神に逆らわない非常に良いものだけであったことを教えている。「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」(創世記 1:31)。それはつまり、悪魔は初めから、神の愛に逆らう人殺しであり、神の真理に立ってはいないということである。「悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません」(ヨハネ 8:44)。そうすると、初めに神と悪魔とが存在していたということなのだろうか。そうはならない。聖書は、初めにおられたのは神だけであったとする。「すべてのものは、神から出て」(ローマ 11:36 新共同訳)。

このように、人が「罪人」となったのは悪魔の仕業で入り込んだ「死」に起因する。「死のとげは罪であり」(I コリント 15:56)。そうすると、悪魔はどこから来たのかという疑問が生じるが、悪魔は神の被造物ではなかったことを聖書は教えている。なのに、全ての始まりは神であることも教えている。これはもう、「理性」にとって理解不能である。というより、「理性」が理解できるのは体験できる世界までなので、体験できない始まりに関することを聖書が教えても、それは理解不能である。例えば、初めに神がおられたことを聖書が教えても、「理性」では、その神はどこから来たのかとなり、理解不能となる。このことから、聖書は「信仰」が担当するものと分かる。神が言われることは「信仰」の対象であり、「理性」の対象ではない。その神が、悪魔は初めから神の真理には属さない者であり、神から出たのではないとし、同時に、神ご自身を全ての初めとする以上、これはただ素直に信じるしかない。すなわち、悪魔の起源は「理性」では分からない、というのが結論である。

しかし、人は聖書を「理性」に担当させようとする。「理性」が納得すれば信じるという形で聖書を読もうとする。それで、聖書が教える悪魔に関する話も、悪魔の仕業で入り込んだ「死」に関する話も、人は「理性」が納得できる話に替えてしまうのである。先述したように、神が造られた天使が墮落し、悪魔になったとしてしまう。そうすると、どうして天使は神に逆らうことができたのかとなり、すなわち「神と異なる思い」はどこから来たのかとなり、さらに困難な問題を抱えることになる。なぜなら、神が造られた世界には、「神と異なる思い」は存在しなかったからである。存在しないものは、自由な意志でも選択のしようがない。アダムの場合は、悪魔が「神と異なる思い」を持ち込んだので選択が可能であったが、天使が悪魔になったという場合、天使はどのようにして「神と異なる思い」を持ったのかとなり、さらに困難な問題へと発展する。それだけではない。人の「理性」は「人間的な標準」に従うので、悪魔の仕業で入り込んだ「死」に関する話も、それは人の罪に対する神の罰として入り込んだとしてしまう。そのせいで、人を罪人にした「死」に覆いが掛かり、罪人を救う「神の福音」にも覆いが掛かってしまった。

そこで、話は脱線するが、そもそも私たちの「理性」には限界があることを、したがって「理性」の納得を目指すことは誤りでしかないことを述べておきたい。

－「理性」には限界がある－

「理性」には限界があることを知るための導入として、次の問題を解いてみてほしい。

$$6 \div 2(1+2)$$

この式を「 $6 \div 2 \times (1+2)$ 」として見るなら、答えは「9」になる。しかし、上記の式「 $6 \div 2(1+2)$ 」の「 $2(1+2)$ 」の部分为一体として見るなら、「 $2(1+2)$ 」は「6」なので、その場合は「 $6 \div 6$ 」になり、答えは「1」になる。では、正解はどちらなのだろう。これは近年、大論争を巻き起こした算数である。「9」を支持する数学者もいれば、「1」を支持する数学者もいるという。さらには、「9」と回答する電卓もあれば、「1」と回答する電卓もあるというから大変である。そして出た結論は、「定義不足」ゆえに、答えは「分からない」であった。このことから言えることは、人は何かを思考する際は、必ず「物差し」（定義）を必要とするが、この問題のように、その「物差し」が十分でなければ、いくら思考しても答えが出ないということである。答えが出ない場合は、「理性」の限界を謙虚に認め、「分かりません」とするしかない。

ならば、「理性」が使う物差しは何か。それは、「結果には原因がある」とする「因果律」である。例えば、私がいるという「結果」から、私には両親がいたという「原因」を誰もが容易に導き出せるが、これは「理性」が「因果律」の物差しを使うから導き出せる。昔の人たちは、この「因果律」を使って、世界の始まりを突き止めようとし、過去に遡った。その結果、世界の始まりには、最初の「原因」が存在したとなり、彼らはそれを「第一原因」とし、「神」とした。こうして、「世界には始まりがある」とし、「世界は無限ではない」と主張した。

ところが、この主張に異議を唱える人たちが現れた。彼らは、「第一原因」が「神」だというのなら、その「神」はどこから来たのかと問いかけたのである。確かに、「理性」は「結果には原因がある」とする「因果律」の物差しで思考するため、「神」という結果に対しても、「神」が誕生した「原因」を問うのは至極当然のことであった。こうして彼らは、「神」が存在するという結果には「原因」があるはずだとし、さらに「その原因にもまた原因があるはずだ」と主張した。その結果、「第一原因」（神）などは存在しないと結論づけ、「世界には始まりがない」、「世界は無限である」と主張した。

すると今度は、「世界は無限である」という主張に異議を唱える人たちが現れた。彼らは、「世界は無限である」なら、すなわち世界には始まりがなく無限に続いていたとい

うのなら、その場合は「無限」が過ぎ去ったということになるが、「無限」に対して過ぎ去ったというのはおかしいとした。そもそも始まりがないとなれば起点がないので、起点がなければ経過もないので、「無限」が過ぎ去ったというのはおかしいとしたのである。分かりやすく言うと、土台のない場所に、どのようにしてレンガを積み上げられるのかということである。いくら積み上げたところで土台がないので（始まりがないので）、ただ「無限」に沈んでいくだけとなる。同様に、起点がなければ、そこには過去も現在も未来もなく、どの瞬間も同じになってしまう。ゆえに、「世界は無限である」という主張はおかしいと異議を唱えた。

こうして、意見は対立した。そこで、冷静に考えてみたい。そもそも「因果律」の物差しを使って「世界は無限である」とするのなら、この宇宙全体の質量は初めからあったということになる。初めから、現在と変わらない質量があったという話になる。であれば、同じ「因果律」の物差しでは、初めからあったという質量は一体どこから来たのかということになってしまうので、やはり「世界は無限である」という主張には無理がある。さりとて、「因果律」の物差しを使って過去に遡り、初めに「神」が存在したとするのなら、その「神」はどこから来たのかとなるので、やはり「世界は無限ではない」というこちらの主張にも無理がある。それでも、人は同じ「因果律」の物差しを使い、片や「世界は無限ではない」と主張し、片や「世界は無限である」と主張してきたという次第である。この二つの主張を定式にすると、次のようになる。

主張1：「AはBである。なぜならCだから」

主張2：「AはBではない。なぜならCだから」

この定式での「C」が、「結果には原因がある」とする「因果律」の物差しである。同じ物差しを根拠に、ここでは正反対の結論を導き出している。こうした事態を「二律背反」というが、世界の起源を巡る論争はまさに「二律背反」であった。同じ根拠を使って、片や「世界は無限ではない」と主張し、片や「世界は無限である」と主張したのである。双方が証明するのに全く同じ根拠を提出し、そこでは正反対の主張を行なった。となれば、どちらの証明にも「理性」の「まやかし」があるということになり、それは先ほどの「 $6 \div 2(1+2)$ 」の答えの場合と全く同じ構図になる。

このように、「理性」には「因果律」の物差ししかないので、いくら過去に遡ったところで、世界の始まりは知り得ないのである。それだけではない。その物差しでは「神」が存在することも、また存在しないことも証明できない。そもそも体験できない世界

のことは想像するしかないので、体験できない世界の真実は知りようがない。例えば、死後の世界は体験できないので想像するしかなく、そこでの真実は知りようがない（確認しようがない）。ならば、知り得ない世界の真実は、どうすれば知ることができるのだろうか。例えば、どうすれば「神」を知り得るのだろうか。

❖ どうすれば「神」を知り得るのか

人の「理性」では、世界の始まりは知り得ない。それは、世界の始まりである「神」を知り得ないということである。ならば、どうすれば「神」を知り得るのか。それは、「神」が人に対し、人が認識できる形で自らを啓示するしかない。その啓示が「聖書」であり、「イエス・キリスト」である。その聖書の言葉を信じれば、「神」を知ることができる。したがって、聖書の教えを信じるには「理性」ではなく、「信仰」が必要となる。こうした当たり前のことを明らかにしたのがカントであった。彼は、人の「理性」の限界を明らかにし、限界の先を担当するのは「信仰」とした。それゆえ、「信仰」の領域に「理性」が決して入り込まないように、と警告を発したのである。

「だからわたしは、信仰のための場所を空けておくために、知を廃棄しなければならなかったのである。」（『純粋理性批判』Bxxx 「純粋理性批判 1」 光文社古典新訳文庫 175 頁）

カントは『純粋理性批判』で、人が体験できない事柄は想像に頼るしかないので、それは独断論となり、誰もが言いたい放題になると警告した。彼は、独断論はまさしく「神」の前に「バベルの塔」を築くことであって、傲慢の何ものでもないとし、体験できない自分の外の世界のことは、「神」が啓示された言葉を信じるようにと説いたのである。また、『実践理性批判』では、「神」が啓示された言葉を正しく教えているのがキリスト教とし、そのみが「神」を知りたいとする「理性」を満足させるとした。

「キリスト教の教え（原注）は、たとえそれがまだ宗教の教えとは見なされない場合でも、以上の点にかんして最高善の（神の国の）概念を与えるのであり、そしてそのみが実践理性のもっとも厳格な要求を満足させる。」（『実践理性批判』A128 「カント全集 7」 岩波書店 307 頁）

しかし、人の「理性」は体験できない世界に自由気ままに飛び出してしまう。そして、ある人たちは宇宙人の存在を好き勝手に想像したり、ある人たちは、様々な超人を好き勝手に想像したりする。同様に、誰もが「神」のことを好き勝手に想像する。だが、

その「神」の想像で使われるのは「因果律」の物差しなので、人が徳を積みば願いを叶えてくださるのが「神」であるといった具合に「神」を想像することになる。その「因果律」の物差しは、言ってみれば「条件づけ」の物差しであり、「制約」の物差しなので、それを使って人は勝手に、「神はこうあるべき」と決めてかかる。そもそも「神」は何ものにも条件づけられない方であり、「無制約」な方なので、そのような「条件づけ」の物差しでは「神」を知りようがない。そこでカントは、「神」のことは「神」ご自身が啓示された聖書を信じる「信仰」が担当するとしたのである。もちろん、聖書も、人は知恵（理性）によっては「神」を知り得ないことを教えている。

「神の知恵により、この世は自分の知恵によって神を知ることがありませんでした。それゆえ神は、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救うことにされたのです。」（Ⅰコリント 1:21 新改訳 2017）

平たく言えば、水槽の中で暮らす魚は水槽の外のことは知り得ないように、「有限性」の中で暮らす人間も、「有限性」の外のことは何も知り得ないということである。そうである以上、「有限性」の外の話は聖書を信じる「信仰」が受け持つのである。

❖ 「信仰」が受け持つ

「理性」には限界があって、体験できない世界のことは何も知り得ない。体験できない「始まり」、すなわち神のことは何も知り得ない。それを知る唯一の道は、神が啓示された聖書を信じることである。ゆえに、聖書は「理性」が担当するのではなく、「信仰」が担当する。正確に言えば、聖書を読むのは「理性」が担当し、そこに書かれていることを信じるのは「信仰」が担当する。つまり、神を知りたいという「理性」の欲求は「信仰」によって満たされる。ということは、「理性」が知った聖書の教えに、それは信じられないと「理性」がつまずくなら、それは聖書の教えに問題があるのではなく、信じられない「不信仰」に問題がある。そうであれば、先述した悪魔の起源に関する聖書の教えは、すなわち死の起源に関する聖書の教えは次のように処理する。

聖書は、悪魔が「蛇」を使ってエバを欺いたことを教え、「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように」（Ⅱコリント 11:3）、そのエバはアダムと一緒にいたので、アダムも一緒に欺かれて罪を犯したことを教え、その罪によって「死」が入り込んだことを教えている。「罪によって死が入り込んだように」（ローマ 5:12 新共同訳）。加えて聖書は、その悪魔は初めから神の愛に逆らう人殺しであって、神の真理には立っていなかったことも教えている。「悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません」

(ヨハネ 8:44)。このことは、悪魔は神の被造物ではないということである。ところが、聖書は、すべてのものは神から出たことも教えている。「すべてのものは、神から出て」(ローマ 11:36 新共同訳)。だが、こうした「始まり」の教えに「理性」はつまずいてしまう。しかし、そのつまずきに対しては「信仰」を生起させ、「聖書がそのように教えているので信じます」として処理するのである。そのようにして、神を信頼する「信仰」を選択することが、「理性」のつまずきに対する正しい処理となる。

それゆえ、イエス・キリストは徹底して「つまずきの石」となられた。人間の姿でありながら、自らをキリストの「神」とすることで、「つまずきの石」となられた。その神が受難する姿を見せることで、「つまずきの石」となられた。それは、神を信頼する「信仰」を生起させるためであり、神に信頼する者は失望させられることがないことを教えるためであった。「見よ。わたしは、シオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。彼に信頼する者は、失望させられることがない」(ローマ 9:33)。つまり、自らが「つまずきの石」となることで、イエス・キリストとは「信仰」でしか出会えないようにされたということである。それで、イエス・キリストを証しする聖書は、人が「理性」で神に近づくことがないようにするために、こうした「始まり」に関する教えにも、「つまずきの石」を置いている。そうすることで、「信仰」に誘導している。

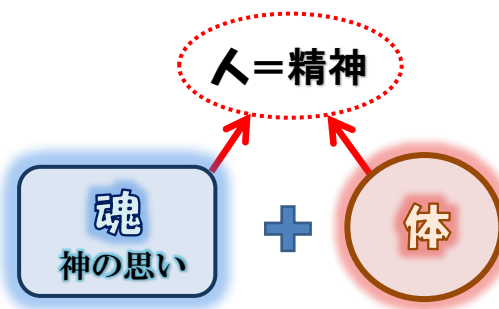
となると、「理性」では知り得ない聖書を、勝手に「理性」で知り得るとする「理性の神学」は、神の前に「バベルの塔」を築くことであって、傲慢の何ものでもないということになる。したがって、私たちの取るべき態度は神の前にへりくだることであり、聖書に対しては「理性」の納得を目指すのではなく、聖書を素直に信じる「信仰」を目指すことである。カントが行き着いた悟りは、まさしくこの点にあった。それゆえ、彼は「理性の神学」を、「ゼロであって無効である」(『純粋理性批判』B664「純粋理性批判【下】」筑摩書房 315 頁)と一刀両断に切り捨てた。大事なことは自分がどう思うかではなく、聖書にはどう書かれているか、である。あくまでも自分の考えを聖書の言葉で軌道修正するのであって(信仰)、聖書の言葉を自分の考えに合わせさせるのではない(理性)。カントは、そのことを論じたのである。さて、ここでは「死」を持ち込んだ悪魔の起源の話をきっかけに、「理性」には限界があるという話をしてきたが、ここで一旦、第一章からのまとめをしたい。それから、次の章に移ろう。

－まとめ－

「神の福音」は、神が人を造られた際の人の「真実な姿」と、「現状の姿」との違いを埋めるものである。本書は、その「神の福音」の真実を知ることを目指している。



そこで最初に、人の「真実な姿」を知るために「人の造り」を調べた。その結果、人とは「魂」と「体」によって機能する「精神」だと分かった。「魂」は神の「いのち」の部分であり、「神の思い」を発信し、「体」が持ち込む情報と神とを「一つ」にする運動を展開するので、そこに認識が生じ、思考が始まる。これが「精神」であり、人である。聖書はその様子を、「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り（体）、その鼻にいのちの息を吹き込まれた（魂）。それで人は生きるものとなった（精神が機能するようになった）」（創世記 2:7 新改訳 2017 ※（ ）は筆者が意味を補足）と綴る。

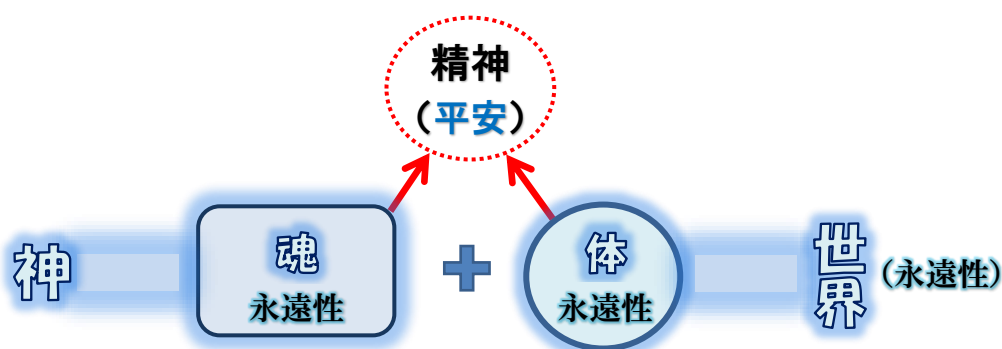


ということは、人が何を思考するかは、「体」が持ち込む情報に左右されることになる。「魂」から発信される「神の思い」は変わらない「永遠性」なので、それを以て「体」が持ち込む情報を認識する以上、人が何を認識し、思考するかは「体」が持ち込む情報に左右される。例えば、「魂」が発信する「神の思い」を否定する情報を「体」が持ち込めば、「精神」は否定的なことを思考し（不安）、逆に「神の思い」を肯定する情報を「体」が持ち込めば、肯定的なことを思考する（平安）。ならば、神が造られた際の人は、何を思考していたのだろうか。それが人の「真実な姿」となる。

❖ 人の「真実な姿」

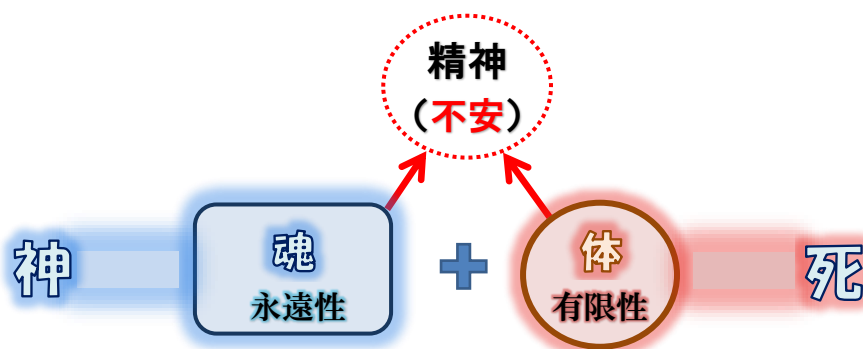
神は当初、人の存在を肯定する「永遠性」の情報だけを「体」が持ち込めるように、世界の全てを「永遠性」として造られていた。そこには、人の存在を否定する「死」

はなかった。そのことが聖書に、「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」(創世記 1:31)と綴られている。それは、神に無条件で愛されている自分を、人である「精神」は認識でき、思考していたということである(平安)。そのことの裏付けが、人は裸であっても恥ずかしいとは思わなかったということに現れている。「人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった」(創世記 2:25)。これは今日の「罪の入口」、「愛されたい」という願望が彼らにはなかったことを意味する。したがって、人は「良い行い」をする「義人」であったというのが、神が人を造られた際の人の「真実な姿」であった。



❖ 人の「現状の姿」

ところが、人の「現状の姿」は人の「真実な姿」とは真逆である。私たちは「良い行い」ができない「罪人」である。「体」は滅びゆく「有限性」であって、生きることを否定している。人が暮らす世界も滅びゆく「有限性」であって、そのことゆえに天変地異が起き、人の存在を否定してくる。それだけではない。「有限性」の「体」ゆえに、「永遠性」の神を認識できない。自分は神に支えられていて、神に無条件で愛されているという事実が認識できない。そのため、私たちの心は「平安」ではなく、「不安」に支配されている。このように、今日の私たちは自分を肯定する「善」だけでなく、自分を否定する「悪」も知っている。それは、人を滅ぼす「死」を知っているということである。それゆえ、裸に対しては恥ずかしいと思ってしまう。



まことに、人の「現状の姿」は、人の「真実な姿」とは真逆である。このことから、人に何が起きたのかが分かる。

❖ 人に何が起きたのか

神が造られた当初の世界は、人の「体」も人が暮らす世界も「永遠性」であり、人は「義人」であった。これが人の「真実な姿」であった。ところが、人の「体」も人が暮らす世界も、今では「有限性」であって、人は「罪人」である。これは、神の「永遠性」を否定する「有限性」、すなわち「死」が入り込んだことを示している。聖書も、神が人を造られたあとに「死」が入り込んだことを教えている。「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです」(ローマ 5:12 新共同訳)。そして、入り込んだ「死」によって、人は「良い行い」ができない「罪人」になったことも教えている。「死のとげは罪であり」(I コリント 15:56)。つまり、人に起きたことは、人の中に「死」が入り込んだということであった。人の「罪」は、まさしく入り込んだ「死」に、人が支配されるようになったことに起因していた。「罪が死によって支配したように」(ローマ 5:21)。

❖ 「死」と「罪」の関係

その「死」は、悪魔の仕業によってアダムが罪を犯し、その罪に伴い入り込んだものであった。ただし、その「死」は、罪への罰として入り込んだのではなかった。罪そのものが神との「分離」なので、人が悪魔に欺かれて罪を持った瞬間、人は「永遠性」の神と「分離」し、「有限性」の「体」になったのである。これを、「死」が入り込んだという。そうすると、その「体」では神に愛されている自分を認識できないので「不安」を覚え、「愛されたい」という願望を抱くようになる(承認欲求)。それゆえ、アダムとエバはいちじくの木の葉で自分たちを飾り、愛される自分になることを目指した。しかし、神の戒めは「愛せよ」なので、「愛されたい」を目指すことは神の戒めに逆らう「罪人」の姿であり、その姿の先には誰が愛されるかを巡っての争いが待っていた。加えて、入り込んだ「死」によって滅びる運命になったので「死の恐怖」を覚え、「生きたい」という願望も抱くようになり、その姿の先には富を巡っての争いが待っていた。このように、入り込んだ「死」によって、人は「罪人」になった。これで罪の原因が特定できたので、「神の福音」の有りようも確定する。

❖ 「神の福音」の有りよう

人の「真実な姿」は「良き者」である。しかし、そこに「死」が入り込んだことで人が「罪人」になったというのであれば、「罪人」は「病人」という扱いになり、「神の福

音」の有りようは「癒やし」ということになる。実際、イエスは「罪人」を「病人」として扱われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」（マルコ 2:17）。なぜなら、私たちの罪の原因は、私たち自身の本質にあったのではなく、入り込んだ「死」にあるからである。パウロはそのことを、「ですから、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです」（ローマ 7:17）と述べ、罪は入り込んだ「死」の“とげ”だと断言した。「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）。この「死のとげは罪であり」は、ホセア 13:14 からの引用であり、“とげ”と訳されたヘブライ語は「デヴェル」[דֶּבֶל]であり、それは「疫病」を意味する（名尾耕作著『旧約聖書ヘブル語大辞典』269-270 頁）。この御言葉は、「罪」とは、「死」がまき散らした「疫病」であることを教えている。パウロはこの御言葉を引用することで、イエスと同様に、「罪人」を「病人」とし、「罪」は「死」による病気としたのである。

さらに言えば、その「死」は悪魔の仕業によるので、「死」によってこの世の支配者となった悪魔が、神からすれば裁きの対象となる。ゆえにイエスは、「裁きについてとは、この世の支配者が断罪されることである」（ヨハネ 16:11 新共同訳）と言われた。したがって、人は裁きの対象ではなく、あくまでも救いの対象なので、聖書は、「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである」（ヨハネ 3:17 新共同訳）と教えている。そうである以上、「神の福音」の有りようは「癒やし」なので、従来の「原罪論」は再解釈する必要がある。

❖ 「原罪論」の再解釈

昔からある「原罪論」では、私たちはアダムの子孫なので、私たちが罪を犯す原因は、アダムの原罪にあるとする。アダムが罪を犯して墮落したので、その際の彼の「罪性」が私たちにも遺伝し、私たちも罪を犯すとする。しかし、この見解には矛盾が存在する。というのも、「罪性」はアダムが罪を犯したことで始まったのなら、彼が罪を犯す以前は「罪性」がなかったことになる。そうすると、「罪性」のない状態で、どうしてアダムは罪を犯せたのかという疑問が生じてしまう。キェルケゴールはこの矛盾を、皮肉交じりにこう述べている。

「だが原罪は現在的なるものであり、罪性である、そうしてアダムだけが罪性に染んでいない唯一の人間である、——なぜなら罪性はアダムによって成り出でたのだから。」（キェルケゴール著『不安の概念』岩波書店 40 頁）

ゆえに、キェルケゴールは、「原罪論」は再解釈すべきであると主張している。本書も全く同感である。では、どのように再解釈すればよいのだろうか。従来の「原罪論」では、人が罪を犯すのはアダムの「罪性」が遺伝したからとするが、その「罪性」の正体を再解釈すればよい。キェルケゴールは、それは「不安」であるとしたが（『不安の概念』）、本書はさらに一步進んで、それはアダムの罪に伴い入り込んだ「死」であるとする。「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）。「罪性」は、すなわち人が罪を犯す性質は、入り込んだ「死」が人を支配したことによるとする。「罪が死によって支配した」（ローマ 5:21）。これは全て、聖書の教えるところである。したがって、誰もがアダムの「罪性」を持っているから罪を犯すとする「原罪論」は、誰もがアダムの罪に伴い入り込んだ「死」を持っているからこそ罪を犯すと再解釈できる。では、最後は、アダムの罪のまとめである。

❖ アダムの罪

アダムが罪を犯したのは、悪魔が「蛇」を使って欺いたからである。現代的に言えば、「オレオレ詐欺」に遭ったようなものである。そうである以上、罪の究極の原因は悪魔にある。それで聖書は、「罪を犯している者は、悪魔から出た者です」（Ⅰヨハネ 3:8）と教え、悪魔の仕業を打ち壊すために神の子が現れたとする。「神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです」（Ⅰヨハネ 3:8）。とはいえ、アダムが罪を犯したことで、すなわち「神と異なる思い」を持ったことで、神と人は「分離」し、「永遠性」の神を認識できなくなる「有限性」を招いてしまった。この出来事を「死」が入り込んだという。つまり、罪（神と異なる思い）自体が神との「分離」であり、「死」なので、「死」は罪から来る報酬であった。「罪から来る報酬は死です」（ローマ 6:23）（本書 61 頁「死」は神からの「罰」ではない）。したがって、アダムの罪を見て神が怒り、「罰」として「死」が入り込んだというのは、「罪には罰」という「人間的な標準」に基づく勝手な想像にすぎない。聖書のことは聖書で解くというのは、この「人間的な標準」を捨て去ることであり、それは自分の「理性」の限界を認め、神の前にへりくだることである。そこで、この章では「理性」には限界があることも論じた。

以上が、ここまでのまとめである。このまとめから、人の抱える問題の真実を特定することができる。その特定が、次章の話になる。そして、人の問題の真実が特定できれば、人の問題を解決する「神の福音」も具体性を以て知ることができる。

第三章 人の抱える問題の真実

ここまでの作業は、人の「真実な姿」と、人の「現状の姿」の違いを明らかにし、人に一体何が起きたのかを知ることであった。それは、「死」が入り込んだことであった。「死」が入り込んだことで、「義人」であった人の「真実な姿」が、「罪人」という「現状の姿」になった。この違いを埋めるのが「神の福音」となる。とはいえ、「死」が入り込んだことで、具体的に人の何が変わったのかを特定しなければ、違いを埋める「神の福音」の真実も分からない。そこで、ここでは「死」が入り込んだことで、人の何が変わったのかを整理する。それこそが、人の抱える問題の真実である。

結論から述べると、「死」が入り込んだことで、人に及んだ変化は二つある。一つ目は、体が朽ちる「死の体」に変わり、永遠には生きられなくなったことである。人である「精神」が機能するには、「魂」と「体」が不可欠であり、「体」が朽ちれば「精神」は機能しなくなるので、それは人が滅びる運命になったことを意味する。つまり、「死の体」になったことで、人は実質「死人」になったのである。これが、人の抱える問題の一つ目の真実である。この問題を解決するには、「朽ちない体」を着せてもらうしかない。二つ目は、「死」が入り込んだことで、被造物の全ては今日の姿、すなわち「有限性」に変わり、「永遠性」の神とは分離してしまったことである。その結果、人は神が見えなくなり、神から無条件で愛されている自分を認識できなくなった。それが「不安」を生じさせ、「愛されたい」という願望を生起させるので、人は誰が愛されるかを巡って争ってしまう。この争いが罪の行為であり、人を大いに苦しめている。よって、「不安」を覚えることが、人の抱える問題の二つ目の真実である。この問題を解決するには、神に愛されている自分を認識できない「不安」を取り除くしかない。

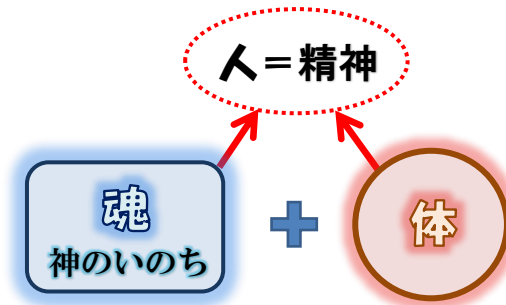
このように、「死」が入り込んだことで、人は大きく変化した。一つは「死の体」になったことであり、もう一つは「不安」を覚えるようになったことである。その変化が人を「死人」にし、人を愛せない「罪人」にしてしまったので、「死の体」と「不安」が人の抱える問題の真実である。したがって、罪を取り除く「神の福音」は、「死」が入り込んだことで生じた変化、「死の体」と「不安」を解決する話になる。そこで、ここでは、「死の体」を「究極の問題」、「不安」を「現実の問題」とし、その中身を具体的に見ていく。そうすれば、罪を取り除く「神の福音」の真実も明らかになる。では、人の抱える問題の一つ目の真実、「究極の問題」から詳しく見ていこう。

－究極の問題－

最初は、「究極の問題」である。それは、入り込んだ「死」によって体が「死の体」となり、生きられなくなったことである。「肉体の死」と同時に、土に帰ることになったことである。「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る」（創世記 3:19）。土に帰るとは、人の滅びを意味する。それゆえ、これこそが人の「究極の問題」である。この問題を正確に把握するには「人の造り」の理解が不可欠なので、「究極の問題」の話は、第一章で見た「人の造り」の復習から始めたい。

❖ 「人の造り」の復習

人とは、何かを認識することで自己を意識する「精神」である。その「精神」は、神が大地のちりで「体」を造り、その「体」に三位一体の神の「いのち」を「魂」として吹き込むことで機能するようになった。「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り（体）、その鼻にいのちの息を吹き込まれた（魂）。それで人は生きるものとなった（精神が機能するようになった）」（創世記 2:7 新改訳 2017 ※（ ）は筆者が意味を補足）。したがって、人である「精神」は、「魂」（神のいのち）と「体」（大地のちり）によって機能する意識であり、それは「魂」と「体」に支えられている。



ここで大事なことは、「魂」には「体」という受け皿が必要だということである。それゆえ、神は先に「体」を造り、それからそこに神の「いのち」を吹き込み、人を支える「魂」とされたのである。「その鼻にいのちの息を吹き込まれた」（創世記 2:7）。吹き込むとは、貸し出すということであり、それは次のようなイメージの図になる。



三位一体の神から貸し出された「魂」は、神の「いのち」の部分なので、それは自発的に「神の思い」を発信する。すると、「体」は発信された「神の思い」を確認するための情報収集を開始する。それによって思考する「精神」が機能し、収集した情報への認識が可能になる。要するに、「魂」は「神の思い」を発信し、「魂」は人に対し、神を慕い求めさせる運動を展開するのである。「神よ、わたしの魂はあなたを求める」（詩篇 42:2 新共同訳）。「精神」である人は、まさしく神に動かされ、神の中で生きている。「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」（使徒 17:28）。これが「人の造り」であり、人は真に神の部分である。このことは、イエスの言葉からも知ることができる。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」（ヨハネ 15:5）。

ここで重要なことは、「精神」は、あくまでも「魂」と「体」とが織りなす機能であって、「精神」という実体があるわけではないということである。神が造られたのは、あくまでも「体」だけであって、そこにご自分の「いのち」を「魂」として貸し出されたにすぎないのである。それでイエスは、「体は殺しても、魂（**プシュケー**）を殺すことのできない者どもを恐れるな」（マタイ 10:28 新共同訳）と言い、人の実体は「魂」と「体」だけであるとされた。同時に聖書は、実体のない「精神」については「霊（**プネウマ**）」として表現し、それは「魂」と「体」によって機能するので、「あなたがたの霊（**プネウマ**）も魂（**プシュケー**）も体も」（I テサロニケ 5:23 新共同訳）と教えている（本書 33 頁「魂」と「精神」とは別である」）。

ということは、人である「精神」が「体」を失うと、どうなるだろう。「体」を失えば、「精神」は機能しなくなる。さらには、神から貸し出されている「魂」は神のいのちの「息」なので、それを貸し出した先の「体」を失えば、「息」は神に帰るしかない。そうなれば、「精神」を支えるものは何も無い状態になるので、このことはそのまま「精神」の消滅を意味する。聖書は、この衝撃的な事実を次のように説明している。

「塵は元の大地に帰り、息はこれを与えた神に帰る。空の空、コヘレトは言う。一切は空である。」（※ 伝道者 12:7-8 聖書協会共同訳）※ 聖書協会共同訳は「コヘレトの言葉」。だが本書は、新改訳の表記に準拠する。以降同様。参照 9 頁

「塵は元の大地に帰り」とは、「大地のちり」で造られた「体」は、大地の土に帰るということであって「肉体の死」を意味する。「肉体の死」が来れば、「息はこれを与えた神に帰る」ことになるという。これは、神が人の「体」に「いのちの息を吹き込まれた」（創世記 2:7）とあるように、神が人の「体」に貸し出した「息」は、すなわち

人を生かしてきた「魂」は、神に返却されることを意味する。すると、人である「精神」は存在できなくなり、「虚無」に服すしかないので、続きに、「一切は空である」と書かれている。これについては、イエスも譬えで教えておられる。

「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。」(ルカ 12:20)

ここで「取り去られる」と訳された原文は、「アパイテオー」[ἀπαίτέω]で、「返却を要求する」という意味である。しかも、ここでの「アパイテオー」は、三人称複数形の能動態なので、三人称複数形の主語が「返却を要求する」という形になっている(参考: 岩隈直著『新約ギリシャ語辞典』山本書店 47 頁、『新約聖書釈義事典 I』教文館 149 頁)。無論、この三人称複数形の主語は、三位一体の神を指す。したがって、ここでの正確な意味は、三位一体の神が、人が死ねば(肉体の死)、貸し出していた「魂」の「返却を要求する」ということである。「魂」は神のいのちの「息」であり、それは神から貸し出されていたので、そのようなことになる。「魂」が神に返却されれば、人である「精神」は存在不可能となり、完全に消滅することは言うまでもない。

このように、「人の造り」から分かることは、人は「体」と「体」に貸し出された「魂」(神のいのち)によって機能する「精神」なので、「体」を失うと「魂」は神に帰り、「精神」は消滅する。ならば、人の「体」の現状はどうなっているのだろう。

❖ 人の「体」の現状

人の「体」の現状を見ると、それは「永遠性」ではなく「有限性」である。「永遠性」の神が確認できない「有限性」であり、必ず朽ち果てて土に帰る。この現状については、神がこう断言されている。「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る」(創世記 3:19)。「体」が土に帰れば、神から貸し出されていた「魂」は受け皿を失うので、神のもとに返却される。すると、人は消滅し、死んだ者となる。なぜなら、すべての人は、神からの「魂」によって生きているからである。つまり、神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのである。

「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」(ルカ 20:38 新共同訳)

ここでイエスは、生きている者は誰であれ、神の「いのち」の部分である「魂」に支えられているので、すなわち神ご自身に支えられているので、「すべての人は、神によ

「生きています」と言い、それゆえ、「生きている者の神」と言われたのであった。人は、まさしく神の「いのち」である「魂」によって生きている。そのため、「魂」の受け皿となる「体」を失えば、「魂」は神に返却され、その者は消滅するしかない。

このように、人の「体」の現状は滅びるしかない「死の体」である。そうである以上、「死の体」が人にとっての致命傷であり、人を完全に滅ぼす最強の「否定」となる。そのため、この「死の体」が恐怖を生み、見える安心をむさぼる「肉の思い」を人に抱かせ、「罪の律法」に仕えさせて人を苦しめている。パウロはそのことを、「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」（ローマ 7:24 新改訳 2017）と述べ、解決はイエス・キリストにしかないので、続けて、「私たちの主イエス・キリストを通して、神に感謝します。こうして、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです」（ローマ 7:25 新改訳 2017）と述べている。このことから、人の抱える「究極の問題」が確定する。

❖ 「究極の問題」

人の抱える「究極の問題」は、「肉体の死」を迎えると「体」を失い、「体」に貸し出されていた「魂」も神に返却されてしまうので、「体」と「魂」によって機能する「精神」が滅んでしまうことにある。人である「精神」は、「魂」と「体」とに支えられているので、それらを失えば機能しなくなり、消滅してしまうことである。それは、人の永遠の滅びを意味する。つまり、人の現状は、永遠の滅びに向かっているのである。これではもう、人は実質、死んでいることになる。それで聖書は、「すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいる」（I コリント 15:22）と教えている。これこそが人の「究極の問題」であり、人の抱える問題の真実である。それは、人はすでに「死んでいる」ということである。この衝撃的な事実を正確に知ってもらうために、第一章では人間学の成果を基に、「人の造り」を知る作業を丁寧に行なってきた。

このように、アダムの罪に伴って入り込んだ「死」により、誰もが「死人」になっていた。これを「**第一の死**」という。そして、人は「肉体の死」と同時に跡形もなく滅びてしまい、全てを失う「虚無」に服すので、「被造物が虚無に服した」（ローマ 8:20）、それが「**第二の死**」となる。それは、人を完全に生きられなくすることなので、この「**第二の死**」の恐ろしさを聖書は象徴を使って、「このような者たちに対する報いは、火と硫黄の燃える池である。それが、第二の死である」（黙示録 21:8 新共同訳）と表現している。それゆえ、これこそが人の「究極の問題」なのである。

しかし、人は聖書が教える「**第二の死**」を、それは神を信じなかった者が地獄に投げ込まれ、苦しみながら生き続けることだと解してしまう。その解釈が正しければ、「肉体の死」と同時に人は生きられなくなってしまうという、これまでの聖書の話は全て嘘になる。それゆえ、死んでも地獄で生き続けられる、というのは人の勝手な想像にすぎない。ならば、人はどうして死んでも生き続けられると思ってしまうのだろう。それは、「魂」を「私」として捉え、「魂」は滅びないとする「**靈魂不滅**」の考えが「人間的な標準」だからである。そのため、人は死んでも（体を失っても）、「魂」として生き続けられるとなってしまう。そこで、人間が生み出した「**靈魂不滅**」にも触れておく必要がある。というのも、聖書にはそのような考えは全くないからである。

❖ 「**靈魂不滅**」

旧約聖書に於ける死生観は、先述したように、生命は身体（肉）と同期し、終わるといふものである。「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る」（創世記 3:19）。そこには、「**靈魂不滅**」という思想は全くない。哲学者でありながら、聖書にも精通していたカントも、「ユダヤ人には来世なるものへの信仰などなかった、したがって天国と地獄への信仰などなかった」と言っている（『たんなる理性の限界内の宗教』A126 「カント全集 10」岩波書店 169 頁）。

ならば、「**靈魂不滅**」の思想はどこから始まったのかというと、一つは古代インドで起きた「ウパニシャッド哲学」からである（紀元前 8 世紀から 6 世紀頃とされる）。その中心思想、「梵我一如」（ぼんがいちにょ）に起源を持つ。「梵我」の「梵」は宇宙の根本原理のことであり、「我」は個人の本体のことであり、それは同一不二（一体）であるとし、個人の本体である「魂」は不滅とされた。それが、「輪廻転生」の思想に発展する。もう一つは、古代ギリシャで起きた「オルペウス教」（紀元前 6 世紀ころ）であり、それは「**靈魂不滅**」の考えに立って「輪廻転生」を唱えた。その影響を受けたのが、古代ギリシア哲学である。そこにはピタゴラス（BC570 頃-496 頃）がいて、彼も「**靈魂不滅**」の考えに立った。また、ピタゴラスの影響を受けたとされるプラトン（BC427-347）も「**靈魂不滅**」の考えに立ち、「輪廻転生」を支持した（『パイドン』）。

こうした考えに共通するのは、人を「魂」としたことである。人である「精神」を、神から貸し出された神の「いのち」の部分である「魂」に置換したことである。しかし、「魂」は人である「精神」を生かし、支えているものであって、人ではない。それは神の「いのち」である。このことに気づき、「精神」と「魂」を最初に分けて考えた

のがアリストテレス（BC384-322）であった。彼は、「魂」と「体」がなければ思考する「精神」もあり得ないとしたのである。

「思惟する（思考する）」は特に靈魂（魂）に独特なものであるようである。しかしこの「思惟する」も或る種の表象であるか、あるいは表象なしにはないものかであるとすれば、これもまた身体（体）がなければあり得ないだろう。」（『靈魂論』403a7-10 「アリストテレス全集 6」岩波書店 6 頁 ＊（ ）は筆者が意味を補足）

そして、死んでも生きられるという考えを完全否定したのが、後の「ストア哲学」を代表するマルクス・アウレリウス（121-180）である。

「ひとたび死ぬと、もはや再び存在することはなく、まったく消滅してしま
うということである。」（『自省録』第 12 卷 5 節 岩波文庫 第 9 刷 232 頁）

だが、マルクス・アウレリウスが、いくら「精神」と「魂」とは別であって、死んでも生きられるというのは誤りであると主張したところで、一旦ギリシャで起きた「靈魂不滅」の思想を止めることはできなかった。それどころか、世界を「ギリシア風」にすることを試みたヘレニズム文化によって、「靈魂不滅」の思想は世界に広がり、それはユダヤ人の中にも入り込んだ。そのため、後期に書かれた旧約聖書には、その思想を意識した言い回しが三箇所ほど見られる（イザヤ 26:19、ダニエル 12:2、ダニエル 12:13）。しかし、それはそういう箇所もあるというだけのことであって、さりとてそれは「靈魂不滅」を教えた話ではない。

何が言いたいかというと、旧約聖書は一貫して、人間の生命が生きる場所は、この世界の他には述べていないということである。それゆえ、人は死ねば塵となって、地に帰るものとして死を教えている。「あなたは土に帰る」（創世記 3:19）。つまり、死は自然な出来事であって、罪に対する罰という考えは全くない。実際、神はアダムの子に對し、死という罰を与えていなかった。見てきたように、聖書は、死をアダムの子に伴い生じた出来事としてだけ教えていた（本書 61 頁「死」は神からの「罰」ではない）。旧約聖書に於ける死生観は、このように死は塵に帰ることであった。

「あなたが御顔を隠されると、彼らはおじ惑い、彼らの息を取り去られると、
彼らは死に、おのれのちりに帰ります。」（詩篇 104:29）

つまり、死人は生き返らないのであり、死者の「精神」である「霊」は、よみがえらないのである。これこそが、旧約聖書に於ける死生観である。

「死人は生き返りません。死者の霊はよみがえりません。」（イザヤ 26:14）

まことに聖書には、人は「魂」であって、死んでも生きられるとする「靈魂不滅」の教えは全くない。旧約時代は当初、死は単純に生命の終結であって、土に帰ることであつた。「あなたは土に帰る」（創世記 3:19）。人は死ぬと、ちりに帰るであつた。「彼らは死に、おのれのちりに帰ります」（詩篇 104:29）。その後、救い主の預言が示されるようになったことで、神により頼むなら、その者には死からのよみがえりがあるという教えが、すなわち「永久に死を滅ぼされる」という教えが加わった。「永久に死を滅ぼされる。神である主はすべての顔から涙をぬぐい、ご自分の民へのそしりを全地の上から除かれる」（イザヤ 25:8）。さらに新約時代になると、その死からのよみがえりの中身が明らかになった。それは朽ちない「霊の体」によるよみがえりであって、「霊の体が復活するのです」（Ⅰコリント 15:44 新共同訳）、神を信じる者の上に起きるとされた。「それは、信じる者がみな、人の子にあつて永遠のいのちを持つためです」（ヨハネ 3:15）。「霊の体」によるよみがえりを説くのは、人とは「体」と「魂」に支えられた「精神」なので、「精神」が死からよみがえるには、必ず朽ちない「体」を着なければならぬからである。

「朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬからです。」（Ⅰコリント 15:53）

ところが、新約時代はすでにヘレニズム文化の普及に伴い、「靈魂不滅」の考えが標準になっていた。その文化の中心に座していたのがプラトンの思想であり、彼は、歴史は生成と消滅を繰り返すが、「魂」だけは不死なので、その中で何度も新たな肉体を以て生まれ変わるとした（輪廻転生）。そして、真理を探究する哲学者たちの死だけは、「魂」が肉体から離れて自由を得られるとした（『パイドン』、『パイドロス』）。こうした考えの普及によって、人は神から貸し出されている「魂」が人であると勝手に思い込み、人は「魂」なので、「体」を失っても生き続けられると思うようになった。その考えが「人間的な標準」となり、世界に広がっていったのである（参考：ブルトマン著作集第6巻『原始キリスト教』第一章の「神と人間」 新教出版社 223-239 頁）。

この「靈魂不滅」の考えはキリスト者の中にも入り込んでしまった。そのため、聖書の教えは「靈魂不滅」の「人間的な標準」を以て解釈されるようになることは避けられなかった。その結果、数多くの死後についての教えが誕生する。しかし、そのことで、人が抱えている「究極の問題」に覆いが掛かり、「神の福音」の真実が見えなくなった。そこで近代になると、キリスト教を代表する神学者バルト（1886-1968）やブルトマン（1884-1976）等が、「靈魂不滅」の考えを再び切り捨てた。例えば、ブルトマンはバルトの考えを引用し、次のように切り捨てている。

「パウロにとって「からだ」は人間の現実に属すること、そのためパウロはからだの復活のみを語りうることを、バルトが強調するのは全く正しい。靈魂不滅のような考えは、(中略) 本質的にありえない。」(ブルトマン著作集第11巻『カール・バルト著「死人の復活」』新教出版社 65頁)

このように、聖書は一貫して「靈魂不滅」の考えを否定してきた。ところが、この世では「魂」を「私」とし、「私」は「魂」ゆえに生き続けるという「靈魂不滅」の思想が「人間的な標準」となったので、その思想がキリスト教にも入り込んでしまい、聖書は誤った意味に解釈されるようになった。これは、私たちに教訓を与えている。それは、「人間的な標準」で聖書を読んでではないということである。「私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません」(Ⅱコリント5:16)。そこで再度述べるが、聖書が教えているのは、人とは「魂」ではなく、「精神」である(本書33頁「魂」と「精神」とは別である)。その「精神」を支え動かすために、神が人の「体」に貸し出されたのが「魂」である。それは神のいのちの「息」であって、「人」ではない(創世記2:7)。そして、「魂」である「息」は神の「いのち」の部分なので、確かに不滅である。そのため、「体」が大地に帰ると、「魂」である「息」は神に帰ることを聖書は教えている。「塵は元の大地に帰り、息はこれを与えた神に帰る」(伝道者12:7 聖書協会共同訳)。そうなれば、人である「精神」は全ての支えを失い、跡形もなく滅びてしまう。つまり、人を襲う「肉体の死」は人の終わりである。

❖ 「肉体の死」は人の終わり

旧約聖書は、「肉体の死」の先を「シェオール」[שְׁאוֹל]と呼び、65回使っている。新改訳聖書は、それを「よみ」と訳している。この「シェオール」は死んだ者が行く場所であるが、問題は、その場所に於ける死んだ者の状態である。旧約聖書は、そこでの状態を、次のように描写している。

「死にあつては、あなたを覚えることはありません。よみ（シェオール）にあつては、だれが、あなたをほめたたえるでしょう。」（詩篇 6:5）

ここでは、「よみ」の場所に行けば、誰も神をほめたたえられないことが示されており、人である「精神」が活動を停止することが描写されている。つまり、これは消滅を意味する。また、次のようにも描写されている。

「あなたの手もとにあるなすべきことはみな、自分の力でしなさい。あなたが行こうとしているよみ（シェオール）には、働きも企ても知識も知恵もないからだ。」（伝道者 9:10）

ここでは、「よみ」の場所に行けば、何の意識も持てないことが描写されている。人である「精神」が、活動を停止することが描写されている。これは、生きている者は自分が死ぬことを知っていても、死んだ者は何も知ることができないということなので、この描写の前の部分にはこう記されている。

「生きている者は自分が死ぬことを知っているが、死んだ者は何も知らない。彼らにはもはや何の報いもなく、彼らの呼び名も忘れられる。」（伝道者 9:5）

ここでは、死後の意識が完全に停止することが強調されている。つまり、「よみ」に下れば、人は雲が消え去ってしまうように、消えてしまうのである。

「雲が消え去ってしまうように、よみ（シェオール）に下る者は、もう上って来ないでしょう。」（ヨブ 7:9）

このように、「シェオール」は死んだ者が行く場所であり、その場所に於ける死んだ者の状態を聖書は描写している。それは「虚無」であり、「被造物が虚無に服した」（ローマ 8:20）、人を襲う肉体の死は人の終わりであることを描写している。このヘブライ語の「シェオール」は、旧約聖書をギリシャ語に翻訳した七十人聖書では、主に「ハデース」[ᾍδης]と訳されている。そして、新約聖書ではこの「ハデース」が10回使われている。すなわち、神は聖書を通し、肉体の死は「精神」の完全な活動停止であって、全てが終わることを教えているのである。それは、「肉体の死」と同時に、人が消滅することを意味する。これが人の現状であって、それは実質、死んでいるという

ことである。「アダムにあってすべての人が死んでいる」(I コリント 15:22)。イエスは、この現状を「死人」(ヨハネ 5:25) と呼ばれた。そうである以上、これが人の抱える「究極の問題」であり、「神の福音」は「究極の問題」を解決するためにある。それで、次のような描写がある。

「これが愚か者の道(中略)／陰府(シェオール)に置かれた羊の群れ／死が彼らを飼う。(中略) その姿を陰府(シェオール)がむしばむ。しかし、神はわたし(神を信じる者)の魂を贖い／陰府(シェオール)の手から取り上げてくださる。」(詩篇 49:13-16 新共同訳)※()は筆者が意味を補足

愚か者は、すなわち神を信じない者は、「陰府(シェオール)に置かれた羊の群れ／死が彼らを飼う」とある。彼らの姿は、「陰府(シェオール)」によって消滅するしかないで、「その姿を陰府(シェオール)がむしばむ」とある。しかし、神を信じる者に対しては、「陰府(シェオール)の手から取り上げてくださる」とあるように、滅ぶしかない「死人」だった者を、神は生き返らせることができる。それは、朽ちない「霊の体」を着せることであり、ここに「神の福音」がある。それは、人を滅ぼす死の力(よみ(シェオール)の力)から贖い出す福音である。そこで、次のような描写がある。

「わたしはよみ(シェオール)の力から、彼らを解き放ち、彼らを死から贖おう。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。よみ(シェオール)よ。おまえの針はどこにあるのか。」(ホセア 13:14)

押えておくべきことは、人とは「精神」であり、それが機能するには「魂」と「体」の二つが不可欠であるということである。そのため、「体」が死を迎えれば、人である「精神」は滅んでしまう(よみに下る)ので、その事実を聖書は教えているのである。したがって、人を襲う「肉体の死」は人の終わりであるというのが、人の抱える「究極の問題」であり、これを解決するためにあるのが「神の福音」である。それは、人が生きている間に(よみに下る前に)、朽ちない「霊の体」を着せることである。では、次に人の抱える「現実の問題」を見てみよう。

－現実の問題－

「死」が入り込んだことで人の体は「死の体」となり、滅びるしかないという「究極の問題」を抱えることになった。しかし、問題はそれだけではなかった。「死の体」とは「有限性」の体のことであり、「有限性」では「永遠性」を、すなわち「神」を認識できないのである。それは、神の「いのち」に支えられている自分の「真実な姿」を認識できないということであり、自分自身が神の「いのち」に属する不変の「肯定」であることを認識できないということである。平たく言えば、神に無条件で愛されている自分を認識できないということである。しかし、「有限性」の体では認識できなくても、人である「精神」は「魂」から「神の思い」を直接受け取っているので、心の奥底では神を知っている。神の愛を知っている。神に愛されている喜びを知っている。だが、その喜びを体の五官では確認できない。このことが、人を「不安」にさせてしまう。そこで、人は心の奥底で知っている愛される喜びを、体の五官でも確認しようと、愛される自分を目指す。そうすることで、「不安」を排除しようとする。ところが、愛される自分を目指すことで、誰が愛されるかを巡って争いが生じるようになり、これが「罪の道」となって人を苦しめることになった。

このように、「死」が入り込んだことで、自分の「真実な姿」を認識できなくなったことの「不安」が苦しみをもたらすことになった。これこそが、解決すべき「現実の問題」である。しかし、人は解決すべき問題というと、苦しみを覚える様々な困難を連想する。確かに、困難は人に苦しみを覚えさせるので、それは解決しなければならない問題である。だが、覚える苦しみの全ては、自分の「真実な姿」を認識できない「不安」に起因している。であれば、見える困難は見せかけの問題であって、解決すべき真の問題は、自分の「真実な姿」が認識できないことの「不安」、すなわち神に無条件で愛されている自分を認識できないことの「不安」にある。ここでは、それについて述べたい。最初は、「不安」ゆえに「罪の道」を歩くようになった経緯から述べる。

❖ 「罪の道」を歩く

人は神に似せて造られたので、人の価値は神と同じ不動の「善」であって、変わらない「肯定」である。ゆえに、たとえ「死の体」という「否定」が入り込んだとしても、人は自分の努力で、自分の存在を「肯定」しようとする必要は全くない。愛される自分を目指し、自分の「肯定」を確認する必要はない。しかし、人は神に無条件で愛されている自分の「肯定」を、体の五官では認識できなくなったので、神に無条件で愛されていることを確認すべく、自らの努力で自らの「肯定」を目指してしまう。神に

信頼を置くのではなく、自らの努力に信頼を置くのである。これを「罪の道」を歩くという。というのも、「罪」とは神を信頼しないことであり、信じないことだからである。「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」（ヨハネ 16:9 新共同訳）。この「罪の道」の起源は、アダムとエバにまで遡る。

アダムとエバは、神の「いのち」の部分である「魂」と、この世界のちりで造られた「体」とに支えられていた。当初は、「魂」は「神の思い」を発信し、「体」は「神の思い」を確認できる情報を持ち込み、彼らの存在を「肯定」していた。だが、悪魔の仕業で「死」が入り込み、彼らの「体」は「死の体」となり、世界も死の世界となった。それは、彼らの存在を「否定」する情報であったので、人の「体」は「神の思い」（肯定）を確認できる情報を持ち込めなくなった。こうして、アダムとエバは、「魂」からの「肯定」と、「体」からの「否定」を同時に持つようになり、神の創造を「肯定」する「善」と、それを「否定」する「悪」を、すなわち「善悪」を知るようになった。「善悪を知るようになった」（創世記 3:22）。そのため、アダムとエバは、自分たちの姿を恥ずかしいと「否定」すると同時に、自分たちの姿を飾ることで、自らを「肯定」しようとした。それが、いちじくの木の実で、自分たちの腰のおおいを作ることであった。「彼らは、いちじくの実をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った」（創世記 3:7）。彼らは、自らの努力で「うわべ」を着飾り、少しでも自分たちを良く見せることで、愛されようとしたのである。つまり、自分の存在を「肯定」しようとした。これが「罪の道」の始まりである。こうした欲求を「承認欲求」というが、その欲求は大きくなっていった。それは、その後の彼らの様子を見ればすぐに分かる。

自分の「うわべ」を着飾った二人は、その後、禁断の実を食べたのかと、神から聞かれた。「あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか」（創世記 3:11）。すると、彼らは「承認欲求」から、食べた責任を他者のせいにし、自分を良く見せようとしたのである。そこでアダムは、「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです」（創世記 3:12）と言ってエバのせいにし、エバは、「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです」（創世記 3:13）、と言って蛇のせいにした。無論、エバが蛇に惑わされたのは事実であり、アダムもエバから実を手渡されたのは事実である。だが、ここでは「食べたのか」と神が聞かれた以上、ただ「食べました」と答えればよかった。そして、食べたことで生じた「不安」を神に話し、神に助けを求めればよかった。しかし、彼らは「不安」を隠し、「自分は元気です」というふりをして、食べたことについては言い訳をすることで自分を良く見せ、愛されようとしたのであった。

この生き方は、アダムとエバの子どもたちであるカインとアベルにも引き継がれ、彼らは互いの「うわべ」を比較するようになり、誰が神に良く思われるかを巡って競うようになった。そのため、カインは自分の捧げ物よりもアベルの捧げ物に神が目を留められたことを知ると、アベルに怒りを抱き、ついには殺害したのである。「だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた。（中略）カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した」（創世記 4:5-8）。

こうして、アダムとエバ以来、誰もが、自らの努力で自らの存在を「肯定」しようとする「罪の道」を歩くようになった。それは神に信頼を置くのではなく、自らの努力に信頼を置く生き方である。自分の存在を自分で根拠づけ、自分の力で永遠に生きようとする努力である。それが、アダムとエバから始まった。つまり、彼らは「善悪」を知るようになり、自分の力で永遠に生きようとする努力を始めたのである。しかし、その生き方は誤りだったので、神は次のように言われた。

「神である【主】は仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るようになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。」」（創世記 3:22）

このように、「死」が入り込み、「否定」の運動が「この世」を支配するようになったことで、人類は「罪の道」を歩み出した。それは自分の存在を自分で根拠づける道であり、言い換えれば、それは愛されようとする道であり、自分が良く思われようとする道である。その道から「肉の欲」、「目の欲」、「暮らし向きの自慢」等が開花し、その欲が様々な罪の行為へと人を駆り立て、人を苦しめるようになった。まことに、「死」が支配する「この世」から、人を苦しめる欲が出たのである（本書 52 頁「罪の入口」）。

「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」

（Ⅰヨハネ 2:16）

「この世」から出た欲を総称し、「承認欲求」という。その欲は、少しでも周りから良く思われ、愛される自分になることを目指させる。少しでも良く思われる「うわべ」で自分を着飾らせ、愛される自分になろうとさせる。これは、人の価値を「うわべ」で判断する生き方であり、それが「罪の道」なので、イエスは、「うわべによって人を

さばかないで、正しいさばきをしなさい」(ヨハネ 7:24)と言われた。だが、人はそれを「罪の道」だとは思わず、自分の努力で獲得した「うわべ」を見て、自分は「肯定」される存在になったと錯覚してしまう。しかし、その「うわべ」は、単に自分が持っている「否定」を隠す「鎧」にすぎないのである。

❖ 「否定」を隠す「鎧」

「死」という「否定」の運動が入り込んで以来、人は自らの存在を自らの努力で「肯定」しようとしてきた。それは周りから認められるということであって、人の関心を引くことを意味する。人の関心を引くことで、自らの存在を「肯定」するのである。そして、人の関心を引くことができる事柄は二種類ある。一つは、人から良く思われる事柄である。例えば、「良い行い」、「富や名誉」、「良い学歴」、「良い容貌」等がそれに当たる。それらを手にできれば、確かに人の関心を引くことができる。もう一つは、人から悪く思われる事柄である。人は周りから良く思われることを目指すが、自分にはそれは無理だとあきらめた人は、周りから悪く思われることで人の関心を引こうとする。例えば、「悪い行い」、「悪い成績」、「嫌われる身なり」等がそれに当たる。子どもが親に怒られることをするのも、これに当たる。ただし、人はそれを無意識にする。

こうして、何であれ人の関心を引くことができれば、人は愛される自分になれたと思ってしまう。なぜなら、愛されるとは、関わってもらうことであって、関心を引くことを意味するからである。何であれ人の関心を引くことで、人は自分が愛される（関わりを持ってもらえる）、「特別な自分」になれたと思い、自分の存在が「肯定」されたと思ってしまう。しかし、「特別な自分」の下には、入り込んだ「死」に「否定」されている自分がある。どれだけほめられても、あるいはどれだけ悪く思われても、その下には自分の存在を「否定」する「死」がそのまま残っている。ということは、人は自分が「否定」されている姿を暴かれないよう、「特別な自分」で覆い隠しているだけであって、人が目指す「肯定」は、自分が持っている「否定」を隠す「鎧」にすぎないのである。この「否定」を隠す「鎧」について、もう少し掘り下げてみたい。

「死」が入り込んだことで、アダムとエバは自分の「真実な姿」を認識できなくなった。その姿とは、無条件で神に愛されている姿である。それが認識できなくなったので「不安」を覚え、彼らは自分の姿を「恥ずかしい」と思い、その姿の素となる自分の裸に「恐れ」を覚えた。「私は裸なので、恐れて、隠れました」(創世記 3:10)。そこで、いちじくの木の子葉で自分たちの裸を少しでも隠そうとした。「彼らは、いちじくの子葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った」(創世記 3:7)。

アダムとエバのこの姿は、人が必死になって隠そうとするものは、「死」に制約された自分の姿への「恐れ」であることを示している。誰もが自分の姿を人から良く思われるもので覆い、「恐れ」を隠す。そのことで、自らの存在を「肯定」しようとする。それゆえ、富で自分の「うわべ」を飾ることで良く思われれば、「もう、これで安心だ」と胸をなで下ろす。しかし、どれだけ富で着飾ったところで、最後は「死」が全てを呑み込んでしまう以上、「もう、これで安心だ」という思いは幻想でしかない。つまり、人が目指す「肯定」は「肯定」ではなく、自分の「恐れ」を隠すための「鎧」にすぎない。イエスは、その愚かさを譬えで話された。

「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。」(ルカ 12:20)

このように、人は自分を富で着飾ることで、自分の存在は「肯定」されたと胸をなで下ろすが、盗人のように死が訪れ、その存在は完全に「否定」されてしまう。ゆえに、それは「恐れ」という「否定」の感情を隠す、ただの「鎧」であって、そこでは自分の存在は何も「肯定」されていないのである。それどころか、自力での「肯定」を目指せば目指すほど空しさも増し、人は苦しむことになる。というより、自力での「肯定」を目指せば目指すほど争いも増え、人は罪の行為で苦しむしかない。そうなった原因は全て、自分の「真実な姿」を認識できなくなった「不安」にあるので、これこそが解決しなければならない「現実の問題」となる。

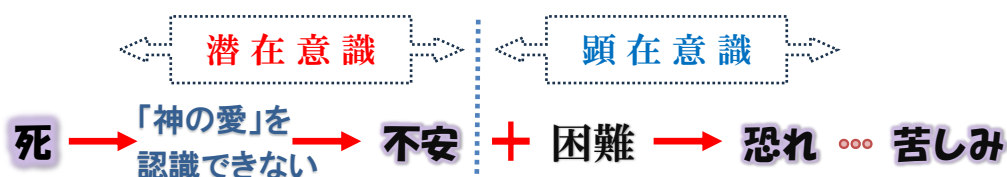
しかし、解決しなければならない「現実の問題」というと、人は様々な困難を連想する。無論、生きることで生じる困難は解決しなければならない問題ではある。だが、それは困難に対して「苦しみ」を覚えてしまうからこそ、解決しなければならない問題なのであって、解決すべきは、「苦しみ」を覚えてしまうことにある。そこで、「苦しみ」を覚える仕組みについても、見ておくことにしよう。

❖ 「苦しみ」を覚える仕組み

人とは思考する「精神」であり、思考は全て、「魂」と「体」とに支えられている。「魂」は神の「いのち」の部分なので、そこからは「神の思い」が発信され、それを確認しようと「体」が情報を収集するので思考が始まる。この思考が人であり、それを「精神」という。「精神」は、まさしく「魂」と「体」とが織りなす機能である。ところが、悪魔の仕業で「死」が入り込み、「世界」と「体」が滅びに向かう「有限性」になった

ために、「精神」は「魂」から発信される、人の存在を肯定する「神の思い」を知ってはいても、「体」が持ち込む情報では、それを確認できなくなった。ここに「不安」の原点があり、それが「苦しみ」となった（本書 40 頁「認識の仕組み」を掘り下げる）。

つまり、こういうことである。人である「精神」は意識の総合体であって、意識は二重構造になっている。一つは「魂」が発信する「神の愛」の情報を受け取る「潜在意識」（無意識）、もう一つは「体」が収集した情報を受け取る「顕在意識」（意識）である。しかし、「魂」が発信する「神の愛」を「潜在意識」で受け取っても、それを「体」の持ち込む情報（顕在意識）では確認できない。これでは神に愛されている自分を認識できないので「不安」になり、「苦しみ」を覚える。ただし、それは心の奥底「潜在意識」での話なので、「顕在意識」はその「苦しみ」を意識できない。漠然とした「不安」を感じるだけである。そこで「顕在意識」は、「顕在意識」の覚える困難に漠然とした「不安」を投影し、「不安」を可視化しようとする。すると困難は「恐れ」となり、意識できる「苦しみ」となる。これが「苦しみ」を覚える仕組みであり、「苦しみ」の原点は、神に愛されている自分を認識できないことの「不安」にある。



では、人は最初に、どのような困難に「不安」を投影するのだろうか。それは、自分の「体」に対してである。人は、自分の「体」が朽ち果てるしかない有限になり、永遠である神の愛を認識できなくなったので、その「体」の困難に「不安」を投影し、「不安」を可視化する。アダムとエバも、自分の「体」に「不安」を投影し、それを可視化した。すると、彼らはそれまで気にもしなかった自分の「体」が気になり、こんな姿ゆえに愛されないのだと、自分の「体」に対して「恐れ」を抱くようになった。「私は裸なので、恐れて、隠れました」（創世記 3:10）。それはそのまま、自分の姿を「恥ずかしい」とする思いとなり、「苦しみ」となった。

ならば、「体」の困難に対して抱いた「恐れ」に打ち勝つには、どうすればよいのだろうか。それには、「体」を着飾り、少しでも良く見えるようにすることくらいしかない。そうすることで、「体」に対する「恐れ」と戦うしかない。アダムとエバは、実際そのようにした。彼らは神の愛を認識できなくなった途端に「不安」を覚え、それを自分

の「体」の困難に投影したので、それで「体」に対する目が開かれ、その姿に「恐れ」を抱き、「体」を着飾って愛されようとした。

「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った（恐れた）。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」（創世記 3:7） ※（ ）は筆者が意味を補足

しかし、いくらいちじくの葉で着飾っても、「体」に対する「恐れ」は消えなかった。それは、「体」の「恐れ」は、神の愛を認識できない「不安」から来ていたからである。それゆえ、いちじくの葉で着飾ったあとも「体」に対する「恐れ」は継続したので、二人は神の声を聞いても、こんな姿の自分では愛されるはずもないと隠れてしまった。アダムは、その時の気持ちを、「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました」（創世記 3:10）と述べている。さらには、神から罪を指摘されると、アダムはエバのせいにし、エバは蛇のせいにした（創世記 3:11-13）。誰かのせいにすることで、少しでも良く思われようとしたのである。

このように、人の中に「死」が入り込んで以来、「魂」は「神の愛」を「潜在意識」に発信しても、その愛を「体」が収集する情報（顕在意識）では確認できなくなり、人は「不安」を覚えるようになった。そうであっても、人はなぜ自分が「不安」なのか、その理由を具体的には意識できない。「不安」の中身が、まるで見えない。そこで、人は意識できる困難に、すなわち見える困難に、見えない「不安」を投影し、「不安」の可視化を図る。すると、困難は「恐れ」となり、それが意識できる「苦しみ」となる。これが「苦しみ」を覚える仕組みである。

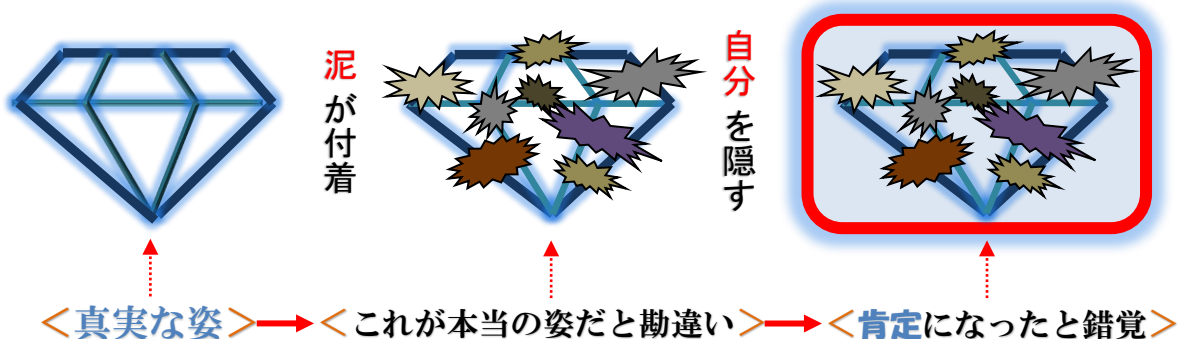
しかし、人は「苦しみ」の原因は困難にあると思うので、困難を解決すれば「苦しみ」からも開放されると錯覚してしまう。困難こそ、解決しなければならない「現実の問題」だと思ってしまう。ところが真実は、神に愛されている自分を認識できない「不安」にこそ、「苦しみ」の原因がある。したがって、神に無条件で愛されている自分の姿を、すなわち神が造られた人の「真実な姿」を認識できないことが、解決しなければならない「現実の問題」なのである。では、「現実の問題」の総括をしよう。

❖ 「現実の問題」の総括

人の価値は、「死」が入ろうとも不変の「肯定」である。人は神の部分として造られたので、「私たちはキリストのからだの部分だからです」（エペソ 5:30）、すなわち人の

根幹は神の「いのち」であり、それは「永遠性」であって変わることがないので、人の価値は何があっても不変の「肯定」である。ただ、神の「いのち」（魂）を入れる器（体）が「有限性」になった、というだけである。譬えるなら、着ていた服がボロボロになったというだけであって、「有限性」となった器（体）の下には、今でも神の「いのち」がある。そこには不変の「肯定」があり、人は今もなお神の「肯定」の部分である。そうでなければ、人は思考することなどできない。なぜなら、神の「いのち」の部分である「魂」が「神の思い」を発信しなければ、人は思考できないからである。したがって、「有限性」となった「体」でも思考できるということは、人の根幹は何も変わっていないということであり、生きている（思考する）者は誰であれ、今なお神に無条件で受容されているのであって、神の目には「肯定」のみである。

しかし、入り込んだ「死」の制約で、その事実を確認できなくなった。それはまるで、「ダイヤ」に泥が付いてしまい、本来の輝きが見えなくなったようなものである。それで人は、泥が付いてしまった姿を自分の本当の姿だと勘違いし、その泥を何かで覆い隠すようになった。少しでも良く思われる「うわべ」で泥を隠し、自力での「肯定」を目指すようになった。そして、自分は「肯定」になったと錯覚するようになった。



それだけではない。少しでも良く思われる「うわべ」で自分を「肯定」しようとすればするだけ、人は熱心に互いを比べるようになる。すると、そこには嫉妬や争いが生じ、様々な罪の行為に向かい、罪責感を抱くようになる。そのことが、ますます自分のことを「否定」させ、さらなる「肯定」を目指させてしまう。その結果、人は以前にも増して周りの目が気になり、以前にも増して「苦しみ」を覚えるようになる。

これでは、「苦しみ」は増す一方である。この「苦しみ」を真剣に解決したいのであれば、神に無条件で愛されている自分を知るしかない。というのも、私たちの覚える「苦しみ」の真の原因は、入り込んだ「死」に遮られ、神に無条件で愛されている自分の

「真実な姿」を認識できない「不安」にあるからである。別の言い方をするなら、神と結びつきたくとも、結びつけなくなったことに「苦しみ」の真の原因がある。神と「一つ」になれないことに原因がある（本書 40 頁「認識の仕組み」を掘り下げる）。それゆえ、これこそが解決しなければならない「現実の問題」である。

「現実の問題」というと、人は目に見える様々な困難を思い浮かべるが、それらは見た目の問題であって、人を真に苦しめているのは見える困難ではなく、自分の「真実な姿」を認識できない「不安」である。全ては、神から「肯定」されている自分の「真実な姿」を、入り込んだ「死」が「有限性」の泥で覆い隠してしまったことによるので、「苦しみ」という「現実の問題」を解決するには、「有限性」の泥を神に洗い流してもらうしかない。泥の付いた自分を神に差し出し、洗ってもらう以外に解決はない。そのようにして、神と「一つ」にしてもらうしかない。イエスは、それを弟子たちに教えるために、彼らの足を洗われたのであった。「それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまっとっておられる手ぬぐいで、ふき始められた」（ヨハネ 13:5）。

このように、私たちの抱える「現実の問題」は、自分の「真実な姿」を認識できない「不安」にある。確かに、人は、病気の問題、罪の問題、経済的な問題、社会の問題、家族の問題、仕事の問題、人間関係の問題、天変地異の問題など、解決しなければならない様々な現実の問題を抱えている。しかし、そうした問題に人が「苦しみ」を覚えるのは、自分の「真実な姿」を認識できないからであって、それは神と「一つ」になっていないからである。したがって、私たちの抱える「現実の問題」は、自分の「真実な姿」を認識できないことに尽きる。神と「一つ」になれないことに尽きる。そして、この「現実の問題」を解決することが、そのまま罪からの解放になる。では、この章の全体のまとめをしよう。

－全体のまとめ－

第一章では、人の「真実な姿」を探り、人の「現状の姿」との違いを明らかにした。第二章では、その違いを生じさせた出来事を特定した。それは、「死」が入り込んだことであった。そこで第三章では、「死」が入り込んだという出来事によって生じた変化を探り、人の抱える問題の真実を特定する作業をした。その結果、人には解決しなければならない二つの問題があることが分かった。一つは、「死」が入り込んだことで人の「体」が朽ちる「死の体」に変化し、そのままでは「肉体の死」と同時に滅びるしかないという問題である。人とは「精神」であり、それが機能するには、「体」と「魂」が不可欠であるため、「体」を失えば「精神」は機能しなくなる。正確に言えば、人を動かしている「魂」は、神から人の「体」に貸し出された神のいのちの「息」なので、「その鼻にいのちの息を吹き込まれた」（創世記 2:7）、「体」を失うと「息」は神に帰ってしまい、そのままでは「肉体の死」と同時に人は滅びてしまう。そのような状態である以上、一切は空である。ここに人の抱える「究極の問題」がある。

「塵は元の大地に帰り、息はこれを与えた神に帰る。空の空、コヘレトは言う。一切は空である。」（伝道者 12:7-8 聖書協会共同訳）

しかし、人は「人間的な標準」で、神（聖書）のことも知ろうとするので、聖書が教えている人の「究極の問題」に気づかない。というのも、「人間的な標準」では、人は「精神」ではなく「魂」であり、「魂」は不滅とするからである。しかし、聖書に書かれていることを聖書で解くなら、人の抱える「究極の問題」が見えてくる。つまり、霊的なものによって、霊的なことを解くのである。「つまり、霊的なものによって霊的なことを説明するのです」（Ⅰコリント 2:13 新共同訳）。

そして、もう一つの解決しなければならない問題は、「体」が有限になったことで永遠である神との間に壁が出来、神に無条件で愛されている自分の「真実な姿」を認識できなくなったことである。神と「一つ」になれなくなったことである。このことが「不安」を抱かせ、「愛されたい」という願望を生み、人を罪の行為に駆り立てている。加えて、「不安」が見える困難と結びつき、「恐れ」となって人を苦しめている。ゆえに、自分の「真実な姿」が認識できなくなったことが人に於ける「現実の問題」である。こうした「現実の問題」を、聖書は、「彼らの心にはおおいが掛かっているのです」（Ⅱコリント 3:15）と表現し、「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている」（Ⅰコリント 13:12 新共同訳）と表現している。

以上の二つが、人の抱える問題の真実であり、それらは悪魔の仕業で持ち込まれた「死」の「否定」から生じたのである。このことから、「神の福音」の骨子が見えてくる。

❖ 「神の福音」の骨子

「神の福音」の骨子は、一言で言うと、人の中に入り込んだ「否定」を「否定」することである。その第一段は、人の存在を完全「否定」する「死の体」を「否定」することである。それには、「死の体」に代わる、朽ちない「霊の体」を着せる必要がある。それを着せれば、「死の体」が朽ちても、神は着せた「霊の体」に「魂」の貸し出しを継続することができるので、人である「精神」も生き続けられる。「霊の体が復活するのです」（Ⅰコリント 15:44 新共同訳）。それゆえ、「霊の体」を着せ、人を「死」から「いのち」に移すことが「究極の問題」の解決となる。これが、人への「否定」を「否定」する第一段である。

ならば、第二段の「現実の問題」の解決はどうなるのだろうか。それは、自分の「真実な姿」を知るようにすることである。人は「否定」の泥によって自分の「真実な姿」を認識できなくなり、神と「一つ」になれずに苦しむようになったので、「否定」の泥（罪）を洗い流すのである。それは「否定」という「罪」を取り除く作業であり、「キリストが現れたのは罪を取り除くためであった」（Ⅰヨハネ 3:5）、「神の国」に引き上げられるまで続けられる。これが、人への「否定」を「否定」する第二段である。

「究極の問題」 = 「死の体」では生きられない → 「霊の体」を着せる

「現実の問題」 = 「真実な姿」が認識できない → 「罪」を取り除く

この第二段の話をさらに述べると、聖書が教えている人の「真実な姿」は、神に無条件で愛されている「良き者」なので、それを知るようにすることで「不安」を「平安」に変える。それは決して、「ダメな者」を「良き者」にすることではなく、神の「栄光」として造られた人の姿を見えなくさせている「否定」の泥を洗い流し、「栄光」から「栄光」へと、神の「栄光」の姿を知るようにしていくことである。

「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」（Ⅱコリント 3:18）

このように、「神の福音」の骨子は「否定」の「否定」である。それは、人の存在を「否定」する「死の体」の代わりに、人の存在を「肯定」し続ける「霊の体」を着せることである。さらには、入り込んだ「否定」によって認識できなくなった自分の「真実な姿」を知るようにするために、入り込んだ「否定」を「否定」することである。それは、聖書が人の「真実な姿」を教えているので、それを信じさせない「不信仰」の罪を取り除くことを意味する。そして、こうした「否定」は、入り込んだ「死」に起因する以上、人の「現状の姿」は紛れもなく「死」による「病気」であり、「罪人」は「病人」なのである。そのことは、イエスが次のように言われている。

「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」（マルコ 2:17）

「罪人」は「病人」なので、「神の福音」は徹頭徹尾「癒やし」である。つまり、人を「ダイヤ」に喩えるなら、「ダイヤ」に付着した「死」による泥を、神が洗い流して本来の姿に癒やす、というのが「神の福音」の真実である。そして、人を「罪人」という「病人」にしたのは「死」なので、最後は「霊の体」での復活を以て「死」に勝利させる、というのが「神の福音」の締めとなる。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか」（I コリント 15:55）。



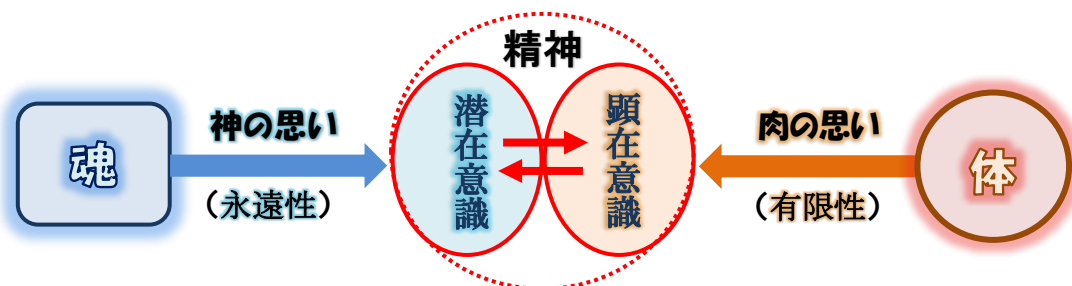
以上が、「神の福音」の骨格である。それは言ってみれば、人の体も心も「死」から「いのち」に移すことであり、それは三つのステージに分けて行われる。「第一ステージ」は「究極の問題」の解決であり、**体**を「死」から「いのち」に移す。「第二ステージ」は「現実の問題」の解決であり、**心**を「死」から「いのち」に移す。そして、「第三ステージ」は、この福音を人に受け取らせるために神がなされる戦いとなる。そこで、ここからはステージごとに見ていく。まずは、福音の「第一ステージ」からである。

第四章 福音の「第一ステージ」

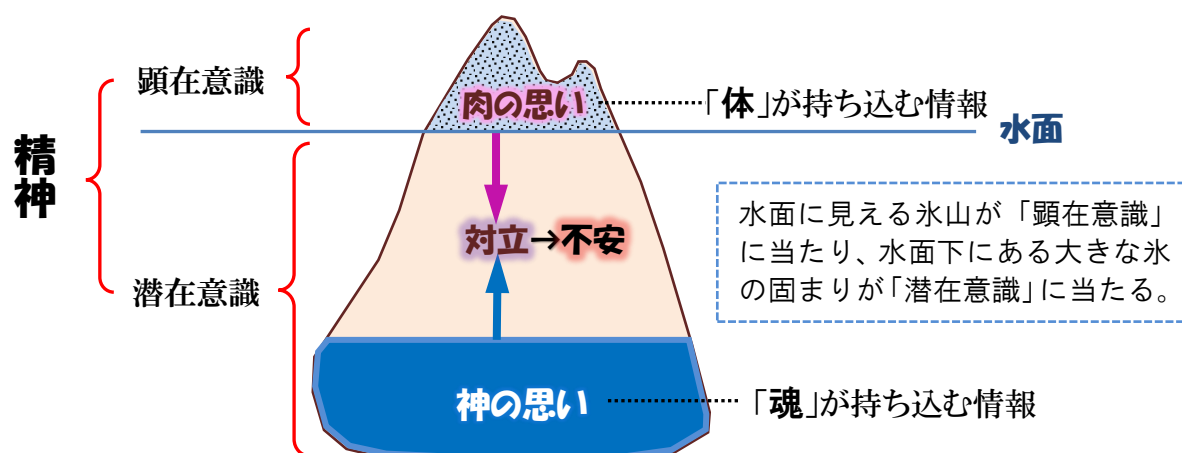
「神の福音」の真実を知るために、前章では人の抱える問題の真実を特定した。それは第一に、「死の体」（有限性の体）のままだと滅びるしかないということであり、これが「究極の問題」であった。これを解決するには、滅びない「霊の体」を着せてもらうしかない。第二に、人の抱える問題の真実は、自分の「真実な姿」を認識できないことであり、これが人を苦しめる「現実の問題」であった。これを解決するには、「真実な姿」を見えなくさせている罪の覆いを取り除くしかない。この二つの問題を解決するのが「神の福音」であり、第一の「究極の問題」を解決するのが福音の「第一ステージ」になる。この章では、それを見ていく。ただし、それには現状に於ける「精神」の構造をもう少し知る必要があるなので、その話を先におきたい。

❖ 「精神」の大まかな構造

人とは思考する「精神」であり、それは神の「いのち」の部分である「魂」と、「体」によって支えられている。その「精神」は意識の総合体であり、自覚できる意識を「顕在意識」（通称：「意識」）といい、自覚できない意識を「潜在意識」（通称：「無意識」）という。そして、「魂」が発信する「神の思い」を受信する意識が「潜在意識」であり、「体」が収集する情報を受信する意識が「顕在意識」である。アダムの子によって「死」が入り込んで以来、人の「意識」はこのような形態になった。なぜなら、「死」によって人の「体」も世界も滅びに向かう「有限性」となり、「体」が収集できる情報は「有限性」に限定されたからである。その結果、「体」の持ち込む「有限性」の情報と、「魂」が持ち込む「永遠性」の情報とを、「精神」は分けて受け取るようになった。このため、聖書は、「魂」が持ち込む情報を「御霊による思い」（神の思い）と呼び、「体」が持ち込む「死」に向かう情報を「肉の思い」と呼ぶ。「肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です」（ローマ 8:6）。この両者は、「精神」の中で激しく対立する。



今日の「精神」は、「魂」による「神の思い」と、「体」による「肉の思い」とに支えられている。とはいえ、この二つの思いは互いに反発するので、「神の思い」を受信した「潜在意識」は、その思いを「顕在意識」に意識化することで、「精神」への支配を拡大しようとする。「顕在意識」も受信した「肉の思い」の情報を「潜在意識」に持ち込むことで、「精神」への支配を拡大しようとする。この対立が、「精神」に「不安」を覚えさせる要因となっている。これが、現状に於ける「精神」の大まかな構造であるが、この構造を氷山に喩えると、水面に見える氷山の部分が「顕在意識」に当たり、水面の下に見えない部分が「潜在意識」に当たる。こうした「精神」の構造は、今日の心理学では広く知られている。



このように、人である「精神」は意識の総合体であり、その「精神」の大まかな構造は、「神の思い」を受信する「潜在意識」と、「肉の思い」を受信する「顕在意識」とに分かれていて、両者は人である「精神」の支配を巡って対立している。「肉の思いは神に対して反抗するものだからです」（ローマ8:7）。それゆえ、「肉の思い」を「不信仰」というが、これこそが人の「真実な姿」を「否定」する泥の正体である。

では、いよいよ「神の福音」の真実の話に移ろう。その真実は三つのステージに分けられるので、この章では人の「究極の問題」を解決する「第一ステージ」を具体的に見ていく。その際、ここで述べた「精神」の大まかな構造の知識が必要になる。

－「第一ステージ」－

人とは意識の総合、「精神」であり、それは「魂」と「体」によって機能する。そのため、「体」を失うと人は存在できない。となると、このままでは「肉体の死」と同時に「体」を失うので、人は滅ぶというのが人の抱える「究極の問題」である。ゆえに、「神の福音」は何をさておいても「究極の問題」の解決を目指す。というのも、人が滅んでしまえば元も子もないからである。そこで、「究極の問題」の解決を、本書は福音の「第一ステージ」と呼ぶ。それは、滅びゆく「死の体」から、人を救い出すことである。「だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」(ローマ 7:24 新改訳 2017)。それには、人が滅びる前に、神が人に朽ちない「霊の体」を着せなければならない。そうすれば、自然の命が朽ちても「霊の体」が「魂」の受け皿となるので、人は滅びることなく生きられる。これを「復活」という。「つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです」(I コリント 15:44 新共同訳)。この「霊の体」を着せる「復活」が福音の「第一ステージ」であり、聖書はこれを「救い」といい、「永遠のいのち」を持つという。では、「死の体」になった経緯から話を始めよう。

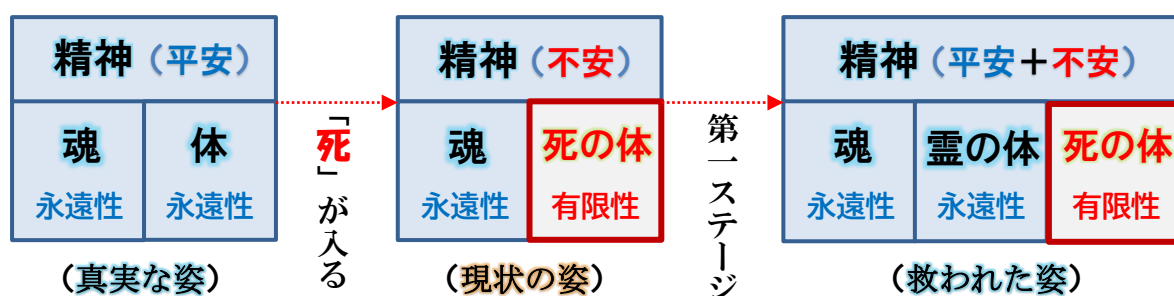
❖ 「死の体」になった経緯

神は、人をご自分と同じような思考ができる「精神」として造られた。そのために、神は大地のちりで「体」を造ったあと、そこに何と、ご自分の「いのち」を吹き込まれたのである。「その鼻にいのちの息を吹き込まれた」(創世記 2:7)。ここで「いのち」と訳されているのはヘブライ語の「ハイイーム」[חַיִּים]で、複数形であり、三位一体の神の「いのち」を言い表している。この神の「いのち」が「神の思い」を「精神」に発信するので、「精神」は神と同じ基準を以て思考ができる。こうして、人は神に似た者として造られた。そして、その時の世界には「有限性」という「死」はなく、人の「体」も人が暮らす世界も全てが「永遠性」であり、そこは神の「いのち」を「肯定」する「善」だけが満ちていた。「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」(創世記 1:31)。このおかげで、人は「体」が持ち込む情報によって「神の思い」を確認することができ、「平安」であった。

ところが、悪魔の仕業によってアダムは罪を犯し、「死」が入り込んだ。その結果、人の「体」も人が暮らす世界も滅びに向かう「有限性」になり、「死」が全ての人に及んだ。「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです」(ローマ 5:12 新共同訳)。こうして、人の「体」は滅びゆく「死の体」となり、人は実質「死人」となった。「アダムにあってす

べての人が死んでいるように」（Ⅰコリント 15:22）。これが、人の体が「死の体」になった経緯である。

となれば、「死人」を再び生きる者にするには、死ぬことのない「霊の体」を着せること以外に道はない。「霊の体」を着せておけば、肉体の死を迎えても「霊の体」で復活することができる。要するに、「血肉の体」という「死の体」では「神の国」を相続できないので、「血肉のからだは神の国を相続できません」（Ⅰコリント 15:50）、相続できる「霊の体」を着せてもらうしかないのである。人である「精神」が機能するには、「精神」を動かす神の「いのち」である「魂」と、「魂」を収める「体」が不可欠なので、人が生き続けるには滅びない「霊の体」が必要となる。それゆえ、「死の体」の内側に「霊の体」を着せられることが、「死人」にとっての唯一の「救い」であり、これが、人の抱える「究極の問題」を解決する「神の福音」の「第一ステージ」となる。



「霊の体」を着せられることを「永遠のいのち」を持つといい、「死」から「いのち」に移されるという。ならば、神は一方的に、「死人」に「霊の体」を着せることができるのだろうか。それはできない。なぜなら、神は人に『人格』を持たせたからである。

❖ 『人格』について

『人格』とは、徹底した自由である。その自由は選択であって、“今”の選択に全責任を負うのが『人格』である。そして、自らの選択を通して『人格』は生成されていく。神は人をそのように造られたので、あくまでも神の側は「救い」の御手を差し伸べるだけであり、それに掴まるかどうかの選択は人の側がしなければならない。仮に、神がその選択を肩代わりしようと思えば、人を『人格』を持たない「ロボット」にする必要がある。だが、それは『人格』を持った人を滅ぼすことになるので、本末転倒である。そこで、神は「救い」の御手を差し伸べ、ご自分を信じるようにと人に決断を迫るので、その呼びかけに応答するかどうかの選択は、人の側がしなければならない。神は人を「ロボット」として造られたのではなく、ご自分に似せ、自らの思考で選択する「精神」として造られたので、「霊の体」を着せるには、どうしても人の側の選択

が必要となる。それゆえ、神が人への御心を実現する際は、神が人の心に働きかけ、人の心に願いを起こさせ、それを人が選択することで御心の実現を図ることになる。聖書は、この手順を次のように教えている。

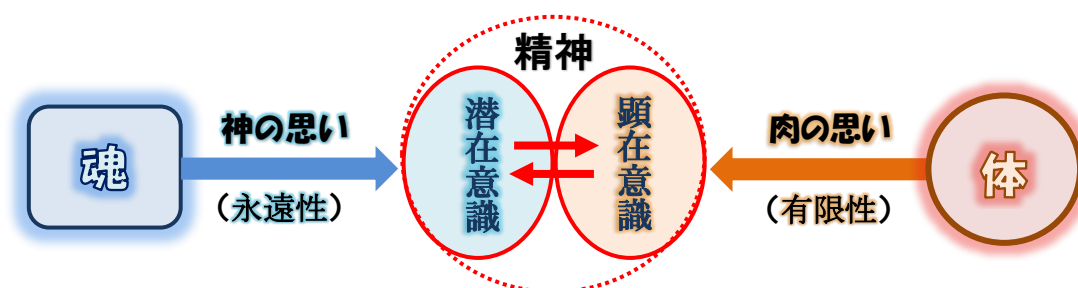
「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。」

(ピリピ 2:13 口語訳)

したがって、神が人を救うには、神が人に呼びかけ、人の側が呼びかけに応答しなければならない。この応答を「信仰」という。そうである以上、アダムにあって死んでいる「死人」に神が呼びかけることが、「第一ステージ」の始まりとなる。それでイエスは、「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます」(ヨハネ 5:25)と言われた。しかし、そこには応答を邪魔する敵がいる。

❖ 敵がいる

先述したように、人とは意識の総合、「精神」であり、「死」が入り込んで以来、意識は「魂」が発信する「永遠性」の情報を受信する「潜在意識」と、「体」が発信する「有限性」の情報を受信する「顕在意識」とに分かれてしまった。その「永遠性」の情報を「神の思い」といい、「有限性」の情報を「肉の思い」というが、この「肉の思い」は「神の思い」に反抗する。そのため、一日中、「魂」を介して「神の思い」を聞いても、「わたしは一日中、手を差し伸べた」(ローマ 10:21)、「肉の思い」が反抗する。こうして、「神の思い」(潜在意識)は「肉の思い」(顕在意識)と、意識の総合である「精神」の主導権を巡って争う。その中、「潜在意識」が「精神」の主導権を奪い、聞いた「神の思い」に対して応答するなら、神から「霊の体」を着せてもらえる。



このように、「死人」となった者の「精神」の内側では、「神の思い」と「肉の思い」との戦いが繰り広げられている。そこには、「神の思い」に逆らう「肉の思い」という敵がいる。「肉の思いは神に対して反抗するものだからです」(ローマ 8:7)。その「肉

の思い」は、入り込んだ「死」によって誕生した意識なので、「肉の思いは死であり」(ローマ 8:6)、徹底して「神の思い」が提案する救いを「否定」する。そして、独自の救いを提案してくる。それは、この世に於ける「見える安心」である。この提案の誘惑に勝たなければ、「神の思い」に対し応答することはできない。

ならば、どうすれば勝てるのか。それは絶望することである。なぜなら、絶望とは、「肉の思い」が提案する「見える安心」をあきらめることだからである。そのため、真に絶望すると「肉の思い」は無力となり、人は神が差し出す御手に掴まることができなくなる。それでイエスは、「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから」(マタイ 5:3)と言われたのである。つまり、絶望する勇気が人を救いへと導く。絶望の中で、「神の思い」に応答できれば救われる。これを、神の呼びかけに応答すれば救われるという。

❖ 応答すれば救われる

誰もが入り込んだ「死」によって「死の体」になり、滅びる運命になった。それは、誰もが実質「死人」になったということである。「アダムにあってすべての人が死んでいるように」(I コリント 15:22)。そこで神は、「死人」を「生きる者」にするために、「この御手に掴まれ!」と、神の「いのち」の部分である「魂」を介し、「死人」に呼びかける。その神の呼びかけに応答し、差し出された御手に掴まれば、神は「死人」である私たちを「死」から「いのち」に引き上げてくださる。これが「死人」が「生きる者」になる救いであり、イエスはこのことを次のように教えられたのである。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は(応答する者は)生きるのです。」

(ヨハネ 5:25) ※ () は筆者が意味を補足

「死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です」というのは、神が「死人」に、今呼びかけているということである。正確に言うと、「神の子」とはキリストを指し、そのキリストの救いを今、神の“霊”(聖霊)が「魂」を介して証ししているということである。「“霊”はこのことを証しする方です」(I ヨハネ 5:6 新共同訳)。聖霊がキリストの救いを証しすることで、救いの御手に掴まれと呼びかけているのである。本書はこれを一言で、「死人」が、神の呼びかけを聞いていると表現する。そして、「聞く者は生きるのです」とは、神は聞く者に、すなわち神の呼びかけに応答する者に、

朽ちない「霊の体」を着せ、「生きる者」にするということを意味する。それは「永遠のいのち」を持つ者にするということであり、これを救いという。

ここで重要なことは、神の呼びかけは「魂」を介して行われるので、「体」の制約を一切受けないということである。そのため、幼子であろうが、「体」に重度の障がいであろうが、はたまたキリストのことを聞くことができない場所や、聞けない時代に「体」であろうが、そうしたことに関係なく、誰であれ神の呼びかけを聞くことができるのである。ということは、誰の上にも救いの機会は平等に与えられていることになるので、聖書は、「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます」（Ⅰテモテ 2:4）と教えている。

このように、神は全ての人を救うために、全ての人に等しく呼びかけておられる。どのように呼びかけるかといえば、それは神の“霊”（聖霊）が「魂」を介してである。いつの時代も、“霊”においてキリストは、「死」に捕らえられて「死人」となった「精神」（霊）たちのところに行き、宣教されているのである。

「そして、霊において（聖霊によって）キリストは（神の子は）、捕らわれていた霊（死人となった精神）たちのところへ行って宣教されました。」

（Ⅰペテロ 3:19 新共同訳）※（ ）は筆者が意味を補足

これを神の呼びかけといい、この神の呼びかけはいつの時代も“今”なされる。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です」（ヨハネ 5:25）。それゆえ、この神の呼びかけに“今”応答すれば、誰であれ救われるというのが、「神の福音」の真実である。救われるとは、「死の体」に代わる「霊の体」を着せられるということであり、「死」から「いのち」に移されることを意味する。まことに神は、人に直接呼びかけ、神の御手に掴まる者に「霊の体」を着せ、その者を引き寄せてくださるのである（和解）。

「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」

（ヨハネ 6:44）

ということは、神の呼びかけを無視するなら、すなわち「聖霊」の呼びかけをけがすのであれば、誰であれ救われないので、キリストはそのことを、「しかし、聖霊をけが

す者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます」(マルコ 3:29) と言われたのである。つまり、人を救うのは三位一体の神「聖霊」であり、神である。

❖ 人を救うのは神

人への最強の否定となった「死の体」を完全に否定できる「霊の体」を着せることが、「神の福音」の「第一ステージ」であり、それが人の救いである。これを、「死」から「いのち」に移されるという。この救いを与えるために、神は「死人」となった私たちに呼びかけ、呼びかけに応答する「信仰」の決断を迫る。であれば、神による呼びかけがなければ誰も救われないので、救いの業は全て神の働きということになり、人は神による救いの招きを、ただ受け取るだけでよいということになる。

「神がわたしたちを救い、聖なる招きによって呼び出してくださったのは、わたしたちの行いによるのではなく、御自身の計画と恵みによるのです。」

(Ⅱテモテ 1:9 新共同訳)

神が人を救う以上、それは言い換えれば、神が人を選ぶということでもある。「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです」(ヨハネ 15:16)。したがって、救いは神の恵みによる。

「罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、——あなたがたの救われたのは恵みによるのです——」(エペソ 2:5 新共同訳)

つまり、「死の体」となった「死人」に神が呼びかけ、その声に応答する者を神が救うのである。なぜそうなるのかを、もう少し丁寧に説明しよう。

神は人を造る際、人の体に神の「いのち」を吹き込まれた。「神である【主】は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた」(創世記 2:7)。こうして、人の土台は神となり、人の「岩」となった。「神こそ、わが岩」(詩篇 62:2)。それは言い換えれば、人は神に背負われているということである。「昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた」(イザヤ 63:9)。

ならば、土台の神とは誰なのか。それはイエス・キリストである。「その土台とはイエス・キリストです」(Ⅰコリント 3:11)。「神の子」が人の土台となり、人を支え動かしている。それゆえ、人に「死」が入り込み、神との関係が壊れ、人が滅びるしかな

い「死人」になっても、体が生きている間は、そこに据えられた土台の「神の子」の声を「死人」は聞くことができる。その声は、「わたしの御手に握まりなさい。わたしが生きる者にするから」という呼びかけである。この呼びかけに応答し、御手に握まるなら、人は生きる者になれるので、イエスは次のように言われたのである。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:25)

ここでイエスは、「神の子の声を聞く」と言われたが、その声は人の土台から聞えてくるので、体の外から耳を介して聞えてくるわけではないので、その声を聞くのは「潜在意識」である。そのため、「神の子」の声を聞き、それに応答して救われても、全ては「潜在意識」での話になるので、救われても人には自覚がない。

このように、人を救うのは神である。神が人に据えた土台の「神の子」を介し、「死人」に呼びかけることで人を救う。その土台は「魂」と呼ばれるが、それは「神の子」の声を発信する場所である。発信された「神の子」の声を、「潜在意識」に伝えるのが聖霊である。つまり、聖霊は「キリストの霊」(ローマ 8:9 新共同訳)であり、聖霊は「神の子」から聞くままを話し、「御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し」(ヨハネ 16:13)、私たちを救いに導くのである。したがって、前項では、神の“霊”(聖霊)が「魂」を介して呼びかけるという説明をした。

ならば、何のために、人は人にキリストの福音を宣べ伝えるのだろうか。それは、神が救った人に、救われたことの自覚を持てるようにするためである。というのも、先述したように、人は神の呼びかけに応答して救われても自覚がない。神の呼びかけを聞くのは「潜在意識」であり、それに応答するのも「精神」の「潜在意識」なので、救われても自覚がない。そのため、人は人に福音を宣べ伝える。

そもそも「霊の体」は見えないので、それを着せられても意識することはできない。しかし、「霊の体」が着せられて救われたなら、キリストの福音を聞くことで、キリストを信じられるようになる。その信仰によって、救いを自覚できるようになる。したがって、救いの自覚を促すために、人は人にキリストの福音を語る必要がある。では、「救い」を自覚できるようになるまでの話をしよう。

❖ 「救い」を自覚できるようになるまでの話

神の呼びかけに応答した者は「霊の体」を着せてもらい、「永遠のいのち」を持つようになる。だが、そのやりとりは「潜在意識」で行われるので、「顕在意識」での自覚は全くない。そうであっても、着せられた「霊の体」は「神の国」に属する体なので、それを着せられると「神の国」の情報を収集できるようになる。その情報は「神の思い」を肯定する情報なので、「霊の体」を着せられてしまえば、「魂」が発信する「神の思い」を「霊の体」で確認できるようになる。それゆえ、キリストについての御言葉を聞くと、それを「霊の体」で確認できる。御言葉は、「魂」が発信する「神の思い」と一致する。それが意識できる「顕在意識」の中で、キリストへの信仰となって育つ。

「そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについての
みことばによるのです。」（ローマ 10:17）

「顕在意識」の中で信仰が育てば、やがてイエスは主であると告白できるようになり、神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じられるようになる。そのことで、自覚できなかった「救い」を自覚できるようになる。

「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです（救いの自覚に至るということ）。」（ローマ 10:9）

※（ ）は筆者が意味を補足

こうした一連の流れを、聖書は続けて次のように説明している。

「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」

（ローマ 10:10）

「人は心に信じて義と認められ」の「心に信じて」とは、「潜在意識」（心）に対して行われる神の呼びかけに応答すること、すなわち信じることを言い表している。「義と認められ」とは、神の呼びかけを信じる人を神が正しいと認め、「霊の体」が着せられることを言い表している。そして、「口で告白して救われるのです」とは、「キリストについての御言葉」を「顕在意識」が聞き、キリストへの信仰を告白できるようになることで、救いの自覚に至ることを言い表している。要するに、「霊の体」を着せられて「永遠のいのち」を持つようになった者は、もう「真理に属する者」なので、神の

声となる「御言葉」を聞くと、次第にそれに聞き従うようになっていくということである。「真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います」(ヨハネ 18:37)。そうなれば、その人は救いの自覚に至り、バプテスマを受けるようになる。

ただし、それには誰かがキリストについての御言葉を届ける必要がある。御言葉を届けることで救いの自覚に至らせ、神が救った者を人が刈り取るのである。これを「伝道」という。そして、神が救った者を刈り取るまでには、多くの人々が苦勞して御言葉を伝えているので、イエスは「伝道」の實際を次のように表現された。

「こういうわけで、『ひとりが種を蒔き、ほかの者が刈り取る』ということわざは、ほんとうなのです。わたしは、あなたがたに自分で勞苦しなかったものを刈り取らせるために、あなたがたを遣わしました。ほかの人々が勞苦して、あなたがたはその勞苦の実を得ているのです。」(ヨハネ 4:37-38)

ということは、キリストについての御言葉を聞いて救いの自覚に至った者は、すなわち神を信じている者は、すでに「霊の体」を着せられていて、「永遠のいのち」を持っているということになる。その者は、すでに「死」から「いのち」に移された状態にあるということになる。そこでイエスは、この奥義を次のように教えておられる。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は(信じている者は: 原文は現在形)、永遠のいのちを持ち(永遠のいのちを持っていて: 原文は現在形)、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです(死からいのちに移された状態にある: 原文は現在完了形)。」(ヨハネ 5:24) ※ () は筆者が意味を補足

このように、神の呼びかけに応答し、「霊の体」が着せられて「永遠のいのち」を持った人は、キリストについての御言葉を聞くと、唯一のまことの神と、神に遣わされたイエス・キリストを知るようになる。「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです」(ヨハネ 17:3)。それにより、救いの自覚に至る。ならば、イエス・キリストへの信仰を告白できない人は、「霊の体」を着せられていないのだろうか。その人は、まだ「永遠のいのち」を持っていないのだろうか。未だに救われていないのだろうか。

❖ 告白をできない人は

信仰の告白は「肉の体」を使ってなされるので、告白には「肉の体」の制約を受ける。例えば、「肉の体」の制約から、キリストについての御言葉を聞くことができても、言葉を理解できない人がある。また、「肉の体」が暮らす場所の制約から、キリストについての御言葉を全く聞くことができない人もある。そうした人たちは、そもそもイエス・キリストの名を知りようがないので、救われていてもイエス・キリストを信じる信仰の告白には至らない。それだけではない。キリストについての御言葉を聞き、たとえそれが理解できても周りの目を恐れ、公に信仰を告白できないケースも多々ある。イエスの弟子のある者もそうであった。「イエスの弟子ではあったがユダヤ人を恐れてそのことを隠していた」(ヨハネ 19:38)。あるいは、今まさに告白へ向かって「肉の思い」と葛藤している人たちもいる。そうすると、キリストへの信仰を告白できないからといって、その人は救われていない、とするのは誤りである。

このように、救われた者が全て「救い」の自覚に欠かせない、イエス・キリストを信じる信仰を告白できるかという点、そうはならない。そもそも「肉の体」の制約から告白自体ができない者もいれば、「肉の体」が暮らす場所の制約から、キリストを聞いたことがないために告白できない者もいるからである。その場合、神は神の被造物を通して、神を知ることができるようにされているので、キリストを知らなくても救いの自覚に至る道は用意されている。「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです」(ローマ 1:20)。さらには、聞いても周りの目を恐れて告白できない者もいれば、告白に向かって「肉の思い」と葛藤している者もいる。したがって、信仰の告白に至っていなくても、救われて神の民になった者はたくさんいる。このことは、パウロが伝道に困難を覚え、イエス・キリストのことを語ることを恐れていたとき、神が次のように言われたことから分かる。

「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから」(使徒 18:9-10)

大事なことは、告白の有無にかかわらず、一旦「霊の体」を着せられて「永遠のいのち」を持つようになったのなら、もう「死」から「いのち」に移されているということである。イエスはそのことを、「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全

身きよいのです」(ヨハネ 13:10)と言われたのである。ならば逆に、「主よ、主よ」と言う者はみな、救われているのだろうか。実は、そうはいかない。

❖ 「主よ、主よ」と言う者

「主よ、信じます」という信仰の告白は「肉の体」がすることなので、救われていなくとも、やろうと思えば自力でできてしまう。それゆえ、信仰を告白できたからといっても救われているとは限らないので、イエスは次のように言われたのである。

「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。」

(マタイ 7:21)

イエスはここで、天国に行けるのは、「父のみこころを行う者」だけだと言われた。ならば、「父のみこころを行う者」とは誰のことなのだろうか。それは、神は全ての人を救おうと全ての人の上に呼びかけておられるので、「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます」(1テモテ 2:4)、その呼びかけに応答する者のことである。その応答は、「主よ、信じます」という肉での応答ではなく、心でする応答である(潜在意識)。したがって、神の奇跡の「わざ」を見て、その御利益にあずかりたいという思いから、「主よ、信じます」と肉で応答しても救われない。しかし、イエスがなされた奇跡の「わざ」を見て、多くの人が「主よ、信じます」と言ったので、イエスは「『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです」と言われたのであった。

また、イエスの「わざ」(しるし)を見て、多くの人がイエスの名を信じた際も、イエスは彼らの目的を知っていたので、彼らの信仰を信用されなかった。「イエスは過越祭の間エルサレムにおられたが、そのなされたしるしを見て、多くの人がイエスの名を信じた。しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった」(ヨハネ 2:23-24 新共同訳)。

この出来事からも、「主よ、主よ」と言う者がみな救われているとは限らないことが分かる。すると、ある人たちは言うかもしれない。イエスは、「たとえわたしが信じられなくても、わたしのわざを信じなさい」(ヨハネ 10:38 新改訳 2017)とも言われたのではないかと。そこで、その意味を考えてみたい。

❖ 「わたしのわざを信じなさい」

確かに、イエスは「わたしのわざを信じなさい」と言われた。だが、その続きに、「それは、父がわたしにおられ、わたしも父にすることを、あなたがたが知り、また深く理解するようになるためです」（ヨハネ 10:38 新改訳 2017）とある。つまり、ここでいう「わざを信じなさい」とは、救われている者に対し、神への理解を深めるために言われた言葉である。救われるために、言われたのではない。

また、イエスはピリポに、「わざによって信じなさい」（ヨハネ 14:11）と言われたこともあったが、それはピリポが、イエスと父なる神とは「一つ」であることが信じられなかったので、それなら「わざ」を見て信じるようにということと言われたものである。ここでも、「わざ」によって神への理解を深めよと言っているのであり、「救い」の話をしているわけではない。というのも、信じるという行為は、ただ神を信じ、救いを自覚してお終いではないからである。救いを自覚できたなら、今度は神が教える真理を知ることを目指すからである。そこでイエスは、信じて救いの自覚に至ったユダヤ人たちに、次のようにも言われたのであった。

「そこでイエスは、その信じた（救われた）ユダヤ人たちに言われた。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」」（ヨハネ 8:31-32） ※（ ）は筆者が意味を補足

ここでイエスは、信じて救いの自覚に至った者たちに対し、さらに真理を知ることになることを促された。その真理のことを、イエスは他の場面で、「わたしが道であり、真理であり」（ヨハネ 14:6）と言われた。つまり、真理を知るとは、イエスを知ることである。そのイエスは父なる神と「一つ」なので、イエスは、まことの神、永遠のいのちである。「この方こそ、まことの神、永遠のいのちです」（Ⅰヨハネ 5:20）。そのことを知るための助けとなるのが、イエスの「わざ」なので、「わたしのわざを信じなさい」（ヨハネ 10:38 新改訳 2017）とイエスは言われたのである。

このように、「わたしのわざを信じなさい」というのは、救われている者に対して語られた言葉であって、「わざ」によって神への理解を深めよという意味である。したがって、人が救われるのは、心の奥底での神の呼びかけに応答するからであって、神の「わざ」を見て救われるわけではない。そうしたことから、イエスは病人を癒やす「わざ」を行なった際はよく、「決してだれにも知られないように気をつけなさい」（マタイ

9:30) と言われていた。また、救いは神が直接されることなので、外見では誰が救われているかは分からない。そうである以上、信仰の告白もなく死んだ家族がいたとしても、救われていないとは言い切れないのである。というより、人を救うことは神にしかできないので、人の取るべき態度は神を信頼することに尽きる。さて、この救いの話からは、何が人の「罪」となるのかも見えてくる。

❖ 人の「罪」

「死」が入り込んで以来、人の体は「死の体」となり、「肉体の死」と同時に人は滅びる運命となった。これが、人の抱える「究極の問題」である。そこで神は、入り込んだ「死」によって実質「死人」となった私たちに呼びかけ、それに応答する者を救われるのである。正確に言うと、私たちの心に呼びかけてくださるのは先述したように、三位一体の神である聖霊なので、聖霊の働きかけに応答するなら、朽ちることのない「霊の体」を着せてもらえる。ということは、聖霊の働きかけを無視し、聖霊をけがすなら、その人は救われない。それは、その人が背負った「死」が赦されない（排除されない）ということであり、永遠の滅びが確定することを意味する。それゆえに、聖霊をけがすことだけが、永遠の滅びを決定づける唯一の「罪」となる。このことをイエスは、次のように教えておられる。

「まことに、あなたがたに告げます。人はその犯すどんな罪も赦していただけます。また、神をけがすことを言っても、それはみな赦していただけます。しかし、聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます。」（マルコ 3:28-29）

このように、聖霊がいつもキリストの救いを人に呼びかけているので、誰もが心の奥で神の子（キリスト）の声を聞いている。その呼びかけによって、誰もが心の奥で神（キリスト）を知っている。にもかかわらず、その神を認めようとしなければ、それが人の「罪」となる。「それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました」（ローマ 1:21）。それは神の呼びかけを無視することなので、これでは滅びるしかない。ということは、神の呼びかけを無視する者は、すなわち神を信じようとしないうちは、既に裁かれていることになる。聖書は、この衝撃的な事実を淡々と語っている。

「御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。」（ヨハネ 3:18 新共同訳）

ここで「裁かれている」と訳されているのは「クリノー」[κρίνω]で、本来の意味は「分ける」であり、信じない者は、すなわち神の呼びかけに応答しない者は、「死人」のままなので、既に神と分けられた状態にあるということである。そして、「信じない」のは、「神の独り子の名を信じていない」ことだと言ひ換えられている。これは、聖霊が「魂」を介して呼びかけるキリストの救いを、信じようとしなないということである。つまり、神の呼びかけに応答しないことが「信じないこと」であり、それこそが裁かれる（分けられる）人の「罪」となるので、キリストは、「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」（ヨハネ 16:9 新共同訳）、と言われたのであった。

ここで重要なことは、イエス・キリストを信じるから救われるのではないということである。イエス・キリストを信じられるのは、「霊の体」を着せられ、「永遠のいのち」を持ったからである。「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです」（ヨハネ 17:3）。そして、「永遠のいのち」を持ったのは、神の呼びかけを聞き、それに応答したからである。そのことを教えたのが、ヨハネ 5:25 にあるイエスの言葉である。

❖ ヨハネ 5:25 の解説

救いの話で最も重要なのは、私たちは「死人」であり、神が「死人」に呼びかけてくださるので、私たちはそれに応答すれば救われるということである。その根拠となる御言葉が、「まことに、まことに」と、イエスが強調して言われたヨハネ 5:25 である。そこで、イエスが教えた救いの御言葉の意味を、正確に解説しておきたい。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は（応答する者は）生きるのです（霊の体を着せられる）。」（ヨハネ 5:25） ※（ ）は筆者が意味を補足

ここで問題になるのが、イエスの言われた「死人」は誰を指すのかである。一般的には、ここでの「死人」は、すでに死んでしまった人たちのことであり、墓で眠る人たちと解される。彼らは「終わりの日」に一斉によみがえり、神の子の裁きを受けると解される。というのも、イエスはこの続きで、こう述べておられるからである。

「このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。善を行った者は、よみがえっていのちを受け、悪を行った者は、よみがえってさばきを受けるのです。」(ヨハネ 5:28-29)

確かに、この訳からでは、先の「死人」は墓で眠る人たちということになる。しかし、この訳は正確ではない。まず、「善を行った者」の「行った者」は、アオリスト分詞なので、「善を行う者」であり、「悪を行った者」も同様に、「悪を行う者」である。そして、「善を行う者」とは、イエスが「あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです」(ヨハネ 6:29)と言われたことから、神の呼びかけを信じる者、すなわち応答する者を指す。「悪を行う者」は、その逆であり、応答しない者を指す。したがって、この話は「かつて」の話ではなく、“今”の話である。

次に、「よみがえっていのちを受け」の「いのち」は属格なので、「いのち **の**」と訳さなければならない。つまり、ここの訳は、「いのち **の** よみがえりに至り」であり、それは、神の呼びかけに応答した「死人」は「霊の体」を着せられてよみがえる、すなわち「死」から「いのち」に移されるという意味である。また、「よみがえってさばきを受ける」の「さばき」も属格なので、「さばき **の**」と訳さなければならない。ゆえに、ここの訳は「さばき **の** よみがえりに至る」であり、それは、神の呼びかけに応答しない者は滅びが確定するので、土地のちりによみがえる(移行する)という意味である。これらのことを踏まえて、この箇所を原文に忠実に訳すと次のようになる。

「このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。善を行う者は、いのちのよみがえりに至り、悪を行う者は、さばきのよみがえりに至るのです。」(ヨハネ 5:28-29 私訳)

新約聖書のギリシャ語に堪能な田川建三も、「善を行った者」ではなく「善をなす者」、「悪を行った者」ではなく「悪をなす者」と、原文に忠実に訳している。要するに、イエスは先に述べた「死人」(ヨハネ 5:25)を、ここでは「墓の中にいる者」と言い換え、先に述べた「聞く者」(ヨハネ 5:25)を、ここでは「善を行う者」と言い換え、先に述べた「生きるのです」(ヨハネ 5:25)を、ここでは「いのちのよみがえりに至り」と言い換えているのである。同時に、ここではその逆も、「悪を行う者は、さばきのよみがえりに至るのです」と同じリズムで説明している。これは、私たちの「肉の体」では「神の国」を相続できないので、「血肉のからだは神の国を相続できません」(Ⅰコリント 15:50)、滅びるしかないということを言っている。

要するに、神の目には人はすでに死んでいるのであって、「アダムにあってすべての人が死んでいるように」(Ⅰコリント 15:22)、それは墓で眠っているのと同じなので、イエスは「死人」を「墓の中にいる者」と言い換えられたのである。そもそも、神は生きている者の神であって、死んだ者の神ではない。

「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」(ルカ 20:38 新共同訳)

ここでの「死んだ者」とは、「体」が滅んだ者を指す。「体」がなければ人(精神)は消滅し、その者と神は関わることはできないので、イエスは「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神」と言われたのである。したがって、神の声を聞くことができる者は「体」があり、生きていなければならない。であれば、「墓の中にいる者」が神の声を聞くという以上、ここでの「墓の中にいる者」とは、「体」はあっても神と分離している「死人」を指していることは明らかである。「アダムにあってすべての人が死んでいる」(Ⅰコリント 15:22)。

このように、イエスが言われた、「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです」(ヨハネ 5:25)に於ける「死人」は、「体」を失って墓に葬られた人たちではなく、神の目には死んでいる私たちのことである。人は生まれた時から「いのち」である神と分離していて、生きているように見えても死んでいるので、「死人」という言い方になる。仮にこれが、墓に葬られた人たちがこれからよみがえり、神の裁きを受けるという話であれば、イエスの言われた、「今がその時」と矛盾が生じる。イエスはここで、「死人」が神の声を聞くのは将来ではなく、明確に“今”と言われたからである。

さらに言えば、ヨハネ 5:25 の箇所は、前節のキリストを信じている私たちは、「死からいのちに移っているのです(現在完了形)」(ヨハネ 5:24)という話を受け、ならばいつ「死」から「いのち」に移ったのかを説明したものなので、「死人」とは、キリストを信じる以前の私たちを指していることは明らかである。つまり、「生きる者」と「死ぬ者」とを分ける神の裁きが行われる「終わりの日」は、神の呼びかけを聞く“今”なのである。「今は終わりの時です」(Ⅰヨハネ 2:18)。“今”が恵みの時であり、救いの時である。「確かに、今は恵みの時、今は救いの日です」(Ⅱコリント 6:2)。“今”が「霊の体」を着せられ、よみがえる時である。

それでイエスは、「聞く者は生きるのです」(ヨハネ 5:25) と言ひ、この先では、「いのちのよみがえりに至る」(ヨハネ 5:29 私訳)と言われたのである。ヨハネ 5:25 は、まさしく“今”が、死んでいた者が生きる者になる時であることを教えている。パウロも、次のように教えている。

「死んだ者であったあなたがたを、神はキリストとともに生かしてくださいました。」(コロサイ 2:13 新改訳 2017)

ここで大事なことは、人が救われるのは、神が人に呼びかけるからであって、人の側の努力によるのではないということである。「神の義」となる救いは、聖霊が人の心にイエス・キリストの真実(十字架の贖い)を呼びかけてくださるからこそ、その呼びかけに応答する(信じる)ことができ、救われる。そこには何の差別もない。

「神の義は(救いは)、イエス・キリストの真実(十字架の贖い)によって、信じる(応答する)者すべてに現されたのです。そこには何の差別もありません。」(ローマ 3:22 聖書協会共同訳) ※ () は筆者が意味を補足

この箇所は、「イエス・キリストを信じる信仰による神の義」(ローマ 3:22)と訳されてきた。しかし、大論争の末、それは誤った訳であることが広く認められるようになったので、2018年に出版された聖書協会共同訳では改訳されている。これについては、後で詳しく説明する。では、「人の造り」からここまでを簡単に整理したい。

❖ ここまでを簡単に整理する

ここまでを簡単に整理すると、次のようになる。人とは、何かを認識し、思考する「精神」である。その「精神」が機能するには、認識に必要な情報を持ち込む「体」と、その情報を認識するのに必要な「物差し」と、思考するのに必要な「運動」が必要である。その「運動」は、「物差し」の源に向かって動くものでないと、「物差し」が情報を認識するための基準にはならないので、「物差し」と「運動」とは一体である。そこで神は、大地のちりで「体」を造り、そこにご自分の「いのち」を吹き込み、その「いのち」を「魂」と呼び、「物差し」と「運動」の働きを担わせた。こうして、人は生きる者になった(「精神」が機能するようになった)。

「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り（体）、その鼻にいのちの息を吹き込まれた（魂）。それで人は生きるものとなった（「精神」は機能するようになった）。」（創世記 2:7 新改訳 2017）※（ ）は筆者が意味を補足

認識に必要な「物差し」は神から出たので、思考に必要な「運動」は神を目指して動く。つまり、「魂」は神を慕い求める「運動」を休むことなく展開するので、寝ている夜であっても神を慕い求める。そのことで、私である「精神」（霊）は、神を捜し求めて思考することができる。聖書はそのことを、次のように教えている。

「私の魂は夜にあなたを慕い／私の中の霊（精神）があなたを捜し求めます。」
（イザヤ 26:9 聖書協会共同訳）※（ ）は筆者が意味を補足

このことから、「精神」が機能するには、「魂」が不可欠であることが分かる。その「魂」には、それを収める「体」が必要なので、人が生きるには「体」も不可欠であることが分かる。そもそも「体」がなければ情報を収集できないので、情報がなければ認識も思考もできないので、人である「精神」は機能しない。しかし、悪魔の仕業で「死」が入り込んで以来、「体」は朽ちる有限性になったので、このままでは人は滅びるしかない。すなわち、死者は生き返らないということである。これこそが、人の「究極の問題」であった。聖書はそれを、次のように教えている。

「死者が生き返ることはなく／死者の霊（精神）も起き上がることはありません。」（イザヤ 26:14 聖書協会共同訳）※（ ）は筆者が意味を補足

そこで神は、何としても朽ちない「霊の体」を着せようとされた。ただし、人には選択できる『人格』を与えていたので、着せることは強制できない。そこで神は、「魂」を介し、「私の手を掴むように」と呼びかけられた。それゆえ、その呼びかけに応答し、御手を掴んだ者は神のもとに引き寄せられ、「霊の体」が着せられた。こうして、死が運命づけられていた死者は生き返り、朽ちるしかなかった屍（しかばね）の「体」は立ち上がることができた。それを聖書は、次のように教えている。

「あなたの死者は生き返り／私の屍（しかばね）は立ち上がります。」
（イザヤ 26:19 聖書協会共同訳）

「あなたの死者」とは、神の呼びかけに応答した「死人」のことであり、その者は生きるのである。「死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです」(ヨハネ 5:25)。つまり、「死」から「いのち」に移される。「死からいのちに移っている」(ヨハネ 5:24)。

このように、人の「究極の問題」と、その解決の希望を、旧約聖書のイザヤ書 26 章は簡潔に教えている。新約聖書は、その内容に肉付けをしている。したがって、本体は新約聖書であり、旧約聖書はその影になる。では、神が呼びかけ、それに応答すれば「霊の体」が着せられるという、福音の「第一ステージ」のまとめをしたい。

❖ まとめ

何もしなければ、人は「肉体の死」と同時に消滅してしまうので、「神の福音」の「第一ステージ」は、人が「肉体の死」を迎えるまでに「霊の体」を着せ、「永遠のいのち」を持つようにすることであった。そこで神は、「肉体の死」を待つだけの私たちを「死人」と呼び、その「死人」に呼びかけてくださる。ここから「第一ステージ」が始まる。そして、神からの呼びかけは人に対して、すなわち「精神」の「潜在意識」に対して、神が直接してくださるので、「体」の制約を全く受けない。そのおかげで、誰もが平等に応答する機会が得られ、その中、応答する「死人」は神から「霊の体」を着せられ、「生きる者」にされる。イエスはそのことを、次のように言われた。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は（応答する者は）生きるのです（霊の体を着せられる）。」(ヨハネ 5:25) ※ () は筆者が意味を補足

これは、「イエス・キリストを信じる信仰」で救われるのではないということである。イエス・キリストを信じる信仰は、救いの自覚に至る話であって、救いは、神である聖霊が、イエス・キリストの十字架の贖いを呼びかけてくださることで得られるのである。つまり、「イエス・キリストの真実」による。聖書はそのことを教えている。

「神の義は（救いは）、イエス・キリストの真実（十字架の贖い）によって、信じる（応答する）者すべてに現されたのです。そこには何の差別もありません。」(ローマ 3:22 聖書協会共同訳) ※ () は筆者が意味を補足

しかし、従来の理解は、「イエス・キリストを信じる信仰」で救われるである。もしそれが正しければ、イエス・キリストの御名を知らない者は、誰一人、救われないことになる。アブラハムもモーセも救われていないことになる。さらには、言葉を理解できない障がい者や幼子も救われないことになる。だが、聖書が教えているのは、「イエス・キリストの真実」、すなわち十字架の贖いで救われるである。これは、聖霊が体の制約を受けない人の「潜在意識」に、十字架の贖いによる救いを語られるので、それに応答すれば救われるということである。そうであれば、体による差別は何もないので、その続きに、「そこには何の差別もありません」（ローマ 3:22 聖書協会共同訳）と書かれている。

このように、神の呼びかけも、それに対する応答も、意識できない「潜在意識」でのやりとりになる。そのため、人は救われても自覚がない。これは、人の側では誰が救われているのかは分からないということを意味する。しかし、誰が救われているかが分からなくても、救われた者がキリストについての御言葉を聞くと、キリストへの信仰が育ち、救いの自覚に至る。そこでキリスト者は、全ての人にキリストについての御言葉を語るのである。そこでは、イエス・キリスト以外に救いがないことを語り、神によって救われた者がイエス・キリストへの信仰を生起できるように助ける。とはいえ、救われた者に福音を語っても、本人が「肉の思い」に負け、信仰の告白に至らないまま天に召されるケースもある。そうである以上、自分の親はイエス・キリストの話聞いても信仰を告白することなく死んだが、天国に行けたのだろうか心配するのはやめなければならない。これに関しては、神にゆだねる信仰が問われる。

以上が、まとめである。さて、この「第一ステージ」では、人が救われるというのは「霊の体」が着せられることだという話をしてきた。しかし、「霊の体」は目に見えないので、多くの方は死んでから「霊の体」を着せられ、そして天国に引き上げられると思ってしまう。そのため、本当に神の呼びかけに「応答」した時に、「霊の体」が着せられるのかと疑問を持ってしまう。そこで次に、「霊の体」はいつ着せられるのか、そのことを聖書から調べてみたい。大事なことは、自分がどう思うかではなく、聖書が何と教えているかである。自分の理性には限界があり、真実は聖書でしか知り得ないという態度が大事である。

－「霊の体」はいつ着せられるのか－

「霊の体」は目に見えないため、「霊の体」を着せられるのは体が死んで復活する時であって、将来のことだと思う人が多い。ゆえに、朽ちない「霊の体」は、すなわち「永遠のいのち」は、未だ持っていないと思っている人が多い。そのため、神の呼びかけに応答した者にはすでに「霊の体」が着せられているという本書の話に対し、すなわちキリストを信じている者は「永遠のいのち」を持っているという話に対し、懐疑になる人もいるだろう。そこで、「霊の体」はいつ着せられるのか、神の呼びかけに応答した時なのか、それとも肉体の死を迎えて復活する時なのか、それを聖書で解いていく。結論から言うと、聖書は、キリストを信じている者はすでに「霊の体」を着せられていることを教えている。まずは、そこから見ていこう。

❖ 「霊の体」を着せられている

「霊の体」に対する懐疑は使徒の時代からあったので、聖書には、「死者はどんなふう

「神は、御心のままに、それに体を与え、(すなわち) 一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります。」(I コリント 15:38 新共同訳) ※ () の箇所は、原文では「カイ」[καί] があるのに訳されていないので、それを訳したもの

聖書は、「死者はどんなふう

の体」が着せられて復活する、である。ならば、その「霊の体」はいつ着せられるのだろう。これが、ここでのテーマである。

先の訳では、「神は、御心のままに、それに体を与え、(すなわち) 一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります」(I コリント 15:38 新共同訳) とあるので、それは将来着せられる話として読めてしまう。あるいは、ここは復活のシステムを説明しているだけであって、いつ着せられるかについては語っていないとも読める。ならば、「お与えになります」と訳された箇所の原文はどうなっているのだろうか。それは将来のことを表す「未来形」で書かれているのだろうか。いや、ここは「未来形」ではなく、「現在形」で書かれている。ゆえに、「お与えになります」ではなく、「与えられています」と訳さなければならない。したがって、「霊の体」はいつ着せられるのかという疑問に対する答えは、すでに着せられているであり、「死」から「いのち」に移されて復活させられている、である。それで、この続きには次のように書かれている。

「死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。」(I コリント 15:42-44 新共同訳)

新共同訳では、「復活し」、あるいは「復活する」と訳されているので、「未来形」にも読めてしまう。しかし、原文は「現在形」の受動態(受け身)である(参考: 田川建三著『新約聖書 訳と註 第三巻』作品社 373 頁)。ゆえに、ここに書かれていることの意味は、「復活させられている」である。この手前では、「霊の体」が「与えられています」(現在形)と書かれていたが、ここではそれを、「復活させられている」と言い換えている。それは、もう「死人」ではなく、「生きる者」にされているということであって、すでに「死」から「いのち」に移されたことを言い表している(現在完了形)。

ただし、ギリシャ語に於ける「現在形」の用法には、詳しい説明は省くが、未来を言い表す用法もある。また、時制とは無関係な真理を述べる用法もある。そのため、「復活する」とも、あるいは先に見た、「お与えになります」とも訳せなくはない。だとしても、それは「現在形」で訳すと意味が通じない場合であって、意味が通じる場合はその限りではない。では、この場合はというと、「現在形」で十分に意味が通じる。逆に、この箇所の「現在形」を「現在形」として訳さなければ、イエスの言われた、「ま

ことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのち（霊の体）を持っています（現在形）」（ヨハネ 6:47 新改訳 2017 ＊（ ）は筆者が意味を補足）との整合性が取れなくなる。さらには、「わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです（現在完了形）」（ヨハネ 5:24）とも整合性が取れなくなる。ゆえに、この箇所は「現在形」のまま訳すべきである。もしこの箇所の「現在形」が未来の出来事を表現しているのであれば、この続きに書かれている未来の出来事、天に引き上げられる復活の様子も同じ「現在形」で書かれているべきである。しかし、そちらの原文は「現在形」ではなく、全て「未来形」で書かれている。

例えば、先の I コリント 15:42-44 の続きに、「（前略）天に属するその人の似姿にもなるのです（未来形）」（I コリント 15:49 新共同訳）と書かれている。また、「（前略）わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます（未来形）」（I コリント 15:51 新共同訳）と書かれている。そこには天に引き上げられる復活の様子が表現を変えて書かれているが、それらの文章の原文は全て「未来形」であって、「現在形」ではない。このことから、ここでの一連の文章では、明らかに「現在形」と「未来形」とが使い分けられていることが分かる。そして、復活の様子を示す締め言葉へと続く。

「最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。」

（I コリント 15:52 新共同訳）

「死者は復活して朽ちない者とされ」も、「変えられます」も、原文は「未来形」である。ここには、肉体の死を迎えたなら（最後のラッパが鳴ると）、たちまち復活し、朽ちない「霊の体」だけを着た姿に変えられることが記されていて、これは原文どおり「未来形」で訳されている。しかし、先に見た箇所、「それぞれ体をお与えになります」（I コリント 15:38 新共同訳）は「現在形」なのに、なぜかそれも「未来形」に訳されている。実に、不思議である。つまり、聖書がここで教えているのは、神の呼びかけに応答した時点で、すなわち神を信じた時点で、イエスが言われたように、人は「死」から「いのち」に移され、「霊の体」を着せられているということである。それゆえ、いつ肉体の死を迎えても、すでに着せられている「霊の体」で復活することができるので、52 節では、「死者は復活して朽ちない者とされ」と「未来形」で記されている。

このように、I コリント 15:35-52 に書かれている復活に関する一連の文章は、「現在形」と「未来形」とに分けられている。そうである以上、原文を時制どおりに訳さなければ、そこに込められた意図を無視することになる。では、I コリント 15:38 を原文のまま「現在形」で訳しておこう。

「神は、御心のままに、それに体（霊の体）を与えています。すなわち、一つ一つの種（魂）にそれぞれ体（霊の体）を。」（I コリント 15:38 私訳）

※（ ）は筆者が意味を補足

また、I コリント 15:44 も原文のまま「現在形」の受動態で訳しておこう。

「血肉のからだが蒔かれ、「霊の体」が復活させられているのです。血肉のからだがあるのですから、「霊の体」もあるのです。」（I コリント 15:44 私訳）

「霊の体」が復活させられているとは、こういう意味である。人は元来、滅びることのない「霊の体」であった。それが入り込んだ「死」によって「血肉のからだが蒔かれ」となったので、（神の呼びかけに応答した者の内では）本来の「霊の体」が復活させられているということである。それは、「霊の体」が着せられたということである。これらを踏まえると、「死者はどんなふうに復活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかもしれません」（I コリント 15:35 新共同訳）という問いに対する聖書の答えは、キリストを信じている者は「霊の体」を着せられていて（現在形）、すでに「死人」から「生きる者」に復活させられている、ということになる。それはイエスが言われた、「死からいのちに移っているのです」（ヨハネ 5:24）と同じことを言っている。それゆえ、肉体の死を迎えたなら、すでに着せられている「霊の体」で復活することになるので、「死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます」（I コリント 15:52 新共同訳）とある。さて、「霊の体」は朽ちないので、「霊の体」が着せられていることは、「永遠のいのち」を持っていることを意味する。

❖ 「永遠のいのち」を持っている

「霊の体」を着せられていれば、もう死ぬことがないので、それは「永遠のいのち」を持っていることを意味する。「永遠のいのち」は神に属する「いのち」なので、「永遠のいのち」を持つと神を認識できるようになる。それは、キリストについての御言葉を聞けばイエス・キリストを知るようになる、ということである。イエスはこの「永遠のいのち」について、次のように話しておられる。

「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」(ヨハネ 17:3)

また、「永遠のいのち」を持っていれば、肉体の死という「終わりの日」に、神はその者をよみがえらせることができるので、イエスはそのことも話しておられる。

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。
わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」(ヨハネ 6:54)

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は」とは、神の呼びかけに応答した人たちを指す。彼らは応答した時点で「永遠のいのち」を、すなわち「霊の体」を与えられたので、肉体の死という「終わりの日」に、神はその人をよみがえらせることができるということである。パウロは、この話を次のように表現している。

「実際私たちは、「たとえ私たちの地上の幕屋の家（肉の体）が打ち壊されても、神からの建物（霊の体）、すなわち天にある、[人の] 手によって造られたのではない、永遠の家（神の国）をもっているのだ」、ということを[よく]知っている。」(Ⅱコリント 5:1 岩波訳) ※ () は筆者が意味を補足

この「岩波訳」は、この箇所の内容の原文の時制を忠実に訳している。「岩波訳」とは岩波書店が出しているものであり、正式名称は「新約聖書翻訳委員会訳」である。さて、パウロはここで、キリストを信じる者たちは、「永遠の家（神の国）をもっている」ことを、すなわち「霊の体」を着ていることを、「[よく] 知っている」と言ったのである。つまり、キリストを信じている者は、「永遠のいのち」を持っているということである。だが、キリストを信じている者の多くは、「永遠のいのち」を持っているという事実を、すなわち朽ちない「霊の体」が着せられているという事実を知らない。それは見えないからである。それでイエスは、信じている者は「永遠のいのち」を持っていることを繰り返し教えておられる。例えば、次のように。

「まことに、まことに、あなたがたに言います。信じる（信じている：原文は現在形）者は永遠のいのち（霊の体）を持っています。」

(ヨハネ 6:47 新改訳 2017) ※ () は筆者が意味を補足

イエスの弟子であったヨハネも、同じ福音書で、「御子を信じる（信じている）者は永遠のいのち（霊の体）を持っている」（ヨハネ 3:36 新改訳 2017 ※（ ）は筆者が意味を補足）と書いている。さらに、ヨハネは手紙の中でも次のように書いている。

「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのち（霊の体）を持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。」（I ヨハネ 5:13）※（ ）は筆者が意味を補足

このように、イエス・キリストを信じている者は、すでに「霊の体」を着せられており、「永遠のいのち」を持っている、のである。それは、すでに「死」から「いのち」に移されている、ということであり、決して滅びることがないことを意味する。イエスはそのことを、次のように言われている。

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます（与えています：原文は現在形）。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」（ヨハネ 10:28）※（ ）は筆者が意味を補足

したがって、神の御心は、神の呼びかけを聞いて応答する者が、すなわち「子を見て信じる者」が、みな「永遠のいのち」を持っていて、その人たちに個別に訪れる肉体の死という「終わりの日」に、彼らをひとりひとりよみがえらせることなのである。

「事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つ（持っている：原文は現在形）ことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。」

（ヨハネ 6:40）※（ ）は筆者が意味を補足

見てきたように、イエス・キリストを信じている者は「霊の体」を着せられていて、すでに「いのちの御霊の原理」の中にあり、「罪と死の原理」からは解放されている。「キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです」（ローマ 8:2）。それは、「霊の体」を持っていなければ、すなわち「血肉の体」では、「神の国」を相続できないからである。「血肉のからだは神の国を相続できません」（I コリント 15:50）。したがって、人が「死人」の中からよみがえるときには、天の御使いと同じように「霊の体」を着ている。「人が死人の中からよみがえるときには、めとることも、とつぐこともなく、天の御使いたちのようです」（マルコ

12:25)。聖書は、そのように教えている以上、それを信じるのが人の取るべき態度である。しかし、信じることを邪魔するのが「理性」である。「理性」は、「霊の体」を着せられても、それを意識することができないので、「それは嘘だ」とささやいてくる。無論、「霊の体」は「神の国」に属する体であって、“霊”なので、見ることも、触ることもできない。そこで、人には「霊の体」を意識することはできないことを教えた聖書の話を見ておこう。それは、イエスとニコデモとのやりとりでの話である。

❖ 意識できない

イエスは、ユダヤ人の指導者であったニコデモに、次のように言われた。

「イエスは答えて言われた。「はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」」（ヨハネ 3:3 新共同訳）

ここでイエスは、「新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」と言われた。なぜなら、「神の国」を見るには、「神の国」に属する「霊の体」が必要だからである。つまり、「新たに生まれなければ」とは、「霊の体」を着せられなければ、ということである。するとニコデモは、「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎に入って生まれることができますでしょうか」（ヨハネ 3:4）と質問してきたので、イエスは次のように答えられた。

「はっきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。」（ヨハネ 3:5-6 新共同訳）

「肉から生まれたものは肉」とは、「肉の体」で生まれた者を指すが、その者は「肉の体」しかないので「神の国」には入れないということである。「霊から生まれたものは霊」とは、「霊の体」を着せられた者を指し、その者は「神の国」に入れるということである。ならば、どのようにして「霊の体」が着せられるのかと、ニコデモは不思議に思ったので、イエスは続けて次のことを言われたのであった。

「『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」（ヨハネ 3:7-8 新共同訳）

ここでイエスは、「風は思いのままに吹く」と言われたが、「風」は「聖霊」の比喻であり、「聖霊」は人に対し、一方的に呼びかけることを言い表している。しかし、その呼びかけは「潜在意識」に対して行われるため、人には全く意識できない。それでイエスは、「それがどこから来て、どこへ行くかを知らない」と言われた。そして、「霊から生まれた者も皆そのとおりである」とは、「霊の体」を着せられることも同様に、それは着せられても意識できないということを言われたのである。

このように、「霊の体」を着せられて救われても、本人には意識できない。しかし、それは神の呼びかけを信じた時（応答した時）、確かに着せられる。そして、「霊の体」を着せられている者は「永遠のいのち」を持っていて、「神の国」に入っているので、キリストについての御言葉を聞くことでキリストを信じられるようになり、救いの自覚に至る。そこでイエスは、ニコデモとのやりとりの続きで、「それは、信じている者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持っているためです」（ヨハネ 3:15 私訳）と言われたのであった。要するに、キリストを信じている者は、すでに「神の国」のただ中にあるということである。そうしたことから、イエスは別の場面で、「神の国」はいつ来るのか、とパリサイ人たちから尋ねられたとき、次のように答えられた。

「さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」」（ルカ 17:20-21）

以上で、「霊の体」はいつ着せられるのかの考察を終わるが、「霊の体」を着せられるという話は耳慣れないかもしれない。しかし、「霊の体」を着せられることが人の「救い」であり、それは神が「死人」を「死」から「いのち」に移すことであり、「永遠のいのち」を持つようにすることである。このことは、最も重要な福音なので、聖書はこの福音を、実は様々な表現で説明している。そこで次に、「霊の体」を着せられることについての様々な表現を見てみたい。そうすれば、さらに深く「第一ステージ」の様子が見えてくる。

－「霊の体」について－

悪魔の仕業で「死」が入り込んで以来、人の体は「死の体」となり、人は肉体の死と同時に土に帰る運命になった。「ついに、あなたは土に帰る」(創世記 3:19)。それは、人は生きられない「死人」になったということを意味する。「アダムにあってすべての人が死んでいるように」(Ⅰコリント 15:22)。それゆえ、神は人を再び「生きる者」にしようとされる。それは、「死人」に朽ちない「霊の体」を着せ、「死」から「いのち」に移すことであり、これが聖書の言う「救い」である。本書はこれを、福音の「第一ステージ」と呼ぶ。これは最も大切な福音なので、「霊の体」が着せられる「救い」については、すなわち「死」から「いのち」に移されることについては、聖書は様々な表現を使って教えている。ここではそれを学んでみたい。そうすれば、耳慣れない「霊の体」のことが、「何だ、そういうことだったのか」となるはずである。では、「死」から「いのち」に移されたことを教えた聖書の様々な表現を見てみよう。

❖ 「死」から「いのち」へ

イエスは、朽ちない「霊の体」を着せられる福音を、「死」から「いのち」に移されるという表現で教えられた。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことなく、死からいのちに移っているのです。」(ヨハネ 5:24)

イエスは、ご自分を遣わした父を信じている者は(現在形)、すでに「死」から「いのち」に移っていると(現在完了形)、その者は「永遠のいのち」を持っているとした(現在形)。そして、イエスはご自分と父とは「一つ」だとし、「わたしと父とは一つです」(ヨハネ 10:30)、父を信じることは、「イエスは主です」と信じることとした。つまり、「イエスは主です」と信じている者は、「死」から「いのち」に移っていて、「聖霊」を持っているということである。聖書はそれを、「聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません」(Ⅰコリント 12:3)と教えている。ならば、どうすれば救われるのかとなるので、イエスは、「死人」が神の呼びかけを聞き、それに応答すれば救われることを続けて教えられた。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:25)

これが「死」から「いのち」に移される「救い」の教えであり、それは「霊の体」が着せられることを意味する。パウロは、この「救い」の教えを次のように表現した。

「神は、私たちが暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」(コロサイ 1:13)

パウロは、イエスの言われた「死」を「暗やみの圧制」と表現し、「いのち」を「愛する御子のご支配」と表現し、その「いのち」の中に「移してくださいました」と、いわゆる過去形（アオリスト）で表現した。また、それを次のようにも表現した。

「あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。」(コロサイ 2:12)

ここでは、「死」から「いのち」に移されたことを、「キリストとともに葬られ」、「キリストとともによみがえらされた」と、いわゆる過去形で、すなわち完了したこととして表現した。また、パウロは次のようにも表現した。

「背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。」(エペソ 2:5 新改訳 2017)

ここでは、「死」から「いのち」に移されたことを、「死んでいた私たち」を「生かしてくださいました」と、いわゆる過去形で、すなわち完了したこととして表現した。また、パウロは次のようにも表現した。

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(Ⅱコリント 5:17)

「だれでもキリストのうちにあるなら」とは、イエスの言われた、「わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は」(ヨハネ 5:24) ということであり、その者は「死からいのちに移っている」(ヨハネ 5:24) とイエスは現在完了形で言われたが、パウロはそれを、「見よ、すべてが新しくなりました」と、同じ現在完了形で表現した。ペテロも、「死」から「いのち」に移されていることを次のような表現で教えた。

「神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。」（Ⅰ ペテロ 1:3-4 新共同訳）

ペテロは、いわゆる過去形（アオリスト分詞）で「新たに生まれさせ」と表現し、さらには、「朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました」と現在完了形（分詞）で表現した。さらには、次のような表現でも教えた。

「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることはない、神のことばによるのです。」
（Ⅰ ペテロ 1:23）

ここでは端的に、「あなたがたが新しく生まれた」と現在完了形（分詞）で表現し、それは「朽ちない種」から、すなわち「霊の体」によってと書かれている。その「朽ちない種」は、神が「死人」に呼びかけてくださった「神の言葉」によるので、「神のことばによるのです」とある。このように、「死人」に「霊の体」を着せて「生きる者」にすることが最も重要な福音なので、聖書はそれを様々な表現で説明している。その福音の「型」が、キリストが十字架で死なれ、三日目によみがえられたことであつた。

「私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであつて、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、また、ケパに現れ、それから十二弟子に現れたことです。」（Ⅰ コリント 15:3-5）

キリストは、この最も重要な福音を教えるために、自らが十字架で「死なれ」、「よみがえられた」のである。それは、「死人」が「霊の体」を着せられ、「死」から「いのち」に移される福音であり、これを教えるためにキリストご自身が人となり、「死」から「いのち」に移されることを証しされたのであつた。まことに「霊の体」を着せられ、「死」から「いのち」に移される福音を、聖書は様々な言葉で説明している。それは見てきたものだけではなく、他にも様々な表現を使って聖書は説明している。

❖ 他にも様々な表現で

「霊の体」を着せられるとは、「死」から「いのち」に移されることであり、その「死」は神との分離なので、「死」から「いのち」に移されることは、神の「いのち」との再結合を意味する。そこで聖書は、「死」から「いのち」に移されたことを、すなわち「霊の体」を着せられたことを、「神と和解した」という表現でも教えている。

「そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。」
(ローマ 5:11)

「神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。」(Ⅱコリント 5:18)

「今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。」(コロサイ 1:22)

キリストを信じている者は、すでに「死」から「いのち」に移されているので、聖書はその事実を、このように「神と和解した」という表現で教えている。そして、その和解はキリストの十字架の死によって成し遂げられた。「十字架によって神と和解させる」(エペソ 2:16)。それは、神が十字架という代価を払って私たちを買い取られたということでもあるので、聖書はそのような表現でも教えている。

「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」(Ⅰコリント 6:20)

「あなたがたは、代価をもって買われたのです。人間の奴隷となつてはいけません。」(Ⅰコリント 7:23)

また、「死」の正体が「罪」であり、「罪の力」の正体が「律法」なので、「死のとげは罪であり、罪の力は律法です」(Ⅰコリント 15:56)、「死」が入り込んだことで、人は「律法」に責め立てられるようになった。人は入り込んだ「死」によって神に愛されている自分を認識できなくなり、そのことで愛される自分を求めるようになり、愛されるには周りの期待に応える必要があるので、その期待が「ねばならない」という「律法」になり、その「律法」に責め立てられるようになった(本書 65 頁「ー「死」と

「罪」との関係ー」)。それゆえ、「死」から「いのち」に移されたことを、私たちを責め立てている「律法」の債務証書を無効にされたともいう。

「いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。」(コロサイ 2:14)

債務証書を無効にされたとは、キリストが「律法」を終わらせ、「キリストが律法を終わらせられたので」(ローマ 10:4)、自由を得させてくれたということである。そこで、「死」から「いのち」に移されたことを、次のようにも表現している。

「キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。」(ガラテヤ 5:1)

また、「死」から「いのち」に移されるというのは、古い人がキリストとともに十字架につけられ、罪の体が滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるということでもあるので、聖書は次のようにも表現している。

「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだ_が滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。」(ローマ 6:6)

さらに言えば、「死」から「いのち」に移されるとは、誰も肉によって誇ることがないようにされるということでもある。というのも、「死」が支配する世界は神と分離した世界なので、人は神ではなく肉を頼みとし、肉によって誇るしかないが、その「死」から「いのち」に移されれば、肉によっては誰一人、誇ることができなくなるからである。したがって、「霊の体」を着せられた者は「死」から「いのち」に移され、イエス・キリストのうちにあるので、その者は誇れなくなってしまうのである。

「しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとなられました。まさしく、「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりにするためです。」(I コリント 1:30-31)

これは、「いのち」に移されたことにより、この「死」の世界で持っていた私たちの誇りが取り除かれたということである。「それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。それはすでに取り除かれました」（ローマ 3:27）。つまり、「神に頼る」ことだけが許されるようになったということなので、聖書は次のように表現している。

「実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。」（Ⅱコリント 1:9 新改訳 2017）

これは、私はキリストとともに十字架につけられましたというのと同じことを言っているのであり、私のうちにはキリストが生きておられるということを言っている。

「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」（ガラテヤ 2:20）

このことを、神によって「義と認められた」という。

「しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」（Ⅰコリント 6:11）

「義と認められた」とは、無罪放免とされ、神から「正しい者」という判決を受けたことを意味する。人の「真実な姿」は神に似た「良き者」であり、初めから「正しい者」として造られているので、そうした判決になる（本書 40 頁「一人の「真実な姿」ー」）。それは自分の価値を肉の努力ではなく、神からの「贈り物」として受け取ったということなので、聖書は「義を得ました」（ローマ 9:30）とも表現する。

このように、キリストを信じている者は「霊の体」を着せられた者であり、「死」から「いのち」に移されている。これから移されるのではなく、すでに移され、神の「いのち」だけが支配する「神の国」の中にある。「神の国は、あなたがたのただ中にある」（ルカ 17:21）。このことは最も大切な教えなので、見てきたように、聖書は「霊の体」を着せられることを様々な表現で説明している。そして聖書は、耳慣れない「霊の体」についても、実は様々な表現で説明している。

❖ 「霊の体」を様々な表現で説明

「霊の体」は朽ちない体なので、聖書はそれを「永遠のいのち」として表現している。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことなく、死からいのちに移っているのです。」（ヨハネ 5:24）

また、「霊の体」が与えられることは神の約束なので、聖書は「霊の体」を、「約束された“霊”」と表現し、それを信仰によって受けることを教えている。

「それは、アブラハムに与えられた祝福が、キリスト・イエスにおいて異邦人に及ぶためであり、また、わたしたちが、約束された“霊”を信仰によって受けるためでした。」（ガラテヤ 3:14 新共同訳）

この「約束された“霊”」とは、「人の子」（ダニエル 7:13）が天から来られ、「永遠の国」が与えられる約束である。「国と、主権と、天下の国々の権威とは、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国」（ダニエル 7:27）。「永遠の国」が与えられるとは、朽ちない「霊の体」を着せられる救いを意味し、それは神の呼びかけに応答する信仰で実現するので、ここに「約束された“霊”を信仰によって受ける」とある。そして、「霊の体」が着せられれば「神の国」に属する者となり、そこは「神の神殿」になるので、聖書は「霊の体」を「神の神殿」としても表現している。

「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。」（I コリント 3:16）

「神の神殿」では、三位一体の神、聖霊が「助け主」となって働かれるので、「助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊」（ヨハネ 14:26）、聖書は「霊の体」を「聖霊の宮」としても表現している。

「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。」（I コリント 6:19）

それは聖霊が働かれる「聖霊の宮」ゆえに、「御霊の賜物」が開化する場所である。

「さて、兄弟たち。御霊の賜物についてですが、私はあなたがたに、ぜひ次のことを知っていただきたいのです。」（Ⅰコリント 12:1）

このように、この耳慣れない「霊の体」についても、聖書は様々な表現で説明している。それは、「霊の体」が見えないからである。そうであっても、「霊の体」が着せられれば変化が生じるので、聖書は「御霊の賜物」としても教えている。この賜物に見える形で現れるので、そのことを通して「霊の体」が着せられていることを、すなわち「死」から「いのち」に移されたことを確認できる。それゆえ、「御霊の賜物」によって、人は救いを自覚できるようになる。ならば、「御霊の賜物」とは何なのだろう。

❖ 「御霊の賜物」

聖書は、人が「霊の体」を着せられると、そこには御霊が宿るようになるので、「御霊の賜物」が開花することを教えている。そして聖書は、「御霊の賜物」の筆頭に、「イエスは主です」という告白を取り上げている。

「ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません。」

（Ⅰコリント 12:3）

さらに聖書は、「イエスは主です」という告白によって、自分が救われていることを自覚できるようになることを教えている。

「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです（救いの自覚に至るということ）。」

（ローマ 10:9） ※（ ）は筆者が意味を補足

聖書は他にも、様々な「御霊の賜物」が開花することを教えている。「知恵の賜物」、「知識の賜物」、「信仰の賜物」、「癒やしの賜物」、「奇蹟を行う賜物」、「預言の賜物」、「霊を見分ける賜物」、「異言の賜物」、「異言を解き明かす賜物」など、様々な賜物が開花するという（Ⅰコリント 12:4-28）。そして、それは全て教会の徳を高めるために開花するので、教会の徳を高めるために用いるよう教えている。

「あなたがたの場合も同様です。あなたがたは御霊の賜物を熱心に求めているのですから、教会の徳を高めるために、それが豊かに与えられるよう、熱心に求めなさい。」（Ⅰコリント 14:12）

このように、「霊の体」が着せられれば、「イエスは主です」という告白を筆頭に、「教会の徳を高めるため」の「御霊の賜物」が開花する。では、なぜそうなるのだろう。それは、教会が「キリストの体」だからである。

❖ 教会が「キリストの体」

「霊の体」を着せられるとは、神と一つにされたということであって、「あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです」（ガラテヤ 3:28）、それは、人はもともと神の器官として造られていたので、器官が回復したということである。つまり、「キリストの体」の器官に、再び組み込まれたことを意味する。

「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」
（Ⅰコリント 12:27）

このことから、着せられた「霊の体」というのは、「キリストの体」の「各器官」であることが分かる。加えて、「キリストの体」の具現化は教会なので、「霊の体」が着せられれば、教会の一員になったことを意味する。本人には自覚はないが、やがてそのことが本人にも分かるように、御霊によって導かれる。

「教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。」（エペソ 1:23 新共同訳）

教会の一員になったことを認識する儀式がバプテスマ（洗礼式）であり、聖餐式である。聖餐式は、私たちが「キリストの体」に組み込まれたのは、キリストの十字架の贖いによるので、そのことを感謝するために行われる。キリストを信じている者は十字架の贖いによって「永遠のいのち」を持つ者なので、肉体の死という「終わりの日」によみがえらされることを、聖餐式を通して再確認するのである。

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。
わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」（ヨハネ 6:54）

要するに、「霊の体」を着せられたというのは、キリストを自分の身に着たということなのである。そのことの確認が、バプテスマならびに聖餐式である。

「バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。」（ガラテヤ 3:27）

そうであるがゆえに、「霊の体」が着せられれば、「イエスは主です」という告白を筆頭に、キリストの体である「教会の徳を高めるため」の「御霊の賜物」が開花する。つまり、神の呼びかけに応答して「霊の体」が着せられたなら、それは「キリスト」を身に着たので、その者は「キリストの体」である教会の礼拝に出席するようになるのである。そこでは、キリストについての御言葉を聞くので、キリストへの信仰が生起する。「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです」（ローマ 10:17）。すると、信仰を告白してバプテスマを受け、教会の一員として奉仕をするようになる。それは、「霊の体」によって「キリストをその身に着た」がゆえに、そのような実を結ぶ。こうした一連の働きを、「御霊の賜物」という。

このように、「霊の体」は見えないが、それは「キリストの体」の器官であり、「キリストの体」の具現化が「教会」なので、「霊の体」が着せられたなら、教会での交わりに参加するようになる。その交わりは、一見すると人との交わりのように見えるが、実は目には見えないイエス・キリストとの交わりなのである。

「私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。」（Ⅰヨハネ 1:3）

これこそが、聖霊によって押された「証印」である。

❖ 聖霊によって押された「証印」

着せられた「霊の体」は見えない。しかし、「霊の体」が着せられたなら、見てきたように様々な実を結ぶようになる。その筆頭が、「イエスは主です」という告白である。この告白を通して、救われたことへの自覚が持てるようになる。そして、それを皮切りに、教会の徳を高めるための様々な「御霊の賜物」が開花する。それは教会の中の

働きに参加できるようになるということであるが、その働きは礼拝を守ることから始まる。こうした変化は、聖霊によって押された「証印」なのである。

「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」(エペソ 4:30)

こうして、神によって「霊の体」を着せられた者は救いの福音を聞くと、それを信じられるようになるが、それこそが約束の聖霊をもって押された「証印」なのである。

「この方にあってあなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。」(エペソ 1:13)

このように、「霊の体」を着たというのは、「キリスト」を着たということである。「キリストをその身に着たのです」(ガラテヤ 3:27)。そして、「キリスト」を着たので、それはキリストに起きたことは私たちの上にも起きるということである。つまり、キリストが十字架で死なれた以上、私たちもキリストと共に十字架で死に、キリストが死から復活した以上、私たちもキリストと共に死から復活するということである。

「もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。」
(ローマ 6:5)

そうであるからこそ、「わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます」(ヨハネ 6:54) と、キリストは言われたのであった。したがって、キリストが十字架で死なれたということは、「キリストの体」の器官とされた私たちも同じように死んだということであり、死んだのなら、キリストがよみがえられたのと同じように、キリストと共に生きることになる、ということである。

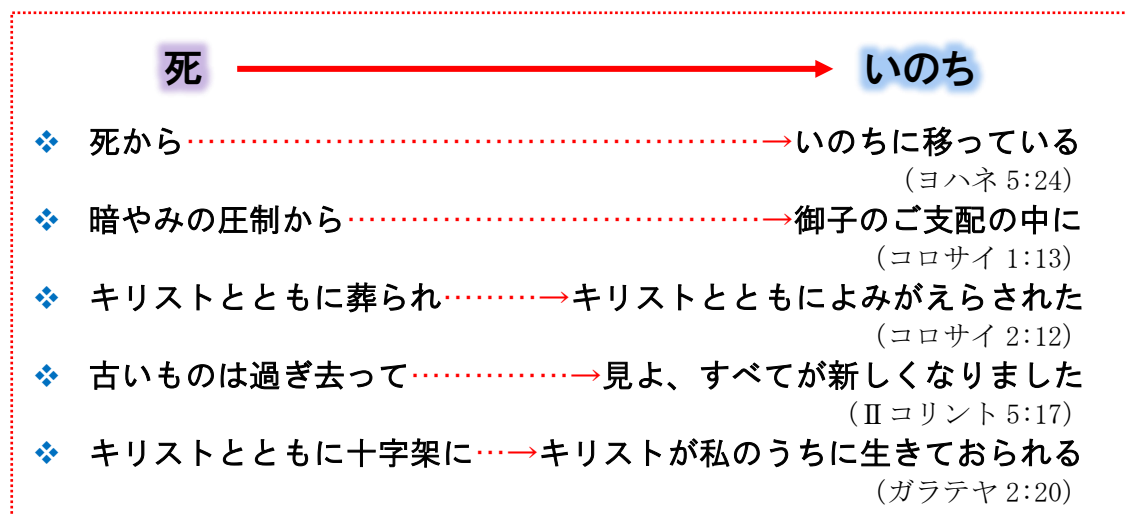
「もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。」(ローマ 6:8)

そのことの証しが、「イエスは主です」という告白ができることであり、その告白こそ、聖霊によって押された「証印」なのである。

以上で、耳慣れない「霊の体」の説明は終わるが、「何だ、そういうことだったのか」となったなら幸いである。聖書は、実に多彩な表現で、「霊の体」については教えているのである。では、まとめてみよう。

❖ まとめ

人の「究極の問題」を解決するのが、福音の「第一ステージ」であり、それは「死人」を「死」から「いのち」に移す福音である。その福音は、神が「死人」に呼びかけることから始まり、その呼びかけに応答することで「死」から「いのち」に移され、生きる者にされる。「死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです」(ヨハネ 5:25)。これを「霊の体」を着せられるといい、「永遠のいのち」を持つという。このことは最も重要な福音であるので、「死」から「いのち」に移される出来事を、聖書は様々な表現で説明している。



聖書は他にも、「いのち」に移されたことを、「和解を成り立たせてくださった」(ローマ 5:11)、「代価を払って買い取られた」(Ⅰコリント 6:20)、「債務証書を無効にされた」(コロサイ 2:14)、「私たちを解放してくださいました」(ガラテヤ 5:1)、「義と認められた」(Ⅰコリント 6:11)、「神の神殿」(Ⅰコリント 3:16)、「神から受けた聖霊の宮」(Ⅰコリント 6:19)、「御霊の賜物」(Ⅰコリント 12:1)、「キリストをその身に着た」(ガラテヤ 3:27)、「約束の聖霊をもって証印を押されました」(エペソ 1:13)、「キリストにつぎ合わされて」(ローマ 6:5)などと表現している。それは「霊の体」を着せられ、「永遠のいのち」を持つ者にされ、「神の国」のただ中にあるということである。「いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」(ルカ 17:21)。したがって、「いのち」に移された者の裁きは終了している。「さばきに会うことがな

く、死からいのちに移っているのです」(ヨハネ 5:24)。これを「救い」という。そして、救われたなら聖霊の助けが得られるようになるので、キリストの御言葉を聞くことで、「イエスは主です」という告白が可能になる。「聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません」(I コリント 12:3)。

このように、聖書は「死」から「いのち」に移されるという出来事を様々な表現で説明している。それは「霊の体」を着せられるということであり、「霊の体」は「御霊の体」なので、それは「キリストを着た」ということである。「キリストをその身に着た」(ガラテヤ 3:27)。「キリストを着た」ので、キリストが十字架につけられたように、私たちもキリストとともに十字架につけられたのであって、もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるとなったのである。

「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」(ガラテヤ 2:20)

したがって、「霊の体」が着せられたことで、その人は新しく造られた者になった。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなったのである。

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(II コリント 5:17)

これは全て、神の呼びかけに応答したことによる。応答したことで「死」から「いのち」に移され、すなわち「霊の体」を着せられ、救われたのである。その結果、「イエス・キリストを信じる信仰」を告白することができるようになった。

以上が簡単なまとめであるが、この話には一つ問題がある。聖書に、「イエス・キリストを信じる信仰による神の義」(ローマ 3:22)とあるからである。この御言葉は、神の呼びかけに応答すれば救われるという本書の話を否定し、人が救われるのは(義とされるのは)、「イエス・キリストを信じる信仰」の告白によるとする。あくまでも救いは、キリストを信じる告白によるとする。そうすると、本書がこれまで述べてきた救いの話は誤りということになる。それゆえ、「イエス・キリストを信じる信仰」による義についても見ておく必要がある。

－「イエス・キリストを信じる信仰」による義－

日本で広く使われている「口語訳聖書」、「新改訳聖書」、「新共同訳聖書」には、「イエス・キリストを信じる信仰」によって、人は義とされることが書かれている。義とされるとは、罪人でも正しい者として神に受け入れられることであり、救われることを意味する。それには、「イエス・キリストを信じる信仰」が必要であることが書かれている。では、そうした御言葉を「新改訳聖書」第三版の訳で見てみよう。

「すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。」（ローマ 3:22）

「今の時にご自身の義を現すためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。」（ローマ 3:26）

「人は律法の行いによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これは、律法の行いによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。」（ガラテヤ 2:16）

「（義を受けたのは）私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」（ガラテヤ 2:20）※（ ）は筆者が意味を補足

「しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました。それは約束（救いの義）が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。」（ガラテヤ 3:22）※（ ）は筆者が意味を補足

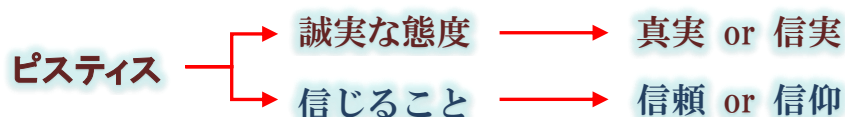
「キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」（ピリピ 3:9）

以上の聖書箇所は、「新共同訳聖書」も「口語訳聖書」も、同じような意味に訳している。表現の違いがあっても、一様に、「イエス・キリストを信じる信仰」によって人は義とされる（救われる）という意味に訳している。そうすると、本書がこれまで述べてきた、神の呼びかけに応答するだけで、すなわち神が差し出す救いの御手に掴ま

るだけで、神が引き寄せてくださる（義とされる）という話は誤りということになる。そこで、ここでは「イエス・キリストを信じる信仰」による義を考察する。初めは、「信仰」の意味からである。

❖ 「信仰」の意味

新約聖書で「信仰」と訳されている言葉は、ギリシャ語の「ピステイス」[πίστις]で、そこには二つの概念がある。一つは、「信頼を呼び起こすもの」という概念である。それは「誠実な態度」であり、一言で表すなら「信実」であり、「真実」である。もう一つは、「信じること」という概念である。それは人間の行為としての信頼であり、一言で表すなら「信頼」であり、「信仰」である（参考：岩隈直著『新約ギリシャ語辞典』山本書店 383 頁、『ギリシア語 新約聖書釈義事典Ⅲ』教文館 123 頁）。



例えば、ローマ 3:3 に、「神の真実（ピステイス）」とあるが、そこでの「ピステイス」は、神が何かを「信じる」ということではなく、神に於ける人への「誠実な態度」を言い表している。それは、偽りのない態度、「信実」である。また、使徒 24:24 に「キリスト・イエスを信じる信仰（ピステイス）」とあるが、そこでの「ピステイス」は、人間の行為としての信頼であり、信じるという「信仰」を言い表している。

では、本書が述べてきた、神の呼びかけに「応答」することで救われるという「応答」は何かというと、神の呼びかけは、人が意識できない「潜在意識」の中で行われるので、それに対する「応答」は、人が意識してする「信じること」ではなく、意識できない「誠実な態度」ということになる。もう少し詳しく述べると、神の呼びかけは体の五官では認識できないが、確かに「良心の声」、あるいは「心の声」として人は聞いているので、それは私たちの罪を責め立てている。その罪とは、神を信じないことであり、「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」（ヨハネ 16:9 新共同訳）、それは「神と異なる思い」を持つことである。つまり、「心の声」は神と「分離」した状態を責め立てている。なぜなら、その状態のままでは滅びてしまうからである。

こうして、神の呼びかけは人の罪を責め立てることで、滅びに向かっていることを人に気づかせる。それは罪責感として、あるいは空しさとして気づかせる。同時にその時、神はこの手に掴まれと、救いの御手を差し伸べてくださっている。譬えるなら、

医者が病気であることを人に気づかせ、治療を受けるように勧めるのと同じである。この神の呼びかけに対して人がすべき「応答」は、一つしかない。それは「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」(ルカ 18:13) である。これが、神の心に信頼を呼び起こす「誠実な態度」となる。それでイエスは、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」と言った者が、「義と認められて家に帰りました」(ルカ 18:14) と言われたのである。無論、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」という言葉は、意識して発するものではなく、「潜在意識」がそのような「誠実な態度」で神の呼びかけに「応答」するということであり、これが「信実」(ピステイス) である。

したがって、人は神の呼びかけに対する「信実」(ピステイス) によって救われる。それは「霊の体」が着せられ、「聖霊の宮」を持つことである。「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮」(I コリント 6:19)。「聖霊の宮」を持てば「聖霊」の助けが得られるので、キリストについての御言葉を聞くと、「イエスは主です」と告白できるようになる。「聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません」(I コリント 12:3)。ここに、神の言葉を信じるという行為の「信仰」が芽を出す。こうして、神との関係は、神の呼びかけに応答する「信実」から始まり、神の言葉を信じる「信仰」へと進むのである。

「福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。」(ローマ 1:17)

「信仰に始まり」の「信仰」(ピステイス) は、神の呼びかけに応答する「誠実な態度」である「信実」を指し、「信仰に進ませる」の「信仰」(ピステイス) は、神の言葉を「信じること」の「信仰」を指している。そうした「ピステイス」は、「イエス・キリストの十字架の贖い」の呼びかけから始まるので、「信仰」の創始者は「イエス・キリスト」である。その「信仰」は、神の言葉を信じることで「イエス・キリスト」を目指すので、聖書は、「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい」(ヘブル 12:2) と教えている。

このように、新約聖書で「信仰」と訳されている言葉はギリシャ語の「ピステイス」であり、そこには二つの概念があり、二つの意味がある。このことが分らないと、「イエス・キリストを信じる信仰」によって人は義とされる(救われる)ということの意味も分らない。そこでの「信じる信仰」とは、「イエス・キリストの十字架の贖い」の呼びかけに「応答」する「誠実な態度」の「ピステイス」を意味する。つまり、

「イエス・キリストの十字架の贖い」を以て神は呼びかけてくださるので、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」という「信実」を以て応答するなら、義とされるということである。さらに言えば、「ピスティス」には二つの概念による意味があるので、それに対応し、「義」にも二つの意味がある。そこで、それも見ておきたい。

❖ 「義」には二つの意味がある

新約聖書で「義」と訳されているギリシャ語は「ディカイオシュネー」[δικαιοσύνη]であり、これは「正しさ」を言い表す言葉である。聖書がこの言葉を人に対して使う場合、それを二つの意味で用いている。一つは、「潜在意識」に於いて神の呼びかけを聞き、それに応答する「信実」で手にする「義」である。その場合の「義」は、神と結合する救いを意味する。「霊の体」を着せられ、「永遠のいのち」を持つことを意味する。もう一つは、「顕在意識」に於いて神の言葉を聞き、それを信じる「信仰」で手にする「義」である。その場合の「義」は、神への信頼が増し加わることを意味し、与えられた「永遠のいのち」が豊かになることを意味する。キリストは、この二つの「義」を達成するために来たと言われた。

「わたしが来たのは、羊がいのちを得（義を得）、またそれを豊かに持つためです（義が増し加わる）。」（ヨハネ 10:10） ＊（ ）は筆者が意味を補足

このことが分かれば、「信仰（ピスティス）による義」（ローマ 10:6）の意味も容易に分かる。そこには二つ意味がある。一つは、「信実」による「義」であり、それは神の呼びかけに応答することで、「永遠のいのち」を持つことを意味する。もう一つは、「信仰」による「義」であり、それは神の言葉を聞いて信じることで、持った「永遠のいのち」が豊かになることを意味する。ただし、聞いて信じるというのは、神の言葉に従うということであり「従順」を意味する。ゆえに、「あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられている」（ローマ 1:8）の「信仰」を、同じローマ書では「従順」に言い換えている。「あなたがたの従順はすべての人に知られている」（ローマ 16:19）。つまり、「信仰」とは「従順」であり、「信仰の従順」（ローマ 1:5）、従順の奴隷となることで、「永遠のいのち」が豊かになるという「義」に至る。「従順の奴隷となって義に至る」（ローマ 6:16）。「従順」の行いによって、「義」と認められる。

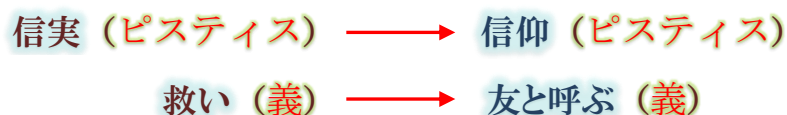
「私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行いによって義と認められたではありませんか。」（ヤコブ 2:21）

ここでの「行い」とは、神の言葉に従う「従順」であり、それは神への「信頼」によって支えられている。「信頼」に支えられた「行い」によって、「義と認められた」とある。それは、神への「信頼」によって、アブラハムは「神の友と呼ばれた」ということなので、この続きに、「彼は神の友と呼ばれたのです」（ヤコブ 2:23）とある。

このように、神が人に対して使う「義」には二つの意味がある。一つは、神が人を正しいとし、その者に「霊の体」を着せ、「永遠のいのち」を得させる「救い」である。もう一つは、救われた者が神への信頼を増し加えていき、神がその者を「友と呼ぶ」ことである。それは、与えられた「永遠のいのち」が豊かになることを意味する。



こうして、神は「永遠のいのち」を得させ、神が召した人々を（「義」とした人々を）、さらに「義」と認め、神から友と呼ばれる栄光を与えるのである。「召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました」（ローマ 8:30）。この二つの「義」が、神の啓示された「義」である。一つ目は「救い」であり、それは神の呼びかけに応答する「信実」で手にする。二つ目は「友と呼ぶ」ことであり、それは神の言葉を信じて従う「信仰」で手にする。「義」はまさに、「信実」に始まり「信仰」に進む。「義は、信実に始まり、信仰に進ませる」（ローマ 1:17 私訳）。



見てきたように、「ピスティス」には二つの概念の意味があるので、「ピスティス」に対応する、「信仰（ピスティス）による義」（ローマ 10:6）にも、二つの意味がある。ただし、見てきた「義」の二つの意味は、人を主体にした「信仰」からの説明であって、神を主体にして見るなら、どちらの「義」も、神が人に与える贈り物である。それは「イエス・キリストの十字架の贖い」によってもたらされるものであり、その贖いを「イエス・キリストの信実」という。つまり、人は「イエス・キリストの信実」によって「義」とされるということである。これを「神の義」という。だが、「神の義」の意味を巡っては論争がある。

❖ 「神の義」について

「神の義」とは何なのだろう。アウグスティヌスは「神の義」の意味を、「罪人を義とするために神が与える義」とした。ルターもこの解釈を引き継ぎ、「神の義」の意味を「神による義認」とした。カルヴァンはさらに踏み込み、「神の法廷に於ける無罪判決」とした。つまり、「神の義」とは、伝統的に神が人に与える義という意味に解されてきた。しかし、それに異議を申し立てる学者が次々と現れた。近年では N.T.ライトや R.B.ヘイズ等が有名である。彼らは、イエスの「ピステイス」の議論（イエスを信じる信仰なのか、イエスの信実なのかを巡る議論）に併せ、「神の義」についても従来の解釈に異議を唱えた。彼らは、「神の義」は「神の正義」を言い表しているだけだとする。「義」と訳されている原語の意味は「正義」なので、「神の義」は「神の正義」という意味にしかないという。その根拠として、「アブラハムの信仰」（ローマ 4:16）と訳されている箇所を引き合いに出す。これを読んで、「アブラハムを信じる信仰」、あるいは「アブラハムが人に信仰を与える」などという意味に解す人はいない。誰もが、「アブラハム自身の信仰」という意味にしか解さない。そうであれば、「神の義」も「アブラハムの信仰」と全く同じ構文なので、それは「神ご自身の義」という意味にしか解せないという。無論、そのとおりである。だが、大事ななのは、「神ご自身の義」、すなわち「神の正義」は何を意味するかである。

「神の正義」は、徹底して悪と戦うことなので、その戦いは人を悪から救い出す「救い」を意味する。そうであれば、「神の正義」である「神の義」は、神による「救い」を意味する。ゆえに、「神の義」を唱えたローマ書では、「神に願い求めているのは、彼らの救われることです」（ローマ 10:1）と書かれた続きに、「彼らは神の義を知らず」（ローマ 10:3）とある。さらには、旧約聖書は「義」という言葉を「救い」という意味に置き換えても使っている。例えば、「わたしの 義は近い。わたしの 救いはすでに出ている」（イザヤ 51:5）のように。またパウロ自身が、「人は心に信じて 義と認められ、口で告白して **救われる** のです」（ローマ 10:10）と言っている。したがって、「神の義」とは、「神が人を救うこと」であって、救うために神が人に下すのは「無罪宣言」であり、罪が赦される「赦しの恵み」である。であれば、「神の義」は「神が人に与える義」と解するのが、すなわち「神の救い」と解するのが正しい。確かに、「神の義」は「神の正義」という意味にしかないが、その「正義」は人への「救い」なので、「神の義」は「神が人を救うこと」である。その「救い」は、罪が赦される「赦しの恵み」であり、無罪判決である。ルターもカルヴァンも「神の義」をそのように解したが、それは正しいということである。

パウロは、こうした混乱を避けるためなのか、「神の義」を「神から与えられる義」（ピリピ 3:9）とも表現している。そこで本書も、「神の義」という表現を使う際は、パウロのように「神から与えられる義」という意味で使う。「神の義」を、「神の赦しの恵み」という意味に解して使う。というより、そのように解釈しないと意味が通じない。例えば、下記の御言葉を見てほしい。

「福音のうちには神の義（赦しの恵み）が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。」（ローマ 1:17） ※（ ）は筆者が意味を補足

ここに、「福音のうちには神の義が啓示されていて」とあるが、「神の福音」はキリストの十字架の贖いであって、それは「赦しの恵み」なので、ここで啓示されている「神の義」は「赦しの恵み」を指している。すなわち、罪人を無条件で赦し、罪人を「正しい」とする恵みである。無条件であれば、「神の義」である「赦しの恵み」は、それを受け取るかどうかの「信仰」の決断を迫ることになるので、この続きに、「その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです」と書かれている。

このように、「神の義」とは「神の正義」であり、その正義は人を苦しめる悪と戦い、人の罪を無条件で赦す「神の赦しの恵み」である。この神の恵みが、人に「永遠のいのち」を得させ、そのいのちを豊かにする。「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」（ヨハネ 10:10）。ゆえに、「神の義」は、第一に、「永遠のいのち」を得させることであり、第二に、「永遠のいのち」を豊かにすることである。このことが分かれば冒頭で見た、「イエス・キリストを信じる信仰」によって人は義とされるの意味も容易に分かる。そこには二つの意味がある。一つは、「イエス・キリスト」の呼びかけに「誠実な態度」で応答する「信実」によって、「永遠のいのち」が得られるということである。もう一つは、「イエス・キリスト」の言葉を信じる「信仰」によって、「永遠のいのち」が豊かになるということである。そして、前者の場合も後者の場合も、そこには罪が赦される「神の赦しの恵み」がある。だが、そこまでの意味を理解するには、聖書理解の熟練を必要とするので、「イエス・キリストを信じる信仰」による義という言い方は、一般には誤解を招いてしまう。

❖ 誤解を招く

ルター以来、プロテスタント神学では、個人が救われるのは行いを実行することによってではなく、「イエス・キリストを信じる信仰」によるとされてきた。その教理の根拠が、「イエス・キリストを信じる信仰による神の義」（ローマ 3:22）を始めとする、

冒頭で取り上げた、「イエス・キリストを信じる信仰」によって人は義とされるという意味に訳されてきた聖句である。

しかし、この教理では、「自分が信じたから救われた」となるので、救いを人間のわざにしてしまう危険が常に伴う。それは、人間による救いの達成である。そうなれば、人が救われないのは伝道しないからとなる。例えば、家族が救われなかった場合（キリストを信じる信仰の告白に至らなかった場合）、それは伝道しなかった自分が悪いとなってしまふ。これでは、家族が永遠の滅びに至った責任は全て、人が背負うことになり、その人は生涯「罪責感」で苦しむことになる。

また、この教理では、多くの人を説得し、イエス・キリストを信じさせることに成功した兄弟がいれば、その者は自分自身を誇ることになる。自分のおかげで、彼らは救われたとなる。さらに言えば、この教理では、救いにはイエス・キリストを信じる信仰の告白を必要とするので、イエス・キリストのことを聞いたことのない人は、誰一人救われないことになる。イエス・キリストが来られる以前の人は、誰一人救われなかったことになる。それだけでなく、言葉が理解できない人も、理解できたとしても口で信仰を告白できない人も、誰一人救われないことになる。

だが、心配はいらない。救いに必要な信仰は、人間によって作られるものではなく、それは神が人の心に置いてくださった賜物であると聖書は教えているからである。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です」（エペソ 2:8）。その信仰は、神からの呼びかけがあって初めて生起するのであり、信仰は神が人の心に置いてくださった賜物なのである。人は、この信仰で救われるのであって、イエス・キリストを信じますという人の力の告白で救われるわけではない。そうした告白は、救われた者が救いを自覚するためには必要であっても、救いに必要なものではない。大体にして、神から「義」と認められたという罪人は、すなわち神によって救われたという罪人は、イエスによれば、ただ、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」（ルカ 18:13）と言っただけである。この罪人は、イエス・キリストを信じますという告白はしなかった。

このように、「イエス・キリストを信じる信仰による神の義」（ローマ 3:22）を始めとする、冒頭で取り上げた、「イエス・キリストを信じる信仰」によって人は義とされるという意味に訳されてきた聖句は、誤解を招いてしまう。すると、この箇所訳は本当に正しいのかという素朴な疑問が湧いてくる。実は、この箇所訳を巡っては、20

世紀になってから大論争が繰り広げられてきた。そこで、そうした論争も踏まえ、この箇所のは訳は本当に正しいかを、噛み砕いて検証してみたい。

❖ 訳の検証

冒頭で取り上げた聖句は、次のとおりである。

「すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。」（ローマ 3:22）

「今の時にご自身の義を現すためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。」（ローマ 3:26）

「人は律法の行いによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これは、律法の行いによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。」（ガラテヤ 2:16）

「（義を受けたのは）私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」（ガラテヤ 2:20）※（ ）は筆者が意味を補足

「しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました。それは約束（救いの義）が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。」（ガラテヤ 3:22）※（ ）は筆者が意味を補足

「キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」（ピリピ 3:9）

表現こそ多少の違いはあるが、どれも「イエス・キリストを信じる信仰」によって「義」が得られるという意味に訳している。ならば、そのように訳された部分の原文を分解すると、それはどれも以下のような形になっている。

「ピステイス」＋「イエス・キリストの」

御言葉によっては、「イエス・キリスト^の」の部分が「キリスト^の」になっていたり、「神の御子^の」になっていたりするが、「……^の」という形では一致している。こうした「^の」を属格というが、これを日本語の語順に従って読み直すと次のようになる。

「イエス・キリスト^の」 + 「ピステイス」

上の表記を見れば分かるが、これを「イエス・キリスト^を 信じる信仰」と訳すのは無理がある。というのも、ここでの主語は「イエス・キリスト」であり、その属格は「^の」であって、「^を」ではないからである。無理なく自然に訳すなら、「イエス・キリスト^の 信実（ピステイス）」となる。こうした読み方を「主格的属格」（主語的属格）という。ならば、どうしてここでは「イエス・キリスト^を 信じる信仰」と訳されているかということ、ここでの属格を「対格的属格」として解すからである。どういうことなのか、分かりやすく説明してみたい。

ここでは「イエス・キリスト^の」という「属格」に、「ピステイス」という「名詞」が付いているが、その「名詞」が例えば「導き」という言葉であったとしよう。すると意味は、「イエス・キリスト ^の 導き」となる（主語的属格）。ただし、「導き」という「名詞」は「導く」（アゴー）[ἄγω] という「他動詞」から派生しているので、「イエス・キリスト^の」を、この「導き」という「名詞」の目的語として解することができる。その場合は、「イエス・キリスト ^を 導くこと」という意味に訳することができる。この読み方を「対格的属格」（目的語的属格）という。ただし、この読み方では人が神よりも偉くなるので、ここでは「イエス・キリスト ^の 導き」（主語的属格）として読むのが自然である。同様に、「イエス・キリスト^の 信実（ピステイス）」も、「主語的属格」にも「対格的属格」にも読める。そこで、昔からこれは「対格的属格」と解され、「イエス・キリスト^を 信じる信仰」と訳されてきた。

では、ここでは「イエス・キリスト^の信実」と訳すのと、「イエス・キリスト^を信じる信仰」と訳すのとでは、どちらが正しいのだろう。確かに、「イエス・キリスト^を信じる信仰」という訳はルター以来、伝統的に支持されてきた。ところが、「信仰」（ピステイス）という「名詞」は、「信じる」（ピステウオー）という動詞から派生したものであるが、「信じる」は「他動詞」とも「自動詞」とも解せるので、「自動詞」として解すなら、「イエス・キリスト^の信実」としか訳せない。そこで、これに関する論争が起きた。論争のきっかけは、1891年に発表されたヨハンネス・ハウスライターの論文であり、彼が従来訳に異議を唱えたことに端を発する（参考：J.Haussleiter『Der

Glaube Jesu Christi und der christliche Glaube』NKZ 2)。しかし、彼の解釈は非難にさらされ、その解釈は一時低迷する。それでも、その重要性に気づいたゲルハルト・キッテルは 1906 年の論文で議論を再開させ、やがて論争に火が付いていく。では、彼の考えを簡単に見てみよう。

キッテルはその論文の中で、ローマ 4:16 の「アブラハムの信仰」と訳されている箇所を取り上げた。その箇所のギリシャ語は日本語の語順に従って読み直すと、「アブラハムの + ピステイス」となっていて、「イエス・キリストの + ピステイス」と同じ形になっていることに着目した。違いは、「イエス・キリスト」の部分が、「アブラハム」だというだけである。彼はそのことを取り上げ、「アブラハムの + ピステイス」を、「アブラハムを信じる信仰」と訳す人はいない以上、「イエス・キリストの + ピステイス」を「イエス・キリストを信じる信仰」と訳すのはおかしいとしたのである。これはかなりの説得力があった（参考：Kittle 『πίστις Ἰησοῦ Χριστοῦ』）。

無論、ブルトマンのように、ここは「イエス・キリストへの信仰」として解釈する者たちも多く現れた（ブルトマン著作集第 4 巻『新約聖書神学Ⅱ』第 35 章 第 2 節 新教出版社 188-191 頁）。だがその中、リチャード・B・ヘイズが、従来の文法論争だけでは決着がつかないので、文学批評の視点からも、パウロ神学の視点からも、「イエス・キリストの信実」という訳が正しいことを丁寧に論証した（1983 年）。それによって、論争も終息に向かい始めた（参考：リチャード・B・ヘイズ著『イエス・キリストの信仰』新教出版社 2015 年）。日本に目を向けてみると、新約聖書のギリシャ語に堪能な田川建三は、「信仰」の動詞「信じる」は「自動詞」であって「他動詞」ではないと言い切り、「イエス・キリストを信じる信仰」と訳すことは文法的に不可能とする（参考：田川建三著『新約聖書 訳と註 第三巻』作品社 166-175 頁）。他にも、従来の訳に異議を唱える学者が大勢現れた（太田修司、原口尚彰 等）。そうしたことから、2018 年に出版された「聖書協会共同訳」は、「イエス・キリストを信じる信仰」ではなく、「イエス・キリストの真実」という解釈を採用し、例えばローマ 3:22 は、「神の義は、イエス・キリストの真実によって、信じる者すべてに現されたのです」と訳されるようになった。

さて、こうした文法論争は抜きにしても、「イエス・キリストを信じる信仰」という意味に訳すと、文法問題を問う以前に、訳の一貫性が欠如するという単純な問題が発生する。今度は、それについて説明しよう。

❖ 訳の一貫性が欠如

イエス・キリストを信じる信仰を通して、人は神によって義とされ、救われるというのが「信仰による義認」である。その根拠となる御言葉の一つがローマ 3:22 である。その箇所は一般に、「イエス・キリストを信じる信仰による神の義」と訳されている。ところが、その手前に、「神の真実」（ローマ 3:3）と訳された箇所があり、そちらの原文を日本語の語順に従って読み直すと、「神の+ピステイス」となっていて、それは「イエス・キリストを信じる信仰」と訳されたローマ 3:22 の原文と全く同じ形になっている。違いは、「イエス・キリスト」の部分が「神」に置き換わっているだけで、内容も全く同じである。したがって、ローマ 3:22 に於ける「イエス・キリストの+ピステイス」を「イエス・キリストを信じる信仰」と訳するのであれば、ローマ 3:3 の「神の+ピステイス」も、「神を信じる信仰」と訳さなければならない。ところが、そちらは「神の真実」として訳されている。これでは訳の一貫性が全くない。

これに着眼したのがカール・バルトである。彼は、ローマ 3:3 は「神の真実」としてしか訳せない以上、ローマ 3:22 も同じように訳すべきとした。そして、「イエス・キリストを信じる信仰」という従来の訳を廃棄し、「神の真実 (treue (独))」と訳した(『ローマ書講解』)。これが波紋を呼んだので、彼は「ローマ書講解」の第二版の序で、なぜそのように訳したかを説明している(参考:「ローマ書講解」上 平凡社 37-38 頁)。

また、20 世紀を代表する神学者パウル・ティリッヒは、訳以前の問題として、「信仰による義認」の伝統的な解釈を批判した。そうした解釈は、神の義を、人間が「信仰」によって勝ち得る行為であるかの如き印象を与えるとして批判したのである(参考:『組織神学 第二巻』226 頁 新教出版社)。ティリッヒは、あくまでも新しい存在(キリスト)の力の中に引き入れられる「救い」が先であり、イエス・キリストを信じる「信仰」はあとであるとし、神の義の原因は「信仰」ではなく、神からの「恩恵」にあるとした(参考:『組織神学 第三巻』新教出版社 281-287 頁)。

このように、訳の一貫性からしても、「イエス・キリストを信じる信仰」という訳はあり得ないことが分かる。また、ティリッヒが指摘したように、人が義とされるのは、神からの「恩恵」であることを聖書は教えている以上、「キリストの血によって義と認められた私たち」(ローマ 5:9)、人が義と認められるのは「イエス・キリストを信じる信仰」によるのではなく、「キリストの血による贖い」によるとすべきである。これを、「イエス・キリストの信実」による義という。つまり、「イエス・キリストを信じる信仰」によって義とされるのではなく、「イエス・キリストの信実」によって、すな

わち「イエス・キリストの十字架の贖い」によって、人は義と認められるというのが、一貫した聖書の教えである。人はあくまでも、キリストにあって義と認められるということである。「キリストにあって義と認められる」（ガラテヤ 2:17）。

ただし、どうしても従来の訳にこだわるのであれば、神からの「義」には、「救い」という意味と、もう一つ神が「友と呼ぶ」という二つの意味があるので、「イエス・キリストを信じる信仰」による「義」を、後者の「義」と解すなら、「イエス・キリストを信じる信仰」と従来のように訳すことも可能ではある（本書 151 頁「義」には二つの意味がある）。あるいは、「イエス・キリストを信じる信仰」を、神の呼びかけに対する応答として解するのであれば、従来の訳も可能ではある（本書 149 頁「信仰」の意味）。ただし、それは可能というだけであって、正しい訳は、「イエス・キリストの真実（信実）」である。実際、「聖書協会共同訳」ではそのように改訳している。

「神の義は、イエス・キリストの真実によって、信じる者すべてに現されたのです。そこには何の差別もありません。」（ローマ 3:22 聖書協会共同訳）

「聖書協会共同訳」では、他にも冒頭で挙げた、「イエス・キリストを信じる信仰」と訳されてきた箇所を同様に改訳している。ローマ 3:26 を、「イエスの真実に基づく者を義とするためでした」とし、ガラテヤ 2:16 を、「人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、ただイエス・キリストの真実によるのだということを知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の行いによってではなく、キリストの真実によって義としていただくためです」とし、ガラテヤ 2:20 を、「神の子の真実によるものです」とし、ガラテヤ 3:22 を、「約束がイエス・キリストの真実によって、信じる人々に与えられるためです」とし、ピリピ 3:9 を、「律法による自分の義ではなく、キリストの真実による義」と改訳している。このように訳されれば、救いに関する誤解も最小限で済み、本書の話もスムーズに理解できることだろう。したがって、「イエス・キリストを信じる信仰」の訳に対する結論は次のようになる。

この項の冒頭で取り上げた、「イエス・キリストを信じる信仰」と訳されていた箇所の原文の意味は、「イエス・キリストの真実（信実）」であって、それはどうすれば救われるのかという話ではなく、どうして神の呼びかけに応答するだけで救われるのか、という話なのである。それは、「イエス・キリストの信実（真実）」のおかげで、という話である。「イエス・キリストの信実」のおかげで救われたからこそ（義とされたからこそ）、イエス・キリストへの信仰を持つことができるという話である。そこで、以

上の話を踏まえ、ガラテヤ 3:22 を正しい訳で考察すると、そこに書かれている話は、以下のようになることが分かる。

❖ ガラテヤ 3:22

ガラテヤ 3:22 の正しい訳は、次のとおりである。

「(前略) 約束がイエス・キリストの真実によって、信じる人々に与えられるためです。」(ガラテヤ 3:22 聖書協会共同訳)

「約束」というのは、この手前を読めば分かるが、神が人を救う「義」のことである。それは、「霊の体」を着せ、「永遠のいのち」を持つようにすることであり、人を「死」から「いのち」に移すことである。聖書は、その「約束」は、「イエス・キリストの真実によって」、その「真実」を信じる全ての人に与えられるという。

ならば、「イエス・キリストの真実」とは何なのだろう。それは、「イエス・キリストの十字架の贖い」であり、人に対する偽りのない神の「誠実な態度」である。それこそが、人の中に神への「信頼を呼び起こすもの」であり、神の「信実」(ピステイス)である。その「信実」を明らかにされた神がイエス・キリストであり、それを聖霊が人の「魂」を介し、その「イエス・キリストの十字架の贖い」を呼びかけてくださっているのである。「霊において (聖霊によって) キリストは (神の子は)、捕らわれていた霊 (死人となった精神) たちのところへ行って宣教されました」(I ペテロ 3:19 新共同訳 ※ () は筆者が意味を補足)。そのおかげで、その呼びかけを信じるだけで、すなわち呼びかけに応答するだけで、人が救われる。それが、「約束がイエス・キリストの真実によって、信じる人々に与えられるためです」の意味するところである。

つまり、「イエス・キリストの真実によって」とは、「神の呼びかけによって」ということであり、「信じる人々」とは、その呼びかけに「応答する人々」ということである。この箇所の意味は、神の呼びかけに応答することで人は救われる、ということであって、それは本書が繰り返し述べてきたことである。このことが分かれば、「信仰に始まり信仰に進ませる」(ローマ 1:17) の意味もさらに深く知ることができる。

「福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。」(ローマ 1:17)

これまでは、「信仰に始まり信仰に進ませる」を、神からの義は、神の救いを受け取る「信実」から始まり、神の言葉を信じる「信仰」に進ませるとして説明してきたが、ガラテヤ3:22の意味が分かれば、ここにはさらにもう一つの意味があることが分かる。それは、「神の義」となる人の救いは、「イエス・キリストの「信実」の呼びかけ」に始まり、人がその呼びかけを「信じること」で手にするという意味である。「信仰に始まり信仰に進ませる」の「信仰に始まり」とは、「神の呼びかけ」に始まりということであり、「信仰に進ませる」とは、その呼びかけを「信じる信仰」ということである。というのも、「信仰」と訳されている言葉はギリシャ語の「ピステイス」[πίστις]であり、そこには二つの概念があるからである。一つは、「信頼を呼び起こすもの」という概念であり、この場合は「神の呼びかけ」が、それに該当する。もう一つは、「信じること」という概念であり、この場合は神の呼びかけに対する「応答」が、それに該当する。つまり、ローマ1:17は、ガラテヤ3:22と同様、神の呼びかけに応答することで人は救われるという、神と人との応酬を教えている(本書149頁「信仰」の意味)。

以上が、「イエス・キリストを信じる信仰」による義についての考察になる。この考察から分かったことは、「イエス・キリストを信じる信仰」という訳には問題があるということである。素直に訳すなら、「イエス・キリストの信実(真実)」である。したがって、人が救われるのは、「イエス・キリストを信じる信仰」によるのではなく、神の呼びかけに応答するからで間違いない。そして、その救いは朽ちない「霊の体」を着せられ、「永遠のいのち」を持つようになることであり、その「永遠のいのち」の本体はキリストなので、「私たちはキリストのからだの部分」(エペソ5:30)、キリストについての御言葉を聞くことで、イエス・キリストを信じられるようになり、「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです」(ローマ10:17)、信じられることで救いの自覚に至るのである。

では最後に、福音の「第一ステージ」は「救い」のステージなので、「救い」にまつわる総括をしたい。

—「救い」にまつわる総括—

福音の「第一ステージ」は、「救い」のステージである。最後に、「救い」にまつわる総括をしたい。まず、人の「救い」となる神からの「義」を、人が受け取る「形」の総括である。それは、神が人に呼びかけ、人がそれに応答することによることを述べてきたが、そうした神からの義を受け取る「形」の総括から始めよう。

❖ 義を受け取る「形」

この世界では、人から何かの報いを得るには、それなりの行いが要求され、頑張った分に応じて報いを得られる。それが、人と人との関わりの「形」になっている。だが、神と人との間では、そうした「人間的な標準」は通用しない。人が何かをし、神がそれを見て報いを与えるということにはならない。いや、神が人に呼びかけをし、「いのち」に至らせる義を差し出してくださるので、人はそれを「ただで」受け取ればよいだけである。「いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい」（黙示録 22:17）。神が呼びかけてくださるので、人はただそれに応答し、神からの義を受け取ればよい。それが、神と人との間の関わりの「形」であり、この「形」は変わることがない。

ただし、神からの義を受け取るというのは、愚かにしか聞こえない神と人を和解させる十字架の言葉を信じることを意味する。つまり、受け取るには「信仰」が必要となる。「宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです」（Ⅰコリント 1:21）。「信仰」で十字架の言葉を受け取ったなら、さらに深く十字架の言葉を受け取るようにと、神は人に呼びかけ、人が神を信頼できるように導き、「友と呼ぶ」関係を目指す。ゆえに、神が人に呼びかけ、人が応答するという「形」が繰り返される。これを「信仰に始まり信仰に進ませる」（ローマ 1:17）という。

その神からの呼びかけは人が誕生したときから始まり、その内容は、人が神と和解できる十字架の言葉である。人は、その呼びかけに応答し、その言葉を受け取ると「霊の体」を着せられ、「永遠のいのち」を持つようになる。これが、神からの救いの義である。とはいえ、神の呼びかけは、人の「体」を介さずに行われるため、人の側は意識できない。これを「潜在意識」と呼ぶ。「体」を介して行う呼びかけは意識できるため、それは「顕在意識」と呼ばれる。要するに、神の呼びかけは「潜在意識」での出来事となるため、人は救いの義を受け取っても意識することはできないということである。しかし、救いの義を受け取ればキリストと交われる「永遠のいのち」を持つようになるので、キリストについての御言葉を「体」を介して聞くと、イエス・キリス

トを知るようになる。「永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです」(ヨハネ 17:3)。こうして、御言葉を聞くことでキリストへの信仰を持つに至り、「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです」(ローマ 10:17)、キリストとの交わりが「顕在意識」で開始する。

イエス・キリストへの信仰を持つと、さらに「神の言葉」を受け取るようにと、神は「潜在意識」に呼びかける。その呼びかけに促され、人は「体」を介し、さらに「神の言葉」を聞くようになる。すると、それが信じられるように導かれる。そのことでキリストへの信頼が増し、友と呼ばれる義に向かう。「彼は神の友と呼ばれたのです」(ヤコブ 2:23)。救いの義から、友と呼ばれる義に進んでいく。このことをイエスは、「わたしが来たのは、羊がいのちを得(義を得)、またそれを豊かに持つためです(義が増し加わる)」(ヨハネ 10:10 ※ () は筆者が意味を補足) と言われたのである。

このように、救いの義を受け取るのは、イエス・キリストを信じる信仰によるのではなく、神の呼びかけに応答することによる。そして、友と呼ばれる義を受け取るのは、「神の言葉」を信じる信仰による。ただし、「神の言葉」を信じるというのも、神の呼びかけに対する応答であり、神からの義を受け取る「形」は、一貫して神の呼びかけに応答するという「形」である。それは、アダムとエバの時から同じである。

❖ アダムとエバの時から同じ

アダムとエバは悪魔の仕業で罪を犯し、その結果、滅ぶしかない「死人」になった。そこで、神は人を救うために呼びかけを開始されたので、彼らは神の声を聞いた。

「そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である【主】の声を聞いた。それで人とその妻は、神である【主】の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。」(創世記 3:8)

ところが、人は神の呼びかけに応答しなかった。それどころか、隠れてしまった。「こんな姿の自分が愛されるはずもない」と、裸である自分を恐れたからである。しかし、神の呼びかけは続き、神は人の心の戸を叩き続けられた。

「神である【主】は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」」(創世記 3:9)

人はその呼びかけを聞き、ついに応答し、神の前に出た。そして、「私は裸なので、恐れて、隠れました」（創世記 3:10）と言った。この時、アダムとエバは救われたのである。これは、神の呼びかけが先にあるので、人はただそれに応答し、神からの義を受け取ればよいことを示している。このように、この「形」は昔から変わらない。

さて、アダムとエバは救われたが、彼らには救いの自覚はなかった。そこで神は二人に、禁断の実を食べたことで何が起きたのかを話された。この「神の言葉」によって、神は彼らに、罪の下に閉じ込められている自分に気づかせ、神にあわれみを乞えるように助けられたのである。すると、彼らは心の中で、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」（ルカ 18:13）と叫ぶことができたので、神は二人に皮の衣で着物を作り、二人に着せられた。

「神である【主】は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。」（創世記 3:21）

神が二人に皮の衣を着せたことには、「あなたの罪は赦されている。わたしは、あなたを愛しているから」という非言語のメッセージが込められていた。この出来事によって、彼らはようやく、救われた自分を自覚することができたのである。

このように、神が呼びかけ、人が応答することで救われるという「形」は、アダムとエバの時から同じである。そして、救いの義の呼びかけは、神が人の「体」を介さずに直接するので、「体」に制約されることはない。「体」を介さずに生じる意識が、先述したように「潜在意識」であり、「体」を介して生じる意識が「顕在意識」である。さらに言えば、「潜在意識」とは、人が自覚的に認識することはできないが、心の深層で神の呼びかけを受け取る領域を指す。一方、「顕在意識」は、思考や感情など、日常的に自覚できる意識のことである。つまり、神の呼びかけは、人が意識できない「潜在意識」に対して行われるので、人は何も心配する必要がない。先のアダムとエバの話は、そのことを示した型である。

余談だが、救いについては何も心配する必要がないので、旧約聖書は、救いについては、わずかに語るのみである。救われるために、人の側で備えるべき「行い」は何もないので、旧約聖書はわずかなことしか語らない。例えば、「耳を傾け、わたしのところに出て来い。聞け。そうすれば、あなたがたは生きる」（イザヤ 55:3）と語る。こ

それは、神の呼びかけを聞き、それに応答する者を神が救うということである。ゆえに、旧約聖書は、神によって救われた者が救いの自覚を持てるようになることに重点を置く。その自覚には、自分の罪に気づき、それを認める必要があるので、旧約聖書では預言者を介して律法を語り、人が罪の下に閉じ込められていることに気づけるようにしている。それは、神がアダムとエバに何が起きたのかを語られたのと同じである。それと並行し、神は「魂」を介し、人を責め立てる。そのことで、気づいた罪を認めさせようとされる。そうすれば、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」（ルカ 18:13）という叫びが生まれ、「あなたの罪は赦されている。わたしはあなたを愛しているから」という内なる声が届き、神からの「平安」が与えられる。その「平安」が、救いの自覚に至らせてくれる。

「しかし、聖書（旧約聖書）はすべてのものを罪の下に閉じ込めました。約束がイエス・キリストの真実によって（神の呼びかけによって）、信じる人々に（応答する人々）与えられるためです。」（ガラテヤ 3:22 聖書協会共同訳）

※（ ）は筆者が意味を補足

見てきたように、救いが先であって、救いの自覚はあとになる。正確に言えば、「イエス・キリストの信実」が私を捕らえてくださったからこそ、キリストを信じられるようになる。「キリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです」（ピリピ 3:12）。捕らえられたのは、神が差し出す御手に掴まったからであり、神の呼びかけを「潜在意識」で聞き、それに応答したからである。つまり、「救い」が先であって、「救い」の自覚はあとになる。そこで次は、「救い」が先であることの総括をしたい。

❖ 「救い」が先

「霊の体」を着せられると、「聖霊」の助けが得られるようになるので、キリストについての御言葉を聞くと、「イエスは主です」と告白できるようになる。「聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません」（I コリント 12:3）。したがって、「霊の体」を着せられる「救い」が先であって、「イエスは主です」という告白はあとになる。このことは、ペテロがイエスに対し、「あなたは、生ける神の御子キリスト」と告白した際、イエスが次のように言われたことから分かる。

「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」（マタイ 16:16-17）

ここでイエスは、ペテロが「生ける神の御子キリスト」と告白できたのは、神がそのことを示したからであって、それは神から出たことだと明言された。神が示したとは、神がペテロに「霊の体」を着せたということであり、それゆえ彼は、イエスの話を聞き、「生ける神の御子キリスト」と告白することができたということである。このように、神による「救い」が先であり、信仰の告白はあとになる。キリストに捕らえられたからこそ、キリストを信じられるようになる。「キリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです」(ピリピ 3:12)。仮に、キリストに捕らえられることもなく、キリストを信じられるようになったとすれば、それは人の知恵によって神を知ったということになるが、そのようなことは断じてあり得ないことを聖書は教えている。

「知者はどこにいますか。学者はどこにいますか。この世の議論家はどこにいますか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。」(I コリント 1:20-21)

キリストに捕らえられる「救い」は、「潜在意識」への神の呼びかけに真実に応答することで得られる。その真実な応答は、ギリシャ語では「ピスティス」と呼ばれる。日本語の聖書はそれを「信仰」と訳しているが、その訳に従えば、人が救われるのは行いによるのではなく、「信仰」によることになる。ただし、その「信仰」は、真実な応答を意味する。その応答は神が呼びかけてくださることで生起するので、応答する「信仰」でさえ、自分自身から出たことではなく、神からの賜物ということになる。

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。」(エペソ 2:8-9)

ここで大事なことは、キリストを信じますという告白は、神によって救われ、「永遠のいのち」(霊の体)を持っているからこそできるということである。ゆえにイエスは、「信じている者は、永遠のいのちを持っています」(ヨハネ 6:47 私訳)と「現在形」で語られたのである。この教えを受けたヨハネも、次のように述べている。

「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。」(I ヨハネ 5:13)

ヨハネは、キリストを信じているなら、もう「永遠のいのちを持っている」と「現在形」で述べた。このことから、イエス・キリストを信じたから義とされたのではなく、神の呼びかけを信じて受け取ったから義とされ、イエス・キリストへの信仰を告白ができるようになったことが分かる。パウロは、それを次のように説明している。

「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」

(ローマ 10:10)

「心に信じて」とは、「潜在意識」(心)に対して行われる神の呼びかけに応答する、ということである。「義と認められ」とは、神が応答した人を正しいと認め、「霊の体」が着せられることを言い表している。そして、「口で告白して救われるのです」とは、「キリストについての御言葉」を「顕在意識」が聞き、キリストへの信仰を告白できるようになることで、「救いの自覚」に至ることを言い表している。イエスはこうした流れを踏まえて、救われた者たちについては次のように祈られた。

「わたしに与えてくださったものはみな(神が救った者はみな)、あなたからのものであることを、今、彼らは知っています。なぜなら、わたしはあなたから受けた言葉を彼らに伝え、彼らはそれを受け入れて、わたしがみもとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じたからです。」(ヨハネ 17:7-8 新共同訳) ※ () は筆者が意味を補足

ここでイエスは、神が救った者はみな、この救いは神から出たことを、「今、彼らは知っています」と言われた。それは、彼らには救われた自覚があるということである。イエスはその理由を、「あなたから受けた言葉を彼らに伝え、彼らはそれを受け入れて(中略)信じたからです」と言われたのである。イエスが天から来た、約束の救い主であるという言葉が彼らが信じられたので、すなわちイエスはキリストであると信じることができたので、彼らは「救い」の自覚を持つことができたということである。

このように、「霊の体」を着せられる「救い」が先であって、「イエスは主です」という告白はあとになる。人は神の呼びかけに「応答」することで救われ、すなわち義と認められ、「永遠のいのち」(霊の体)が与えられ、そのおかげでイエス・キリストを知るようになる。それでイエスは、「永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです」(ヨハネ 17:3)

と祈られた。こうしてイエスは、「永遠のいのち」が与えられる「救い」が先で、父なる神とイエス・キリストを知る信仰の告白はあとになることを明かされたのである。そして、イエスはその「救い」については、次のように教えておられた。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:25)

イエスは、「聞く者」が救われて生きる者になると言われたのであって、「イエス・キリストを信じる信仰」で救われて生きる者になるとは、言われなかった。「神の子の声を聞く」とは、神の子であるキリストが成し遂げた十字架の贖いを、神である聖霊が「神の子の声」として、「死人」である私たちに“今”呼びかけてくださることを意味する。それで、「今がその時です」とある。そして、その呼びかけに応答する者を、すなわち十字架の贖いを受け取る者を「聞く者」という。すると、「霊の体」を着せられて「永遠のいのち」を持つ者となり、生きる者となるのである。これが神による救いであり、救われた者は「死」から「いのち」に移った状態にある。それゆえ、神を信じられるようになるので、イエスはこの手前で次のように教えておられた。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです。」

(ヨハネ 5:24 私訳)

「わたしを遣わした方を信じている者」とは、父とイエスとは一つなので、「わたしと父とは一つです」(ヨハネ 10:30)、イエス・キリストを神として信じている者を指す。イエスは、その者はすでに「永遠のいのち」を持っていると断言された。それはつまり、「永遠のいのち」を持つ「救い」が先であって、イエス・キリストを信じる信仰はあとになるということである。この順序が分かれば、「救い」には「希望」があることも見えてくる。そこで、これについても総括したい。

❖ 「希望」がある

「救い」は、神からの呼びかけから始まる。神からの呼びかけは「体」を介してではなく、人を支えている神の「いのち」である「魂」を介して直接行われるので、誰であれ神の呼びかけを聞くことができる。キリストのことを「体」の五官では聞いたことのない人でも、聞く能力に障がいのある人でも、はたまた乳幼児でも、「体」の制約に

関係なく、誰もが神の呼びかけを聞くことができる。いや、すでに神の呼びかけを聞いているので、誰もが思考することができる。誰もが「魂」を介して神からの呼びかけを「潜在意識」で聞いているからこそ、自己を認識できる（本書 30 頁「－「人の造り」－」）。それゆえ、誰であれ平等に「救い」の機会を有している。あとは、神の呼びかけに応答すれば救われる。

応答とは、ただ神が差し出す御手に掴まることである。それに必要なのは、自分の現状を知るだけである。その現状は滅びに向かっているので、「絶望」でしかない。神なしでは生きられない、自分の弱さでしかない。その現状と向き合えばよい。そうすれば、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」（ルカ 18:13）となり、神の御手に掴まることができる。そこでは「行い」も「知識」も「知性」も必要がない。肉の能力には、全く以て依存しない。ゆえに、神による「救い」には「希望」がある。

しかし、一般的な「決定論」では、神が誰を救うかを決めるので、人の側からの「希望」は全くない。また、一般的な「非決定論」でも、「救い」にはキリストへの信仰の告白が求められるので、告白するのに必要な肉の能力や環境を持っていない者には「希望」が全くない。だが真実は、誰にでも「希望」がある。なぜなら、「救い」には一切の「行い」も、「知識」や「知性」も必要がないからである。それは全て、神の御前でだれをも誇らせないための神の知恵である。「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです」（I コリント 1:21）。

このように、いつの時代のどこの人であろうと、言葉を理解できない人や、あるいは喋ることのできないような障がいのある人であっても、はたまた乳幼児であっても、そうしたことに関係なく、誰であれ救われる機会を持っている。それは、人の「救い」が「体」の能力に全く依存しないからである。それゆえ神は、人が母の胎内にいる時から平等に呼びかけてくださる。「【主】は、生まれる前から私を召し、母の胎内にいる時から私の名を呼ばれた」（イザヤ 49:1）。まことに神の目には、人の区別は全くない。ユダヤ人やギリシヤ人といった区別は全くない。誰であれ、神の呼びかけに応答するなら救われるのである。ここに「希望」がある。

「ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。」

（ローマ 10:12）

「主を呼び求めるすべての人に」とは、主の呼びかけに「応答」する、すべての人ということであり、神にあわれみを乞う者を指す。神はその者に、「恵み深くあられる」という。それは、救われるということである。そして、救われたなら、その者は誰が自分の主なのかを知ろうとする。それで、この続きには次のことが書かれている。

「「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」のです。」(ローマ 10:13)

救われたなら、誰が救い主なのか、「主の御名を呼び求める」ようになるという。その結果、その者はキリストについての御言葉を聞くことで、イエス・キリストが救い主なる主であると信じられるようになる。信じられれば、救われたことを自覚できるようになるので、「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」とある。ここで注意すべき点は、最初は「主を呼び求めるすべての人に」(ローマ 10:12)であったのが、続きでは、「主の御名を呼び求める」と変化していることである。そこには「**御名**」が付け加えられている。つまり、「救い」が先であり、救われたから「主の御名を呼び求める」運びとなるということである。

さて、このとき、キリストについての御言葉を語ることを「伝道」という。ならば、どのように「伝道」すればよいのだろう。「伝道」についても総括したい。

❖ 「伝道」について

人を救うのは神である。神が人に呼びかけ、救いの御手を差し伸べてくださるので、人はそれに掴まることで救われる。これを、神の呼びかけに応答するという。このように、神が人の心に呼びかけ、人の心の戸を叩くことで、神が人を救われる。「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく」(黙示録 3:20)。人が人を説得し、人を救うわけではない。ただし、救われても本人には自覚がないので、自覚に至らせることは人がしなければならない。これが「伝道」である。しかし、誰が救われているかは人には分からないので、全ての人に「伝道」する。その際の言葉は、従来と何も変わらない。

「イエス・キリストを信じなさい、そうすれば救われます！」

救われても自覚がない以上、そして、キリストを信じて初めて救いを自覚できる以上、「イエス・キリストを信じなさい、そうすれば救われます！」と、従来と同じ言葉で伝道すればよい。そのことで信仰が持てたなら、「あなたの信仰は、神からの賜物です」と語り、神によって捕らえられ、救われていたから信じていることができ

たことを教えればよい。したがって、「伝道」は従来と何も変わらない。イエス・キリスト以外に、救いの道がないことを宣べ伝え、「ナザレ人イエス・キリストの御名（中略）この方以外には、だれによっても救いはありません」（使徒 4:10-12）、「信仰による義」を語るのである。パウロもシラスも、そのように「伝道」した。

「「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか」と言った。ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と言った。」（使徒 16:30-31）

これは、主イエスを信じれば、自動的に家族も救われるという意味ではない。家族も、あなたと同様に、主イエスを信じれば救われるという意味である。ここで救いの質問をしたのは牢獄の看守であり、パウロとシラスが牢獄にいたときに会った人物である。その時の様子は次のとおりであった。

パウロとシラスは獄中で、神に祈り賛美していた。すると、真夜中に突然、大地震が起こり、たちまち牢獄の扉が開いた。看守は地震で目を覚ますと、扉が開いていたので、罪人が逃げたと思った。それで、責任を取って自害しようとした。その時、パウロが大声で、「自害してはいけない。私たちはみなここにいる」（使徒 16:28）と叫んだ。看守は、パウロたちが逃げていなかったことに驚くと同時に、自害せずにすんだことの感謝から、二人を外に連れ出した。この行動から、この看守は神の呼びかけを聞き、それに応答して救われていたことが分かる。なぜなら、看守は、「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか」と二人に尋ねたからである。この質問は、神であるキリストに捕らえられていなければできない。神に捕らえられていたので、「主を呼び求める」のではなく、先述した、「主の御名を呼び求める者」（ローマ 10:13）となり、この質問をすることができた。そこで、二人は「主の御名」を教えたのである。それが、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」であった。このことから、ここでの「主イエスを信じなさい」は、明らかに救いの自覚に至らせるためであったことが分かる。

このように、「伝道」は従来と何ら変わりがない。ただ注意すべきことは、「伝道」とは収穫であって、収穫する実を成らせるのは、すなわち人を救うのは、神だということである。それでイエスは、「伝道」については、「収穫」という言葉を用い、次のように言われたのである。

「その後、主は、別に七十人を定め、ご自分が行くつもりのすべての町や村へ、ふたりずつ先にお遣わしになった。そして、彼らに言われた。「実りは多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主は、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」(ルカ 10:1-2)

ここでイエスは、「実りは多いが、働き手が少ない」と言われた。神が救った者は多いが、彼らを収穫する者が少ないということである。この言葉からも、「伝道」は神が救った者を収穫することだと分かる。そして、イエスは弟子たちに、「さあ、行きなさい」(ルカ 10:3)と伝道を命じ、さらに次のことを言われたのであった。

「どんな家に入っても、まず、『この家に平安があるように』と言いなさい。もしそこに平安の子がいたら、あなたがたの祈った平安は、その人の上にとどまります。だが、もしいないなら、その平安はあなたがたに返って来ます。」
(ルカ 10:5-6)

イエスは弟子たちに、そこに「平安の子」がいたらと言われた。「平安の子」とは、神によって救われた子であり、もしも救われた子がそこにいれば、弟子たちが語る御言葉によって、その者は救いの自覚に至るので、「あなたがたの祈った平安は、その人の上にとどまります」と、イエスは言われたのであった。つまり、神が人を救い、救われた「平安の子」を収穫するのが「伝道」である。しかし、多くの人々は、人が人を救うのが「伝道」だと思っているので、とても自分にはできないとあきらめてしまう。そこで、イエスはそうした人たちを励ます意味で、次のようにも言われたのである。

「あなたがたは、『刈り入れ時が来るまでに、まだ四か月ある』と言ってはいませんか。さあ、わたしの言うことを聞きなさい。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。」(ヨハネ 4:35)

ここでもイエスは、人を救うのは神であって、人がするのは刈り取りであることを教えておられる。つまり、神が人を救うのであって、人のすることは誰に対してもキリストの福音を語り、神が救った者たちが救いの自覚を持てるようにする刈り取りなのである。この刈り取りを「伝道」という。この流れが分かれば、「救い」に関する長年の議論にも決着を見ることができる。その議論については、前項の「希望」がある」でも少し触れたが、今度は少し詳しく見てみたい。

❖ 決着を見る

昔から、「救い」に関する議論は繰り返されてきた。その中、「救い」に関する二つの考え方が生まれた。一つは、神が誰を救うかを決めるという「決定論」である。もう一つは、神が誰を救うかを決めるのではなく、救いを選ぶのは人間とする「非決定論」である。「決定論」は一般的に「予定説」と呼ばれているが、「決定論」であれば、誰を救うかは神が決めることになるので、キリストのことを聞いたことのない人でも、言葉を理解できない人や、あるいは喋ることのできないような障がいのある人であっても、はたまた乳幼児であっても、神が予め彼らを救うと決めていれば救われることになる。それゆえ、救いは人が心配することではなくなる。

だがそうすると、人間が自分の救いを願ってもそれは無意味になる。神が誰を救うかをすでに決定している以上、人の側には救いを望む権利もないことになる。人には自由がないことになり、「人格」がないことになってしまう（本書 108 頁『『人格』について』）。そこで、自らの意志で救いを選ぶ「非決定論」の考えも生まれた。ただし、救われるには、キリストへの信仰告白を必要とするので、キリストのことを聞いたことのない人や、「体」が持つ制約から信仰告白のできない人はどうなるのかという疑問が常に付きまとうことになった。こうして、「決定論」も「非決定論」も不十分のまま、それでも互いに多くの御言葉を根拠に、互いの主張は相容れないまま平行線を辿ってきた。

しかし、見てきて分かったように、神の救いは「決定論」でも「非決定論」でもない。ただし、神の救いは、神が全ての人に呼びかけることで行われるので、神の呼びかけだけに目を留めるなら、神が救いを決める「決定論」になる。ところが、救われるには神の呼びかけに応答する必要があるので、そのことだけに目を留めるなら、それは「非決定論」になる。これであれば、「救い」に関する長年の議論も決着を見るのである。では、まとめをしよう。

❖ まとめ

人の「究極の問題」は、自然の体のままでは滅びるしかないということにある。この解決は、滅びることのない「霊の体」を着せてもらうことである。「霊の体」を着せられ、「永遠のいのち」を持つようになれば滅びない。これが福音の「第一ステージ」であり、それは「死」から「いのち」に移される福音である。イエスはこの福音を、「死からいのちに移っているのです」（ヨハネ 5:24）と言われた。問題は、その救いをどのようにして手にするかである。それについては、イエスは次のように言われた。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:25)

イエスは、私たちのことを「死人」と呼んだが、それは誰もがアダムにあって死んでいるからである。「アダムにあってすべての人が死んでいるように」(I コリント 15:22)。その「死人」が、神の子の声を、すなわち神の声を聞く時が来ると言い、「今がその時」だと言われた。これは、誰に対しても神は“今”呼びかけておられるということである。そして、その呼びかけに応答する者は(聞く者は)、「生きるのです」と言われた。それは「霊の体」を着せられ、「生きる者」になるということである。ここで大事なことは、神が人に呼びかけ、神が人を救われるということである。その神からの呼びかけが、聖霊が「魂」を介して人の「潜在意識」に行う、「イエス・キリストの真実(信実)」の証しである。人はその「イエス・キリストの真実(信実)」によって救われるのである。

ところが、プロテスタントでは、救いは「イエス・キリストを信じる信仰」で手にするというのがルター以来の標語であった。その標語は、「イエス・キリストの+ピステイス」を、「イエス・キリストを信じる信仰」と訳すことで堅持されてきた。それは、当時のカトリックの教えに対抗するには、救いは「行い」ではなく、「信仰」であることを強調する必要があつて、「イエス・キリストを信じる信仰」で救われるという意味に訳された。こうして、この訳については長い間、異論を唱える者はほとんどいなかったが、近代になってこの訳に疑問を持つ専門家たちが現れ、ついに近年、聖書協会共同訳は、「イエス・キリストを信じる信仰」を、「イエス・キリストの真実」と改訳するに至った。そのことで、ようやくイエスが言われた救いの教えが表舞台に立つこととなった。というのも、イエスが言われたのは、「死人」が神の呼びかけに、すなわち「イエス・キリストの真実」に、ただ応答することで救われるということであつて、「イエス・キリストを信じる信仰」で救われるとは言われていなかったからである。

しかし、「イエス・キリストを信じる信仰」で救われるという長年の思い込みから、例えばイエスが言われた、先の「死人」(ヨハネ 5:25)の意味を、「墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。善を行つた者は、よみがえっていのちを受け」(ヨハネ 5:28-29)という箇所を引き合いに出し、それは死んで、墓の中にいる人のことであるとした。それゆえ、生きているときに「善を行つた者」は、「よみがえっていのちを受け」と訳されてきた。だが、「善を行つた者」の「行つた者」は、アオリ

ストの分詞なので、それは「善を行う者」という意味である。さらには、「よみがえっていのちを受け」の「いのち」は属格なので、それは「いのち の」と訳さなければならない。つまり、その箇所の正確な意味は、「善を行う者」は、「いのち の よみがえりに至り」である（田川訳）。これは、イエスがヨハネ 5:25 で言われた、神の呼びかけに応答する「死人」を、「善を行う者」と言い換え、ヨハネ 5:25 で言われた、その者は「生きるのです」を、「いのち の よみがえりに至り」と言い換えているだけである。私たちの生まれながらの状態は死んでいるので、ヨハネ 5:25 で言われた「死人」を、「墓の中にいる者」と言ったのである（本書 120 頁「ヨハネ 5:25 の解説」）。

私が常々気になっているのは、聖書の肝心な箇所が、時として、原文に忠実には訳されていないということである。例えば、「霊の体」がいつ着せられるのかを教えている箇所がそうである。それは、「神は、御心のままに、それに体を与え、一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります」（I コリント 15:38 新共同訳）と訳され、あたかもこれから「霊の体」が着せられるかのような話になっている。しかし、原文は、「体を与えられています」であって、「現在形」である。ゆえに、「霊の体」を与えられている者は、「死」から「いのち」に「復活」しているので、この先では、「霊の体が復活させられている」（I コリント 15:44 私訳）と「現在形」で書かれている。ところが、新共同訳では、「霊の体が復活するのです」（I コリント 15:44 新共同訳）と「未来形」にも読める意味に訳されている。では、その先も全てが間違っているかと言えば、その先にある I コリント 15:52 はその限りではない。「霊の体」が着せられていれば、肉体の死という最後のラッパが鳴れば土に帰ることなく、復活できるので、その原文は「未来形」で書かれているのである。「最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます」（I コリント 15:52 新共同訳）と、正しく「未来形」で訳されている。これでは、聖書がせっかく「現在形」と「未来形」を区別しているにもかかわらず、その意味が失われてしまう。イエスが言われた、「死からいのちに移っているのです」（ヨハネ 5:24）の教えを、それは「霊の体」が着せられていることであると、せっかくパウロが具体的に説明しても意味がない（本書 127 頁「―「霊の体」はいつ着せられるのか―」）。

いずれにせよ、聖書を原文に忠実に訳すなら、聖書は、神が人に呼びかけ、神が人を救い、人を「死」から「いのち」に移すことを教えている。それは「霊の体」を着せ、「永遠のいのち」を持たせるということであり、その「永遠のいのち」を持たせられた

者は、キリストの言葉を聞くと、キリストへの信仰が生起するということである。「永遠のいのちとは、(中略) イエス・キリストとを知ることです」(ヨハネ 17:3)。

このように、人を救うのは神なので、人は救いについては何ら心配する必要はない。心配すべきは、救いの自覚に至るかかどうかである。それゆえ、旧約聖書に書かれているのは、専ら人を罪の下に閉じ込め、人を絶望に追い込む「律法」である。「聖書(旧約聖書)は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました」(ガラテヤ 3:22 ※ () は筆者が意味を補足)。というのも、絶望に追い込まれると、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」(ルカ 18:13) となり、「あなたの罪は赦されている。わたしはあなたを愛しているから」という内なる声で神からの「平安」が届き、それにより救いの自覚に至るからである。ゆえに、私たちの心配すべきことは、神によって救われた者に御言葉を届け、彼らが救いの自覚に至ることである。ただ、誰が救われているかは分からないので、全ての人に福音を届けるのである。

さて、人の救いについては旧約聖書も教えている。それについては少し触れたが、旧約聖書は新約聖書の影なので、そこにも救いの話が明確に書かれている。それを最後に紹介し、それに関連する話を以て福音の「第一ステージ」の締め括りとしたい。

❖ 旧約聖書に見る救いの教え

イエスは、「死人」が「生きる者」となる救いについては、次のように言われた。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:25)

ここでイエスは、「死人」が神の呼びかけを聞き、それに応答することで「生きる者」となり、人は救われることを教えられた。旧約聖書には、これと全く同じ霊的な「構造」を示す神の教えがある。その代表的な教えを挙げよう。

「耳を傾け、わたしのところに出て来い。聞け。そうすれば、あなたがたは生きる。わたしはあなたがたと永遠の契約を結ぶ。それは、ダビデへの確かで真実な約束である。」(イザヤ 55:3 新改訳 2017)

ここで神は、「聞け。そうすれば、あなたがたは生きる」と言われた。つまり、神の呼びかけを聞き、それに応答することで、人は救われるということである。「死人」が

「生きる者」になるということである。そして神は、これを「永遠の契約」とされた。では、いつ私たちは神の呼びかけを聞くのかというと、預言者は続けて言う。

「【主】を求めよ、お会いできる間に。呼び求めよ、近くにおられるうちに。」
(イザヤ 55:6 新改訳 2017)

ここで預言者は、「お会いできる間に」、「近くにおられるうちに」主を求めよと言う。それはつまり、生きている“今”が、神の呼びかけを聞く時であるということである。イエスは、「死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です」(ヨハネ 5:25)と言われたが、それと同じ内容である。さらに預言者は続けて、神の呼びかけに応答することを、「【主】に帰れ」と言い、そうすれば次のようになるという。

「悪しき者は自分の道を、不法者は自分のはかりごとを捨て去れ。【主】に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださいから。」(イザヤ 55:7 新改訳 2017)

主に帰るなら、「主はあわれんでくださる」という。その意味は、「豊かに赦してください」ことだという。すなわち、罪が赦され、「死」から「いのち」に移されるということである。「永遠のいのち」を持つようになるということである。これはイエスが言われた、「永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです」(ヨハネ 5:24 私訳)と霊的に一致する「構造」である。そしてパウロは、神がイエスを死者の中からよみがえらせたことを、先のイザヤ 55:3 の「それは、ダビデへの確かで真実な約束である」を引用し、次のように述べている。

「神がイエスを死者の中からよみがえらせて、もはや朽ちることのない方とされたことについては、『わたしはダビデに約束した聖なる確かな祝福を、あなたがたに与える』というように言われていました。」(使徒 13:34)

パウロはここで、先に見たイザヤ 55:3 の「それは、ダビデへの確かで真実な約束である」を、『わたしはダビデに約束した聖なる確かな祝福を、あなたがたに与える』と言い換え、その約束の内容は、「聞け。そうすれば、あなたがたは生きる」(イザヤ 55:3 新改訳 2017)であったことから、それをイエスのよみがえりに重ね、それは神が「死人」を「生きる者」にすることを示した「型」であると、したのである。

つまり、パウロは、神の靈感によって、イザヤ 55:3 の「聞け。そうすれば、あなたがたは生きる」の中に、イエスが言われた、「死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです」（ヨハネ 5:25）と全く同じ霊的な「構造」があることを知り、それを十字架刑で「死人」となられたイエスがよみがえり、「生きる者」となられた出来事に適用させたのである。そして、これは「死人」であった私たちも「生きる者」になれることを示した「型」であるとし、これこそが良い知らせとしたのであった。「私たちは、神が父祖たちに対してなされた約束について、あなたがたに良い知らせをしているのです」（使徒 13:32）。このパウロの説教を聞き、多くの異邦人たちは主を賛美し、信仰に入った。

「異邦人たちは、それを聞いて喜び、主のみことばを賛美した。そして、永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰に入った。」（使徒 13:48）

「永遠のいのちに定められていた人たち」とは、神の呼びかけに応答し「永遠のいのち」を持つようになった人たちである。その人たちが、パウロによるイエス・キリストの証しを聞き、「みな、信仰に入った」という。これは、救いの自覚に至ったということである。このように、先の一連のイザヤ書の御言葉には、イエスが言われた救いの教えの影を見ることができる。

他にも、旧約聖書には次のような教えがある。

「私は今日、あなたがたに対して天と地を証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいをあなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。」

（申命記 30:19 新改訳 2017）

ここで神はモーセを通して、神の「いのち」を選ぶのか、それとも「死」を選ぶのかの選択を迫った。ならば、神の「いのち」はどうすれば手に入れられるのか。そのことが、この続きに書かれている。

「あなたもあなたの子孫も生き、あなたの神、【主】を愛し、御声に聞き従い、主にすぐるためである。まことにこの方こそあなたのいのちであり、あなたの日々は長く続く。」（申命記 30:19-20 新改訳 2017）

神の「いのち」は、ここにあるように、「御声に聞き従い」手にするのである。すなわち、神の呼びかけに応答し、神に従うことで手にする。ここにも、イエスが言われた救いの教えの影を見ることができる。他にも、次のような教えがある。

「ほめたたえられる方、この【主】を呼び求めると、私は、敵から救われる。」
(詩篇 18:3)

「【主】を呼び求める」とは、神の呼びかけに応答するということであり、「敵から救われる」とは、「死」から「いのち」に移されるということである。ここにも、イエスが言われた救いの教えの影を見ることができる。他にも、次のような教えがある。

「神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」」(イザヤ 30:15)

「立ち返って静かにすれば」とは、肉の耳で世の声を聞くのではなく、心の耳で、神の呼びかけを聞くなら、ということである。そして、その神の呼びかけを「信頼すれば、あなたがたは力を得る」とあるように、神の呼びかけに応答すれば救われるということである。ここにも、イエスが言われた救いの教えの影を見ることができる。

このように、旧約聖書は新約聖書の影なので、そこにもイエスが言われた救いの話と全く同じ霊的な「構造」を示す神の教えがある。旧約聖書には、他にも同様の「構造」で書かれた救いの話はあるが、これくらいで十分だろう。とはいえ、パウロが旧約聖書に潜伏していた救いの話を見つけられたのは、イエスの教えがあったからこそである。イエスの言葉がなければ、それらは別の意味に解されてしまい、旧約聖書には信仰による、すなわち神の呼びかけに応答するだけで救われるという話はないとなっていた。実際、パウロはイエスと出会う前は、そのように理解していた。したがって、イエスの言葉が聖書の意味を正しく知る「光」なのである。その「光」は、救いの「構造」を明らかにした。着目すべきは、まことに救いの「構造」である。

❖ 救いの「構造」

イエスが明らかにされた救いの「構造」は、神が人に呼びかけ、人が「信じます」と応答することで成就する仕組みである。その仕組みの「構造」を説明するのに、聖書

では様々な言葉が使われてきたのである。その時々状況にあった言葉で、救いの「構造」が説明されてきた。

では、なぜ救いは神からの呼びかけで始まるのかといえ、すべての人がアダムにあって死んでいた、「アダムにあってすべての人が死んでいるように」（Ⅰコリント 15:22）、死んでいる人の側からでは、生きている神に対して何もできないからである。それゆえ、救いは「死人」への、神の呼びかけから始まる。あとはその呼びかけに応答し、差し出された救いの御手を掴むだけである。御手を掴むことが「**信じます**」であり、「**信仰**」である。つまり、人は「**行い**」ではなく、「**信仰**」で救われるのである。これが、イエスが明らかにされた救いの「構造」であり、神の義の「構造」である。

「神の義は、イエス・キリストの**真実**（イエス・キリストの十字架の贖いの呼びかけ）によって、**信じる者**（その呼びかけに応答する者）すべてに現されたのです。そこには何の差別もありません。」（ローマ 3:22 聖書協会共同訳）

※（ ）は筆者が意味を補足

この救いの「構造」が最初に示されたのは、神からの、アダムへの呼びかけに於いてである。神は死んだアダムに呼びかけた。「神である【主】は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」」（創世記 3:9）。この救いの「構造」は、この時点から一貫している。

このように、救いの「構造」は、神が人に呼びかけ、人が「**信じます**」と応答することで成就する仕組みである。大切なのは、聖書の言葉を見ると同時に、その言葉を支えている霊的な「構造」を知ることである。喩えるなら、この世界には様々な建物があるが、その建物を支えている「構造」を知らなければ、同じ建物は建てられないからである。見た目は同じように造ることができても、「構造」が異なれば偽物であって、それは崩壊してしまう。同様に、見た目には同じ『主よ、主よ』という者であっても、それがイエスの言われた救いの「構造」に立っていなければ偽者であり、天の御国に入ることはできない。それでイエスは、次のように言われたのである。

「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。」

（マタイ 7:21）

「みこころを行う者」とは、イエスが言われた、神の呼びかけに応答する者である。御利益目当てに、『主よ、主よ』という者ではない。

見てきたように、聖書を読む上で重要なのは、そこに書かれている言葉を支えている霊的な「構造」を知ることである。パウロは、そのことを神の靈感によって教えられたからこそ、旧約聖書の霊的な意味を解き明かすことができた。

例えば、パウロは創世記 15:6 の「【主】を信じた。主はそれを彼の義と認められた」（創世記 15:6）を引用し、それを「アブラハムには、その信仰が義とみなされた」（ローマ 4:9）と言い換え、人は「行い」ではなく「信仰」で救われるとした。ところが、創世記 15:6 は「死人」が「生きる者」になる救いの話ではない。それは、神がアブラハムに言われた、「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」（創世記 15:5）を信じますと言った話にすぎなかった。しかし、この神とアブラハムとのやり取りの中に、パウロは神の靈感によって、イエスが言われた救いの「構造」があることを知り、創世記 15:6 を再解釈したのである。そういう意味では、新約聖書は旧約聖書の霊的な再解釈である。

以上で以て、福音の「第一ステージ」を終わる。これは最も重要なステージなので、このように多くの頁を使わせてもらった。さて、次は人の「現実の問題」を解決する、福音の「第二ステージ」である。それは、救いの自覚を目指すところから始まり、自分の「真実な姿」を知ることまでを目指す。

第五章 福音の「第二ステージ」

人の抱える問題は二つある。一つは、必ず滅びるという「究極の問題」であり、もう一つは、自分の「真実な姿」が見えないという「現実の問題」である。どちらも、悪魔の仕業で入り込んだ「死」に起因する。「死」が入り込んだことで、滅びに向かう「有限性」の体になり、その体では「永遠性」の神が見えないので、神に愛されている自分の「真実な姿」が見えない。そのため、人は「不安」を覚え、見える安心を求めて罪を犯すようになった。そこで、まず「究極の問題」を解決するために福音の「第一ステージ」があり、そこでは「有限性」の体が滅びてしまう前に、滅びることのない「霊の体」が着せられる。それを着せたなら、次に「現実の問題」の解決へと進む。それが福音の「第二ステージ」であり、そこでは自分の「真実な姿」が見えるようにすることで「不安」を取り除き、人が罪を犯さないようにすることを目指す。

つまり、「霊の体」を着せ、自分の「真実な姿」が見えるようにする一連の作業は、罪を取り除くという作業である。それでキリストは、罪を取り除くために来られたという。「キリストが現れたのは罪を取り除くためであった」(Ⅰヨハネ 3:5)。しかし、罪というと、私たちは道德規範に違反する「肉の行い」だけを連想するのが常である。だが、それでは「神の福音」は「肉の行い」を排除するだけの話になってしまい、自分の「真実な姿」が見えるようにするという、福音の「第二ステージ」が見えなくなる。そこで、福音の「第二ステージ」に入る前に、罪について整理しておきたい。

❖ 罪についての整理

「罪」は、「死」の運動である。「罪が死によって支配したように」(ローマ 5:21)。「死」の運動は、神の「いのち」に逆らう運動なので「罪」である。「死」の運動は滅びに向かわせる変化であり、変化しない神とは敵対するので「罪」である。その「死」の運動が人の中に入り込み、人の体は滅びに向かって変化し続ける「有限性」になった。その結果、人は実質「死人」となり、「永遠性」の神とは「分離」した状態になった。この状態が「罪」である。そこで聖書は、「死」のとげを「罪」と呼んでいる。「死のとげは罪であり」(Ⅰコリント 15:56)。それは、神と人とは「分離」した状態を指す。

この「有限性」の体では、「永遠性」の神を認識できないので、神に愛されている自分の「真実な姿」は見えない。「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている」(Ⅰコリント 13:12 新共同訳)。このことが「不安」を生じさせるので、人は「不

安」を排除すべく、愛される自分を目指すようになった（承認欲求）。それは、「愛せよ」に集約される神の律法に逆らう「行為」なので、聖書はこれも罪とする。「罪とは律法に逆らうことなのです」（Ⅰヨハネ 3:4）。つまり、罪は神の律法に逆らう「行為」であっても、その「行為」を引き起こしているのが、神と分離した「状態」なのである。その状態が「死」であり、聖書はそれを「罪」とし、「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）、「罪の行為」とは分けている。

このように、罪の正体は、第一に神と分離した「状態」である。第二に、神に逆らう「行為」である。分離した「状態」が不安を引き起こし、神に逆らう「行為」に向かわせている。それで聖書は、「状態の罪」と、「行為の罪」との違いを表すために、神と分離した「状態の罪」を「死」と呼び、神に逆らう「行為の罪」を「肉の行い」（ガラテヤ 5:19）と呼ぶ。また、神と分離した「状態の罪」を言い表す際は、原語では概ね単数形が使われ、「死のとげは罪（単数形）であり」（Ⅰコリント 15:56）、「行為の罪」を言い表す際は、原語では概ね複数形が用いられている。「不法を赦され、罪（複数形）をおおわれた人たち」（ローマ 4:7）。

罪 = 死 = 分離 → 不安 → 肉の行い(罪)
単数形複数形

そして、「究極の問題」を解決する福音の「第一ステージ」が、「状態の罪」（単数形）への対応となり、「現実の問題」を解決する福音の「第二ステージ」が、「行為の罪」（複数形）への対応となる。どちらも、悪魔の仕業で入り込んだ「死」への対応なので、「神の福音」は、悪魔の仕業を打ちこわすためにある。「悪魔のしわざを打ちこわすためです」（Ⅰヨハネ 3:8）。では、福音の「第二ステージ」のあらましから見ていこう。

－「第二ステージ」のあらまし－

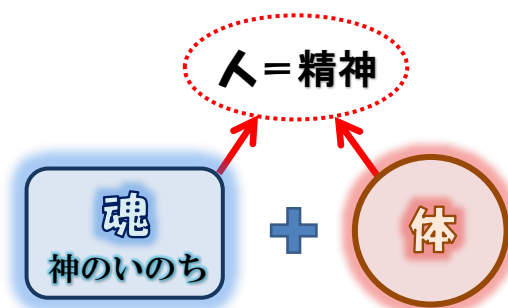
「神の福音」の「第二ステージ」は、聖書が教えている人の「真実な姿」を知ることである。ならば、聖書が教える人の「真実な姿」とは何なのだろう。

❖ 人の「真実な姿」

人は神に似せて造られた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて」（創世記 1:26）。したがって、神がぶどうの木であれば、人はその枝である。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」（ヨハネ 15:5）。そうである以上、人は神と同じ「不変の価値」を持ち、神から無条件で愛されている存在である。それゆえ、人は神に愛されようと頑張る必要は全くない。別の言い方をするなら、自らの力で、自らの価値を獲得する必要は全くないということである。これが人の「真実な姿」であり、それは一言でいえば、「非常に良い！」である。「それは非常に良かった」（創世記 1:31）。このことは、「人の造り」からも知ることができる。

❖ 「人の造り」

人とは、「魂」と「体」とによって機能する「精神」である。その「魂」は神の「いのち」の部分なので、「神の思い」を発信する。また、神は愛であり、愛は「統合運動」なので、「魂」は「神の思い」を発信すると同時に、その思いと「体」が持ち込む情報とを結びつけようとする。すると、そこに認識が生じ、思考が開始する。そうした意識の総合体が「精神」であり、人である。つまり、実体としてあるのは「魂」と「体」であり、その二つによって機能するのが「精神」である。平たく言えば、「魂」の発信する「神の思い」と、「体」の持ち込む情報とが結びつこうとする場所が「精神」である（本書 30 頁「－「人の造り」－」）。



このように、人は神の「いのち」（魂）に動かされている。つまり、人は神の中に生き、神にあって存在しているのである。「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」（使徒 17:28）。それは、太陽の光が誰の上にも降り注いでいるように、神

の愛が誰の上にも降り注がれているということであり、何の差別なく、神に無条件で愛されているということである。そのおかげで、誰であれ認識ができ、思考ができる。

したがって、人の「真実な姿」は、無条件で神に愛されている姿である。神の「いのち」である「魂」は、神が人を無条件で愛しているという「神の思い」を、太陽の光のように発信している。神が人を造られた当初、人はその「神の思い」を「体」の持ち込む情報でも確認できたので、自分たちが裸であっても恥ずかしいとは思わなかったと、聖書は綴っている。「人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいとは思わなかった」(創世記 2:25)。ところが、そこに「死」が入り込んだのである。

❖ 「死」が入り込んだ

ある時、エバは悪魔に操られた「蛇」に欺かれて罪を犯し、「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように」(Ⅱコリント 11:3)、一緒にいたアダムも罪を犯してしまった。それは、「神と異なる思い」を持ったということであり、そのことで神との一致は崩壊し、神と人を分離する「死」が自動的に入り込んでしまった。「ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がった」(ローマ 5:12)。すると、二人は神に愛されている自分を認識できなくなり、自分たちが裸であることに恐れを抱くようになった。「私は裸なので、恐れて、隠れました」(創世記 3:10)。それは、自分の「真実な姿」を認識できなくなったということであり、「無限性」の神を認識できない「有限性」の体に、すなわち「死の体」になったということである。

このように、悪魔の仕業で、神と人を分離する「死」が入り込み、「体」も世界も「有限性」になった。そのせいで、「体」は「神の思い」を確認できる情報を持ち込めなくなり、人は自分の「真実な姿」を認識できなくなった。そのことの「不安」から、人は見える安心をむさぼるようになり、「罪の道」を歩くようになった。

❖ 「罪の道」を歩く

アダムとエバは、自分の「真実な姿」を認識できなくなると「不安」になり、いちじくの木の実で腰のおおいを作った。「いちじくの実をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った」(創世記 3:7)。それは、人は自らの努力で自らの価値の獲得を目指すようになったことを意味する。そのせいで、人は互いの価値を比べるようになり、価値の獲得を巡って争うようになった。この争いが、神の戒めである「愛せよ」に逆行する「罪の道」となり、神の戒めを実行できるように造られていた人を苦しめることになった。つまり、人を愛せなくなり、そのことが人を苦しめた。

このように、「死」が入り込んだことで人は自分の「真実な姿」を認識できなくなり、すなわち自らが持つ素晴らしい自分の価値を認識できなくなり、自らの努力で自らの価値の獲得を目指すようになった。それは、互いを比べ競い合う道なので、神の戒めである「愛せよ」に逆行する「罪の道」であった。これが、人を苦しめる「現実の問題」である。そこで、「神の福音」の「第二ステージ」は、この「現実の問題」の解決を目指す。それは自分の「真実な姿」を知るようにすることであり、そのあらましは次のようになる。

❖ 「第二ステージ」のあらまし

人は神の部分なので、「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」(ヨハネ 15:5)、人は神と同じ価値を持っている。神から無条件で愛される「不変の価値」を持っている。人がどのような状態になろうとも、人は神の部分なので、神からは無条件で愛されている。そこで、その価値を人に思い起こさせるために、イエスは十字架に架かられた。十字架でご自分のいのちさえも惜しくないほどに人を愛していることを証しし、愛される価値は努力によって獲得するのではなく、もうすでに与えられていることを明らかにされたのであった。要するに、人の価値は神からの「贈り物」なのである。こうして、イエスは十字架に架かられたことで、神からの「贈り物」を思い起こさせ、神からは無条件で愛されている人の「真実な姿」を人を知るようにされたのであった。そして、それを知るに至る「第二ステージ」のあらましは、次のとおりである。

最初に神は、神の呼びかけに応答する者に「霊の体」を着せられる。そうすることで、神は人を救う。ただし、その救いを人は自覚できないので、次に神は「神の言葉」を以て人の罪をあぶり出し、人を絶望へと追い込まれる。「聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました」(ガラテヤ 3:22)。その中、人が自分の絶望と向き合うことができれば、その人は神に助けを乞うようになるので、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」(ルカ 18:13)と祈る。すると、罪が赦される「赦しの恵み」を受け取ることができ、神に無条件で愛されている自分の「真実な姿」を知ることになる。それにより、救われた自分を自覚できるようになる。

これを皮切りに、さらに神は「神の言葉」で罪をあぶり出し、「赦しの恵み」をさらに受け取れるようにしてくださる。この受け取りを「信仰」といい、「信仰」を通して神は「死」による「悪」から私たちをきよめ、神に無条件で愛されている自分の「真実な姿」を、さらに知るようにしてくださる。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」(Ⅰヨハネ 1:9)

こうして、人は罪が赦される体験を繰り返すことで、神に無条件で愛されている自分の「真実な姿」をますます知るようになっていく。したがって、多くの罪が赦されたなら、神に愛されている自分の「真実な姿」を多く知るようになり、それがそのまま神への愛を多く創造する。

「だから、言うておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」

(ルカ 7:47 新共同訳)

以上が、「第二ステージ」のあらましである。それは、神が「神の言葉」によって罪を人に認識させ、人を絶望に追い込み、そのことで神にあわれみを乞うようにさせ、罪が無条件で赦される「赦しの恵み」を「信仰」で受け取らせるステージである。この作業を繰り返すことで、人は無条件で愛されている自分の「真実な姿」を知るようになっていき、自らの努力で自らの価値を獲得しようとする罪は洗い流されていく。

そして、「信仰」で受け取る「赦しの恵み」の最初の体験が、「救い」の自覚をもたらす。その後の「信仰」で受け取る「赦しの恵み」の体験が、「永遠のいのち」を持っていることを信じられるように助け、「復活」への希望を持たせてくれる。それが、無条件で愛されている自分の「真実な姿」を知るようになる行程であり、神からの「贈り物」である、自分の「不変の価値」を思い起こすということである。それは、まさしく神への「信仰」が成長していく道にほかならない。逆に言うと、「神の言葉」を信じない「不信仰」が排除されていく道であり、これが「第二ステージ」のあらましである。そこで次は、「信仰」の成長という視点で「第二ステージ」を見ていく。

－「信仰」の成長－

人は「死の体」になったことで、自分の「真実な姿」を認識できなくなった。そのことが人を「不安」にさせたので、人は自らの努力で自らの価値の獲得を目指すようになった。その結果、人は自分の価値の獲得を巡って互いを比べ、争うようになり、人は人を愛せなくなった。こうして、自分の「真実な姿」を認識できないことが、人を愛せない「罪の道」となり、人を苦しめることになった。これが人の抱える「現実の問題」なので、福音の「第二ステージ」は、認識できなくなった自分の「真実な姿」を知るようにすることを目指す。それは、聖書が教えている人の「真実な姿」、「見よ。それは非常に良かった」（創世記 1:31）を信じられるように神が助けてくださるということである。つまり、人の「真実な姿」を教えている「神の言葉」を素直に信じることができるよう、「信仰」の成長を助ける作業が福音の「第二ステージ」である。

❖ 「信仰」の成長を助ける

福音の「第二ステージ」では、神が人の「不信仰」の罪を取り除き、「神の言葉」を信じる「信仰」の成長を助けてくださる。それによって、「救い」を自覚できるようにし、さらには「死」から「いのち」に移されたことを、すなわち「永遠のいのち」をすでに持っていることを信じられるようにしてくださる。神は、こうした一連の作業を通して、神から不変の「肯定」を「贈り物」として賜っている自分を、すなわち神に無条件で愛されている自分の「真実な姿」を、人が知るようにしてくださる。それが心の根底にあった「不安」を排除し、「罪の道」から人を救い出すことになるからである。ならば、神はどのようにして「信仰」の成長を助けてくれるのだろう。

「信仰」の成長を助けるには、神から貸し出されている神の「いのち」、すなわち「魂」が発信する「神の思い」を、神が着せた「霊の体」で確認させればよい。というのも、「霊の体」は「神の国」に属する体なので、「霊の体」を持てば「神の国」を治める「聖霊」の助けが得られ、「聖霊」が「神の思い」を人に確認させてくれるからである。そうすれば、「神の思い」を否定する「不信仰」の罪を取り除くことができ、「信仰」の成長を助けることができる。イエスはそのことを、次のように言われた。

「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」（ヨハネ 14:26）

このように、神は、ご自身が人に着せた「霊の体」によって、「信仰」の成長を助けてくださる。神から受けた「霊の体」は「聖霊の宮」でもあるので、「神から受けた聖霊の宮であり」(I コリント 6:19)、「聖霊」が「信仰」の成長を助けてくださる。「信仰」が成長することで、人は神に「肯定」されている自分の「真実な姿」を知るようになる。それは、自力で獲得した自分の価値を捨て、神から「贈り物」として与えられている価値を受け取り(思い起こし)、その下で生きていくことを意味する。そして、その「信仰」が成長する流れは、次のとおりである。

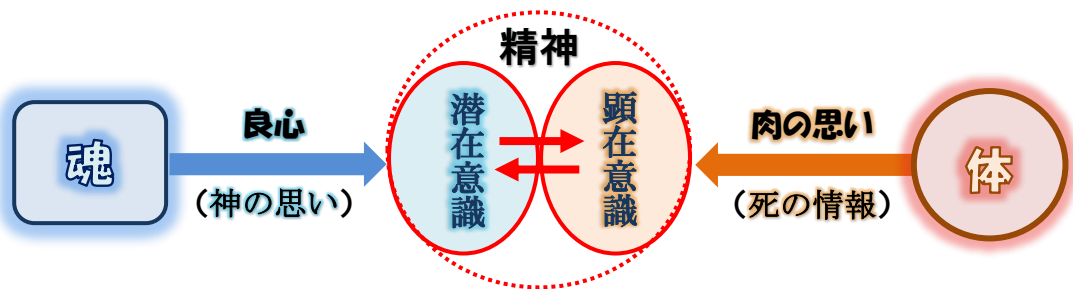
❖ 「信仰」が成長する流れ

人とは思考する「精神」であり、それは「意識」である。その「意識」は、「潜在意識」(無意識)と「顕在意識」(意識)とに分けられるが、ここでの「信仰」の成長の話は、「顕在意識」が舞台になる。神から「贈り物」として与えられている価値を受け取る(思い起こす)場所は、「顕在意識」である。そのため、神から「贈り物」として与えられている価値を「顕在意識」に受け取らせるには、まずは「神の思い」の情報を「顕在意識」の中に持ち込まなければならない。そうしなければ、「顕在意識」に於いて、「神の思い」を受け取る「信仰」の選択は何も起きない。

そこで、神は、「魂」が「潜在意識」に発信している「神の思い」を「顕在意識」でも理解できる言葉に焼き直し、「顕在意識」にも「神の思い」を持ち込めるようにされた。それは、神の立てた預言者を通し、「神の思い」を「顕在意識」が理解できる人の言葉で啓示することで行われた。加えて、神は自らが人となって人の言葉で直接語ることで、「神の思い」を人の「顕在意識」に伝えられた。その方がイエスであり、こうした言葉が「聖書」となり、「顕在意識」でも理解できる「神の言葉」の情報となった。

さて、「神の思い」は「顕在意識」でも理解できる「聖書」となったので、次は「聖書」に書かれている「神の言葉」を「顕在意識」に持ち込む段階に入る。それには、人が人に「神の言葉」を伝える必要がある。これを「伝道」という。「伝道」を通して、「神の言葉」を「顕在意識」に聞かせるのである。そうすれば、神が予め着せておいた「霊の体」、すなわち「聖霊の宮」に住まわれる「聖霊」の助けによって、聞いた「神の言葉」を確認できるようになる。すると、「顕在意識」の中で神への「信仰」が育ち始める。「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです」(ローマ 10:17)。こうして、「顕在意識」は「神の思い」を持つようになる。

ところが、「顕在意識」の中には、やがて死ぬ「体」が持ち込んだ「死の情報」が住み着いている。それは、「いのち」を展開する「神の思い」に逆らう「肉の思い」である。そのため、「聖書」の「神の言葉」を聞くと、「顕在意識」では激しい戦いが起きる。この戦いは、「聖書」の「神の言葉」を聞く以前から起きている。それは、「魂」を介して「神の思い」（いのちの情報）を受け取る「潜在意識」と、やがて死ぬ「体」を介して「肉の思い」（死の情報）を受け取る「顕在意識」との間で、人である「精神」の支配を巡って起きている。「神の思い」は「良心」と呼ばれるので、「良心」と「肉の思い」との戦いとして、それは初めから「精神」の中で繰り広げられている。



つまり、初めからあった「良心」と「肉の思い」との戦いの場に、「聖書」に書かれている「神の言葉」が持ち込まれるという形になる。加えて、着せられた「霊の体」によって「聖霊」の助けも得られるので、戦いはもっぱら、聞いた「神の言葉」を信じるかどうかに絞られていく。それゆえ、この戦いに勝つことで「信仰」は成長し、「顕在意識」の中で「神の思い」を「否定」してきた「不信仰」の泥も洗い流されていく。

そして、「神の言葉」を信じる戦いに勝つカギは、兎にも角にも、自分の罪に気づき、絶望することである。絶望なくして、神により頼む真実な「信仰」は生起しない。なぜなら、絶望は「肉の思い」に頼ってきた自分の敗北を意味するからである。それで、「魂」が発信する「神の思い」は、人の内側から「良心」となって罪を指摘する。加えて、「聖書」に書かれている「神の言葉」は生きているので、「神の言葉」を聞くと、内側から指摘された罪が外側からも明らかになる。「神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髓とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです」（ヘブル 4:12 新共同訳）。それはどうにもならない自分の罪に絶望させるためであり、その絶望と向き合えば、その人は、罪が赦される神の恵みの座に近づくことができる。

「だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。」

（ヘブル 4:16 新共同訳）

神の恵みの座に近づき、罪が赦される恵みを受け取ることができれば、心は言いようもない平安に包まれ、無条件で愛されている自分を知るようになり、その「肯定」が不信仰という「否定」の泥を洗い流す。こうして、「神の言葉」を信じられるようになっていく。以上が、神により頼む真実な「信仰」が成長する流れになる。

このように、「信仰」の成長は、「顕在意識」が「神の言葉」を聞くことから始まる。「信仰は聞くことから始まり」(ローマ 10:17)。聞くことで、信じるかどうかの激しい戦いが「顕在意識」の中で起きる。それゆえ、人が「神の言葉」を「顕在意識」でも聞くことができるようにと、神は「神の言葉」を人の言葉に焼き直された。それが「聖書」である。「聖書」に書かれている「神の言葉」を信じる戦いが、「信仰」の成長を促す。その戦いを支援してくれるのが、「聖霊」である。その「聖霊」の助けによって、イエス・キリストを証しする言葉を信じられるようになれば、「イエスは主です」という告白に至る。「聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません」(I コリント 12:3)。そのことで、「救い」を自覚できるようになる。それを皮切りに、「聖書」が教えている、目には見えない「永遠のいのち」も信じられるようになっていき、自分の「真実な姿」を知るようになっていく。それは、「キリストに在る」自分を「信仰」で見出すということである。

❖ 「キリストに在る」自分を見出す

私たちは、「人間的な標準」で自分を知ろうとする。しかし、「人間的な標準」では、行いが人の価値なので、それでは自分の「真実な姿」は何も知り得ない。なぜなら、人の「真実な姿」は「行いに在る」自分ではなく、「キリストに在る」自分だからである。「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません」(II コリント 5:16)。「キリストに在る」自分は、キリストを証しする「聖書」で知ることができる。それによると、人の「真実な姿」は「キリストの体」の部分である。「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」(I コリント 12:27 新共同訳)。これが、「キリストに在る」自分である。そうすると、「キリストの体」に起きた十字架の死と復活は、「キリストに在る」者の上にも起きたことになる。つまり、「キリストに在る」者は、誰であれキリストと共に十字架の死にあずかり、キリストと共に復活し、新しくされた者である。その事実が、「人間的な標準」で自分を知ることがやめれば見えてくる。それで、先に見た、「人間的な標準で人を知ろうとはしません」(II コリント 5:16)の続きに、次のことが書かれている。

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(Ⅱコリント 5:17)

「新しく造られた者」とは、「死」の泥が洗い流された者であり、神が造られた人本来の姿であって、人の「真実な姿」を指す。

このように、「人間的な標準」で自分を知るのをやめ、「聖書」の教えで自分を知るなら、「キリストに在る」自分を見出すことができる。それこそが、自分の「真実な姿」である。したがって、「信仰」が成長するというのは、「人間的な標準」によって自分を知ろうとすることをやめ、「キリストに在る」自分を見出していくことである。それは、現実の自分が「罪人」であっても、「キリストに在る」自分は「義人」であるということを、まさしく承認していくことなのである。それは真実に、「神の言葉」への「従順」であって、「キリストの十字架」に身をゆだねることにほかならない。そういう意味では、「信仰」とは「従順」である。

❖ 「信仰」とは「従順」である

「信仰」は、「人間的な標準」の放棄を要求する。従来の自己理解を放棄させ、「キリストの十字架」に身をゆだねることを要求する。それは「キリストの十字架」によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたとする「キリストの十字架」を承認することである。

「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。」

(ガラテヤ 6:14)

「信仰」はこうした要求を突きつける以上、「信仰」とは「従順」である。ゆえに聖書は、「あなたがたの **信仰** が全世界に言い伝えられている」(ローマ 1:8) の「**信仰**」の部分で、「**従順**」に言い換えている。「あなたがたの **従順** はすべての人に知られている」(ローマ 16:19)。さらには、ユダヤ人の「不信仰」を「不従順」として教えている。「彼らも、今は **不従順** になっていますが」(ローマ 11:31)。したがって、私たちはキリストの福音の告白に対しては従順であるべきである。「あなたがたがキリストの福音の告白に対して **従順** であり」(Ⅱコリント 9:13)。それは、徹底してキリストの十字架の言葉を信じることであり、それこそが私たちを癒やす神の力となる。

「十字架のことは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私
たちには、神の力です。」（Ⅰコリント 1:18）

十字架の言葉を承認する「従順」によって、すなわち「キリストの十字架」を引き受ける「信仰」によって、古い「私」に代わって新しい「私」が成立する。それが自分の「真実な姿」であり、「キリストに在る」自分である。

このように、「信仰」とは「キリストの十字架」に身をゆだねる「従順」である。この「信仰」は、神の戒めに従う「従順」から始まる。なぜなら、「愛せよ」に集約される神の戒めに本気で従うなら、誰もが敵を愛せない自分の罪に気づくことができ、絶望に転落し、自力での価値を放棄し、神からの「贈り物」としての価値に身を任せるようになるからである。身を任せることが「信仰」であり、それは神の戒めに対する「従順」から生まれる。神からの「贈り物」の恵みに身を任せることができれば、自分の「真実な姿」が、すなわち「キリストの体」の部分である自分が見えてくる。その姿は、自力で自らの価値の獲得を目指す「罪の奴隷」ではなく、「罪の奴隷」から買い取られて、「代価を払って買い取られた」（Ⅰコリント 6:20）、自由を得た姿である。「あなたがたは自由人として行動しなさい」（Ⅰペテロ 2:16）。それゆえ、「従順」なき「信仰」はあり得ない。これは「行い」のない「信仰」はあり得ないということであり、「行い」のない「信仰」は死んでいるということである。

「たましいを離れたからだは、死んだものであるのと同様に、行い（従順）のない信仰は、死んでいるのです。」（ヤコブ 2:26）※（ ）は筆者が意味を補足

こうして、人は神の戒めに従う「従順」によって自分の罪に気づくことができ、神の恵みを受け取る「信仰」は成長していく。その「信仰」は、救われたことの自覚に至らせ、その後は、人の「真実な姿」を知るようにさせてくれる。これを「信仰の成長」といい、その成長は神が助け、人の抱える「現実の問題」、すなわち自分の「真実な姿」を認識できないことの「不安」の解決を図る。これが福音の「第二ステージ」である。それは言うてみれば、キリストによって捕らえられたところの自分を目指させるという話でもある。そこで次は、その視点から福音の「第二ステージ」の話をしたい。

－「キリストによって捕らえられた」－

福音の「第二ステージ」を別の視点から見ると、それはキリストによって捕らえられたところの自分を、すなわち「霊の体」が着せられているところの自分を、信じられるように神が助けてくださる話である。なぜなら、キリストによって捕らえられたところの自分が、自分の「真実な姿」だからである。そこで、この視点で福音の「第二ステージ」を見ていく。それは、私たちが「いのち」となるキリストによって捕らえられたので、すなわち「死」から「いのち」に移されたので、「死からいのちに移っているのです」(ヨハネ 5:24)、もう「死」に戻ることができないという話から始まる。

❖ 「死」に戻ることはいかなる

入り込んだ「死」によって、人は神と分離してしまった。神を認識できない「死の体」となり、滅びゆく「死人」となった。その結果、人は神に支えられている自分の「真実な姿」を認識できなくなり、自分はどこから来てどこに行くのか、死んだらどうなるのか、何のために生きているのか、そうした疑問を抱えることになった。その不安から、人は見える安心をむさぼる罪人になり、苦しむようになった。そこで、神は「死人」に呼びかけ、それに応答する者を「死」から救い出し、「いのち」に移してくださった。それは「死の体」の下に朽ちない「霊の体」を着せ、「永遠のいのち」を与えられたということである。ただし、一旦「永遠のいのち」が与えられると、もう二度と「死」に戻ることができなくなるので、イエスは次のように言われたのである。

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」

(ヨハネ 10:28)

イエスは、ご自分が「永遠のいのち」を与えた者は、「決して滅びることがなく」と言われた。それは、「永遠のいのち」を与えられたことで、神と再結合したからである。それゆえ、「だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません」とも言われた。それはつまり、もう二度と「死」に戻ることができないということである。一旦「光」の中に入れられたなら、二度と「闇」には戻れないのである。それで聖書は、もう後ろは振り返らないで、「光の子」らしく生きるようにと教えている。

「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」(エペソ 5:8)

一度「光」を受けた者は、まことに「死人」に逆戻りしたくとも（墮落したくとも）、もうできないのである。そうである以上、これからは神だけに信頼を置いて生きるしかない。聖書はこのことを強調するために、逆説を使っても教えている。

「一度光を受けて天からの賜物の味を知り、聖霊にあずかる者となり、神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力とを味わったうえで、しかも墮落してしまうならば、そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、恥辱を与える人たちだからです。」（ヘブル 6:4-6）

この箇所の意味はよく誤解され、救われても再び以前の生き方に戻り、教会にも行かなくなったなら、救いは取り消され、二度と神のもとに戻ることは許されないという意味に解かれてしまう。しかし、これはそのような意味ではない。二度と「死人」には戻れないことを強調するために、「そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません」と、逆説的に表現したにすぎない。例えば、「負けるが勝ち」ということわざがあるが、どうして負けることが勝ちなのかと思ってしまうが、これは常識に反することを述べることで「勝つ」ことの真理に気づかせようとする言い回しであり、この御言葉の表現はそれと同じである。親は子どもの生き方を矯正するとき、「お前はもう私の子ではない。二度と家に戻るな」と逆説的に表現することがあるが、それと同じである。聖書が逆説的に表現するのは、復活の希望は変わることがないからである。つまり、必ず復活がある以上、再び以前の生き方に戻ることは全く以て無意味であることを教えるために、ここでは逆説的表現が使われている。それゆえ、この続きには、復活の希望を最後まで持ち続けることを切望するとある。

「そこで、私たちは、あなたがたひとりひとりが、同じ熱心さを示して、最後まで、私たちの希望について十分な確信を持ち続けてくれるように切望します。」（ヘブル 6:11）

私たちの希望は、イエスの言われた、「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません」（ヨハネ 10:28）にある。それゆえ、先のヘブル書の続きにはさらに、「神は約束の相続者たちに、ご計画の変わらないことをさらにはっきり示そうと思い、誓いをもって保証されたのです」（ヘブル 6:17）とあり、神の計画は絶対に変わらな

いことが強調されている。その計画とは、「死」から「いのち」に移された者を、すなわちキリストが朽ちない「霊の体」を着せ、「永遠のいのち」を与えた者を、そのようにしてキリストが捕らえた者を、彼の肉体の死と同時に、キリストが天に引き上げるという計画である。その計画は絶対に変わらない以上、キリストによって捕らえられた者には、もう「死」に戻る道はないのである。

このように、一旦「死」から「いのち」に移され、すなわち神から「霊の体」（永遠のいのち）を頂いたなら、もう二度と「死」には戻れない。それは、「いのち」を司る神の愛からは、何があっても引き離されることはないということである。

「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」（ローマ 8:38-39）

しかし、多くのクリスチャンは、「霊の体」（永遠のいのち）は見えないので、それはこれから頂くものだと思っている。自分の救い（「死」から「いのち」に移ること）は、完成していないと思い込んでいる。未だに自分は「死」の中であって、「いのち」に移されていないと思い、「いのち」に移される裁きはこれからだと信じている。だが、裁きはこれからで、救いは完成していないと思うのは誤解である。

❖ 救いは完成していない？

多くのクリスチャンは自分の救いは完成していないと思うので、一生懸命「律法」の文字に仕え、肉によって自分の正しさを神に証しし、その報いとして「霊の体」（永遠のいのち）を手に入れ、「神の国」に入ろうとする。「律法」の文字に仕える肉によって、「いのち」に移される救いを仕上げようとする。これでは、信じただけ（応答しただけ）で、「霊の体」（永遠のいのち）を、すなわち “霊” を受けたことを台無しにしてしまう。とはいえ、こうした誤解は尽きないので、聖書は次のように教えている。

「あなたがたに一つだけ確かめたい。あなたがたが “霊” を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも、福音を聞いて信じたからですか。あなたがたは、それほど物分かりが悪く、“霊” によって始めたのに、肉によって仕上げようとするのですか。」（ガラテヤ 3:2-3 新共同訳）

いくら誤解しようとも、キリストを信じている私たちは、すでに「死」から「いのち」に移された状態にあり、裁きに会うことがない。そのことは、イエスが断言された。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです。」

(ヨハネ 5:24 私訳)

つまり、キリストを信じている者は、見た目は「死の体」であっても、すでに「霊の体」で復活させられているということである。そこで聖書は、次のように教えている。

「つまり、自然の命の体（**死の体**）が蒔かれて（蒔かれていて：原文は現在形の受動態）、霊の体が復活するのです（復活させられているのです：原文は現在形の受動態）。」（Ⅰコリント 15:44 新共同訳） ※（ ）は筆者が意味を補足

ここでは自然の体が「蒔かれて」、霊の体が「復活する」と訳されているが、どちらも原文は「現在形」である。ただし、「現在形」には、**普遍の真理**を言い表す用法があるので、ここでは復活の**普遍の真理**として訳されている。だが、この箇所は時制どおりに訳さなければ文脈に矛盾が生じる。というのも、この御言葉の続きに、終わりのラッパとともに起きる復活の**普遍の真理**が、「現在形」ではなく「未来形」で書かれているからである（Ⅰコリント 15:52）。ゆえに、この箇所は原文どおりの時制で訳さなければ意味が通じなくなる。したがって、ここでの意味は、アダムによって「死」が入り込んで以来、人は「死の体」で「蒔かれている」者になったが（現在形の受動態）、神の呼びかけに応答した私たちは「霊の体」を着せられ、「復活させられている」者になったということである（現在形の受動態）。そうであるからこそ、終わりのラッパと共に復活でき、神の国へと凱旋できるということである（未来形）。よって、この箇所はイエスの言われた、「死からいのちに移っているのです」（ヨハネ 5:24）と同じ意味であり、「霊の体」（永遠のいのち）を手にする救いは、もう完成しているということである（本書 127 頁「霊の体」を着せられている」）。

このように、神の呼びかけに応答した時点で（信じた時点で）、私たちは「霊の体」を着せられたのであって、それにより「死人」であった私たちは復活し、「生きる者」になったのである。「死」から「いのち」に移され、神による救いはもう完成している。このことを、キリストによって捕らえられたという。それは、見えるところは「罪人」

であっても、すでにキリストにあっては「義人」であるということを意味する。そうであるなら、救いの獲得を目指して「律法」の文字に仕えるのではなく、すでにキリストによって捕らえられたところの自分を知り、それを信じて生きるべきである。キリストによって捕らえられたところの自分を捕らえようとして生きるべきである。

❖ 捕らえられたところの自分を捕らえる

パウロは、自分自身の生き方を次のように述べている。

「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。」（ピリピ 3:12 新共同訳）

ここに、「既に完全な者となっているわけでもありません」とあるので、私たちの救いは完成していないようにも読めてしまう。まだ「死」から「いのち」に移されていないかのようにも読めてしまう。しかし、この続きに、「キリスト・イエスに捕らえられている」とあるように、救いは完成している。つまり、クリスチャンはすでに「完全な者」である。それゆえ、この先には、「だから、わたしたちの中で完全な者はだれでも、このように考えるべきです」（ピリピ 3:15 新共同訳）とある。要するに、私たちは「死」から「いのち」に移され、すなわち「キリスト・イエスに捕らえられている」「完全な者」ではあるが、見た目には未だ「死」の中にいる「罪人」なので、「既に完全な者となっているわけでもありません」と、言ったのである。それでパウロは、この現実とのギャップを少しでも埋めることを目指したという。

これは尤もである。ただし、この訳からは、パウロの言う「完全な者」が何なのかが分からない。私たちが目指す「完全な者」とは、キリストに捕らえられているところの自分であり、自らが描く理想の姿ではない。さらに言うと、キリストに捕らえられているところの自分が見えるから、それを捕らえようとすることができる。しかし、上記の訳からは、そうしたことはまるで見えてこない。ただ、目指すようになった動機だけが強調されてしまう。これは、「キリスト・イエスに捕らえられている からです」の「からです」という訳に問題がある。そこで、少し専門的な話をしたい。

「からです」と訳された箇所は、「エピ」[ἐπι]という前置詞と、「ホー」[ὅ]という関係代名詞の二語であり、それを「…からです」という「理由を表す接続詞」の熟語と解し、訳している。そのため、「完全な者」が何なのかが分からない訳になっている。

だが、ここは熟語ではなく、素直に「ホー」を関係代名詞として解し、その「ホー」は後文の、「キリスト・イエスに捕らえられた」ところの「自分」を指すとすれば、「エピ」には「…のために」という意味があるので、「キリスト・イエスに捕らえられたところの自分を捕らえるために」となり、先の文章は次のようになる。

「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっていてるわけでもありません。何とかして、自分がキリスト・イエスに捕らえられたところを捕らえるために、努めているのです。」（ピリピ 3:12 私訳）

このように訳せば、目指すところの「完全な者」の姿が明確になり、理に適った文章となる。つまり、ここにはイエス・キリストに捕らえられたところの自分を、本当の自分とするように努めることが書かれているのである。ゆえに、続きにはこうある。

「兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」（ピリピ 3:13-14 新共同訳）

ここに「後ろのものを忘れ」とあるが、それは「過去」の記憶を消す努力をするということではない。「人間的な標準」で人を知ろうとしてきた生き方をやめる、ということである。自らの努力で自らの価値を獲得するという肉の生き方に、再び身をゆだねることのないようにするために、前のものに全身を向けつつ、「賞を得るために」走っているという。その「賞」が、「キリスト・イエスに捕らえられたところの自分」であり、「キリストに在る」自分である。それは「キリストを着た」自分であり、「キリストをその身に着た」（ガラテヤ 3:27）、キリストに背負われた自分である。

「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。」（イザヤ 63:9）

これが、「キリスト・イエスに捕らえられたところの自分」であって、自分の「真実な姿」なので、それを「本当の自分」として生きることを目指すのである。それは朽ちない「霊の体」を着せられ、「死」から「いのち」に移されている自分にほかならない。それゆえ、「死」に対しては死んでしまった者として生きていく。「霊の体」を着せら

れたことで「キリストを着た」ので、私たちの古い人はキリストと共に十字架につけられたと信じて生きる。罪の体が滅び、これからは罪の奴隷ではなくなった者として生きる。これが福音の「第二ステージ」であり、そこでは自分の「真実な姿」を聖書で知り、その姿のごとく生きることを目指す。それをサポートする恵みが、福音の「第二ステージ」である。それで、聖書は次のように教えている。

「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだ
が滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、
私たちは知っています。」（ローマ 6:6）

これは、「死の体」ではなく、着せられた「霊の体」で生きるということである。「死の体」は外なる人であって、日々衰えていくが、「霊の体」は内なる人であり、それは日々新たにされているので、勇気を失わないで生きていくということである。

「ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。」（Ⅱコリント 4:16）

これは、「霊の体」を着せられているところの自分が、いつまでも残る「本当の自分」なので、消えゆく「死の体」に惑わされることなく生きていくことを意味する。それは、キリストによって捕らえられたところに向かって、栄光から栄光へと、変えられていくということである。「栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます」（Ⅱコリント 3:18）。これこそが、「後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ」（ピリピ 3:13 新共同訳）という生き方である。そうしたことから、「霊の体」によって生きるように、すなわち「霊の体」に住まわれる「聖霊」の導きに従って歩むようにと、聖書は教えている。「わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい」（ガラテヤ 5:16 新共同訳）。

以上が、福音の「第二ステージ」を、キリストによって捕らえられた自分を捕らえるという視点から見た内容であり、それは「聖霊」の導きに従って歩むということである。さて、この話を「真理」に従うという視点からも説明しておきたい。

－「真理」に従う－

福音の「第一ステージ」は、「死」から「いのち」に移され、キリストに捕らえられることであり、福音の「第二ステージ」は、捕らえられたところの自分を捕らえることである。それは「真理」に従うということであり、それを神が助けてくださるのが福音の「第二ステージ」である。そこで、ここでは「真理」に従うという視点から福音の「第二ステージ」を見ていく。まずは、「真理」とは何かである。

❖ 「真理」とは何

この世に於ける「真理」は、この世での正しいことを意味する。堅い言い方をするなら、「真理」とは、この世の事物と一致することであり、認識と対象が一致することであり、矛盾なく整合性が取れることである。つまり、人がこの世で確認できる正しさが、この世に於ける「真理」ということになる。そうである以上、この世に於ける「真理」は、この世で何をすべきかを問うことであり、なすべき規範である。

しかし、聖書が教える「真理」は、この世のものとは違う。それは、人がこの世で確認できる正しさではなく、それは変わらないことを指し、「不動」であることをいう。というのも、聖書に於ける「真理」はヘブライ語の「エメト」[אֱמֶת]であり、それは「堅固であること」、「変わらないこと」、「長持ちすること」、「信頼できること」という「不動」を意味するからである。この「不動」を意味する「エメト」が、ヘブライ語で書かれた旧約聖書をギリシャ語に訳した七十人訳聖書では（イエスの時代は七十人訳聖書が使われていた）、多くの箇所では「真理」を意味する「アレーテイア」[ἀλήθεια]という言葉に訳されている（創世記 47:29、ヨシュア記 2:14、士師記 9:15、I サムエル 12:24、詩篇 145:18、箴言 20:28、イザヤ 48:1 など）。

このように、聖書に於ける「真理」は「エメト」であり、それは変わらないことであって「不動」を意味する。それは、いつまでも同じ「神」のことであり、「イエス・キリスト」を指す。「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです」（ヘブル 13:8）。ゆえに、イエスはご自分のことを、「真理」と言われたのである。

「イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」（ヨハネ 14:6）

したがって、途中で変わるもの、また途中から存在しなくなるものは、聖書が教える「真理」ではない。変わることなく存在し続けるものだけが真の正しさであり、それが「真理」である。聖書はその「真理」を、「イエス・キリスト」であるとする。であれば、「イエス・キリスト」こそ、従うべき規範となる。「真理」がイエスなので、イエスを信じる「信仰」は、イエスという「真理」に従うことを意味する。「真理に従う」(I ペテロ 1:22)。そのため、聖書では、「信仰」と「従順」は一緒に使われる。「それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためです」(ローマ 1:5)。そしてイエスは、「真理」が人を自由にすると言われた。

「そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」「

(ヨハネ 8:31-32)

「真理」である「不動」が私たちが自由にできるというのは、この世界では誰もが滅びに向かって動き続けているので、滅びる運命から自由になるには、動かない「不動」に掴まるしかないからである。「不動」である「真理」が、滅びに向かう運動から人を自由にできる。そこで次に、「真理」が自由にすることを実際の事柄で説明したい。

❖ 「真理」が自由にする

この世界は死に支配されて以来、全てが終わりに向かって動き続けている。そのため、この世界では「過去」も「現在」も「未来」も定まることがない。「現在」を手にしたと思っても、すぐに「過去」になってしまうので、動かない“今”を持つことができない。“今”あった自分の価値も、すぐに「過去」の話になってしまう。例えば、オリンピックで金メダルを取って価値ある者と賞賛されても、時間の経過に伴い「過去」の人となり、あの時の価値は時間に流されてしまう。そのようにして、この世界では自分の価値が動き続ける。ある時はほめられても、ある時は叱られ、ある時は愛されても、ある時は批判され、その度に自分の価値が変わっていく。

そこで、誰もが必死になって自分が獲得した自分の価値を、自らの努力で維持しようとする。誰もが「みんな」に自分を合わせ、「みんな」に良く思われる自分になることで自らの価値を維持しようとする。だが、そのような生き方をすれば、「みんな」から自分はどう思われているかが気になってしまい、「みんな」の目の奴隷として生きる

ことになる。そこには全く自由がない。つまり、私たちが暮らす世界は動き続け、変化し続けるので、そこには自由など全くないということである。

この奴隷状態から解放され、真に自由になるには、動き続ける「みんな」の目に自分の価値を託すのではなく、全く以て動かない「不動」の目に、自分の価値を託すしかない。それは「不動」のキリストの目に自分の価値を託し、そこに留まるということである。具体的には、キリストによって捕らえられたところの自分を知り、それを「本当の自分」として受け取ることである。これを「真理」に従うといい、そのことが私たちを自由にしてくれるので、聖書は次のように教えている。

「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっていないわけでもありません。何とかして、自分がキリスト・イエスに捕らえられたところを、捕らえるために努めているのです。」（ピリピ 3:12 私訳）

ならば、「不動」のキリスト・イエスに捕らえられたところの自分とは、どのような自分なのだろうか。それこそが不動の「真理」であり、自分の「真実な姿」である。

❖ 自分の「真実な姿」

神の呼びかけに応答し、「霊の体」を着せられたことで、私たちは神に捕らえられた。そのことで、神に捕えられたところの自分を、すなわち自分の「真実な姿」を知ることが可能となった。それが不動の「真理」であり、それは**第一に**、見た目は罪人であっても、その「うわべ」に関係なく、神から無条件で愛されている自分である。

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」（ローマ 5:8）

神は、人を無条件で愛するがゆえに、「見よ。それは非常に良かった」（創世記 1:31）と言われた。そして、神は「不動」なので、神が一旦「然り」と言えば、それは変わらず「然り」なのであって、この評価が変わることは決してない。「あなたがたは、『然り、然り』『否、否』と言いなさい。それ以上のことは、悪い者から出るのである」（マタイ 5:37 新共同訳）。神は「不動」という「真理」なので、その神が「非常に良かった」と言えば良かったのであって、その価値が変わることは決してない。

しかし、悪魔の仕業で「死」が入り込んで以来、神が定めた「真実な姿」を人は認識できなくなり、勝手に自分のことを「ダメな者」と思うようになった。神が「然り」としたことを、勝手に「否」と言うようになった。その考えは、まさしく悪魔という悪い者から出ている。「悪い者から出るのである」(マタイ 5:37 新共同訳)。それでキリストは、私たちの姿が罪人であっても変わらず愛される価値があることを十字架で明らかにし、神が定めた人の「真実な姿」を、私たちが再び知ることができるようにされたのである。その「真実な姿」は、神から無条件で愛されている姿である。それゆえ、この「真理」に従うことは、愛されるための努力を放棄するということである。自分の正しさを証しすることで、神からの義を獲得しようとする生き方を放棄するということである。人を裁くことで自分を正しいとし、自分には愛される価値があるとする生き方を放棄するということである。誰が愛される価値があるかを巡って争い、そのことで嫉妬したり、怒ったりする生き方をやめるということである。

さて、「霊の体」を着せられたことで知ることが可能になった、自分の「真実な姿」は、すなわち不動の「真理」は、**第二に**、神と一緒にしか生きられない姿である。それは、自分はキリストの体であって、その部分であるという姿である。「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」(I コリント 12:27 新共同訳)。それゆえ、この「真理」に従うことは、神に何でも相談することを意味する。つらくなったなら人に助けを求める前に、神に助けを求め、「神の言葉」で励まされるということである。それはつまり、「神の言葉」を生きる糧にするということである。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」(マタイ 4:4)。

そして、不動の「真理」となる自分の「真実な姿」は、**第三に**、死に打ち勝っている姿である。自分はキリストの体の部分となれば、それは死に打ち勝ったイエス・キリストの部分なので、死に勝利している自分にほかならない。

「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」死のとげは罪であり、罪の力は律法です。しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」(I コリント 15:55-57)

死に勝利している自分であるがゆえに、この第三の「真理」に従うということとは、希望を持って生きることを意味する。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励んで生きるということである。それゆえ、この続きに、「ですから、私の愛する

兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから」(Ⅰコリント 15:58) とある。とはいえ、「真理」に従う生き方は自力ではできないので、そこには絶えず神の助けが必要になる。その助けが、福音の「第二ステージ」である。

このように、「真理」とは変わらないことであり、この変化し続ける世界に於いては、神が人となって来られたイエス・キリストだけが変わらない「真理」である。この方は変わることをない不動であり、いつまでも「存在」し続けるので、この方に捕らえられたところの自分も、いつまでも「存在」し続ける。それこそが自分の「真実な姿」であり、「真理」である。この「真理」を、福音の「第一ステージ」で手にする。だが、「真実な姿」は不動であって動かないため、この動き続ける世界では認識できない。動かないものは、すなわち「時間」と「空間」に制約されないものは、動き続ける体では認識できないのである。そのため、神は人を助け、それを認識できる「信仰」を育ててくださる。これが福音の「第二ステージ」である。そして、動かない「神の国」に移り住む時が来れば、私たちは自分の「真実な姿」を完全に知るようになる。

「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。」(Ⅰコリント 13:12)

ということは、見た目が「罪人」であっても、その姿は消えてしまうということである。であれば、私たちは神に捕らえられたところの消えない「義人」として生きていけばよいということである。今すでに、「神の子」として生きていけばよい。「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです」(Ⅰヨハネ 3:2)。これこそが、「真理」に従って生きるということであり、それは消えゆく「肉の体」に従って生きるのではなく、消えることのない「霊の体」によって生きるということである。その生き方を神である「聖霊」が助けてくださるというのが、福音の「第二ステージ」である。そこで次は、「聖霊」が助けてくださる歩みの実際を見てみたい。

－「聖霊」が助けてくださる歩み－

福音の「第一ステージ」は、「霊の体」を着せられる救いである。福音の「第二ステージ」は、その救いを「聖霊」の助けによって自覚し、それを皮切りに自分の「真実な姿」を知るようになっていくことである。それは「真理」に従うようになることであり、神に着せられた「霊の体」で生きるようになることであり、「信仰」によって生きるようになることである。その全ては、「聖霊」が助けてくださる歩みである。ここでは、その歩みの実際を見ていく。最初は、「霊の体」で生きるものの意味からである。

❖ 「霊の体」で生きる

「霊の体」は「キリストの体」の部分なので、「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとり各器官なのです」（Ⅰコリント 12:27）、「霊の体」は「聖霊の宮」（Ⅰコリント 6:19）である。したがって、「霊の体」で生きるというのは、そのまま「聖霊」に従って生きることを意味する。それが福音の「第二ステージ」になる。ならば、「聖霊」に従い、「霊の体」で生きるとは、どういうことなのだろう。

まず、「霊の体」は「キリストの体」なので、これからはキリストと同じ価値を持って生きるということである。それはもう、「律法」の文字に仕え、「律法」の行いで自分の価値を手にする必要はないということである。つまり、これまで自分を縛っていた「律法」からは解放されたということであり、今後は「律法」の文字に従う古い生き方ではなく、「聖霊」に従う新しい生き方で神に仕えるということである。

「しかし今は、わたしたちは、自分を縛っていた律法に対して死んだ者となり、律法から解放されています。その結果、文字に従う古い生き方ではなく、“霊”に従う新しい生き方で仕えるようになっているのです。」

（ローマ 7:6 新共同訳）

そして、「聖霊」に従って生きるようになると、これからは神による「律法」の要求も満たされるようになる。「それは、肉ではなく霊に従って歩むわたしたちの内に、律法の要求が満たされるためでした」（ローマ 8:4 新共同訳）。「聖霊」に従って生きる者は「霊」に属することを考えるので、「霊に従って歩む者は、霊に属することを考えます」（ローマ 8:5 新共同訳）、「霊」である神による「律法」の要求も、「聖霊」の助けによって満たされていくのである。その要求は、神を信頼し、愛することである。

また、「霊の体」で生きるというのは、将来の復活が規定された「現在」を生きるということである。「霊の体」を着せられた者は将来の復活が保証され、「現在」が将来によって規定されたので、「霊の体」で生きることは、将来の復活が規定された「現在」を生きるということになる。そうすると、復活するという規定によって、「現在」の死ぬべき「肉の体」は、しばらくの間は生かされているにすぎないということになる。

「もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう。」（ローマ 8:11 新共同訳）

それはつまり、「肉」に従って生きる責任を、私たちは負っていないということである。「ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません」（ローマ 8:12）。私たちの負っている責任は、「肉の体」を満足させるために生きることではなく、あくまでも「霊の体」に従って生きることである。

また、「霊の体」で将来の復活が保証された以上、「霊の体」で生きるというのは、「義人」として生きるということである。なぜなら、将来の復活は、「義人」にしか与えられないからである。したがって、見た目は「罪人」であっても、自分はもう罪に対しては死んでしまった者で見なし、死んだのであれば、これからはキリストとともに生きることになると信じるのが、「義人」として生きるということである。

「死んでしまった者は、罪から解放されているのです。もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。」（ローマ 6:7-8）

このように、「霊の体」で生きることの実際を様々な表現を使って聖書は教えている。この教えに従い、「キリスト・イエスに捕らえられたところの自分」を捕らえようとして生きるなら（ピリピ 3:12）、自分の価値を自力で得たいという肉の欲望を満足させるようなことはなくなっていく。「霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません」（ガラテヤ 5:16 新共同訳）。こうした生き方を「霊の体」で生きるといい、それは「聖霊」に従う生き方なので、「聖霊」が助けてくれるのである。これを、「信仰」によって生きるともいう。

❖ 「信仰」によって生きる

私たちの抱えている「現実の問題」は「罪」であり、それは自分の「真実な姿」を認識できないことに起因する。「真実な姿」とは、神に背負われている神の部分としての自分であり、それゆえ神とは同じ価値を有し、神に無条件で愛されている自分である。それを認識できないがゆえに、私たちは自力で自分の価値の獲得を目指すようになった。少しでも自分の「うわべ」を良くし、少しでも愛される自分を目指すようになった。言い換えれば、自分で自分の生命を手に入れようと欲するようになったのである。それは神に信頼を置かないことなので、すなわち神と分離した状態なので、それが「罪」となって私たちを苦しめている。そうってしまったのは、悪魔の仕業で「死」が入り込み、人の体が神を認識できない「死の体」になったからである。

そこで、神は福音の「第一ステージ」に於いて、神の呼びかけに応答する者に「霊の体」を着せ、再び自分の「真実な姿」を認識できるようにしてくださった。それは、「霊の体」は「聖霊の宮」なので、「聖霊」が人の「真実な姿」を教えた「神の言葉」を信じられるように助けてくださるということである。「聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます」(ヨハネ 14:26)。つまり、「聖霊」が「神の言葉」を信じられる「信仰」を育て、救いの自覚に至らせ、「信仰」によって生きられるように助けてくださるのである。これが、福音の「第二ステージ」である。ならば、「信仰」によって生きると、どうなるのだろう。

「信仰」によって生きると、私たちは落胆しなくなる。なぜなら、「肉の体」である「外なる人」が衰えても、「霊の体」である「内なる人」は日々新たにされていくのを「信仰」で知るようになるからである。「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます」(Ⅱコリント 4:16 新共同訳)。

また、「信仰」によって生きると、艱難は軽く思えるようになる。というのも、「信仰」がない中で生きれば、艱難は重い苦しみでしかないが、「信仰」によって生きるなら、神の永遠の栄光を知るようになるからである。その栄光は、艱難による苦しみの重さとは比べものにならないほどの重さを有するので、艱難を軽く思えるようになる。

「わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。」(Ⅱコリント 4:17 新共同訳)

これが、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ「信仰」によって生きるということである。見えるものは過ぎ去るが、見えないものは永遠に存続するのである。

「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」

(Ⅱコリント 4:18 新共同訳)

こうして、神の義が啓示された福音は、神の呼びかけに応答する「信仰」に始まり、「神の言葉」を信じる「信仰」へと進ませ、「真実な自分」を見えるようにする。

「福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。」

(ローマ 1:17 新改訳 2017)

このように、「霊の体」を着せられた義人は、「信仰によって生きる」のである。この「信仰」が、目には見えない自分の「真実な姿」を確信させてくれる。「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです」(ヘブル 11:1)。確信させてくれる自分の「真実な姿」は、「キリスト・イエスに捕らえられたところの自分」であり、「キリストに在る」自分であり、「キリストの体」として永遠に生きる自分であり、神に無条件で愛されている自分である。そうである以上、私たちが目指すのは、自分が思い描く自分の理想ではなく、「キリストに在る」自分であって、それはキリストの十字架によって「死」を克服した自分である。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか」(Ⅰコリント 15:55)。そこでは、「死」がもたらした罪の「過去」は何もない。これを可能にしてくれたのが、「赦しの恵み」である。そこで、「聖霊」が助けてくださる歩みとして、「赦しの恵み」についても述べておきたい。

❖ 「赦しの恵み」について

「死」が入り込んで以来、誰もが自分の過ちと罪のために死んだ者となった。「さて、あなたがたは、以前は自分の過ちと罪のために死んでいたのです」(エペソ 2:1 新共同訳)。それは、「過去」に閉じ込められた、ということである。というのも、「死」が入り込み、「死」が支配するようになった世界には「未来」などないからである。いくら「未来」を夢見ても、それはやがて「過去」になってしまうからである。そうである以上、この世界に於いて「未来」は幻であって、不動ではない。そのため、この世

界では誰もが「過去」の結果に心が支配され、「あの時、あのようになしておけばよかった…」とか、「あの人は赦せない…」とか、「もう、自分はダメだ…」とか言って苦しむ。そのようにして、人は「過去」に目を向け、「過去」に留まって生きてしまう。それこそが、罪に苦しむ様である。

そこで神は、罪に苦しむ人を、苦しみが住む「過去」から救い出し、「未来」に生きられるようにするために来られた。それには「過去」を滅ぼし、白紙にしなければならなかった。そのために神の用意された武器が、「赦しの恵み」である。この恵みは、犯した罪が緋のように赤くても雪のように白くし、「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる」(イザヤ 1:18)、人の「過去」を完全に消去してしまう。ゆえに、神の前ではもう「自己称賛」の「過去」も、「後悔」の「過去」も通用しない。神は、この「赦しの恵み」を以て人を「過去」から救い出し、神と和解させ、心を「未来」に開かせるのである。そうであるからこそ、人として来られた神、イエス・キリストは、「わたしが語る福音を信じるように」と決断を迫った。

「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」

(マルコ 1:15)

イエスが信じるようにと言われた福音は、「放蕩息子の譬え」(ルカ 15:11-32)にあるように、罪が無条件で赦される「赦しの恵み」であり、人を「過去」から救い出す恵みである。イエスはこの恵みを受け取らせるために「光」となって、人の「闇」である「過去」を、すなわち「過去」に居座る「罪」を明らかにされた。そして、「赦しの恵み」を受け取るようにと決断を迫る。それが、「福音を信じなさい」である。つまり、神が人となって来られたのは、神のことを教えるためでも、人に何かをさせるためでもない。ただ、「罪人」となって死んでいた人を救うためであった。その神は、いつの時代でも「光」となって人の「罪」を明らかにし、「赦しの恵み」を受け取るようにと決断を迫っておられる。神はいつの時代でも「光」となって、人の心の戸を叩いておられる。ゆえに、この神の呼びかけに応答し、心の戸を開けるなら、神は人のうちに入って来て一緒に食事をしてくださる。その食事が、「赦しの恵み」である。

「わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」(黙示録 3:19-20)

神は、人に「赦しの恵み」を食べさせることで、人を苦しめている「過去」を、すなわち人を「否定」する泥を洗い流される。その最初の「赦しの恵み」の食事で「霊の体」を着せ、「死」から「いのち」に移してくださる。これが福音の「第一ステージ」である。それでも肉体の死を迎えるまでは、この「死の体」を持つがゆえに、「死の体」に欺かれて人は罪を犯す。そして、再び「過去」に支配されてしまう。そこで、神は再び人の心の戸を叩き、再び「赦しの恵み」の食事をさせてくださる。そのようにして、人が「過去」に閉じ込められて苦しみを覚える度に、神は人の心の戸を叩いてくださるので、何度もキリストと共に「赦しの恵み」の食事をする事ができる。それによって、心は「過去」から「未来」に向くようになっていく。

こうして、神との最初の食事では人は救われ、その後の食事ではイエス・キリストが信じられるようになっていき、救いの自覚に至る。さらにその後の食事では、そのままで神に愛されている自分を知るようになっていく。それは、「永遠のいのち」を持っていることが信じられ、自分の「真実な姿」を知るようになっていくということである。これを「真理」に従って生きるといい、この生き方によって神への愛が成長していく。ということは、「赦しの恵み」の食事を何度もし、多くの罪を赦された者は、多く神を愛せるようになっていくということである。

「だから、言うておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」

(ルカ 7:47 新共同訳)

これが、キリスト・イエスに捕えられたところの自分を捕らえようとする行程であり、「真理」に従う行程であり、「霊の体」で生きる行程であり、「信仰」によって生きる行程である。それは、「赦しの恵み」を何度も受け取る行程であり、それによって多くの罪を赦された者は、多く愛するようになっていく。その全ての行程を「聖霊」が助けてくださるというのが、福音の「第二ステージ」である。

このように、神は「赦しの恵み」によって、人を愛せない「否定」の泥である罪を洗い流される。それで、神は人の罪を明らかにし、「赦しの恵み」を受け取るようにと迫る。それによって、罪の泥を洗い流される。この「赦しの恵み」の受け取りが「信仰」であり、「赦しの恵み」を多く受け取れば受け取るだけ「信仰」も成長し、無条件で愛されている自分を知るようになる。それに伴い、神も人も多く愛せるようになってい

く。そして、神と人を愛するこの姿こそ、自分の「真実な姿」にほかならない。そこへの道のりが、福音の「第二ステージ」である。

「第二ステージ」＝ 罪を洗い流す ＝ 信仰を成長させる ＝ 愛が成長する

したがって、「赦しの恵み」は、罪の「罰」を帳消しにする恵みではない。それは、あくまでも罪を取り除く恵みである。というのも、罪の正体は「死」であり、「死」によって神に愛されている自分を認識できなくなった「不安」なので、「死のとげは罪であり」（Ⅰコリント 15:56）、その「不安」を取り除くには、神が無条件で人を愛していることを示す「赦しの恵み」が必要だからである。そのため、「赦しの恵み」には真実に罪を、すなわち「不安」を取り除く力がある。その恵みを示したキリストの十字架には、真実に罪という「死」による病を癒やす力がある。「その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた」（Ⅰペテロ 2:24 新改訳 2017）。

まことに、「神の福音」の中心は「赦しの恵み」であり、それは「罰」を帳消しにする恵みでは決してない。「赦しの恵み」は、神がその人の罪を、すなわちその人の「過去」を二度と思い出さないということである。「わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さない」（エレミヤ 31:34）。それは、神が本気で人を愛していることを示した恵みである。

見てきたように、福音の「第二ステージ」は罪との戦いである。神が「赦しの恵み」で、人から罪を取り除いていく戦いである。神が「赦しの恵み」を、「信仰」で受け取らせる戦いである。この戦いを、三位一体の神、「聖霊」が助けてくださる。そして、聖書はこうした戦いを「悪霊」との戦いとしても綴っている。「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、（中略）天にいるもろもろの悪霊に対するものです」（エペソ 6:12）。そこで福音の「第二ステージ」の最後は、「悪霊」との戦いの話をしたい。聖書が教える「悪霊」との戦いとは一体何なのかを、聖書の言葉で説明したい。

－「悪霊」との戦い－

福音の「第二ステージ」は、「真理」に従えるようになる戦いである。その「真理」とは変わらないことなので、それはイエス・キリストを指す。「わたしが道であり、真理であり」(ヨハネ 14:6)。その方を証しするのが聖書なので、聖書の教えに従えるようになる戦いが、すなわち信じられるようになる戦いが、福音の「第二ステージ」である。ところが、この世には「真理」を否定する「偽りの情報」が満ちあふれているので、「真理」を信じられるようになる戦いは、そのまま「偽りの情報」との戦いになる。例えば、「これを手に入れば幸せになれる…」、「こうすれば幸せになれる…」、「何々ができれば幸せになれる…」、「お金が人を幸せにしてくれる…」、「成績が良ければ幸せになれる…」等々、この世にはこうした「偽りの情報」が満ちあふれているので、これと戦うことが「真理」を信じられるようになるための戦いになる。

ならば、「偽りの情報」はどこから出てきたのだろう。聖書によると、「偽りの情報」を持ち込んだのは「悪魔」であった。「悪魔」は、人と最も親しかった「蛇」を使い、神が、「それを取って食えるとき、あなたは必ず死ぬ」(創世記 2:17)と言われたことに対し、すなわち「真理」に対し、「あなたがたは決して死にません」(創世記 3:4)と、「偽りの情報」を持ち込んできたのである。人はこの「偽りの情報」に欺かれ、苦しみへと突き進んでしまった。したがって、「偽りの情報」は「悪魔」から出てきた。ということは、「偽りの情報」との戦いは「悪魔」との戦いを意味するので、聖書はそれを「悪霊」との戦いと呼ぶ。そこで、「真理」を信じる戦いとなる福音の「第二ステージ」を、聖書は「悪霊」との戦いとしても綴っている。ここからは、それを見ていく。最初は、「偽りの情報」の生みの親、「悪魔」についてである。

❖ 「悪魔」について

「悪魔」のことを、人は好き勝手に想像し、語る。そして、自分の経験を基に、これは「悪霊」の仕業だと決めつける。だが、理性には限界があって、経験できない世界のことは、すなわち見えない世界のことは、理性では知り得ない(本書 72 頁「－「理性」には限界がある－」)。見えない神のことも、人の知恵(理性)では知り得ない。「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです」(1 コリント 1:21)。ならば、どのようにして見えない「神」のことを知ればよいのだろう。それは、聖書の言葉を信じる信仰によってである。これは、目に見えない「悪魔」についても同じあり、「悪魔」のことは聖書でしか知り得ない。大事なことは、自分がどう思うかではなく、聖書は何と教えているかである。特に、「悪魔」については聖書の

教えに従わないと、自分勝手な想像が膨らみ、誤った方向に進みかねない。ならば、聖書は「悪魔」については何と教えているのだろう。最も基本になるのが、イエスの言われた「悪魔」に対する次の教えである。

「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」(ヨハネ 8:44)

イエスは罪を犯す者を、「悪魔から出た者」と言われた。それは、「悪魔」が持ち込んだ「死」によって人は不安になり、見える安心を求めて罪を犯すようになったからである。「罪が死によって支配したように」(ローマ 5:21)。さらにイエスは、「悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません」と言われた。これは、「悪魔」は初めから、「真理」である神には属していなかったということである。初めから神に逆らう者であって、神の被造物ではないということである。このことは、神の被造物はみな神に属し(「真理」に立ち)、それは非常に良かった、という教えからも分かる。「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」(創世記 1:31)。

ならば、「悪魔」はどのようにして神に逆らうのだろうか。それは、神の言葉は「真理」なので、「偽りの情報」を人に信じ込ませることで逆らう。「悪魔」はアダムとエバに「偽りの情報」を信じ込ませて「死人」にしたように、「偽りの情報」を人に信じ込ませることで、人を殺すのである。ゆえにイエスは、「悪魔は初めから人殺し」と言い、「悪魔」の正体を「偽りの父」と言われたのであった。

このように、「悪魔」とは「偽りの父」であり、彼の武器は「偽りの情報」である。そして、この世に於いて「偽りの情報」の元締めになっているのが「死」である。というのも、神は「いのち」であり、それは人の存在を無条件で肯定するにもかかわらず、「死」は、人の存在を無条件で否定するからである。「永遠のいのち」などないと、「いのち」である神を否定するからである。この「死」による否定を頂点に、そこからは神を必要としない様々な「偽りの情報」が生まれたのである。例えば、神が不在でも幸せになれるという情報である。それゆえ、「偽りの情報」を信じてしまうことが、神を信じないことになり、それこそが罪であった。「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」(ヨハネ 16:9 新共同訳)。その「偽りの情報」の元締めとなる「死」を

持ち込んだのが「悪魔」なので、イエスは罪を犯す者のことを、「悪魔から出た者」(ヨハネ 8:44)と言われたのであった。つまり、神を否定する「死」を司る者が「悪魔」である。「死をつかさどる者、つまり悪魔を」(ヘブル 2:14 新共同訳)。この「悪魔」のことを「サタン」ともいう。「悪魔とか、サタンとか呼ばれて」(黙示録 12:9)。そこで次に、「サタン」についても見ておきたい。

❖ 「サタン」について

旧約聖書に「サタン」という言葉が、特にヨブ記一章、二章に多く出てくる。それは、「敵対者」を意味するヘブライ語「サターーン」[שָׂטָן]を訳したものである。「サターーン」は、特定の誰かを指す言葉ではなく、「敵対者」という一般名詞であり、「反抗する運動」の概念を言い表す言葉である。ここでは、この「サターーン」に冠詞が付いているので、特定の「敵対者」を指している。それが「サタン」と、原文の発音を踏襲する形で訳されている。つまり、「サタン」は固有名詞ではない。それは単に「反抗する運動」なので、冠詞がない「サターーン」は、例えば「敵対者」(民数記 22:32 新改訳 2017)、「妨げる者」(民数記 22:22 新共同訳)、「敵対する者」(I サムエル 29:4 新改訳 2017)、「敵」(I 列王記 5:4 口語訳)等の意味に訳されている。

そして、ヘブライ語で書かれた旧約聖書をギリシャ語に訳した七十人訳聖書は、例えばヨブ記で「サタン」と訳されている箇所を、原文と同様に冠詞を付け、「ディアボロス」[διάβολος]という意味に訳している。「ディアボロス」は「敵対者」、「中傷者」を意味する言葉であり、これも特定の誰かを指す言葉ではないが、そこに冠詞が付くことで、特定の誰かを指す言葉になっている。そうしたことから、ギリシャ語で書かれた新約聖書で「ディアボロス」に冠詞が付くと、日本語の聖書はそれを「悪魔」と訳している。しかし、それは「敵対者」という言葉に冠詞が付いただけであって、固有名詞ではない。また、冠詞の付かない場合でも、「悪魔」と訳されている箇所があるが(ヨハネ 6:70、使徒 13:10)、それは本来なら「敵対者」と訳すべきである。さらに言えば、日本語の新約聖書には「悪魔」の他に、「サタン」という言葉も出てくる。それは、冠詞の付いた「ディアボロス」の訳ではなく、「サタナース」[Σατανᾶς]を訳したものである。「サタナース」はアラマイ語から来ているが、語源はヘブライ語の「サターーン」と同じであり、やはりこれも「敵対者」を意味する。

このように、「サタン」とは「悪魔」のことであり、それは「敵対者」という意味であって、固有名詞ではない。ただし、新約聖書に於ける「サタン」はアラマイ語の「サタナース」を使うことで、固有名詞のように言い表している。だが、それも単に「敵

対者」を意味する言葉であり、元来は固有名詞ではない。それは、「反抗する運動」の概念を言い表す言葉である。それゆえ、聖書のどこにも、「悪魔」とか「サタン」とか呼ばれる被造物（固有名詞）を神が造られた、という記述は全くない。これについては、神学を深く学び、かつドイツ観念論の哲学者として有名なシェリング(1775-1854)も、次のように述べている。

「旧約聖書においても新約聖書においても、＜悪魔が創造された、悪魔が創造された霊である＞、と語られている箇所が見出されえないということである。」(『啓示の哲学』14-244「シェリング著作集 6c」文屋秋栄 298 頁)

聖書が「悪魔」を固有名詞で呼ばないのは、「悪魔」の実体を知ることが重要だからである。その実体は「敵対者」、すなわち「反抗する運動」である。しかし、運動には姿形がないので、聖書は「悪魔」のことを「霊」としても教えている。「空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている 霊」(エペソ 2:2)。つまり、「サタン」と「悪魔」は同じであり、それは「反抗する運動」であって、悪い「霊」、「悪霊」である。そこで次に、「悪霊」についても見ておきたい。

❖ 「悪霊」について

「悪魔」の実体は「反抗する運動」であり、そもそも運動には姿形はないので、それは「霊」である。神も姿形を持たない「霊」なので、それとは区別するために、聖書は「悪魔」の方の「霊」を「悪い霊」とし、「悪霊」と呼ぶ。ゆえに、「悪魔」の策略との戦いを、「悪霊」との戦いとして教えている。「もろもろの悪霊に対するものです」(エペソ 6:12)。ここで「悪霊」と訳されているのは、二つの単語の「悪い+霊」であり、他にも、ルカ 7:21、使徒 19:12, 13, 15, 16 で同様の形が使われている。それは、特定の被造物を指す言葉ではなく、神に「反抗する運動」を指す。その神は「真理」なので、神に「反抗する運動」の中身は「偽りの情報」である。その「偽りの情報」はたくさんあるので、エペソ 6:12 では、「もろもろの悪霊」という表現になっている。そして、「偽りの情報」の見える象徴が「偶像の神」なので、新約聖書で「悪霊」を言い表す際の大半は「悪い+霊」ではなく、当時の「偶像の神」を言い表す言葉、「ダイモニオン」[δαίμόνιον] が使われている。

このように、「悪魔」も「サタン」も「悪霊」も、固有名詞ではなく、それは「反抗する運動」であり、人を惑わす「偽りの情報」であって、どれも中身は同じである。神

が「光」であれば、どれも中身は「闇」である。この「闇」は、神が天地を創造し、人を造る際には、すでに存在していたという。

「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。」（創世記 1:1-2 新共同訳）

この「闇」が「偽りの情報」を発信し、それにアダムもエバも欺かれて罪を犯してしまった。ならば、「闇」はどこから来たのか、その起源は分からない。なぜなら、聖書が「闇」の起源について沈黙するからである。聖書にはただ、「おまえはどこから来たのか。」サタンは【主】に答えて言った。「地を歩き回り、そこを歩き回って来ました。」（ヨブ 1:7）と書かれているだけである。しかも聖書は、初めは神しかおられなかったとするので、これはもう理性では理解不能である。そうした場合、分からなくても信じますという「信仰」が求められる。ところが、「信仰」ではなく理性の納得を求めてしまうと、神が造られた良き天使が「途中」から高慢になり、天から追放されて「悪魔」になったと考えるしかない。だが、その考えは、「悪魔」に対するイエスの教えを完全否定することになる。というのも、イエスは「途中」からではなく、「悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません」（ヨハネ 8:44）と言われたからである（本書 70 頁「悪魔の起源」、本書 72 頁「－「理性」には限界がある－」）。

大事なことは起源ではなく、「悪霊」とは神に「反抗する運動」であり、中身は「偽りの情報」だということである。その「偽りの情報」の王座に君臨するのが、すなわち神に「反抗する運動」の頂点に君臨するのが「死」である。この「死」の運動が、神が展開する「いのち」の運動を完全否定し、生きる希望がないという「偽りの情報」を人に信じ込ませ、人を一生涯「死の恐怖」の奴隷にしてしまった。「一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々」（ヘブル 2:15）。そのことから、人は見える安心を提供する様々な「偽りの情報」を信じてしまい、見えない安心を提供する「神の言葉」には耳を傾けなくなった。この「死」を司るのが「悪魔」であり、「死をつかさどる者、つまり悪魔を」（ヘブル 2:14 新共同訳）、その「死」によって人は「神の言葉」には耳を傾けなくなったので、罪を犯している者は「悪魔」から出たということになる。そこで、この「悪魔」の仕業を打ち壊すために神の子が現れたのであった。

「罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。」

（I ヨハネ 3:8）

つまり、悪魔の仕業による「死」が、神の言葉の「真理」を否定する「偽りの情報」を人の中に撒き散らし、心が神に向かない「的が外れている」状態にしてしまったのである。これが神の目には人の罪となるので、新約聖書は「的が外れている」ことを意味する「ハマルティア」[ἁμαρτία] を使って罪を言い表している。では、「悪魔」、「サタン」、「悪霊」の実体が分かったところで、「悪霊」との戦いの中身を見てみよう。

❖ 「悪霊」との戦いの中身

「悪魔」とは「サタン」のことであり、その実体は、神に「反抗する運動」である。この運動を「悪霊」というが、それは様々な「偽りの情報」を指す。それゆえ、聖書は「悪魔」との戦いを、もろもろの「悪霊」（偽りの情報）との戦いとして教えている。

「悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」（エペソ 6:11-12）

聖書は、「悪魔の策略」と戦うことを、「もろもろの悪霊に対する」戦いとする。「もろもろの悪霊」と表現するのは、「真理」である神に「反抗する運動」となる「偽りの情報」はたくさんあるからである。そこで聖書は、様々な「偽りの情報」に打ち勝つために、神のすべての武具をとることを命じている。

「ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。」（エペソ 6:13-15）

ここで聖書は、三つの武具を教えている。それは、「真理の帯」、「正義の胸当て」、「平和の福音」である。この三つの武具を、この先では次のように言い換えている。

「救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。」（エペソ 6:17-18）

聖書は、一つ目の武具である「真理の帯」を「救いのかぶと」と言い換え、二つ目の武具である「正義の胸当て」を「御霊の与える剣である、神のことば」と言い換え、三つ目の武具である「平和の福音」を「すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい」と言い換えている。では、その一つ一つを見ていこう。

「偽りの情報」はキリスト者に対し、「お前は、まだ救われていない」とささやく。「自分の姿を見てみる。お前のような罪人が天国に行けるはずがないだろう」とささやく。「永遠のいのちが欲しければ、もっと律法の行いを頑張れ」とささやいてくる。そのようにして、キリスト者を不安にさせ、的外れの信仰に誘導しようとする。これに対抗できる武具が「真理の帯」、すなわち「救いのかぶと」である。それは、福音の「第一ステージ」で述べてきた話であり、次の御言葉が「救いのかぶと」である。

「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。」（Ⅰヨハネ 5:13）

これが「真理の帯」であり、「救いのかぶと」である。これを信じることで、敵が放つ「偽りの情報」の火矢に打ち勝つことができる。

次は、「正義の胸当て」である。この世界は、様々な「偽りの情報」で満ちあふれている。冒頭でも述べたように、「これを手に入れば幸せになれる…」、「こうすれば幸せになれる…」、「何々ができれば幸せになれる…」、「お金が人を幸せにしてくれる…」、「成績が良ければ幸せになれる…」等々、「偽りの情報」が満ちあふれている。さらに言えば、何か困難に遭遇すると「死の恐怖」が顔を覗かせ、「これは、お前の罪に対する神からの罰だ…」とささやいてくる。何かに恐れを抱くと、「死の恐怖」は、「神は、お前のここが嫌いだ…」、「神から愛されたければ、もっと頑張れ…」とささやいてくる。こうした「偽りの情報」に勝つには、「真理」が書かれた聖書の言葉で立ち向かうしかない。それで、神の言葉が「正義の胸当て」となる。そして、神の言葉を受け取るには聖霊の助けが必要である。「聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます」（ヨハネ 14:26）。そこで、ここでは「正義の胸当て」を、「御霊の与える剣である、神のことば」と言い換え、それを「受け取りなさい」としている。その「神のことば」は、「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」（創世記 1:31）

と教え、人は神から無条件で愛されていることを教えている。それゆえ、それを信じることで、敵が放つ「偽りの情報」の火矢に打ち勝つことができる。

最後の武具は、「平和の福音」である。「偽りの情報」は、「死」によって生じた「恐れ」を背景に入り込もうとする。そのため、「偽りの情報」に勝つには「恐れ」を締め出す必要がある。それには、人を愛することである。自分のためではなく、すべての聖徒のために忍耐の限りを尽くして祈ることである。すると「全き愛」が働き、「恐れ」を締め出してくれる。「全き愛は恐れを締め出します」(Ⅰヨハネ 4:18)。これが「平和の福音」である。そこで、聖書は「偽りの情報」に打ち勝つ武器として「平和の福音」を挙げ、それを「すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい」と言い換えている。そして、聖書はこうした神の武具の上に、「信仰の大盾」を取ることを教えている。

「これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。」(エペソ 6:16)

「信仰の大盾」は、救いの教えを信じ、神の教えを信じ、すべての聖徒の祝福を信じる「信仰」であり、それが敵の放つ「偽りの情報」の火矢に打ち勝たせてくれる。

このように、「悪霊」との戦いの中身は、様々な「偽りの情報」との戦いである。その「偽りの情報」の元締めが「死」であり、それは人の存在を完全否定する運動である。神は人の存在を完全肯定する運動を展開するので、「死」が「偽りの情報」の元締めになる。それで聖書は、「死」に対しては次のように教えている。

「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」死のとげは罪であり、罪の力は律法です。しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」(Ⅰコリント 15:55-57)

だが、人は神が用意してくださった神の武具を使おうとはしない。そのため、「死」による「偽りの情報」に人は欺かれ、自分には希望がないと思ってしまう。「死の恐怖」の奴隷となって、怯えながら生きてしまう。その結果、「こんな自分は、愛されるはずもない」となり、心が病んでしまう。聖書はこのことを、「悪霊につかれた人」(マタイ 4:24)、「汚れた霊につかれた人」(マルコ 5:2) 等と表現している。イエスは、こう

した「偽りの情報」に苦しみ、心が病んでしまった人には「真理」を告げることで、「悪霊」（偽りの情報）を追い出された。そのようにして、彼らを癒やされた。そこで、その実際も見ておきたい。

❖ 「汚れた霊」につかれた人

「汚れた霊」につかれた人と聞くと、人は勝手な想像をする。しかし、「汚れた霊」とは「偽りの情報」のことであり、「偽りの情報」で心が病んでしまい、日常生活が送れなくなった人を、聖書は「汚れた霊」につかれた人という。この当時は「精神病」という言葉がなかったので、心が病む症状は「汚れた霊」につかれた人と表現されただけである。正確に言えば、誰もが「不安」を覚える以上、誰の心も病んでおり、誰もが「汚れた霊」につかれた人である。ただ、「不安」を何かでごまかせる人たちは社会で上手くやっていけるが、ごまかすのが下手な人は、日常生活にも困難を覚えてしまうというだけである。つまり、誰もが「偽りの情報」を信じ、「こんな自分は、愛されるはずもない」と思って苦しんでいるのであって、これが心の病気である。

では、「偽りの情報」が心に強く入り込み、心がひどく病んでしまい、日常生活に著しく困難を覚えるようになった人が癒やされたという出来事を、聖書から見てみよう。その人は墓場に住んでいた。そこでは鎖でつないでも、足かせをつけても引きちぎり、砕いてしまった。誰も彼を押さえるだけの力がなかったので、彼は、「夜昼となく、墓場や山で叫び続け、石で自分のからだを傷つけていた」（マルコ 5:5）という。そのような彼が、遠くからイエスを見つけると駆け寄って来た。

「彼はイエスを遠くから見つけ、駆け寄って来てイエスを拝し、大声で叫んで言った。「いと高き神の子、イエスさま。……」」（マルコ 5:6-7）

彼はどうして駆け寄って来たのだろうか。それは「偽りの情報」で心が病み、絶望という「闇」の中にいる自分を知っていたからである。彼は、真実に「闇」を知っていたので、真実な「光」が分かり、駆け寄って来たのである。「闇」の中にいる者は、遠くからでも「光」が分かるので、彼もイエスを遠くから見つけることができ、「光」を求めて駆け寄って来ることができた。それは、目の前の方が「いと高き神の子」であることが、すなわち神であり、真実な「光」であることが、彼には分かったということである。それで彼は、イエスに駆け寄ると、イエスを拝し、「いと高き神の子、イエスさま」と大声で叫んだ。このことは、絶望という「闇」が神への「信仰」を生起させることを示している（本書 190 頁「「信仰」が成長する流れ」）。さらに言えば、イエスのことを「いと高き神

の子」と分かったということは、すでに彼は神の呼びかけに応答し、神に捕らえられていたということである。ところが、彼は続けて叫んだ。

「いと高き神の子、イエスさま。いったい私に何をしようというのですか。
神の御名によってお願いします。どうか私を苦しめないでください。」
(マルコ 5:7)

彼は何と、「どうか私を助けてください」ではなく、「どうか私を苦しめないでください」と言ったのである。これはどうしてなのか。さらに続きを読みたい。

「それは、イエスが、「汚れた霊よ。この人から出て行け」と言われたからである。」(マルコ 5:8)

彼が、「どうか私を苦しめないでください」と言った理由は、「汚れた霊よ。この人から出て行け」とイエスが言われたからだいう。これは言い換えれば、「偽りの情報よ。この人から出て行け」である。まさに「偽りの情報」は、人を「闇」に閉じ込めようとする運動なので、イエスはその運動を自らの「光」で追い出そうとしたのである。しかし、彼は長年「偽りの情報」によって生活を送ってきたので、もうその暮らしに慣れていて、そのため、「偽りの情報」が追い出されたならどうなるのかと未知の生活を恐れ、「どうか私を苦しめないでください」(マルコ 5:7)と叫んでしまったのであった。だが、これは、「どうか私を助けてください」の裏返しである。そうでなければ、どうして遠くからイエスを見つけ、駆け寄って来たりするだろう。彼が何を言おうとも、彼の行動に彼の本音が現れている。では、続きを見てみよう。

「それで、「おまえの名は何か」とお尋ねになると、「私の名はレギオンです。
私たちは大ぜいですから」と言った。そして、自分たちをこの地方から追い出さないでくださいと懇願した。」(マルコ 5:9-10)

イエスは、「偽りの情報」に名を尋ねた。すると「偽りの情報」は、「私の名はレギオンです」と答えた。「レギオン」[λεγιών]とは「軍団」という意味であり、大勢いることを言い表している。それゆえ続きに、「私たちは大ぜいですから」とある。これは、人を苦しめている「偽りの情報」がたくさんあることを言い表しているが、たくさんあっても、人を滅ぼすという一つの目的で動いているので、「軍団」という。そして、「偽りの情報」につかれた人は、「自分たちをこの地方から追い出さないでくださいと懇願し

た」のであった。この懇願の裏にあるのは、「こんな自分は、愛されるはずもない」という強い思いであり、「こんな罪深い自分は、罰を受け殺されるに違いない」という強い恐れであった。つまり、彼は心で、かつてペテロがイエスに出会った時にしたように、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」（ルカ 5:8）と叫んでいたのである。無論、これはペテロの本音ではなかったのも、ペテロはイエスについていった。この「汚れた霊」につかれた人も、先の懇願は本音ではなかったのも、心の中で真剣に、イエスに助けを求めている。それゆえ、この後、次のように願った。

「ところで、その山腹に、豚の大群が飼ってあった。彼らはイエスに願って言った。「私たちが豚の中に送って、彼らに乗り移らせてください。」イエスがそれを許されたので、汚れた霊どもは出て行って、豚に乗り移った。」

（マルコ 5:11-13）

彼は、信じてきた様々な「偽りの情報」の「軍団」（レギオン）を自分に見立て、「私たちが豚の中に送って、彼らに乗り移らせてください」と懇願したのである。すると、イエスはそれに答えられた。

「すると、二千匹ほどの豚の群れが、険しいがけを駆け降り、湖へなだれ落ちて、湖におぼれてしまった。」（マルコ 5:13）

イエスは、豚の群れが「湖におぼれてしまった」この出来事を通して、「偽りの情報」は人を滅ぼすことを彼に教えたのであった。また、豚に入るという、彼の望む形で「偽りの情報」を追いつくことで、「こんな自分でも、神に愛されている」という「真理」が彼の心を覆うようにされたのである。こうして、彼は「偽りの情報」が人を滅ぼすことの恐ろしさを知ると同時に、自分の望みが叶うことで、愛されている自分を知った。しかし、彼が正気に戻るには、自分の罪が赦されたことも知る必要があった。人を苦しめ正気を奪ってしまうのが罪責感だからである。そこで、イエスは彼にあることをなされた。

「豚を飼っていた者たちは逃げ出して、町や村々でこの事を告げ知らせた。人々は何事が起こったのかと見にやって来た。そして、イエスのところに来て、悪霊につかれていた人、すなわちレギオンを宿していた人が、着物を着て、正気に返ってすわっているのを見て、恐ろしくなった。」

（マルコ 5:14-15）

「汚れた霊」につかれた人のことを、ここでは「悪霊につかれていた人」と言い換え、彼は「着物を着て」、正気に返ったとある。この時の彼は裸だったので、「彼は、長い間着物も着けず、家には住まないで、墓場に住んでいた」（ルカ 8:27）、これは誰かが彼に着物を着せたことを意味する。それは、イエスである。イエスは、彼に着物を着せたのであった。ならば、なぜ彼に着物を着せると、正気に戻ったのだろうか。

❖ 着物を着せる

「汚れた霊」につかれた人、すなわち「悪霊につかれていた人」は、「着物を着て」、正気に返ったとある。このことから、「悪霊」につかれていたときは着る物を捨て、裸であったことが分かる。「彼は、長い間着物も着けず」（ルカ 8:27）。裸であることで自らを罰し、「こんな罪深い自分は、罰を受けて当然である」としていたことが分かる。その激しい罪責感が、彼の正気を奪っていた。そして、彼はこの激しい罪責感に連動し、「こんな自分は、愛されるはずもない」という「偽りの情報」を信じ切っていたので、墓場に隠れて生きていた。それは「闇」の中に生きていたということ意味する。それゆえ、彼には真実な「光」が分かり、イエスを見ると駆け寄って来た。そこでイエスは、「汚れた霊よ。この人から出て行け」と命じ、「こんな自分は、愛されるはずもない」という「偽りの情報」（悪霊）を彼から追い出された。そのことで、愛されている自分を彼が知るようにされた。しかし、それは愛されている自分を知っただけで、自分の犯してきた罪が赦されたという自覚ではなかった。そのため、「こんな罪深い自分は、罰を受けて当然である」という否定的な思いが、依然として彼の正気を奪っていたので、イエスは何も語ることをせず、彼に着物を着せたのである。それは、神がアダムとエバにしたのと同じであった。

その昔、アダムとエバは親しかった蛇に欺され、罪を犯してしまった。そのことで、彼らは神に愛されている自分を認識できなくなり、自分が裸であることしか見えなくなった。その時、彼らは自分たちの裸の姿を恐れて、隠れてしまった。「それで私は裸なので、恐れて、隠れました」（創世記 3:10）。そうした彼らに神は優しく声をかけられたので、彼らは勇気をもって神のところに出て来た。そこで神は、何が起きたのかを彼らに告げられたので、彼らは自分たちの犯した罪を知り、「何と罪深いことをしてしまったのだろう。こんな自分は、もう愛されるはずもない」という思いになった。その時、彼らは心の中で、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」と叫んだ。神は彼らの心の叫びを聞き、何も語らず彼らのために皮の衣を用意し、裸であった彼らに着せてくださったのである。「神である【主】は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった」（創世記 3:21）。そのようにして、「あなた

の罪は赦されているから」と、神は彼らに「非言語」でのメッセージを送り、彼らの心を癒やされたのであった（本書 289 頁「その時が来た」）。

これと全く同じ出来事が、この「悪霊」につかれていた人にも起きていたということである。彼も着物を着せられたことで、理屈抜きに自分の罪が赦されたことを知り、正気に返ったからである。ここに書かれていた、「着物を着て、正気に返って」（マルコ 5:15）とは、まことにそういうことであつた。

余談だが、互いの思いを伝え合うことを「コミュニケーション」という。その手段は会話だけではない。「非言語」のコミュニケーションもある。というのも、人は相手の表情、相手の行動、相手の口調、そうした相手の「非言語」の仕草から相手の気持ちを知ることができるからである。実は、会話によるコミュニケーションよりも、「非言語」でのコミュニケーションの方が圧倒的に多い。

この「悪霊」につかれていた人の場合も、「非言語」でのコミュニケーションが行われていた。イエスは何も語らず、ただ優しく彼に着物を着せることで、「あなたの罪は赦されているから」と、「非言語」でのメッセージを彼に送られていた。そのことで、彼は罪が赦された自分を自覚でき、正気に返った。このことが分かるなら、「悪霊」につかれていた人は、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」（ルカ 18:13）と心の中で叫んでいたことが容易に想像できる。イエスは着物を用意し、何も語らず裸であつた彼に、優しいまなざしで着せることで、「わたしは、あなたを愛しているから」という「非言語」のメッセージを送られたのである。それにより、「悪霊」につかれていた彼は、自分の罪が赦されたことを自覚でき、無条件で罪が赦され、無条件で愛される自分の「真実の姿」を知ったのであつた。こうして、「こんな罪深い自分は、罰を受けて当然である」という「偽りの情報」は追い出され、彼は正気に返った。

このことから、キリストの十字架は、まさしく人を無条件で愛し、人の罪を赦していることを私たちに伝えるための「非言語」でのメッセージであつたことが分かる。キリストは、私たちが「偽りの情報」に屈することがないように、すなわち「こんな罪深い自分は、愛されるはずもない」という情報に欺かれないよう、十字架に架かれ、無条件で愛している事実を、「非言語」で伝えたのである。それは、一生涯「死」による「偽りの情報」の奴隷となり、すなわち「こんな罪深い自分は、愛されるはずもない」と、一生涯「死の恐怖」につながれて奴隷となっていた私たちを、真実に解放するためであつた。

「これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」

(ヘブル 2:14-15)

キリストの十字架は、まことに絶望の中にいる人たちに対する、「非言語」による神からの告知である。「あなたの罪は赦されているから。わたしは、あなたを愛しているから」という、言葉では到底言い尽くせない、人への神の熱い思いを伝えているのが、キリストの十字架である。「あなたがたに対して、神が抱いておられる熱い思いをわたしも抱いています」(Ⅱコリント 11:2 新共同訳)。

このように、「悪霊」との戦いは「偽りの情報」との戦いである。「偽りの情報」を締め出し、「真理」となる神の言葉を信じる戦いである。神はその戦いを助けてくださる。というのも、その戦いを通して、無条件で愛されている自分の「真実な姿」が見えるようになり、「不安」が「平安」になるからである。そのようにして、神は人を癒やされる。見てきた「汚れた霊」につかれた人の話は、そのことを教えている。さて、福音の「第二ステージ」は「悪霊」との戦いであり、それは神の癒やしを受け取る話であるが、それは、この「汚れた霊」につかれた人の話の続きに起きた出来事からも知ることができる。それは、十二年の間長血をわずらっていた女性が癒やされる出来事である。

❖ 十二年の間長血をわずらっていた女性

イエスは「悪霊」につかれていた人を癒やされた後、別の場所に移動された。そこには、イエスのことを聞きつけた人たちが大勢いた。その中に、十二年の間長血をわずらっている女性がいた。彼女は、多くの医者に診てもらったが、ひどい目に遭い、財産を全て使い切っていた。彼女は、まさしく絶望の「闇」の中にあった。ところが、彼女はイエスの着物にさわると、癒やされたのである。

「彼女は、イエスのことを耳にして、群衆の中に紛れ込み、うしろから、イエスの着物にさわった。「お着物にさわることでもできれば、きっと直る」と考えていたからである。すると、すぐに、血の源がかれて、ひどい痛みが直ったことを、からだに感じた。」(マルコ 5:27-29)

彼女は、「お着物にさわることでもできれば、きっと直る」と信じて、イエスの着物にさわった。すると、何と彼女の病気は癒やされてしまったのである。

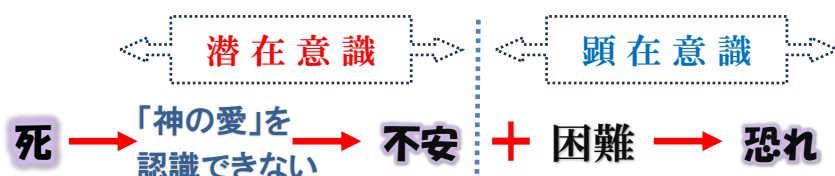
これと同じことが、百人隊長の部下が病気になった際にも起きた。百人隊長が、「ただ、おことばを下さい。そうすれば、私のしもべは直ります」(マタイ 8:8)と言ったので、イエスは、「さあ行きなさい。あなたの信じたとおりになるように」(マタイ 8:13)と答えられた。その言葉を信じた百人隊長は、イエスの言葉どおり、部下が本当に癒やされたことを知った。それは、神を信頼する「信仰」に神は必ず応答するということであり、十二年の間長血をわずらった女性も絶望の「闇」と向き合ったことで、神を信頼する「信仰」がまさに生起したのであった。さて、話はこれで終わりではない。誰が自分にさわったのかと、イエスは探し始められたのであった。

「イエスも、すぐに、自分のうちから力が外に出て行ったことに気づいて、群衆の中を振り向いて、「だれがわたしの着物にさわったのですか」と言われた。そこで弟子たちはイエスに言った。「群衆があなたに押し迫っているのをご覧になっていて、それでも『だれがわたしにさわったのか』とおっしゃるのですか。」イエスは、それをした人を知ろうとして、見回しておられた。」

(マルコ 5:30-32)

群衆の中で、誰が自分の着物にさわったのかと探すのは無理な話である。それでもイエスは、「だれがわたしの着物にさわったのですか」と声を上げ、探された。無論、弟子たちはやめさせようとしたが、彼らの制止を振り切り、その者を探されたのであった。これは一体どうしたことなのだろう。その答えは簡単である。イエスは自分にさわった者を、本当の意味では癒やしてなどいなかったからである。

そこで思い出してほしい。何が人を苦しめていたかを。それは、「神の愛」を認識できないことで生じる「不安」であり、つまり自分の「真実な姿」が認識できないことによる「不安」である。それで、人は何としても「不安」を排除しようとする。だが、「不安」には姿形がないので、人は無意識に「不安」に見える**困難**に投影してしまう。そのため、人は**困難**に対して「**恐れ**」を抱くようになる。



これを、「不安」の可視化という。「不安」を可視化することで、「潜在意識」に於ける「不安」は、「顕在意識」に於ける具体的な「恐れ」になる。すると、人は見える**困難**と戦うことで「恐れ」を締め出し、見えない「不安」を排除しようとする（本書 97 頁「苦しみ」を覚える仕組み）。この女性も、長血という**困難**と戦うことで、無意識に見えない「不安」を排除しようとした。それゆえ、体が治れば一切の苦しみから解放されると思い、イエスの着物に触れたのである。そして、見えるところの**困難**は解決した。しかし、「神の愛」を認識できないことで生じる「不安」は、そのままであった。

これでは、イエスがなさりたい癒やしは達成されていない。というのも、イエスが人を癒やす真の目的は、「神の愛」を認識できないことで生じる「不安」を、すなわち苦しみを取り除くことにあったからである。苦しみの本当の原因を取り除くことが、イエスがなさろうとしていた癒やしであった。それは、自分の「真実な姿」を認識させない運動を展開する「偽りの情報」を締め出すことであった。この女性は未だに、「こんな罪深い自分は、愛されるはずもない」という「死」による「偽りの情報」に苦しんでいた。端的に言えば、「罪には罰」という考えに苦しんでいた。そのことは、イエスが自分のことを探していると知った時、「きっと、罰を受けるに違いない」と恐れてしまったことから明らかである。しかし、彼女は必ず見つかってしまうと思い、あの放蕩息子が罰を覚悟で父のもとに立ち帰ったのと同じように、恐れおののき、罰を覚悟でイエスの前に出たのであった。

「女は恐れおののき、自分の身に起こった事を知り、イエスの前に出てひれ伏し、イエスに真実を余すところなく打ち明けた。」（マルコ 5:33）

すると、イエスが本当になさりたかった癒やしが始まった。それは、彼女から「偽りの情報」を締め出すために、彼女の「真実な姿」を告げ知らせることであった。

「そこで、イエスは彼女にこう言われた。「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して帰りなさい。病気にかからず、すこやかでいなさい。」
（マルコ 5:34）

彼女は、自分は勝手に着物に触れたので、「きっと、罰を受けるに違いない」と恐れていたが、何と、イエスは彼女の方を向き、優しく語りかけたのであった。その言葉の中でイエスは、「安心して帰りなさい」と言われた。その時、彼女は生まれて初めて、

無条件で愛される自分を知り、彼女の中にあった、「こんな罪深い自分は、愛されるはずもない」という「偽りの情報」が締め出されたのである。これこそが、イエスが本当になさりたかった癒やしである。それは、人が自分の「真実な姿」を知るようになることにほかならない。なぜなら、それが苦しみから人を真に解放するからである。

こうした事情から、イエスは体の病気の癒やしを行なった際はよく、「気をつけて、だれにも何も言わないようにしなさい」（マルコ 1:44）と言われた。それは、本当の癒やしではなかったからである。体の癒やしは一時的であり、いくら癒やしたところで、体はやがて朽ち果てる。しかし、キリストを信じている者の体は、もう朽ちない「霊の体」を着せられているので、実は完璧に癒やされている。それゆえ、キリスト者の場合は、パウロのように、見える体の病気は癒やされなくても、「偽りの情報」が締め出されるといふ本当の癒やしを受けることが多い。というより、神は見える体の病気によって、逆に人が自分の「弱さ」と向き合えるように助け、神からの「赦しの恵み」を受け取らせるのである。「わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」（Ⅱコリント 12:9）。その恵みこそ、自分の「真実な姿」を知る本当の癒やしである。

このように、十二年の間長血をわずらっていた女性を癒やす出来事は、「こんな罪深い自分は、愛されるはずもない」という「死」による「偽りの情報」を締め出した話であり、これが本当の癒やしであって、これを「悪霊」との戦いという。しかし、締め出さなければならない「偽りの情報」の元締めは「死」であり、それこそが最大の「偽りの情報」である。この最大の「偽りの情報」を人の中から締め出すには、「死人」が生きる者になることを示す必要がある。それができて、初めて「悪霊」（偽りの情報）に対し、完全に勝利したことになる。そこでイエスは、こうした「悪霊」（偽りの情報）との戦いの延長で、「死人」を生きる者にされたのであった。

❖ 「死人」を生きる者にされた

先に見た十二年の間長血をわずらっていた女性の話は、会堂管理者の一人がイエスに、自分の娘が死にかけているので助けてほしいと願ったので、会堂管理者と一緒に彼の家に向かっている途中で起きた出来事であった。イエスは先の女性に、「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して帰りなさい。病気にかからず、すこやかでいなさい」（マルコ 5:34）と言って癒やされたが、その時、会堂管理者の家から人がやって来て、会堂管理者にこう言ったのであった。「あなたのお嬢さんはなくなりました。なぜ、このうえ先生を煩わすことがありましょう」（マルコ 5:35）。その話をそばで聞いていたイエスは、会堂管理者に次のように言われたのである。

「恐れなくて、ただ信じていなさい。」（マルコ 5:36）

普通は、死んでしまったならあきらめるしかない。しかし、「恐れなくて、ただ信じていなさい」とイエスは言い、その情報を偽りとされたのである。つまり、「死人」が生き返るということである。それはまさしく、人を最も苦しめる最大の「偽りの情報」との戦いであり、イエスはここで会堂管理者の中から、最大の「偽りの情報」を締め出そうとされたのであった。これは大変重要なことだったので、それを霊的に理解できるペテロとヤコブ、そしてヤコブの兄弟ヨハネのほかは、イエスはだれも自分と一緒に行くのをお許しにならなかった。そして、会堂管理者の家に着くと、人々が取り乱し、大声で泣いたり、わめいたりしているのを見て、彼らにこう言われた。

「なぜ取り乱して、泣くのですか。子どもは死んだのではない。眠っているのです。」（マルコ 5:39）

ここでイエスが「なぜ取り乱して、泣くのですか」と言われたということは、イエスが「恐れなくて、ただ信じていなさい」（マルコ 5:36）と言われたことを、誰も信じなかったことを意味する。イエスの言葉を、誰もが「偽りの情報」とし、自分たちが見ている死を真実としたということである。そこでイエスは、はっきりと、「子どもは死んだのではない」と言われたのである。だが、「人々はイエスをあざ笑った」（マルコ 5:40）。しかし、いくら笑われようとも、イエスは最大の「偽りの情報」との戦いをやめなかった。そこでみなを外に出し、その子どもの父と母、それにご自分の供の者たちだけを伴って、子どものいる所へ入って行かれた。それからイエスは、「死人」に呼びかけられたのであった。

「そして、その子どもの手を取って、「タリタ、クミ」と言われた。（訳して言えば、「少女よ。あなたに言う。起きなさい」という意味である。）」
（マルコ 5:41）

すると、何と「死人」が神の呼びかけを聞き、生きる者となった。

「すると、少女はすぐさま起き上がり、歩き始めた。十二歳にもなっていたからである。彼らはたちまち非常な驚きに包まれた。」（マルコ 5:42）

こうして、人を最も苦しめる最大の「偽りの情報」である「死」を、イエスは締め出されたのである。ここに「真理」がある。この出来事こそ、生まれながらに死んでいた「死人」が、神の子の呼びかけを聞き、それに応答すれば、生きる者になるということを示した型であって、これこそがイエスの最も強調された「真理」であった。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」（ヨハネ 5:25）

私たちもかつては、この少女と同じように死んでいたが、「アダムにあってすべての人が死んでいるように」（I コリント 15:22）、この少女と同じように、神の子の呼びかけを聞き、それに応答して生きる者になったのである。それゆえ、キリストを信じている私たちは、「永遠のいのち」をもう持っていて、裁きに会うことがなく、すでに「死」から「いのち」に移された状態にあると、イエスは断言された。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです。」

（ヨハネ 5:24 私訳）

この「真理」を信じられるようになることが、「偽りの情報」の情報との戦いに勝つことである。したがって、死んだ少女が生きる者になったこの出来事は、まさに最大の「偽りの情報」を締め出した話である。見える困難を解決する話ではなく、人を苦しめている最大の「偽りの情報」を締め出した話であり、生きることに「希望」を持たせる話である。これが、「悪霊」との真実な戦いである。しかし、そこまでの意味を当時の人たちが理解するのは無理であり、むしろ少女に起きた出来事は、体が癒やされる奇跡としてしか理解できなかったのも、イエスは彼らに、「このことをだれにも知らせないように」（マルコ 5:43）と厳しく命じられたのであった。

このように、キリストを信じている者たちは、もう「死人」ではなく、「永遠のいのち」を持っているのであって、すなわち朽ちない「霊の体」を着せられているのであって、この少女と同じように、死んでいたのが生きる者にされた奇跡の中にいる。それは、神に支えられて生きる姿であり、神に無条件で愛されている姿である。それこそが、神が人を造られた際の人の「真実な姿」にほかならない。

しかし、その「真実な姿」を人は知らないし、知っても信じることができない。それは、「偽りの情報」で心が病んでしまっているからである。それで、福音の「第二ステージ」は、「偽りの情報」を締め出す戦いを展開する。神は罪を赦す恵みを使い、人から「偽りの情報」を締め出し、人が自分の「真実な姿」を知って心が癒やされる戦いを展開される。聖書は、これを「悪霊」との戦いとして教えている。それは、神の「赦しの恵み」が「真理」となる神の言葉を信じさせる戦いであり、「信仰」を成長させる戦いである。こうして、福音の「第一ステージ」では「永遠のいのち」を得るので、福音の「第二ステージ」では、その「永遠のいのち」を豊かにしていくのである。それでイエスは、「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」(ヨハネ 10:10)と言われたのであった。羊が得る「永遠のいのち」は「イエス・キリスト」を指すので、「この方こそ、まことの神、永遠のいのちです」(Ⅰヨハネ 5:20)、その「永遠のいのち」を豊かに持つとは、イエス・キリストへの信頼を増し加えていくということである。では、福音の「第二ステージ」のまとめをしよう。

❖ 福音の「第二ステージ」のまとめ

「神の福音」の「第二ステージ」は、「第一ステージ」で「霊の体」が着せられて救われた者に対し、「神の言葉」を以て救いの自覚に至らせ、さらには「永遠のいのち」を持つようになったことを知るようにさせ、「復活」の希望を持てるようにするステージである。それは、神に無条件で愛されている自分の「真実な姿」を知るようにするということである。そこで神は、「神の言葉」を人が信じられるように、「赦しの恵み」を使って「罪」の泥を洗い流される。それを以て「信仰」を成長させ、「神の言葉」が示す人の「真実な姿」を、人が知ることができるようになる。

具体的には、神は人に対し、「神の言葉」によって「罪」を認めさせ、「赦しの恵み」を受け取るようにと迫るのである。神はこの作業を繰り返すことで、神からの「肯定」を受け取らせ、すなわち「贈り物」としての自分の価値を思い起こさせ、その下で生きるようにさせる。それは、自らの努力で自らを「肯定」しようとする「罪」を洗い流し、自分の「真実な姿」に気づかせることである。その姿は、神に無条件で愛されている「良き者」であって、不変の「肯定」である。たとえ見えるところは罪深く、「ダメな者」に見えても、私たちは「神」に属していて、その方の栄光を現している。それこそが、「キリスト・イエスに捕らえられたところの自分」であり「真理」である。それを「信仰」で見て、捕らえられた自分を生きることが、「信仰」に生きることの実際になる。それは、「真理」への「服従」にほかならない。その生き方を神が助けてくださるというのが、福音の「第二ステージ」である。

そして最後は、「悪霊」との戦いという視点から見えてきた。なぜなら、「悪霊」との戦いは、人の「真実な姿」を塞いでいる「偽りの情報」との戦いを意味するからである。「悪霊」とは特定の被造物を指す言葉ではなく、それは「悪い+霊」であって、「真理」である神に逆らう「偽りの情報」の運動を意味する。そして、「偽りの情報」の運動は、人を無条件で否定する「死」から出ていて、その「死」を司っているのが「悪魔」である。「死をつかさどる者、つまり悪魔を」(ヘブル 2:14 新共同訳)。ゆえに、イエスは「悪魔」のことを、「偽りの父」と言われた。「悪魔は(中略)偽りの父である」(ヨハネ 8:44)。しかし、「悪魔」のことを人は好き勝手に想像し、聖書が教えている「悪魔」の姿を知ろうとはしない。そのため、「悪霊」との戦いは、誤った意味に解釈されてしまうのが常となった。

このように、福音の「第二ステージ」は、神が人に自分の「真実な姿」を知るようにするために、神が人に「赦しの恵み」を受け取らせるステージである。それでイエスは、罪は何であってでも赦されることを宣言するために、「わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません」(ヨハネ 12:47)と言い、「人はどんな罪も冒涇も赦していただけます」(マタイ 12:31)と言われたのである。これこそが、「こんな罪深い自分は、愛されるはずもない」という不信仰の罪を、すなわち「悪魔」による「偽りの情報」を締め出す恵みである。この恵みによって、「こんな自分でも、神に愛されている」という「真理」を、人は知るようになる。

ところが、人は「赦しの恵み」を拒否し、神からの「肯定」を拒んでしまう。住み慣れた、「こんな罪深い自分は、愛されるはずもない」という「偽りの情報」に居座ることで、「神の言葉」を信じない不信仰を愛してしまう。そこで、神は次に、神の恵みを拒む不信仰の力と戦われる。それが、福音の「第三ステージ」となる。それゆえ、福音の「第三ステージ」は、これまでのステージと同時進行するのである。では、最後のステージに進もう。

第六章 福音の「第三ステージ」

人は「死の体」(有限性の体)で生まれてくるので、そのままでは滅びるしかない。これが、人の抱える「究極の問題」である。加えて、「死の体」は有限性ゆえ、その体では永遠性の神を認識できない。そのため、神に無条件で愛されている自分の「真実な姿」を人は知り得なくなり、「不安」を覚える。その「不安」が、見える安心をむさぼる罪へと人を誘導し、人を苦しめている。ゆえに、自分の「真実な姿」を知らないことが人の抱える「現実の問題」である。そこで、神は「究極の問題」を解決するために、神の「いのち」である「魂」を介し、人の「潜在意識」に呼びかけ、それを聞いて応答する者に朽ちない「霊の体」を着せ、「死」から「いのち」に移される。これが福音の「第一ステージ」であり、人の「救い」である。ただし、それは「潜在意識」での出来事なので、救われても自覚がない。そのため、福音の「第二ステージ」は、舞台を人が意識できる「顕在意識」に移し、「救い」を自覚できるようにする。そして、それを皮切りに、自分の「真実な姿」を知ることができるように神が助けてくださる。この「第二ステージ」の流れを、さらに詳しく説明しよう。

神の呼びかけに応答した者は、「霊の体」を着せられる。これが福音の「第一ステージ」であり、「第二ステージ」はこのあとに始まる。着せられた「霊の体」は神に属する体なので、それが着せられると「聖霊」が直接助けてくれるようになる。そのおかげで、「霊の体」を着せられて救われた者は、キリストについての言葉を聞くと、キリストが信じられるようになり、「イエスは主です」と告白ができるようになる。「**聖霊**によるのでなければ、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません」(I コリント 12:3)。こうして、「救い」を自覚できるようになる。ということは、主イエスを信じている者は、すでに「霊の体」という「永遠のいのち」を持っていて、「死」から「いのち」に移された状態にあるということなので、イエスは次のように断言された。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている (原文は現在形) 者は、永遠のいのちを持っ
ていて (原文は現在形)、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移っ
た状態にあるのです (原文は現在完了形)。」(ヨハネ 5:24 私訳)

そこで神は、「救い」を自覚できるようになった者は、もう「永遠のいのち」を持っていて、「死」から「いのち」に移された状態にあるので、そのことを人が知るようにさ

れる。それは神に支えられ、神に無条件で愛されている姿であって、それが人の「真実な姿」にほかならない。神は、人がそれを知るようにすることで、罪に苦しむようになった人の「現実の問題」の解決を図る。以上が「第二ステージ」の流れであり、それは「神の言葉」を信じる「信仰」を成長させる流れでもある。

そして、この「第一ステージ」と「第二ステージ」を裏で支えていたのが「赦しの恵み」である（本書 210 頁「赦しの恵み」について）。それは、入り込んだ「死」によって人の存在が「否定」されたので、その「否定」を「否定」する恵みである。言い換えれば、「こんな罪深い自分は、愛されるはずもない」という「偽りの情報」を締め出す恵みである。この恵みは、人を「否定」する罪を赦し、罪の住み家である「過去」を白紙にする。この恵みによって「霊の体」が着せられ（救い）、罪が赦されたことを知るようになり、「救い」の自覚に至る。さらには、神に無条件で愛されている自分の「真実な姿」を知るようになっていく。したがって、「赦しの恵み」の受け取りなくしては「救い」を手にすることも、「救い」の自覚に至ることも、自分の「真実な姿」を知ることもない。まさに、福音の「第一ステージ」と「第二ステージ」を裏で支えていたのが「赦しの恵み」である。しかし、人は「赦しの恵み」の受け取りを拒否する。そこで、その恵みを受け取らせるために神のなさる働きが、福音の「第三ステージ」となる。では、「赦しの恵み」を受け取らせるために神は何をなさるのだろう。それを知るために、人はなぜ受け取りを拒否するのか、まずはその理由から見ていこう。

－神からの「肯定」を拒む理由－

人を「過去」に閉じ込めてしまう「死」の運動を、神は「赦しの恵み」によって洗い流してくださる。その運動は「偽りの情報」であって、人を「否定」する泥である。その泥を、神は人を「肯定」する「赦しの恵み」で洗い流してくださる。しかし、人は神が差し出される無条件の「肯定」を拒んでしまう。なぜ拒むのか。その理由を明らかにすれば、神は拒む者に何をなさるかも分かる。それこそが、福音の「第三ステージ」である。では、人が神の「肯定」を拒むようになった経緯から見てみよう。

❖ 神の「肯定」を拒むようになった経緯

その昔、アダムは悪魔に欺かれて罪を犯し、すなわちアダムは「神と異なる思い」を持ってしまい、そのことで神と「分離」してしまった。神との間にあった「一つ思い」

の関係が、「神と異なる思い」を持ったことで自動的に壊れ、神と人とは「分離」してしまった。それは、人の「体」もこの世界も「有限性」になり、「永遠性」である神を認識できなくなったということである。この出来事が「死」であり、「死」が入り込んだ結果、人の土台である神に人は無条件で愛されているにもかかわらず、そのことが認識できなくなった。そのせいで、人は自分の価値を喪失したと思い、自分を「ダメな者」として認識するようになり、自分の姿を恥ずかしいと思うようになった。そこで、恥ずかしいと思う自分の姿を何かで覆い、価値ある者になろうとした。その最初が、いちじくの葉で腰を覆うことであった。

「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」(創世記 3:7)

「ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った」とは、自分の内面を見る目が閉ざされ、自分の外しか見えなくなったことを言い表している。自分の内面とは、神が自分の土台であって、神に無条件で愛されている自分である。それが認識できなくなり、認識できるのは自分の外の情報だけになったので、「ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った」とある。そして、二人が知ようになった「自分たちが裸である」という情報には、自分を支えている神が含まれておらず、そこには裸の情報しかなかったので、自分に対しては無価値という認識になった。その結果、裸である自分の姿を恐れ、彼らはいちじくの木の葉で自分を覆い隠し、無価値な自分から価値ある自分になろうとした。しかし、それでもなお裸である自分の姿を「恐れ」、今度は物陰に隠れた。「それで私は裸なので、恐れて、隠れました」(創世記 3:10)。今日、人は何かの権威に身を隠し、自らを権威ある者に見せようとするが、その習性はここから始まったのである。

さて、「有限性」の「体」は、神を認識させないだけではなかった。その「体」には朽ち果てる運命もあったので、人は顔に汗を流して糧を得、ついには土に帰ることになった。「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る」(創世記 3:19)。こうして、神との関係を遮断する「有限性」という「死」は、人の存在を徹底的に「否定」し、最後は「無」となる現実を人に突きつけ、完全に人を無価値な者として認識させたのである。しかし、人は本来「無」ではなく、神と共に生き続けられる価値ある者として造られているので、無価値という認識に対しては、心の奥底で反発が起き

る。喩えるなら、木の本質は水に浮くように神に造られたので、その木を水の中に沈めようとすれば反発が起きるのと同じである。

つまり、人の本質は価値ある者として造られているので、「見よ。それは非常に良かった」(創世記 1:31)、「無価値」とする「有限性」の運動に対しては反発が起き、人は価値ある者になろうとするのである。そこで、人は自力で自分の「うわべ」を飾り、そこに自分の価値を求めるようになった。自分の業績で自分を飾り、その業績を自分の価値として、価値ある者になろうと必死になった。互いの業績を比べ、争うようになり、互いに憎み合うようになった。カインがアベルと業績を巡って争い、アベルを殺したように、人は互いに憎み合うようになった。これが人の罪の様であり、この様子が人を苦しめている。なぜなら、人の本質は価値ある者として、すなわち神の「いのち」に支えられ、神と人を愛するように造られているからである。ところが、人を愛したくても、互いを比べて愛せなくなり、そのせいで人は苦しむようになった。パウロは、そのことを次のように言っている。

「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。」

(ローマ 7:19-20)

パウロは、私の中に「罪」が住み着いたので、罪を犯すようになったと言う。その住み着いた「罪」は、すなわち神に逆らう「肉の思い」は、入り込んだ「死」に起因するので、彼は同じローマ書で、「肉の思いは死であり」(ローマ 8:6)と述べている。また別の手紙では、「死のとげは罪であり」(I コリント 15:56)と述べている。

このように、悪魔によって「死」が人のうちに住み着き、人は神と人を愛せなくなる「罪人」になり、加えて、「死の恐怖」によって体の欲望にも振り回され、自分の罪深さに苦しむこととなった。このことから、人は罪を犯す自分を見て神に裁かれると思うようになり、神を避けるようになった。これが、人が神の「肯定」を拒むようになった経緯である。では、なぜ罪深い自分は神に裁かれると思ってしまうのだろう。

❖ 罪深い自分は神に裁かれる

神は人をご自分に似せ、「良い行い」ができる者として造られた。「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです」(エペソ

2:10)。そのため、神の命令は重荷とはならなかった。「神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません」(Ⅰヨハネ 5:3)。これを別の視点から述べると、人は神に無条件で愛されている自分を認識できたということである。愛されている自分を認識できたので、神と人を愛することができ、神の命令「愛せよ」が重荷にならなかった。愛を知らない者は愛せないで、そのような理屈になる。

ところが、そこに「死」が入り込んできたことで、「永遠性」であった人の「体」と環境は、神を認識できない「有限性」になった。そのことで、人は神に無条件で愛されている自分を認識できなくなり、「良い行い」を選択できる「意志」は制限されてしまった。つまり、「有限性」から生じる「死の恐怖」が身の安全の確保を優先させるので、人を支えている神の「いのち」である「魂」が発信する「神の思い」を選択できなくなったのである。「神の思い」は「愛せよ」に集約されるが、身の安全の確保は「愛されたい」に集約されるので、「死」が入り込んだ途端、人は「神の思い」を選択できなくなる。そうすると、「神の思い」は重荷となり、それは人を責め立てる「ねばならない」という形式の「律法」になる。「律法」になれば、それが実行できない自分を見ると罪責感を覚えるようになる。この「罪責感」が「死の恐怖」と合体し、こんな罪深い自分では神に裁かれると思わせてくる。そして、神の報復を恐れさせる。

❖ 神の報復を恐れる

人は神の報復を恐れるようになると、報復を何としても避けようとする。その最善の手段が、「神の命令」に、すなわち「律法」に少しでも従うことである。そこで、「律法」の「行い」で神に認められることを目指し、神の報復を避けるようになる。ここに、人類が共通に目指す「道德規範」が生まれ、誰もが道徳的な人間になることで、無意識に神の報復から逃れるようになる。これは、見方を変えれば、自らの「行い」を以て、神からの報いを得ようとすることである。それで人は、「私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております」(ルカ 18:12) と、自らの「行い」を神に訴え、神からの報いを得ようとするのである。この生き方が「律法主義」であり、御利益宗教を生み出す。

こうして、人は神の報復を恐れるあまり、神と自分との間に、自分の努力の成果となる「行い」を持ち込み、神とは一定の距離を保った形式で関わるようになる。神の報復を恐れ、神とは徹底して形式的な関わりをするようになる。それで、無償で与えられる神からの「肯定」を拒んでしまう。というのも、神からの「肯定」を無償で受け取ると、神と自分との間に持ち込んだ形式での関わり、すなわち「行い」による報い

は崩壊し、「神の命令」を完全には実行できない自分が神の目に顕わになってしまうからである。そうすると、「死の恐怖」と相まって、神の報復に怯えるしかない。それゆえ、神からの無償の「肯定」を拒んでしまう。ただ信じれば救われるという、神からの誘いを断ってしまい、神からの「肯定」となる「義」を、何としても自分の「行い」の報いとして受け取ろうとするのである。あのパリサイ人のように。

このように、人は神の報復を恐れるあまり、神と人との間に「行い」という壁を持ち込むようになった。この壁が、神からの「肯定」を拒ませてしまう。そして、神の報復を恐れるようになったのは、神と人を分離する「死」が入り込んだことで「神の思い」を選択できなくなり、「神の思い」が重荷になり、自分を罪深い者として認識するようになったからである。この罪責感を「死の恐怖」が後押しし、死の報復を人に予感させ、神に裁かれると思わせ、神の報復を恐れさせる。そのせいで、人は何か災いに遭うと、「罰が当たった」と思ってしまう。ここに、「罪には罰」という「人間的な標準」が誕生し、人はその「人間的な標準」で人を知り、神を知るようになった。

端的に言えば、入り込んだ「死」によって、人は神を避けるようになったということである。それは、神を恐れるようになり、神をまともには見られなくなったということである。こうしたことから、人は無償で与えられる神からの「肯定」（神からの義）を拒んでしまう。では、神を恐れる様子を、聖書の人物で見てみたい。

❖ 神を恐れる

アブラハムは神を知っていたが、神から呼びかけられたときはひれ伏し、神を見なかった。「アブラムは、ひれ伏した」（創世記 17:3）。なぜなら、自分は罪深いので、神を見たなら裁かれて死ぬ、と思ったからである。また、ヤコブは顔と顔とを合わせて神を見たとき、こう言った。「わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている」（創世記 32:31 新共同訳）。この言葉から、ヤコブも、自分は罪深いので、神を見たなら裁かれて死ぬ、と思っていたことが分かる。モーセも、神の前で顔を隠した。「モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した」（出エジプト 3:6）。

このように、人は入り込んだ「死」によって罪人になったので、自分は神に裁かれると思うようになり、神を避けるようになった。そこで、神は人の罪を赦す道を昔から示してこられた。人は自分の罪の裁きを恐れて神を避けるので、人がご自分に近づいてこられるようにと、神は人の罪を贖う道を示してこられた。例えば、祭司が「いけにえ」を捧げれば罪が赦される、という道を神は示された。

「祭司はもう一羽のほうも、定めに従って全焼のいけにえとしなければなら
ない。祭司はその人のために、その人が犯した罪の贖いをしなさい。その人
は赦される。」(レビ記 5:10)

この道によってモーセ自身、罪が裁かれるという神への恐れが取り除かれ、彼は神と
顔と顔とを合わせて友のように交わることができるようになった。

「【主】は、人が自分の友と語るように、顔と顔とを合わせてモーセに語られ
た。」(出エジプト 33:11)

しかし、人は罪が赦される道を神に示されてもなお、神を見たなら裁かれて死ぬとい
う思いは消えなかった。ギデオンに至っては、神の使いを見ただけで、自分は死ぬに
違いないと恐れた。「ああ、神、主よ。私は面と向かって【主】の使いを見てしまいま
した」(士師記 6:22)。それで、神は次のように言われたのである。

「安心しなさい。恐れるな。あなたは死なない。」(士師記 6:23)

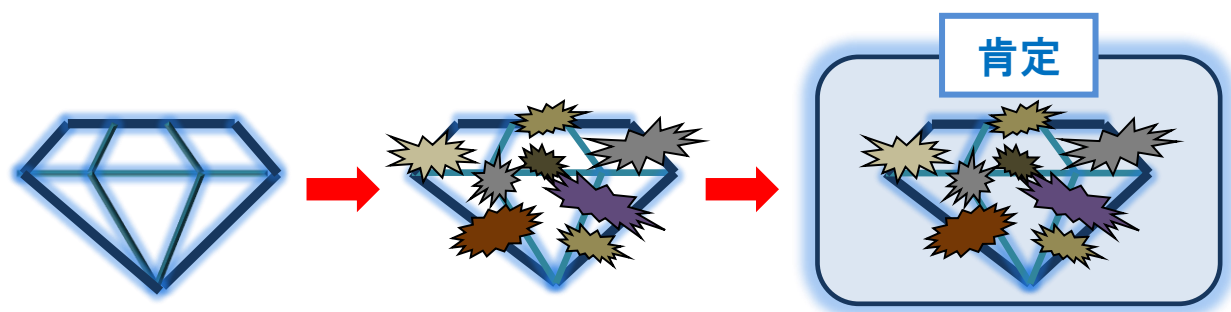
この神の言葉から、今度はきよい者であれば罪が赦され、死なずに神を見ることがで
きるという誤解が生じるようになった。そこで、人はこぞって神からの律法を実行す
ることで自らのきよさを、すなわち義を証しし、神の前に立とうとした。しかし、人
の行いで自分を義とすることは不可能であることを、人は知らなかった。行いに関係
なく、神の呼びかけに応答する者が義とされることを、人は知らなかった。そこで、
人は自らの業績での義を目指した。そのため、業績のない者は、自分の罪深さを強く
意識し、引き続き神を避けてしまった。例えば、エリヤは神のことを聞くと、「すぐに
外套で顔をおおい、外に出て、ほら穴の入口に立った」(Ⅰ列王記 19:13)となった。
ペテロは、イエスが主だと分かった途端、イエスを避けた。「主よ。私のような者から
離れてください。私は、罪深い人間ですから」(ルカ 5:8)。

このように、人は自分の罪深さを知るがゆえに神の裁きを恐れ、神を避けてしまうの
である。神の「肯定」を拒んでしまう。しかし、これはあくまでも表面上の理由であ
って、神の「肯定」を拒んでしまう真の理由は他にある。それは、神の「肯定」を受
け取ることが、人にとっては最もつらいことだからである。

❖ 最もつらいこと

「死」が入り込んで以来、誰もが朽ち果てる制約を持つ「有限性」の体で生まれることになった。その制約から、誰もが「生きたい」と願って自己保身に走り、「愛せよ」という神の命令には従えない「罪人」になった。その結果、誰もが自分のことを「ダメな者」（無価値）と思うようになった。しかし、人の「真実な姿」は体が「有限性」になろうとも、神の愛に支えられた「良き者」のままである。言わば高価な「ダイヤ」であり、ただそこに「有限性」という泥が付いたにすぎない。そうとも知らずに、人は「罪人」となった自分の姿を、自分の「真実な姿」だと思い込み、少しでも価値ある者になろうとする。その価値は、周りからどれだけ良く思われるかで決まるので、人は周りから良く思われるもので自分を覆い隠し、少しでも価値ある者になろうとする。そうすることで、「死」に否定されている自分を「肯定」しようとするのである。

そして、周りからよく思われる材料は、「美しい容貌」、「多くのお金」、「高学歴」、「良い行い」、「健康」、「高価な車」、「立派な家」など山ほどある。それらは、人を価値ある者に仕立ててくれるので、「富」と呼ばれる。こうして、誰もが「富」によって自分の価値を築き、そのことで自分の存在を「肯定」するようになった。この話を「ダイヤ」に喩えるなら、人は「ダイヤ」であったが、そこに泥が付いたことで、泥の姿を自分の「真実な姿」だと思い込み、その泥の姿を何か良いもので覆い隠し、覆い隠した姿を以て自分を「肯定」しようとするということである。



この図を見れば分かるように、「富」で自分を「肯定」したと思っても、泥で汚れた姿は何も変わっていない。したがって、この生き方は無駄であり、「的外れ」でしかない。聖書はこの「的外れ」（ハマルティア）[ἀμαρτία] の状態を「罪」とし、この状態（生き方）が「罪の行為」を誘発することを教えている。加えて聖書は、この世の「富」が不要となる、神からの「贈り物」についても教えている。それは、どのような罪（否定）も赦し、「人はその犯すどんな罪も赦していただけます」（マルコ 3:28）、人を高価で尊いとする神による「肯定」である。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」（イザヤ 43:4）。その「肯定」は神からの「贈り物」

であって、それを以て神は無償で人の罪の泥を洗い流し、人に「未来」という希望を与えてくださる。神はそのようにして、人を「肯定」しようとする。それゆえ、神からの「肯定」を、ただ信じて「受け取りなさい」と、神は言われる。

しかし、人は自力で手にした「富」による自分の「肯定」を堅く握りしめている。そのため、神が差し出す「肯定」を受け取ることができない。そこで、人は手にした「富」を一旦横に置き、それから神の「肯定」を受け取ろうとする。そうすることで、神にも仕え、「富」にも仕えようとする。イエスの弟子たちも、そのようにして二人の主人に仕えた。そのため、片方の都合が悪くなれば、いつでも逃げ出すことができた。実際、イエスの教えを聞き、こんなことを信じたら、自力で手に入れた「評判」という「富」を失ってしまうと恐れた弟子たちは、「これはひどいことばだ。そんなことをだれが聞いておられようか」（ヨハネ 6:60）と言って、イエスから離れ去って行った。「こういうわけで、弟子たちのうちの多くの者が離れ去って行き、もはやイエスとともに歩かなかった」（ヨハネ 6:66）。この出来事は、自らの努力で手に入れた「富」による自分の「肯定」を手放すことが、人には最もつらいことを物語っている。

このように、自力で手に入れた「富」による自分の「肯定」を手放すことが、人には最もつらいことなのである。その「富」の王座に君臨するのが、人から良く思われる「評判」である。そのため、イエスの弟子たちがそうであったように、私たちもイエスの教えに従うことで周りから悪く思われて「評判」が下がると思えば、教会に行かなくなってしまう。ペテロも、イエスが捕らえられた時、「評判」の「富」を手放すことができず、イエスのことを知らないと言って裏切ってしまった。

次に手放すのがつらい「富」は「お金」である。多くの人は、「お金」による自分の「肯定」を手放せず、どうしても「お金」という「富」にも仕え、神にも仕えようとしてしまう。しかし、それはできないことなので、イエスは、「あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません」（マタイ 6:24）と言われた。このイエスの言葉からも、人にとって「富」を手放すことは最もつらいことだと分かる。このことは、ある青年の話からも知ることができる。

❖ 青年の話

ある時、イエスのもとに青年がやって来た。彼はイエスに、「永遠のいのち」を手にするにはどのような良いことをすればよいかと尋ねた。しかし、その問いは間違っていた。というのも、「永遠のいのち」は「行い」ではなく、「信仰」で受け取るものだっ

たからである。そこでイエスは、「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです」(マタイ 19:17) と言い、もし良いことをしたいと言うのであれば、戒めを守るようにと言われた。

すると青年は、そのようなことはしていると言い、さらに完全になるにはどうすればよいかと尋ねたので、イエスは、「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい」(マタイ 19:21) と言われた。イエスは完全になりたいければ、すなわち自分を完全に「肯定」したければ、手にした「富」を手放すようにと言われたのである。そうすれば、「富」を握りしめていた手が空くので、人を完全に「肯定」する神からの「贈り物」(神の義)を受け取ることができるからである。それは、初めから神に与えられていた完全な「肯定」を思い起こすことができるということを意味する。だが、青年は自ら手に入れた「富」による自分の「肯定」を手放すことができなかった。そのため、その「富」のせいで、神による「肯定」を受け取ることができなかった。聖書は、その理由を、「ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである」(マタイ 19:22) と教えている。

これこそが、人が神の「肯定」を拒む真の理由にほかならない。それは自らが手にした自分の「肯定」を、すなわち手にした「富」による安心を手放せないからである。手放すとどうなるのだろうと「不安」になり、そのようなことは怖くてとてもできないのである。誰もが頑張って手にした「富」に自分の価値を重ね、それによって自分を「肯定」してきたので、「富」を手放すことは自分の価値を「否定」することになって最もつらいことになる。ゆえに、たとえ神からの「肯定」は「贈り物」であっても、それを拒んでしまう。そこで、さらに詳しく「富」の中身を見てみたい。

❖ 「富」の中身

手放せない「富」は三つに分類できる。一つ目の「富」は先述したように、「評判」である。というのも、「死」が入り込んで以来、誰もが神に無条件で愛されている自分を認識できなくなったので、誰もが愛される自分を目指すようになったからである。それは、誰もが周りから良く思われる「評判」を目指すようになったということであり、「評判」を自分の価値とし、「評判」を以て自分を「肯定」しようとしたということである。そのため、「評判」こそ手放すのが最も困難な「富」となり、それは神の「肯定」となる御言葉をふさいでしまう最強の敵となった。そして、少しでも良い「評判」を

手にするには「世の心づかい」が必須となるので、そこでは神よりも「人のことを思う」ことが常習化してしまう。その最強の敵にペテロは仕えていたので、イエスはペテロに向かって、「下がれ。サタン」(マタイ 16:23) と言い、その理由を、「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」(マタイ 16:23) と言われたのである。

このイエスの言葉からも、「評判」こそ、手放すのが最も困難な「富」であることが分かる。確かに、ペテロはこの「富」を手放すことができなかったのも、イエスが捕らえられた時、人のことを思う「世の心づかい」から、イエスのことを知らないと言ってしまった。私たちもペテロと同じである。人のことを思う「世の心づかい」に生き、自分がどう思われるかという「評判」の「富」に仕えているので、「自分はクリスチャンです」と声を上げることに困難を覚える。それを告白すると、周りからどう思われるかと恐れてしまう。つまり、自分の「肯定」を周りからの「評判」に頼り、神が「贈り物」として下さる「肯定」に身をゆだねることができないのである。その結果、どっちつかずのクリスチャン生活を送ってしまう。

二つ目の「富」は先述したように、「お金」である。「お金」を持てば持つだけ、この世での安全が確保されるので、「お金」で自分の存在が「肯定」されたかのような錯覚に陥ってしまう。そのため、「お金」は手放すのが困難な「富」となる。あの青年がそうであったように、「お金」を手放すことなどできない。それどころか、誰もが「お金」を少しでも獲得しようとし、「富の惑わし」の中に身を投じてしまう。それが、神が「贈り物」として下さる「肯定」の御言葉をふさいでしまう。そして、三つ目の「富」は「いろいろな欲望」である。誰もが「欲望」を満たすことで、自分の存在を「肯定」しようとする。したがって、「いろいろな欲望」も御言葉をふさいでしまう。

以上が、手放せない「富」の中身である。一つ目が「評判」であり、そのために「世の心づかい」に人は邁進する。二つ目が「お金」であり、そのために「富の惑わし」に人は身を投じてしまう。三つ目は「いろいろな欲望」なので、誰もが「欲望」を満たそうとする。こうした「富」が、人を「肯定」する神からの「御言葉」をふさいでしまうので、イエスは次のように言われたのである。

「世の心づかいや、富の惑わし、その他いろいろな欲望が入り込んで、みことばをふさぐので、実を結びません。」(マルコ 4:19)

「みことばをふさぐ」とは、神からの「肯定」を拒むということであり、ここでイエスは、「みことばをふさぐ」敵の正体を三つ教えられたのであった。その筆頭に「世の心づかい」を挙げ、次に「富の惑わし」、「いろいろな欲望」を挙げられた。これこそが「罪」の実体であり、「神の言葉」を信じようとしない「不信仰」が具現化された姿である。このように、手放すのが困難な度合いに応じて、「富」は三つに分類される。

ちなみに、ここで「世の心づかい」の「心づかい」と訳されているギリシャ語は「メリムナ」[μέριμνα]である。それは、例えばイエスは、「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています」(ルカ 10:41)と言われたが、ここで「気を使っています」と訳されている箇所が「メリムナ」の動詞である。このことから、イエスが言われた「世の心づかい」の「心づかい」とは、まさしく誰かに「気を使う」ことだと分かる。その「気を使う」ことの実際は、イエスがペテロに、「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」(マタイ 16:23)と言われたように、「神のことを思わないで、人のことを思ってしまう」ということである。これが、イエスの言われた「心づかい」の概念である。しかし、新共同訳や新改訳 2017 では、「世の心づかい」を「この世の思い煩い」と訳している。これでは原文の概念が曖昧になり、誤解を与えてしまう。

尚、「富」を手放すというのは、「富」を物理的に捨てるということではなく、「富」による自分の価値を放棄するということであり、神が下さっている価値に身をゆだねるということである。それができれば、この世の「富」はもう「ちりあくた」(ピリピ 3:8)となり、「富」を自分のためではなく、神の働きのために再利用するようになる。

さて、「富」による「肯定」を手放すのが困難であれば、誰も神による「肯定」を受け取ることができない。それは、神の呼びかけに応答できないということである。そこで、福音の「第三ステージ」の出番となる。それは、世の「富」を手放すことができるようにする神の働きである。では、いよいよ「第三ステージ」の流れである。

－「第三ステージ」の流れ－

前項に於いて、「富」による安心を手放すことができず、イエスによる「肯定」を拒んでしまった「青年の話」をした。実は、その話には続きがある。イエスは弟子たちに、こう言われたのである。

「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国に入るのはむずかしいことです。まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」

(マタイ 19:23-24)

イエスは神の「肯定」の世界、「天の御国」に、金持ちが入るのがいかに難しいかを述べることで、人が神の「肯定」を受け取ることの困難さを説明された。困難の理由は、先述したとおりである。すると弟子たちは、「それでは、だれが救われることができるのでしょうか」(マタイ 19:25)と言ったので、イエスは次のように話された。

「イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」」(マタイ 19:26)

ここでイエスは、神が人に働きかけをすれば、人は神の「肯定」を受け取れるようになることを告げられたのである。これこそが、神のなさる「第三ステージ」での作業である。そして、その作業によって神の「肯定」を受け取ることができれば、それまで自分が築き上げてきた「肯定」を「ちりあくた」と思うようになる。

「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。」(ピリピ 3:8)

それだけではない。神の「肯定」を受け取れば、「死」に打ち勝てる「復活の力」を知ることができるので、まことの「希望」を抱けるようになる。

「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。」(ピリピ 3:10-11)

このように、人は手にしたこの世の「富」による「肯定」を手放せないで、神による「肯定」を受け取るのが困難な中にある。そこで、神は人に対して働きかけをされる。それによって、人は神が差し出す「肯定」を受け取れるようになる。そうなれば、それまで手にしていた自力での「肯定」は「ちりあくた」と思えるようになり、まことの「希望」が持てるようになる。こうした神の人への働きかけが、福音の「第三ステージ」である。ならば、神は何をなさるのだろう。その概略を先に押さえた上で、そのまま続けて「第三ステージ」の流れを見ていこう。

❖ 神は何をなさるのか

人が神による「肯定」を受け取らないのは、一言でいえば、自らの力で手にした「肯定」の方が良いと思うからである。目に見えない「神の言葉」による「肯定」よりも、目に見えるこの世の「肯定」の方が良いと思うから、神の「肯定」を受け取らない。そうした自力での「肯定」は、全て「過去」の出来事であるが、手にした「過去」の方が、神が言われる当てにならない「未来」の約束よりも良いと思うから、「過去」の結果にしがみつき、神の「肯定」を拒んでしまう。

そうであれば、自力で得た「過去」の成果による「肯定」が、実際には何の役にも立たないことを悟れたなら、すなわち自力での「肯定」に**絶望**できれば、神の「肯定」を受け取る勇気を持つことができる。そこで、神は人を**絶望**に追い込まれる。とはいえ、自力での「肯定」が、周りからほめられるものであればあるだけ、その人が**絶望**することは困難になるので、イエスは、「みなの人々がほめるとき、あなたがたは哀れです」（ルカ 6:26）と言われた。逆に、自分の「過去」が悲しいものであればあるだけ、その人は**絶望**することも容易になるので、イエスは、「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから」（マタイ 5:4）とも言われた。特に、あの取税人のように、自分の犯した罪（過去）に苦しむなら容易に**絶望**に向かい、神の「肯定」を受け取ることができる。それで、イエスは次のように言われた。

「取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。」（ルカ 18:13-14）

こうして、取税人は神の「肯定」を、すなわち神による「義」を受け取ったのである。

このように、神が「第三ステージ」でなさることは、人を**絶望**に追い込むことである。正確に言えば、人を救う「神の福音」の「第一ステージ」の際も、「第二ステージ」の際も、その裏では**絶望**に追い込む作業が行われている。そのことで、人を神の前にへりくだらせ、神の「贈り物」の「肯定」を受け取らせようとされる。ならば、神はどのように人を**絶望**へと追い込むというのだろうか。

❖ 「絶望」に追い込む

神は人を造る際、神の「いのち」を人の体に貸し出された。それは「魂」と呼ばれ、人を正しい道に導くために「神の思い」を発信する基地である。人は造られた当初、その「魂」が発信する「神の思い」を実行することを何の重荷にも感じなかった。ところが、「死」が入り込んだことで、人の意志は制約され、「魂」が発信する「神の思い」を実行することが困難になった。つまり、「神の思い」は、人を責め立てる「ねばならない」という律法になったのである。聖書はそのことを、「彼らはこのようにして、律法の命じる行いが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています」（ローマ 2:15）と綴っている。

そして、神は「神の思い」を「魂」を通して発信するだけでなく、人の言葉でも啓示し、それを聖書とした。すると、聖書も人を責め立て、全ての人を罪の下に閉じ込めてしまった。「聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました」（ガラテヤ 3:22）。例えば、聖書は、「兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません」（マタイ 5:22）と教え、全ての人を徹底して罪の下に閉じ込めた。その結果、人はどんなに自分を「富」で飾って「肯定」しようとも、内側（魂）からも、外側（聖書）からも責め立てられ、**絶望**に追い込まれることになった。神はそうすることで、人が神の「肯定」を受け取れるようにされたのである。それはちょうど、医者から手に負えない病気を指摘されて**絶望**に追い込まれ、医者に助けを乞うように導かれるようなものである。同様に、人は自らの罪に気づかされることで**絶望**に追い込まれれば、自力での「肯定」をあきらめ、神の「肯定」の受け取りへと導かれていく。そこで、神は全ての人を徹底して罪の下に閉じ込め、**絶望**に追い込まれる。

「しかし、聖書はすべてのものを罪の下に閉じ込めました。約束がイエス・キリストの真実によって、信じる人々に与えられるためです。」

（ガラテヤ 3:22 聖書協会共同訳）

全ての人を徹底して罪の下に閉じ込め、絶望へと追い込むのは、「約束がイエス・キリストの真実によって、信じる人々に与えられるため」だという。その「約束」とは、神が「贈り物」として下さる「肯定」であり、それは「イエス・キリストの真実（十字架の贖い）」が提供するので、人はそれをただで受け取ればよい。それで、「信じる人々に与えられる」とある。これは、「いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい」（黙示録 22:17）と同じである。さて、神が人を絶望に追い込むためになさることは他にもある。それは、人の「患難」を「静観」することである。

❖ 「患難」を「静観」する

「死」に向かう運動が世界に入り込んで以来、世界は生成と消滅を繰り返し、「天変地異」を生じさせるようになった。それは、避けられない困難である。また、人の体も「死」に向かったために、様々な「病気」を生じさせるようになった。これも、避けられない困難である。また、「死」に向かう運動は、「いのち」である神との分離なので「不安」を生じさせ、人を見える安心をむさぼる「罪人」にしてしまった。これも、避けられない困難である。こうした一連の困難は、「患難」と呼ばれる。「患難」は避けられないものとなり、容赦なく人の存在を「否定」してくる。

だが、人は自分の存在を容赦なく「肯定」する神の「いのち」に支えられているので、そうした「否定」に対しては反発を覚える。そこで、人は自らの力で獲得した「富」で、自らの存在を「肯定」しようとする。そのため、人は多くの「富」を手にしたら、「もう、これで安心だ」と胸をなで下ろすのである。そして、神からの「肯定」はいらないと拒否する。これは愚かなことなので、イエスは譬えの中で、「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる」（ルカ 12:20）と言われた。なぜなら、自らの力で獲得した「富」では、「死」に打ち勝つことなどできないからである。つまり、手にした「富」は、自分の存在を全く「肯定」していないということである。

しかし、人はそのことが全く分からないので、本当に、「もう、これで安心だ」となるかどうかを考えさせるために、神は人の「患難」を「静観」される。例えば、病気になって余命宣告を受けたなら、手にした「お金」という「富」が役に立つかを考えさせる。また、生活苦に追い込まれたなら、手にした「評判」という「富」が役に立つかを考えさせる。また、様々な失敗や困難に遭ったなら、それまで誇ってきた自力での「肯定」が役に立つかを考えさせる。そのために、神は人の「患難」を「静観」し、人が絶望に追い込まれていくのを待たれる。待つことで、自力で手にした「肯定」が偽物であって、それは何の役にも立たないことに気づくことを期待されるのである。

ここで注意してほしいのは、神が静観される「患難」は、神から出たものではないということである。「患難」は全て「死」に起因し、その「死」は悪魔の仕業によるので、「悪魔という、死の力を持つ者」(ヘブル 2:14)、「患難」は全て悪魔から出ている。その悪魔はサタンとも呼ばれているが、「悪魔とか、サタンとか呼ばれて」(黙示録 12:9)、「患難」はサタンの仕業である。神はその仕業を「静観」するだけで、神が「患難」をもたらすわけではない。そのことは、ヨブ記の第一章を読めば分かる。「【主】はサタンに仰せられた。「では、彼のすべての持ち物をおまえの手に任せよう。ただ彼の身に手を伸ばしてはならない。」」(ヨブ 1:12)。「おまえの手に任せよう」とは、お前による「患難」を「静観」しようということである。

このように、神は人に襲いかかる「患難」を「静観」される。そのことで、人が**絶望**に追い込まれるのを待ち、自力で手にした「肯定」が偽物であることに気づけるようにされる。「もう、これで安心だ」という思いは偽物だったと気づけば、神が差し出す御手に掴まれるようになるからである。そのようにして、神の「贈り物」の「肯定」を受け取らせようとされる。そして、「静観」する裏では、先述したように、人の罪を責め立ててもいる。責め立てることで、裏でも人を**絶望**へと追い込んでいる。そうである以上、神はただ「患難」を「静観」しているだけではなく、神の「肯定」を拒否する者たちの敵となって、戦われているのである。

❖ 神は戦われる

人の土台は神の「いのち」であり、神が人を背負われている。そのため、人が苦しむときには、いつも神も苦しみを覚えるので、神は人の苦しみと戦われる。その苦しみは、人が神の「肯定」を拒むことに起因するので、神は人の敵となって、神の「肯定」を拒否する「不信仰」の罪と戦われる。そして、何としても人を助けようとされる。それが、人を**絶望**に追い込むということである。全ては入り込んだ「死」によって、人が神の「肯定」を受け取ることができずに苦しんでいるので、神の「肯定」を受け取らせるためにそうされる。そういう意味では、神が人の敵となって立ち上がり、人の罪と戦うのが「第三ステージ」ということになる。

「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。しかし、彼らは逆らい、主の聖なる御霊を痛ませたので、主は彼らの敵となり、みずから彼らと戦われた。」(イザヤ 63:9-10)

つまり、神は昔からずっと人を背負ってこられたので、人を苦しめる罪を見ると怒りを覚え、罪を握って放そうとはしない人の敵となって、その罪を奪い取るのである。そのために、「神の言葉」の律法は全ての人を罪の下に閉じ込め、神は人の「患難」を「静観」される。それは、神が提供する「肯定」の食事を、人が共にすることができるように、神が人の心の戸を叩き続けられるということである。「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする」(黙示録 3:20)。

このように、神は人を**絶望**に追い込み、人が自らの力で手にした「肯定」にしがみつく「不信仰」の罪と戦われる。正確に言えば、神が**絶望**に追い込むのではない。すでに人は**絶望**の「闇」の中にいるので、それを認める勇気を持てるように、「闇」を「光」で照らし出しているにすぎない。「魂」によって神の「光」を照らし、人の中の「闇」を明らかにし、**絶望**する勇気を持てるようにしているだけである。言い換えれば、神は人に「永遠」を意識させることで、人の暮らす有限の世界には「永遠」が全くない現実気づかせようとしているだけである。「永遠」がない現実気づくことが苦悩であり、**絶望**なので、神はただ「光」を照らし、人に「永遠」を意識させているだけである。そのことで、人が**絶望**する勇気を持てるように裏で助けておられる。

❖ 絶望する勇気

絶望は、自らの力で獲得してきた「肯定」が、その役割を果たすことができず、それは「否定」でしかないことに気づいたときに起きる。平たく言えば、為す術がなくなったときの感情であり、逃げる場所がなくなったときの感情である。したがって、困難の中で、「よし頑張るぞ！」と新たな自分を目指せるようになったという人がいるなら、その人は困難に会っても**絶望**してはいなかったということになる。なぜなら、まだ自分という逃げる場所があったからである。あるいは、**絶望**から自らの死を選択するなら、その場合も自分の体に逃げる場所があったということであり、**絶望**してはいない。また、**絶望**から誰かに怒りを覚えるのなら、その場合も自分の中の怒りに逃げる場所があったということであり、**絶望**してはいない。

本書が言う**絶望**とは、あくまでも自分を含め、この世界のどこにも逃げる場所がなくなったときの感情である。そのような感情になれば、その人の心はこの世界ではなく、天を見上げられるようになる。神を見上げ、神にあわれみを乞えるようになる。ここに救いがあり、その救いへの決断を後押ししてくれるのが**絶望**である。それで神は、

人が**絶望**する勇気を持てるように裏で助けておられる。では、**絶望**が、人を神にあわれみを乞える決断に導く流れを具体的に説明したい。

自らの力で獲得してきた「肯定」が、その役割を果たすことができなくなると、誰もが**絶望**を覚える。そのため、**絶望**を覚えれば、獲得してきた「肯定」で覆い隠してきた自分の罪と向き合うことになり、それは激しい「罪責感」をもたらす。このことは、どうにもならない「病氣」に気づくことを意味する。なぜなら、「罪の行為」は死による「病氣」だからである。そして、どうにもならない「病氣」に気づけば、人は助けを求めて医者のもとに行く決断ができるように、どうにもならない「罪の行為」の「病氣」に気づけば、人は助けを求めて神のもとに行く決断ができる。そうすると、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」（ルカ 18:13）となる。

これが、**絶望**が人を神にあわれみを乞う決断に導く流れであり、この決断を「信仰」という。この「信仰」で、人は神の「肯定」となる人への「義」を受け取ることができる。そこで、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」と祈った者が、「義と認められて家に帰りました」（ルカ 18:14）とイエスは言われたのである。「義と認められる」とは「正しい人」であるという宣言であり、それは「罪の行為」が赦されたことを意味する。こうして、人は自分が罪人であっても神に愛されていることを知る。それは、無条件で愛されている本来の自分の姿を思い出すということでもある。それによって、自分を「否定」していた罪の泥は洗い流されていく。それゆえ神は、人が**絶望**する勇気を持てるように、裏で人を助けておられる。

このように、福音の「第三ステージ」では、神は人に**絶望**する勇気を持たせようとする。そうすれば、神が差し出す「神の言葉」の「肯定」を受け取ることができるからである。つまり、「霊の体」を着せられて救われても、「肉体の死」を迎えるまでは「死の体」が存続し続けるため、引き続き「神の言葉」を信じない「不信仰」に襲われ、神の「肯定」よりも自力での「肯定」にしがみついてしまうので、それを手放せるように、神が人に**絶望**する勇気を持てるよう助けてくださるのである。それが「第三ステージ」であり、その作業は「肉体の死」を迎えるまで何度も繰り返される。

❖ 繰り返される作業

福音の「第三ステージ」は、神の差し出す「肯定」を受け取らせるために、**絶望**する勇気を人に持たせる神の働きである。それは、どうにもならない罪（病氣）を神が人に気づかせる作業であり、この作業は「肉体の死」を迎えるまで何度も繰り返される。

というのも、「肉体の死」を迎えるまでは、人は自分を「否定」し続ける「死の体」を背負っているのです。一度は自分を「否定」する罪が洗い流されても、再び「死の体」による「否定」の運動によって、自らの力で自らを「肯定」する罪に走ってしまうからである。それゆえ、**絶望**に追い込む作業は繰り返され、罪が赦される体験を何度も味わうことになる。このことは、イエスがペテロから何度まで兄弟の罪を赦すべきでしょうかと質問されたとき、「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います」（マタイ 18:22）と答えられたことから分かる。そして、この「赦しの恵み」の体験が、神への「愛」を創造するとイエスは言われた。

「だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」

（ルカ 7:47 新共同訳）

そうした事情から、聖書に登場する信仰の人たちは、誰もが多くの罪を赦された体験をした。それは、神の律法と「患難」とによって、何度も**絶望**を体験したということである。例えば、パウロは、「牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした」（Ⅱコリント 11:23）と、何度も**絶望**を体験したことを告白している。しかし、そのことで自分の「弱さ」を認める勇気を持てたことも告白している。「もしどうしても誇る必要があるなら、私は自分の弱さを誇ります」（Ⅱコリント 11:30）。さらに、パウロは病にも襲われ、そのことを通しても自分の「弱さ」を認めさせられ（絶望させられ）、「弱さ」（絶望）のうちに神の恵みが完全に働くことを主から教えられたことも告白している。「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです」（Ⅱコリント 12:9）。

このように、「第三ステージ」の作業は、「肉体の死」を迎えるまで何度も繰り返される。「死」が完全に勝利に呑み込まれる「復活」まで、何度も繰り返される。それはつまり、「神の福音」は、人を「苦しみ」（絶望）から「苦しみ」（絶望）へ導くということである。神は「光」を照らし、人に「永遠」を意識させることで「苦しみ」に導き、神の「肯定」を、すなわち「平安」を受け取らせるのである。したがって、キリスト者は、キリストを信じる信仰だけではなく、「苦しみ」をも賜ったということになる。

「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。」（ピリピ 1:29）

賜った「苦しみ」の中で、人はキリストの愛（肯定）と出会い、無条件で愛されている自分の「真実な姿」を知ることになる。この「苦しみ」が繰り返されることで、「真実な姿」を益々知ることになる。そして、「肉体の死」が来れば、神の「肯定」が、「死」による「否定」の泥を全て洗い流すので、人は自分の「真実な姿」を完全に知ることになる。「その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります」（Ⅰコリント 13:12）。それまでは、神の「いのち」である「魂」と、神の啓示である聖書によって、神は人に罪を気づかせ、その罪が認められるよう「患難」を「静観」し、人を「苦しみ」（絶望）に追い込まれるのである。そのことで「赦しの恵み」にあずからせ、少しでも自分の「真実な姿」を知るようにさせ、「平安」が得られるようにしてくださる。ということは、「患難」は喜ぶべきものということになる。「そればかりではなく、患難さえも喜んでいます」（ローマ 5:3-4）。であれば、「患難」が来るのをただ待つのではなく、自分で「患難」を引き寄せればよい。

❖ 「患難」を引き寄せる

神の呼びかけに応答した者の土の器（体）には、神からの「宝」が与えられている。「私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです」（Ⅱコリント 4:7）。それは「永遠のいのち」であり、朽ちることのない「霊の体」である。したがって、「患難」によって苦しめられても窮することはない。「患難」に遭い、途方に暮れても、行き詰まることもない。倒されることも、滅ぼされることもない。

「私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に暮れますが、行き詰まることはありません。迫害されますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。」

（Ⅱコリント 4:8-9 新改訳2017）

むしろ、「患難」で打ちのめされればされるほど、私たちが土の器の中に持っている「宝」は見えるようになる。「患難」に遭えば遭うほど「死の危険」を覚えるので、そのことで神への「信仰」が働き、受け取った「宝」が見えるようになっていく。それは、死と同時によみがえる「霊の体」であり、よみがえられた「イエスのいのち」であり、それが「患難」によって打ちのめされることで見えるようになる。

「いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。」（Ⅱコリント 4:10）

ゆえに、「患難さえも喜んでいます」（ローマ 5:3）となる。そうであれば、心配せずに「患難」を引き寄せればよい。「死」が支配する世界で暮らす限り、何もしなくても必ず「患難」には遭遇するが、それを待って**絶望**する必要などない。

では、どうすれば「患難」を引き寄せられるのだろうか。最も良いのは、主イエス・キリストを宣べ伝えることである。なぜなら、「伝道」をすれば途端に周りからは嫌われ、迫害されるからである。これが「患難」である。人の最大の願望は周りから良く思われることである以上、迫害されてしまう「伝道」に勝る「患難」はない。しかも、迫害される先には殺される危険さえある。実際、パウロは「伝道」することで激しい迫害に会い、死の危険を覚悟した。「ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました」（Ⅱコリント 1:9）。しかし、この「患難」が、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者にし、「これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした」（Ⅱコリント 1:9）、自分の「真実な姿」と出会わせてくれる。それは、受け取った「宝」が見えるようになるということである。

このように、神は人が神により頼む者となるために、すなわち神への「信仰」を育てるために、あえて人の「患難」を「静観」されるというのが福音の「第三ステージ」なので、「患難」は待つよりも、主イエス・キリストを宣べ伝えることで引き寄せるほうが近道になる。それは何も「伝道」だけではない。何でもよいから、神に積極的に求めることでもよい。というのも、神に求めれば求めるだけ、求めたことが本当に叶うと信じられるかどうか問われることになり、それは信仰が試される「試練」になり、「苦しみ」になるからである。そこでイエスは、「何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます」（ヨハネ 15:7）と言われたのであった。それゆえ、積極的に神に願い、信仰が試される「試練」を引き寄せればよい。嬉しいことに、その「試練」には「脱出の道」が備えられている。

❖ 「脱出の道」

「患難」の静観で、神は人を**絶望**に追い込む。しかし、ただ**絶望**に追い込まれるのを待つ必要はない。「患難」に遭ったなら、「患難」の解決を神に真剣に祈るのである。すると「患難」は、「本当に神は願いを聞いてくださるのだろうか」という疑念と戦う、信仰の「試練」になる。例えば、パウロは自分の体が病気になり苦しくなった時（患難）、神に癒やしてほしいと真剣に祈ったが、三度祈っても癒やされなかったので、その状況の中でも神は祈りを聞いてくださると信じるのかが問われた。それは、まさし

く信仰が試される「試練」であった。だが、この「試練」によって、ついにパウロは自分の「弱さ」を承認することができ、「弱さ」に働く神の恵みを主に教えられたのであった。それは、罪人であっても神に愛される自分を、すなわち自分の「真実な姿」を知るようになる「赦しの恵み」であった。パウロはその恵みを知ったので、むしろ大いに喜んでパウロは自分の「弱さ」を誇るようになった。

「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」（Ⅱコリント 12:9）

パウロに起きたように、信仰が試される「試練」は今でも起きる。例えば、会堂が古くなる、あるいは狭くなるという困難（患難）に出会ったなら、牧師はその解決を神に求めるようになる。その途端、その「患難」は信仰が試される「試練」となる。なぜなら、解決には新しい会堂を手に入れる必要があるが、それには資金が必要となるからである。十分な献金が集まらなければ、会堂をあきらめるのか、それとも神を信じて求め続けるのか、その決断を迫られるので、まさしくこの「患難」は信仰が試される「試練」となる。すると、パウロがそうであったように、その「試練」によって自分の「弱さ」に気づかされる。それに気づけば、「弱さ」に働く神の恵みを受け取れるようになり、「わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」、罪人であっても神に愛される自分を、すなわち自分の「真実な姿」を知るようになる。これこそ、神が「試練」とともに備えてくださっている「脱出の道」である。

「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」（Ⅰコリント 10:13）

つまり、「脱出の道」は、新しい会堂が手に入る道ではなく、自分の「真実な姿」を知る道である。無論、神は新しい会堂が建つようにも助けてくださるが、それよりも神にとって大事なことは、人が自分の「真実な姿」を知るようになることなのである。

このように、神が備えてくださる「脱出の道」は、自分の「弱さ」を認めさせ、それでも神に愛されている自分に気づかせることである。それが、自分の「真実な姿」を

知る道となる。そして、人が覚える苦しみ of 全ては詰まるところ、自分の「真実な姿」を認識できないことに起因するので、これが人の「現実の問題」の解決となる。以上が、福音の「第三ステージ」の流れである。それは、神の呼びかけに対し、人が応答できるように、神が助ける働きである。その働きを以て、神は最初に「霊の体」を人に着せ、次は人にこびり付いた罪を洗い流し、人が自分の「真実な姿」を知るようにされる。喩えるなら、見た目は「毛虫」のようであっても、本当は「美しい蝶」であることを知るようにしてくださる、ということである。

❖ 「美しい蝶」

私たちは神に似せて造られた者であり、喩えるなら「美しい蝶」である。しかし、この世界では「美しい蝶」の姿が覆い隠され、反対に、人に嫌われる「毛虫」の姿にしか見えない。それは、自由が制限された姿である。そのせいで、私たちは自分の姿に「恐れ」を抱き、その姿をアダムのように何かで覆い、何かに隠れることで安心しようとする。「それで私は裸なので、恐れて、隠れました」（創世記 3:10）。そのため、自分を覆い隠すために使っていたものが傷ついたり、腐ったり、奪われたりするような出来事に会うと苦しみを感じる（患難）。そこで神は、私たちが「美しい蝶」であることを知るようにしてくださる。自分の「真実な姿」は「美しい蝶」であることを、人に襲いかかる「患難」を「静観」することで知るようにしてくださる。これこそが、神の備えられた「患難」への「脱出の道」であり、それは人が自分の「真実な姿」を知るようになることなのである。

そして、その「真実な姿」は、人生に於ける最大の「患難」、「肉体の死」を迎えた時、はっきりと知ることになる。というのも、その時、今まで着ていた「死の体」は廃棄され、その土の器の中に入れられていた宝である「霊の体」でよみがえるからである。そのようにして、人は自分の「真実な姿」を目の当たりにし、自分が神に完全に知られているのと同じように、その時、自分自身の姿を完全に知ることになる。

「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。」（I コリント 13:12）

それはちょうど、「毛虫」が「美しい蝶」の姿に羽化するのと同じである。こうしたことから、神に問題の解決を求める信仰の人たちは、自分の見えるところがどうであっても、約束された自分の「真実な姿」を信仰で見て大いに喜んでいた。

「これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。」（ヘブル 11:13）

この事実を、私たちは「信仰」で先取りできる。「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです」（ヘブル 11:1）。この先取りが「安息」をもたらし、この「安息」こそ神の約束であって、それは今でも有効なので、神は何としても私たちを「信仰」による「安息」に導き入れようとしてくださる。それこそが、福音の「第三ステージ」の目指すところである。

「こういうわけで、神の安息に入るための約束はまだ残っているのですから、あなたがたのうちのひとりでも、万が一にもこれに入れないようなことのないように、私たちは恐れる心を持とうではありませんか。」（ヘブル 4:1）

このように、「安息」を手に入れられるかどうかは、自分が「美しい蝶」であることをどこまで信じていることができるかに懸かっている。そして、信じるというのは「決断」なので、福音の「第三ステージ」は見方を変えれば、それは神が人を絶望に追い込むことで、神を信じる「決断」を迫っているということになる。そこで次に、神は「決断」を迫るという視点で「第三ステージ」を見ていきたい。

－神は決断を迫る－

福音の「第三ステージ」は、「神の言葉」を信じる「信仰」を神が育てるステージである。そのために、神は「神の言葉」を信じない罪をあぶり出し、同時に、罪が赦される「神の義」（赦しの恵み）を啓示される。その「神の義」の受け取りが「信仰」なので、福音の「第三ステージ」は「信仰」から始まり、自分の「真実な姿」を信じられる「信仰」に進ませてくれる。そこで聖書は、次のように教えている。

「福音のうちには神の義（赦しの恵み）が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。」（ローマ 1:17） ※（ ）は筆者が意味を補足

ということは、神は常に、「神の言葉を信じよ！」と、「信仰」の決断を迫り、「信仰」から「信仰」へと進めるように、御手を差し伸べておられるということになる。したがって、人にある真の「選択の自由」は、神が差し出す救いの御手に掴まるか、掴まらないかしかない。ゆえに、ここでは神は決断を迫るという視点で福音の「第三ステージ」を見てみたい。まずは、「選択の自由」の考察から始めよう。

❖ 「選択の自由」

人は何を選択しようと、最後は全てを失う。それは、人が土に帰るからである。「あなたは土に帰る」（創世記 3:19）。であれば、何も選択しなかったのと同じである。これは、人には「選択の自由」などないことを示している。そうなったのは、「死」が入り込み、「死人」になったからである。「アダムにあってすべての人が死んでいるように」（Ⅰコリント 15:22）。その姿はちょうど、海で溺れている姿と同じであり、何をしようとも力尽きれば死んでしまう。そこで神は、溺れている人を助けるための命綱を投げられた。人の「潜在意識」に呼びかけることで、命綱を投げられた。それゆえ、そこには「選択の自由」が生まれた。それは、神からの命綱に掴まって「いのち」を得るか、それともそのまま「死」を待つかの選択である。「死人」である私たちには、この「選択の自由」しかなかった。だが、人はそれを知らなかったので、神は人となって来られた。その方がイエス・キリストであり、その方は、神が「死人」に対し、生きる者になる選択を迫っていることを告げられたのである。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」（ヨハネ 5:25）

その方は悠長に教義を教えたのではなく、終わりが近づいていた私たち「死人」に、決断を迫られたのである。あるときは、「光」にあって生きるのか、それともこのまま「闇」にあって生きるかの決断を迫り、「わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです」（ヨハネ 12:46）、また、あるときは「天からのパン」によって生きるのか、それとも「世のパン」によって生きるのか、その決断を迫られた。「わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます」（ヨハネ 6:51）。これらのことから、**「選択の自由」**は神の御手に握まるか握まらないか、それしかないことが分かる。

ところが、人は、世界にあるものは好きに選択できるので、自分には何でも選べる自由があると思い込んでいる。しかし、この世界のものはいずれ消えてしまう以上、何を選択しようとも、実は何一つ所持できない。そもそも、何かを選択しても、自分が滅びてしまえば全てを失うので、全ては**「空の空」**（伝道者 1:2）でしかない。ということは、それは何も選択していないのと同じである。選択したと思う先は幻であって、**「無」**だからである。「あなたがたは、しばらくの間現れて、それから消えてしまう霧にすぎません」（ヤコブ 4:14）。それゆえイエスは、「人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありましょう」（マルコ 8:36）と言われたのである。つまり、人にある**「選択の自由」**は、神の呼びかけに応答して**「いのち」**を得るのか、それとも応答せずに**「いのち」**を損じるのか、そのどちらかしかない。

このことは、誰もが神の前に**「平等」**であることを示している。なぜなら、誰もが同じ**「罪人」**であって**「死人」**なので、誰にとっても、同じ救いの選択しかないからである。誰もが**「平等」**に、同じ決断の前に立たされているのである。神につくのかつかないのか、**「光」**か**「闇」**か、**「真理」**か**「虚偽」**か、**「永遠のいのち」**か**「永遠の滅び」**か、その決断を神から**「平等」**に迫られている。このことは、人に**「死」**が入り込んで人が**「死人」**になって以来、全く変わらない。したがって、神の目には、ユダヤ人もギリシャ人もない。奴隷も自由人もない。男子も女子もない。**「ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません」**（ガラテヤ 3:28）。大人も幼子も、障がい者も健常者もない。

ところが、人は周りと自分を比べ、自分は不幸だと思い、自分は差別されていると言い、**「平等」**ではないと訴える。確かに、**「うわべ」**を基準にすれば、それは**「平等」**ではない。だが、それは誤りである。というのも、**「うわべ」**は滅びるのであって、初めから**「無」**でしかないからだ。言ってみれば、それは鏡にぼんやりと映る姿であり、

「真実な姿」ではない。「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ています」(Ⅰコリント 13:12)。つまり、互いの「うわべ」を比べ、自分は不幸だと思ってしまうことは誤りである。真実は、誰もが生まれながらに、何も持つことができない「死人」であり、ただ神のあわれみを必要とする「罪人」にすぎないということである。それゆえ、自分と人を比べ、自分のことを不幸だと思う者は、まさに不幸としか言いようがない。逆に、自分が優れているとか、富んでいるとか思う者も、不幸としか言いようがない。彼らには、現状の真実がまるで見えていないからである。

このように、人は「選択の自由」を勘違いしている。「選択の自由」は、神の呼びかけに応答して「いのち」を得るか、それとも応答せずに「死」に留まるか、のどちらかしかない。人は誰であれ、滅びるしかない「死人」である以上、神は常に、その決断を迫られる。「死人」となった人の「潜在意識」に呼びかけ、「いのち」の選択をするように決断を迫られる。加えて、人の「顕在意識」に対しては、人を救う神の御名は「イエス・キリスト」だけであることを、神は聖書を通して教え、その方を信じるようにと決断を迫られる。「ナザレ人イエス・キリストの御名(中略)天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです」(使徒 4:10-12)。

これは、イエス・キリストの名は「死人」を救う宣教の言葉となり、生死を分ける最後の審判となったことを意味する。誰もが「死人」として生まれ、各人の「終わりの時」を待つしかない状態なので、イエス・キリストによって救いの言葉が語られたのである。「この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました」(ヘブル 1:2)。ゆえに、この神の呼びかけに応答すれば、すなわち神を信じる選択をすれば、「死人」は「死」から「いのち」に移され、「死からいのちに移っているのです」(ヨハネ 5:24)、「生きる者」になれる。「聞く者は生きるのです」(ヨハネ 5:25)。それは神の呼びかけによる救いなので、救いはただ神の恵みによる。

「罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——」(エペソ 2:5)

この恵みが「赦しの恵み」であり、それを受け取るかどうかの選択を、神は人に迫っている。その迫りが、人が覚える「苦しみ」であり、「絶望」である。そこで、神は人の患難を静観される。これが福音の「第三ステージ」である。では、「赦しの恵み」を受け取る選択をしたなら、その後の選択はどうなるのだろう。

❖ その後の選択

「死人」が神の呼びかけに応答する選択をし、「赦しの恵み」を受け取って「生きる者」になっても、その後も、神である「光」を信じるのか、それとも神を否定する「闇」を信じるのかの選択は続く。なぜなら、「生きる者」になって一旦は「神の言葉」を信じられても、その体は「死」が支配する世界にあるので、再び「死」という否定の「闇」に惑わされ、「神の言葉」を信じられなくなってしまうからである。そのため、イエスがキリストであるといった初歩の教えの言葉は信じられても（「乳」は飲めても）、例えば、「死からいのちに移っているのです」（ヨハネ 5:24）といった奥義を教えた言葉は、すなわち「堅い食物」は信じられないとなる。

「私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。」

（Ⅰコリント 3:2）

「堅い食物」が信じられないのは、「生きる者」が「死人」に逆戻りしたからではなく、未だに「生きる者」の目に覆いが掛かっているからである。「いつでも彼らの心には覆いが掛かっています」（Ⅱコリント 3:15 新共同訳）。そこで、神は引き続き罪を明らかにし、「赦しの恵み」を受け取るかどうかの選択を人に迫る。「赦しの恵み」を受け取ることは、心が主に向くということなので、「赦しの恵み」で覆いは取り去られていく。「主の方に向き直れば、覆いは取り去られます」（Ⅱコリント 3:16 新共同訳）。それゆえ、これを繰り返すことで、次第に「堅い食物」が食べられるようになり、自分の「真実な姿」を信じられるようになっていく。

このように、「死」が支配する世界で暮らす限り、人にある真実な「選択の自由」は、「光」か「闇」かの二択しかない。神を信じるのか信じないのか、すなわち神が差し出す「赦しの恵み」を受け取るのか、受け取らないのか、この二つの選択肢しかない。それ以外の選択は全て「無」に結びつく以上、それは何も選択していないことになるからである。この「赦しの恵み」を受け取る選択が、「信仰」である。そこで神は、「赦しの恵み」を受け取らせるために、人の心に渇きを起こさせる。

❖ 心に渇きを起こさせる

「神の福音」は、「否定」の「否定」である。それは「死」という「否定」を「否定」し、滅びの「過去」に閉じ込められてしまった人を「未来」に導くものである。そのために神が用意されたのが、「過去」を「否定」する「赦しの恵み」である。それは人

に「永遠のいのち」を得させ、そのいのちを豊かにする恵みである。ゆえに、「赦しの恵み」を受け取るように（信じるように）、神はいつも人に迫る。それは、神が与える水を飲むということである。「しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません」（ヨハネ 4:14）。しかし、人は神からの水を飲もうとはしない。自分で手にした水があるので、それで心を潤そうとする。そこで、神は人にご自分の与える水を飲ませようとされる。それが福音の「第一ステージ」、「第二ステージ」を裏で支える福音の「第三ステージ」である。ならば、神は人に何をなさるのだろうか。

神が人にご自分の水を飲ませるためにすることは、人の心に渴きを起こさせることである。人が自分で手に入れた水を飲んでもすぐに渴くことに気づかせ、自力で得た水に「絶望」させることである。というのも、渴きが起きなければ、いくら神が水を差し出しても人は飲まないからである。イギリスのことわざに、「馬を水飲み場へ連れていくことはできるが、飲ませることはできない」というものがあるが、それと同じである。神は、「さあ、この水を飲みなさい」と、人を水飲み場に連れていくことはできるが、人に『人格』を持たせた以上、強制的に飲ませることはできない。飲ませるには、渴きを起こさせる必要がある（本書 108 頁『人格』について）。ならば、神はどのようにして、人の内に渴きを起こさせるのだろうか。

神は、「死」が入り込んだことで生じるようになった患難を静観される。同時に、律法を突きつけることで罪をあぶり出し、人間は「無」にすぎないことを承認させようとされる。これが人を「絶望」に追い込み、人に罪を認めさせるので、ここに心の渴きが起きる。そうなれば、神が差し出す水を神からの「贈り物」として飲むことができるようになる。これはちょうど、神が人の心の「コップ」に水を注ぐために、人を襲う患難が「コップ」の水を空にするのを待つようなものである。空になれば渴きが起き「苦しみ」を覚えるので、神が差し出す水を飲むか、それとも再び自力での水を手に入れて飲むかの選択に迫られる。これを「試練」という。すなわち、心に「苦しみ」を覚えるときは「試練」に遭っているときであって、それは神の水を飲むかどうかの「信仰」が試されている。神が、神の御手を掴むようにと決断を迫っている。それゆえ、「試練」に遭ったなら大いに喜ぶようにと聖書は教えている。

「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと
思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは
知っているからです。」（ヤコブ 1:2-3）

つまり、人はよく、「どうして神に助けを求めても、神は沈黙（静観）するのか」とつぶやくが、それは私たちを愛するがゆえにそうされるということである。例えば、ラザロが病気になり、彼の姉妹マルタとマリヤがイエスのところに使いを送って助けを求めた際も、イエスは彼らを愛するがゆえに、ラザロの病気という患難を静観された。「イエスはマルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。そのようなわけで、イエスは、ラザロが病んでいることを聞かれたときも、そのおられた所になお二日とどまられた」（ヨハネ 11:5-6）。それは、「死」という最強の「否定」に打ち勝つ、神の「肯定」の言葉を受け取らせるためであった。その言葉とは、「また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか」（ヨハネ 11:26）である。しかし、その時の彼らは、その言葉を受け取るだけの信仰がなかったので、イエスはラザロの病気という患難を静観された。そのことで、彼らを「絶望」に追い込み、彼らの心に渇きを起こさせた。それから、ラザロを復活させた。

彼らは、まさに「絶望」の中で復活を見た。すると、イエスの言葉を信じなかった「不信仰」の罪をすぐに認めることができ、罪が赦される「赦しの恵み」の水を飲むことができた。その一人に、ラザロの姉妹マリヤがいた。彼女は罪が赦される「赦しの恵み」の水を飲むことができたので、その喜びから、以前にも増してイエスを多く愛するようになった。それで彼女は、イエスが十字架に架けられることを予期した時、埋葬の準備にと、惜しげもなく高価な香油をイエスに塗ったのである。イエスはマリヤのその姿に感動し、「この女は、自分にできることをしたのです。埋葬の用意にと、わたしのからだに、前もって油を塗ってくれたのです。まことに、あなたがたに告げます。世界中のどこでも、福音が宣べ伝えられる所なら、この人のした事も語られて、この人の記念となるでしょう」（マルコ 14:8-9）と言われた。このことから、マリヤが「赦しの恵み」を受け取ったことは明らかである。というのも、「多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさに分かる」（ルカ 7:47 新共同訳）とあるからである。

このように、神は人の心に渇きを起こさせることで、「赦しの恵み」の水を飲ませてくださる。それを、ただで飲ませてくださる。神はその水を何としても飲ませたいので、「渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい」（黙示録 22:17）と言われる。最初に飲むいのちの水は、その人に「永遠のいのち」を与え、その後も患難に遭う度に繰り返し飲むいのちの水は、手にした「永遠のいのち」豊かにしていく。このようにして、神が与える水は「永遠のいのち」へと湧き出ていく。「わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます」（ヨ

ハネ 4:14)。つまり、神の福音は、いのちの水を飲む「信仰」に始まり、いのちの水を飲む「信仰」に進ませるということである。

❖ 「信仰」に始まり、「信仰」に進ませる

神は人の患難を静観し、律法を突きつけ、人の心に渇きを起こさせる。それによって、罪が赦される「赦しの恵み」の水を飲ませてくれる。それは、神から「義」（正しい）と認められるということである。人は最初の「赦しの恵み」の水を飲むことで、すなわち最初の「義」で、「永遠のいのち」を手にする。そのことで、やがて「イエス・キリスト」を知るようになる。「永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです」（ヨハネ 17:3）。その後も、神によって渇きを起こされ、「赦しの恵み」の水を飲む。そのことで、より一層「神の言葉」を信じられるようになり、イエス・キリストとの交わりが豊かになっていく。「私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです」（I ヨハネ 1:3）。神との交わりが深くなることで、さらに神からは「義」と認められ、神の栄光が輝くようになる。「召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました」（ローマ 8:30）。イエス・キリストが来られたのは、こうして私たちが「永遠のいのち」を得、それを豊かにしていくためであった。

「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」

（ヨハネ 10:10）

したがって、神の下さる賜物は「永遠のいのち」であり、「神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのち」（ローマ 6:23）、その行き着く所も「永遠のいのち」なのである。「その行き着く所は永遠のいのち」（ローマ 6:22）。これは、福音は「赦しの恵み」という神からの「義」であって、その「義」は神の真実な呼びかけに応答する「信仰」（潜在意識）に始まり、さらに自分の罪に気づかされ、さらなる「義」を受け取る「信仰」（顕在意識）に進ませてくれるということである。「その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです」（ローマ 1:17）。それは「信仰」で「永遠のいのちを得」、さらにイエス・キリストを信頼する「信仰」へと進み、「永遠のいのちを豊かに持つ」ということである（本書 151 頁「義」には二つの意味がある）。

このように、いのちの水を飲む「信仰」に始まり、さらにいのちの水を飲む「信仰」に進ませる「神の福音」の中心は、「赦しの恵み」である。その恵みは、自力での価値の獲得を放棄させ、神が「贈り物」として下さる「義」を受け取らせる。この「義」

によって、無条件で愛されている「良き者」としての自分を人に認めさせ、見た目には「罪人」であっても罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思えるようにしてくれるのである。

「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」(ローマ 6:11)

その恵みに導いてくださるのが「聖霊」であり、「聖霊」は常に、「神の言葉を信じよ！」と、私たちに「信仰」の決断を迫っておられる。そのようにして、「良き者」が「良き者」である自分に気づけるように助けてくださる。したがって、神が明らかにされたのは、「ダメな者」を「良き者」にする福音ではない。

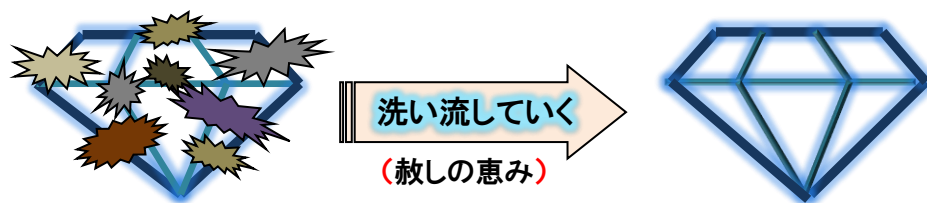
❖ 「ダメな者」を「良き者」にする福音ではない

神が明らかにされたのは、「ダメな者」を「良き者」にする福音ではない。「良き者」に付いた泥を落とし、「良き者」としての姿に癒やす福音である。それは、「良き者」を「否定」するものを「否定」し、すなわち自分のことを「ダメな者」と「否定」する不信仰を「否定」し、「良き者」である自分に気づかせる福音である。人がそのような不信仰を持つようになったのは、「死」の運動が入り込んだからである。それゆえ、人を「否定」する「死」は神の最後の敵である。「最後の敵である死」(I コリント 15:26)。敵は「死」なので、神の目には、いつでも人は「良き者」であり、神の目には高価で尊いのである。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」(イザヤ 43:4)。したがって、人が「罪人」であるという姿は、神の目には「病人」でしかない。「死」による、病気の姿でしかない。

そこで、「神の福音」は徹底して「病人」の「癒やし」を目指す。その「癒やし」の治療を行うのが、キリストが自らを捧げた十字架での打ち傷である。というのも、その打ち傷は「罪人」に対する神の愛を明らかにし、「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます」(ローマ 5:8)、神の目には人がいかに「高価で尊い」かを示しているからである。人は「罪人」になっても変わらない「良き者」であり、「肯定」であることを、キリストの打ち傷が明らかにしてくださったのである。それゆえ、人を「肯定」するキリストの打ち傷が、人を「否定」する「罪」を、すなわち自分のことを「ダメな者」と思ってしまう「病気」を癒やす力になる。

「そして自分から十字架の上で、私たちの罪（病気）をその身に負われました。それは、私たちが罪（病気）を離れ、義のために（神の「肯定」の下で）生きるためです。（こうして）キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」（Ⅰ ペテロ 2:24） ※（ ）は筆者が意味を補足

このように、人の現状は「死」による「病人」であって、「病人」を癒やすのが「神の福音」の真実である。それは、「ダメな者」を「良き者」にする福音では断じてない。あくまでも「良き者」を「否定」する罪を、「赦しの恵み」で癒やしていく福音である。喩えるなら、ダイヤモンドに付いた泥を、洗い流していく福音である。



そこで言いたい。神が「然り」と言えば、「然り」であるということ。神が、「見よ。それは非常に良かった」（創世記 1:31）と言えば、「非常に良かった」ということ。それは、断じて変わることはないということ。そうである以上、神が言われる「然り」を「否」に変えることは、すなわち勝手に人のことを墮落した「ダメな者」と決めつけることは、悪い考えでしかないのである。

「あなたがたは、『然り、然り』『否、否』と言いなさい。それ以上のことは、悪い者から出るのである。」（マタイ 5:37 新共同訳）

ところが、神の目には「非常に良かった」とする人の「真実な姿」を、人は認識できないので、人は勝手に自分のことを、墮落した「ダメな者」と決めつけてしまう。それで、人は自分の「うわべ」を飾り、それによって自らの価値を引き上げようとする。「ダメな者」を、少しでも良く見せようとする。だが、それは悪い考えでしかないの、イエスは、「わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした」（マタイ 6:29）と言い、人は何を以てしても着飾ることなどできないことを教えられたのである。なぜなら、神が人に貸し出された、神の「いのち」に勝る価値はないからである。

以上が、神は決断を迫るという視点から見た福音の「第三ステージ」である。そのステージは、福音の「第一ステージ」と「第二ステージ」とを裏で支えているので、「第三ステージ」の話はそのまま、「神の福音」の真実の総括でもある。そして、見てきた中で最も重要な福音は、「死人」を「生きる者」にする福音の「第一ステージ」なので、イエスは、「人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません」（マルコ 8:36）と言われたのであった。その「第一ステージ」の福音は、ちょうど羊飼いが迷い出た羊を捜し出し、みなで大喜びをするようなものである。イエスは、その喜びを譬えで教えられた。『『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください』と言うでしょう』（ルカ 15:6）。さらには、次のようにも言われた。

「あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら（神の呼びかけを聞き、神に立ち返るなら）、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」（ルカ 15:10） ※（ ）は筆者が意味を補足

さらに言えば、神に立ち返って「生きる者」になったのなら、すなわち神から「永遠のいのち」を与えられたなら、その者は決して滅ぼされることはない。イエスは、そのことも、「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません」（ヨハネ 10:28）と言われた。それゆえ、キリスト者は見た目の自分がどうであっても、何も心配する必要はない。そのことを知ることが、自分の「真実な姿」を知ることであり、それを知ることが可能にする「信仰」を育てるのが、福音の「第三ステージ」である。

さて、これで福音の「第三ステージ」は終わるが、「第一ステージ」から「第三ステージ」まで見てきたことで「神の福音」の真実は明らかになった。それは「死人」を「いのち」に移し、神と関われるようにし、友のような関係を築くというものである。つまりそれは、「永遠のいのち」を得させ、それを豊かにしていくということであり、自分の「真実な姿」を知ることである。一言でいえば、それは神と人との距離を縮めるということである。そこで最後に、神と人との距離を縮めるという視点から、「神の福音」の全体を見てみたい。

－神と人との距離を縮める－

人の「真実な姿」と人の「現状の姿」との違いを埋めるのが、「神の福音」である。



人の「真実な姿」は、神が最初に人を造られた際の人の姿であり、それは「義人」であって非常に良かった。「見よ。それは非常に良かった」(創世記 1:31)。それに対し、人の「現状の姿」はといえば、「罪人」である。では、どうして「義人」が「罪人」になったのか。それは、悪魔の仕業で「死」が入り込んだからである。「死」が永遠性で造られていた人の「体」を有限性に変え、永遠性である神を認識できなくさせ、人を不安に陥れ、見える安心をむさぼる「罪人」にしてしまった。つまり、「死」が「罪」であり、「死のとげは罪であり」(I コリント 15:56)、それは神と人が分離した状態を指す。神と人との距離が無限に開いている状態を指す。この状態が「罪人」であり、それが見える安心をむさぼる「罪の行為」を引き起こしている。したがって、「罪の行為」を犯すから「罪人」なのではなく、「罪人」ゆえに（神と距離があるがゆえに）、「罪の行為」に走ってしまうのである。

このように、人の「真実な姿」は入り込んだ「死」によって「罪人」になり、それが人の「現状の姿」となった。この違いを埋めるのが「神の福音」なので、それは「罪」を取り除く話となる。「キリストが現れたのは罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています」(I ヨハネ 3:5)。「罪」は入り込んだ「死」に起因し、それは神と人との分離した状態であり、神と人との距離が無限に開いていることなので、「罪」を取り除く話は、神と人との距離を縮める話となる。そこで、神と人との距離を縮めるという視点から、福音の「第一ステージ」から「第三ステージ」までの総括をしたい。まず、人とは何か、その仕組みはどうなっているのかを総括したい。

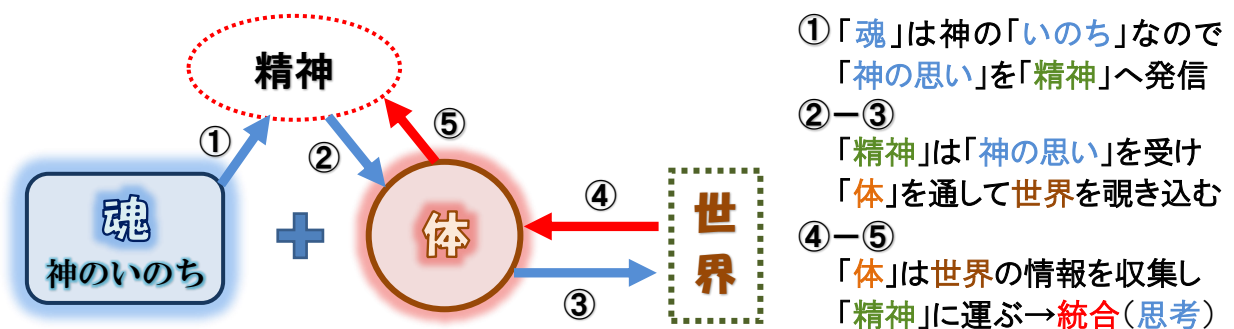
❖ 人とは何か、その仕組みはどうなっているのか

人とは何かを認識し、思考する「精神」である。では、その仕組みはどうなっているのか。なぜ「精神」は認識ができ、思考ができるのか。認識には、「体」が持ち込む情報を判断するための「物差し」が必要である。「物差し」がなければ何の判断も下せない。次に、思考には、目的地に向かって動き続ける運動が必要である。目指す目的地があるから、思考が生まれる。つまり、「精神」が機能するのに必要なものは、認識に

欠かせない「物差し」と、思考に欠かせない「精神」を動かす運動である。この二つの役割を担える神の「いのち」を、神は人に吹き込み、それが人を支える「魂」となった。その「魂」に、「体」が情報を持ち込むことで、何かを認識し、思考する「精神」が機能する。この仕組みを、聖書は次のように描写している。

「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り（体）、その鼻にいのちの息を吹き込まれた（魂）。それで人は生きるものとなった（精神が機能するようになった）」（創世記 2:7 新改訳 2017 ※（ ）は筆者が意味を補足）

この仕組みを別の角度から説明すると、以下のようになる。「体」に「魂」が吹き込まれると、意識である「精神」が起動するので、神の「いのち」に根差す「魂」は「神の思い」を「精神」へ発信する。すると、「精神」は「神の思い」を受け、「体」を通して世界を覗き込み、世界の情報と「神の思い」を統合しようとする。ここに認識が起き、思考が始まる。



この仕組みで重要なのは、人である「精神」を支え動かしているのは「魂」であり、それが神の「いのち」だということである。神の「いのち」が、人をある目的地に到達できるよう動かし、それに必要な「物差し」を提供してくれるおかげで、「精神」は機能する。ならば、神の「いのち」の「魂」が目指す目的地はどこなのか。それは神である。「魂」は、人と神が「一つ」になれるよう、人を神に向かって動かしている。「神よ、わたしの魂はあなたを求める」（詩篇 42:2 新共同訳）。

このように、人は神の「いのち」である「魂」に支えられ、動かされている「精神」である。その神は三位一体であり、互いが「一つ」に結ばれているので、人とも「一つ」になれるように、神の「いのち」である「魂」は、人を神に向かって動かしている。「それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らが

みな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです」(ヨハネ 17:21)。これが分かれば、神に於ける人の罪も分かる。

❖ 神に於ける人の罪

神の「いのち」である「魂」は、人である「精神」が神と「一つ」になれるように、目的地を神とし、神を目指して人を動かしている。つまり、神は人を自分のところに引き寄せておられる。「わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます」(ヨハネ 12:32)。それゆえ、神が展開する運動に逆らって、人が神と距離を取るなら、それが罪となる。この「神と距離をとること」の具現化が、神(キリスト)を信じないことであるので、イエスは罪について次のように言われた。

「その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと、」

(ヨハネ 16:8-9 新共同訳)

このように、神に於ける人の罪は、「わたしを信じないこと」であり、それは「神と距離をとること」である。この状態を「神と人が分離している」といい、この状態の中にある者を「罪人」と呼ぶ。そして、この状態を「不安」といい、それが見える安心をむさぼる「罪の行為」を引き起こさせている。すなわち、「罪の行為」を犯すから「罪人」なのではなく、「罪人」だから「罪の行為」に走るのである。そして、「神と人が分離している」状態が「死」なので、まさしく「死」とげが罪である。「死のとげは罪であり」(I コリント 15:56)。ならば、その罪に対しては何が有効だろう。

❖ 罪に有効なのは何？

神の目には、人が「神と距離をとること」、すなわち神との「分離」が罪である。そうであれば、その罪には「罰」は有効ではない。この世に於ける罪に対しては、確かに「罰」は有効である。この世に於ける罪は、道徳規範や国の法律に違反する行為なので、違反すると「罰」があるとなれば罪を抑制することができる。さらには、人の努力を以て道徳的な人間になることも、国の法律に違反しない者になることもできる。しかし、罪が「神と距離をとること」であれば、そうはいかない。「罰」を与えることは全く以て逆効果である。考えてみてほしい。自分の上司が「罰」を与える人であったなら、その上司に近づこうとするだろうか。自分の親が怒りっぽく、意にそぐわないと「罰」を与える人だったなら、親に心を開くだろうか。言うまでもなく、人は「罰」を与える人とは親しくなろうなどとは思わない。逆に、そういう人とは距離を置こう

とする。怒らせないようにと、形式的な関わりに終始する。同様に、神が人の罪を見て怒り、「罰」を与える方であるならば、人は神を恐れて距離を取ってしまう。神に近づこうとはせず、神とは形式的な関わりに終始する。そうではないだろうか。

ならば、神の目から見た人の罪に対しては、何が有効なのか。それは言い換えれば、神との距離を縮めさせるには何が有効なのかである。答えは、「無条件の愛」である。人は、自分を無条件で受け入れてくれる人に引き寄せられる。責められることなく、そのままで愛し受け入れてくれる人に吸い寄せられる。それゆえ、赤ちゃんは無条件で微笑んでくれる人を見ると、大いに喜ぶ。その習性は大人になっても変わらないので、神と人との距離を縮めるには、「無条件の愛」が、すなわち「無条件の赦し」が有効となる。そうしたことからイエスは、神は人を無条件で赦し受け入れることを、「放蕩息子の譬え」（ルカ 15:11-32）で話された。また、次のようにも言われた。

「だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。」（ヨハネ 12:47）

ここでイエスは、「わたしはその人をさばきません」と言い、罪への「罰」を完全否定された。なぜなら、それは全く以て人の罪（神と距離を取ることを）をやめさせるのに効果がないからである。効果があるのは赦しなので、イエスは次のようにも言われた。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ 11:28）

「重荷を負っている人」とは、「苦しみの中にある人」ということであり、「苦しみ」は、神と人との間に距離がある「罪」によって生じている。ゆえに、神との距離を縮めない限り（罪を取り除かない限り）、「苦しみ」はなくなる。しかし、人は自分の「苦しみ」は、見える困難によって起きていると思い込んでいるので、見える困難と戦うことで「苦しみ」を排除しようとする。だが、それは真実ではない。神と距離があることによる「罪」が「不安」を生み、その「不安」は見えないので、人は無意識に見える困難に「不安」を投影し、「不安」の見える化を図る。そうすると、困難は「苦しみ」となり、「重荷」となる。つまり、「重荷」は、神と人との間に距離がある神との「分離」から、すなわち罪から来ているのであって、罪の具現化にほかならない。イエスはここで、その「重荷」を持ってくれば、すなわち罪を持ってくれば休ませてあげ

と言われたのである。これが、罪に対する神の対応であり、それは「罰」ではなく、「無条件の赦し」である。この恵みによる対応が、「神の福音」である。

このように、人の罪に有効なのは「罰」ではなく、「無条件の赦し」である。そして、神は変わることのない永遠の方なので、「イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません」（ヘブル 13:8 新改訳 2017）、この福音は昔から変わることはない。それはつまり、神には永遠の昔から、「無条件の赦し」の恵みで人を「死」から贖い、罪の泥を洗い流し、神と人との距離を縮めるという計画があったということである。この変わらない福音を明らかにされたのが、キリスト・イエスである。

「神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされたのです。」（Ⅱテモテ 1:9-10）

キリスト・イエスが明らかにされた福音は、罪を無条件で赦し、「死人」となっていた私たちを「生きる者」にすることであった。これが福音の「第一ステージ」である。次に、「死人」が「生きる者」になり「永遠のいのち」を持つようになったなら、その者の罪を徹底的に明らかにし、それを無条件で赦すことで、自分の「真実な姿」を知るようにすることであった。これが福音の「第二ステージ」である。そのために、神の「いのち」である「魂」は、人を神に向かって動かし続けている。この運動こそが福音の「第三ステージ」であり、それは神と人との距離を縮めようとする神の「愛」にほかならない。その「愛」は、「無条件の赦し」の恵みである。この福音は永遠の昔に与えられたものであって、「永遠の昔に与えられたものであって」、変わることがない。それが今、救い主キリスト・イエスによって明らかにされたのである。「それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされたのです。」。しかし、このような話をすると、ノアの時代の大洪水は、神が人の罪を見て怒り、「罰」を与えた話ではないのかと疑問を持つ人もいるので、それについても触れておきたい。

❖ ノアの時代の大洪水

聖書は、キリストを証しする書である。「その聖書が、わたしについて証言しているのです」（ヨハネ 5:39）。したがって、本体はキリストであり、そのキリストを新約聖書が証ししているので、旧約聖書は新約聖書の“影”になる。「これらは、次に来るもの

の影であって、本体はキリストにあるのです」(コロサイ 2:17)。その本体であるキリストが、「わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです」(ヨハネ 12:47)と言われた以上、「罪には罰」ではなく、「罪にはあわれみ」の眼鏡で旧約聖書のノアの時代の大洪水を読まない限り、誤った意味に解してしまう。

しかし、人は「罪には罰」という「人間的な標準」で読み、それを誤った意味に解している。大事なことは、キリストが語られた言葉が「公理」であり、この「公理」に違反する聖書解釈は無効だということである。そして、キリストを証しする新約聖書は、その「公理」に基づき、キリストの御業を次のように教えている。

「キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。」(I ペテロ 3:18)

ここに、キリストが十字架で死んでよみがえられたのは、「私たちを神のみもとに導くためでした」とある。それは、「死」から「いのち」に移し、神と人との距離を縮めるためであったということである。確かにキリストは、「わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです」(ヨハネ 5:24 私訳)と言われたので、それは「死」から「いのち」に移す福音で間違いない。そうすると、「死」から「いのち」に移されるのは誰かとなるので、キリストは続けて、「死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は(応答する者は)生きるのです」(ヨハネ 5:25 ※ () は筆者が意味を補足)と言い、神の呼びかけに応答する者が「死」から「いのち」に移されると言われた。それは紛れもなく、神が人に働きかけ、神との距離を縮めさせる福音であり、その福音は永遠の昔からあったので、神は昔から同じ福音を語ってこられた。そのことが、先の続きに書かれている。

「そして、霊においてキリストは、捕らわれていた霊たちのところへ行って宣教されました。」(I ペテロ 3:19 新共同訳)

「捕らわれていた霊たち」とは、未だ神とは分離した中にいる「死人」を指す。その「死人」に対し、「霊においてキリスト」は福音を語ってこられたという。それは「聖霊」が、人に貸し出した「魂」を介し、キリストが十字架で明らかにしたと同じ福音を語られてきたということである。それゆえ、その福音の呼びかけに応答する者は救

われたということである（本書 110 頁「応答すれば救われる」）。無論、その中にはノアの時代の人たちもいたので、そのことが続けて書かれている。

「昔、ノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたときに、従わなかった霊たちのことです。わずか八人の人々が、この箱舟の中で、水を通して救われたのです。」（Ⅰ ペテロ 3:20）

ここには、ノアの時代の人たちにも同じ福音を、「霊においてキリスト」は語られたが、それに応答して救われたのはノアの家族八人だけであったことが書かれている。ゆえに、八人は「水を通して救われた」とある。したがって、旧約聖書に書かれているノアの時代の大洪水は、神が人の罪を見て怒って「罰」を与えたという出来事ではない。「人間的な標準」ではそうであっても、その解釈は無効である。あの出来事は、誰もが生まれながらに神と分離した「死人」なので、神は人に救いの御手を差し伸べ、「死」から「いのち」に移そうとされた救いを示した型なのである。それは、まさしく神と人との距離を縮めようとした話なのであって、キリストが明らかにされた、「死」から「いのち」に移す福音の影である。そのことが、続きに書かれている。

「そのことは、今あなたがたを救うバプテスマをあらかじめ示した型なのです。バプテスマは肉体の汚れを取り除くものではなく、正しい良心の神への誓いであり、イエス・キリストの復活によるものです。」（Ⅰ ペテロ 3:21）

ここにハッキリと、ノアの時代の大洪水の話は「罪には罰」ではなく、それは「今あなたがたを救うバプテスマをあらかじめ示した型」であって、「罪にはあわれみ」であったことが書かれている。この解釈は全て、「イエス・キリストの復活によるもの」とあり、キリストが示された福音に基づいているとする。これが、キリストの語られた言葉を「公理」とした聖書解釈であり、この解釈以外は私的解釈であって無効である。

つまり、ノアの時代の大洪水は「罪にはあわれみ」の話であって、「罪には罰」の話ではないということである。このように、神が人との距離を縮めるために使われる手段は「罰」ではなく、キリストが十字架で明らかにした「無条件の赦し」である。それは、昔から全く変わっていない。この変わらない恵みは、まさしく神と人との距離を縮めるためであって、それが「神の福音」の真実である。そして、神と人との距離を縮めるというのは、人の「苦しみ」を取り除くという話である。

❖ 「苦しみ」を取り除く

人が覚える「苦しみ」の全ては、神との距離があることで生じるのであって、困難な出来事が「苦しみ」を生じさせているわけではない。神との距離があることで「不安」が生じ、その「不安」が見える困難と結びついて「苦しみ」を覚えさせている。なぜなら、人は神の部分として造られているので、神と距離があればあるだけ「不安」が生じるからである。その「不安」が、「苦しみ」の原料になっている。それゆえ、神の目には「神と距離を取る」ことが、人を苦しめている本体となる。そして、人が神と距離を取ってしまうのは、入り込んだ「死」のせいである。「死」は全てを「有限」にし、「永遠」である神とは結びつけなくさせてしまったからである。ここに「苦しみ」の原因がある（本書 40 頁「認識の仕組み」を掘り下げる）。

そこで神は、入り込んだ「死」によって神との距離ができてしまった人を、「無条件の赦し」を以て引き寄せられる。人の罪を責めないで無条件で赦し、神と人との距離を縮めてくださる。その初めは「死」から「いのち」に移すことであり、そうすれば神と信仰で関われるようになるので、その信仰を育てることでさらに人を神に近づけさせ、友としての関係を築こうとされる。そのようにして、神の愛は、神と人との「一つ」になることを目指す。そのために、神は絶えず人に働きかけてくださる。この働きかけが「神の福音」であり、それは「ダメな者」を「良き者」にする話ではない。「良き者」を「死」から「いのち」に移し、神に近づけさせる話である。それは人に「永遠のいのち」を得させ、それを豊かにするという話である。「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」（ヨハネ 10:10）。

以上で、福音の「第三ステージ」は終わる。最後は、神と人との距離を縮めるという視点から「神の福音」の全体を見てきた。そこで分かったのは、キリストが明らかにされた福音は、永遠の昔からあるのであって、昔から神は霊に於いて、同じ福音を「死人」に語りかけてこられたということである。「この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされたのです」（Ⅱテモテ 1:9-10）。

さて、この福音が永遠の昔からあるというのが本当ならば、ノアの時代の人たちだけでなく、アダムとエバでも検証できるはずである。そこで次章は、見てきた福音を、「アダムとエバで検証」したい。

第七章 「アダムとエバで検証」

神は「永遠」であり、すなわち「不動」なので、その思いはとこしえに変わることがない。「イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません」(ヘブル 13:8 新改訳 2017)。ということは、見てきた「神の福音」は、アダムとエバにも適用されていたはずである。アダムに「死」が入り込んで、全ての人が「死人」となった以上、「アダムにあってすべての人が死んでいるように」(I コリント 15:22)、見てきた「死人」への福音は、「死人」となったアダムとエバにも適用されたはずである。つまり、創世記三章に描かれているアダムとエバの話には、「神の福音」の「第一ステージ」から「第三ステージ」の流れを、すなわち「神の福音」の真実の「型」を見ることができるはずである。この章では、それを検証する。では、福音の「第一ステージ」の検証から始めよう。

－「第一ステージ」の検証－

悪魔の仕業で「死」が入り込んで以来、人の体はやがて滅びる「死の体」になった。その体は滅び向かっている以上、実質「死人」と同じであった。そこで神は、「死の体」の下に朽ちない「霊の体」を着せようとされる。「霊の体」を着せれば、「死の体」の生が終わっても、人を天に引き上げることができるからである。これを「救い」といい、「永遠のいのち」を持つという。では、神はどのようにして「霊の体」を着せるのだろう。それは、神が「死人」に呼びかけ、「死人」がその呼びかけに応答することで「霊の体」を着せ、生きる者にされる。これが「神の福音」の「第一ステージ」である。イエスはそれを、次のように言われた。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は(応答する者は) 生きるのです(永遠のいのちを持つ)。」(ヨハネ 5:25) ※ () は筆者が意味を補足

このイエスの言われた「第一ステージ」を、アダムとエバにも確認できるかが、最初の検証である。その検証は、二人が蛇に欺かれる場面から始まる。

❖ 蛇に欺かれる

蛇は、神が造られた動物の中で最も賢かった。「ほかのどれよりも賢かった」（創世記 3:1 新改訳 2017）。それゆえ、蛇は人と最も親しい関係にあった。それはちょうど、賢い犬は人と親しい関係を築けるのと同じである。つまり、親しい関係にあった蛇が突然しゃべり出したので、アダムとエバはすっかり心を許してしまったのである。その結果、二人は蛇に欺かれ、「取って食べてはならない」（創世記 2:17）と神に言われていた実を食べてしまった（罪を犯してしまった）。

「そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。」（創世記 3:6）

神が「それを取って食べる時、あなたは必ず死ぬ」（創世記 2:17）と言われたとおり、食べた罪に伴って「死」が入り込み、「罪によって死が入り込んだ」（ローマ 5:12 新共同訳）、人の体は滅びるしかない「死の体」になった。それは神を認識できない体であったがゆえに、人の目には土台の神が見えなくなり、裸の自分しか知り得なくなった。その姿は何も持たない姿だったので無価値に思え、二人は自分の姿に恐れを覚えた。そこで、彼らはいちじくの木の実をつづり合わせて腰のおおいを作った。

「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの実をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」（創世記 3:7）

こうして、蛇に欺かれて罪を犯したアダムとエバは、滅びるしかない「死人」になった。「アダムにあってすべての人が死んでいるように」（I コリント 15:22）。ここに、「死人」となった彼らを救うための福音、神の呼びかけが開始されたのである。

❖ 神の呼びかけが開始

神は歩き回りながら、「死人」となった二人に呼びかけを開始された。その様は、まるで迷い出た羊を探し歩く羊飼いのようであった。それで、彼らは神の声を聞いた。

「そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である【主】の声を聞いた。」
(創世記 3:8)

しかし、二人は神の声を聞いても、裸である自分を知るようになっていたので、こんな姿では愛されるはずがないと、裸の自分を恐れて身を隠してしまった。

「それで人とその妻は、神である【主】の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。」（創世記 3:8）

神には、二人が隠れていることもお見通しであったが、それでもあえて、「あなたは、どこにいるのか」と呼びかけ、彼らの心の戸を叩き続けられた。「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく」（黙示録 3:20）。

「神である【主】は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」」（創世記 3:9）

神は、「あなたは、どこにいるのか」と呼びかけることで、二人が自らの意志で神の呼びかけに応答し、神のもとに来るのを待たれた。人には『人格』を持たせたからである。『人格』とは徹底した自由なので、神は二人が隠れていることを知っていても、ただ呼びかけることしかされなかったのである。強制ではなく、自らの自由な意志で彼らが応答し、神のもとに出てくるのを忍耐して待たれた（本書 108 頁『人格』について）。そうした中、最初は神の声を聞いても、自分たちが裸であることを恐れて隠れていた二人ではあったが、それでも神の優しい呼びかけが続いたことで、ついに隠れていることのつらさに耐えられなくなり、彼らは自らの自由な意志で、神の呼びかけに「応答」したのであった。

❖ 「応答」した

アダムが代表し、彼らは神の呼びかけに「応答」した。

「彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」」（創世記 3:10）

神の熱心な呼びかけによって、ようやく二人は神の呼びかけに「応答」することができた。この「応答」こそ、二人が神による「救い」を受け取った瞬間である。この「応答」により、二人は神に「接ぎ木」され、再び「生きる者」となった。目には見えないが、この時、二人の「魂」には「霊の体」が着せられ、二人は「永遠のいのち」を持つ者になり、「死」から「いのち」に移されたのである。それゆえ、「霊の体」を通

して、聖霊なる神との交わりが再開した。交わりの再開によって、「神の言葉」を信じられるように、聖霊が助けてくださることになった。これは、見てきた「神の福音」の「第一ステージ」と全く同じ話である。では、まとめてみよう。

❖ まとめ

福音の「第一ステージ」は、「死人」が神の呼びかけを聞き、それに「応答」するなら救われるというものであったが、その「救いの型」を、まことにアダムとエバでも検証することができた。それはつまり、キリストが明らかにした福音は永遠の昔から同じであったということを意味する。「この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされたのです」（Ⅱテモテ 1:9-10）。

ここで見落としてはならないのは、二人に呼びかける神の様は、聖霊が人のうちで呼びかけておられることを示した「型」である。人のうちには神の「いのち」による「魂」があり、それを介して聖霊が、キリストが明らかにされた十字架の贖いの福音を呼びかけておられるが、これはそのことを示した「型」である。それと同時に、この場面の神の姿は、神が人として来られたイエス・キリストの「型」でもある。というのも、彼らは罪を犯したので、それに伴い「死」が入り込み、今日の私たちと同じように神を認識できない「死の体」になり、その体の耳では神の声を聞くことができなくなっていたからである。しかし、アダムもエバも神の声を「死の体」で聞くことができ、その声に「応答」することができた。ということは、神の側が、人と同じ「死の体」を身にまとったということであり、この場面での神の姿は、キリストが人となって来られた姿の「型」である。「人となって来たイエス・キリスト」（Ⅰヨハネ 4:2）。そのことで、キリストが明らかにされた十字架の贖いの福音を、聖霊がアダムとエバの心の中で呼びかけておられることを示している。

このように、神であるキリストが人の姿を身にまとして二人に語る姿は、今日、聖霊が人の「魂」を介し、人に呼びかけておられる姿を象徴している。つまり、二人は人となって来られた神の呼びかけを聞いた時、それは同時に、心の中で聖霊の呼びかけを聞いたということであり、それに「応答」したことで彼らは救われたのである（本書 110 頁「応答すれば救われる」）。これで、アダムとエバの話に福音の「第一ステージ」が確認できた。では、「第二ステージ」である。

－「第二ステージ」の検証－

「死人」となったアダムとエバであったが、神の呼びかけを聞き、それに「応答」したことで救われた。それは、朽ちるしかない「死の体」の下に「霊の体」が着せられ、「死人」から生きる者になったということであり、「永遠のいのち」を持つ者になったということであった。これは、まことにイエスが明らかにされた福音、「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです」（ヨハネ 5:25）の“影”である。だが、アダムとエバには、自分たちが救われたという自覚がなかった。そこで、「神の福音」の「第二ステージ」の出番となる。そこでは、神は「神の言葉」を以て人の罪を明らかにし、絶望に追い込み、神にあわれみを乞うように導かれる。そのことで、罪が無条件で赦される「赦しの恵み」を受け取らせ、救われたことへの自覚に至らせる。さらには、「永遠のいのち」を持っていることを信じられるようにし、自分の「真実な姿」を知るようにしてくださる。これが、福音の「第二ステージ」であったが、今度はアダムとエバの話の中に、それに該当する出来事があったかどうかを検証する。最初は、救いの自覚に至るまでの検証からである。それは、神が人の罪を問う場面から始まる。

❖ 人の罪を問う

アダムとエバには、救われた自覚がなかった。加えて、罪を犯したという自覚もなかった。というのも、二人は蛇に欺かれて実を食べたのであって、「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように」（Ⅱコリント 11:3）、自らの意志で「神の言葉」に逆らい、食べたのではなかったからである。それゆえ、彼らはただ、自分の裸を恐れて、隠れただけであった。「私は裸なので、恐れて、隠れました」（創世記 3:10）。罪責感による恐れから、隠れたのではなかった。そこで、神はアダムに次のように問うた。

「あなたが裸であるのを、だれがあなたに教えたのか。」（創世記 3:11）

この問いから、彼らが裸を知るようになったことに、すなわち「死の体」になったことに、神は全く関与されていなかったことが分かる。裸を知る「死の体」にした「死」は、罪に対する神からの罰ではなく、悪魔の仕業であったからである（本書61頁「死」は神からの「罰」ではない）。そして神は、続けて問われた。

「あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか。」

（創世記 3:11）

ここで神は、人に罪を問うた。この「神の言葉」により、ようやくアダムもエバも、自分たちは蛇に欺かれたことに気づき、自分たちの罪を知ることができた。神が予め人に対し、「食べてはならない」(創世記 2:17) という律法を持たせてくれていたので、罪に気づくことができた。「しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです」(ローマ 5:13)。こうして、神は「神の言葉」を以て、二人の罪を明らかにされたのであった。だが、二人は自分の素の姿に「恐れ」を覚えていたので、罪に気づいた瞬間、神からの裁きを「恐れ」てしまった。それゆえ、罪を認めなかった。つまり、こういうことである。入り込んだ「死」によって、神に無条件で愛されている自分が認識できない「死の体」になり、人は「不安」になった。その「不安」は、自分の土台の神を認識できなくなった自分の体の困難と重なり、体の素の姿に「恐れ」を覚えさせた。その「恐れ」の中で、神に逆らう罪に気づいたので激しい「つらさ」に襲われ、罪を認めれば裁かれると思ってしまい、罪を認めなかったのである。

❖ 罪を認めなかった

神はアダムに罪を問うたが、彼は次のように答えただけで、自分の罪を認めなかった。

「人は言った。「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」(創世記 3:12)

アダムは自分の罪をエバのせいにし、自分は悪くないと言い訳をしたのである。しかし、罪に気づいて「つらさ」を覚えた以上、病人が医者に助けを乞うように、罪を認めて神に助けを乞うべきであった。だが、彼はそれをしなかった。そこで、神はアダムとのやり取りをやめ、今度はエバに罪を問うた。

「そこで、神である【主】は女に仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。」女は答えた。「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです。」(創世記 3:13)

ここでは、「あなたは、いったいなんということをしたのか」と訳されているが、この訳では神が怒っているかのような印象を受けてしまう。しかし、ヘブライ語の原文を直訳すると、「あなたは、何をしたのか」となる。イエスの時代に使われていた七十人訳聖書も、同様の意味に訳している。「τί τοῦτο ἐποίησας」。ゆえに、「いったいなん いうことを」という訳は勝手な解釈であり、原文にはない。神はここで、何をした

のかと尋ねただけであって、怒っているわけでは決してない。さて、エバは「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです」と答えた。確かに、惑わされて食べたのは事実であるが、食べたことで「死」が入り込み、自分の姿に「恐れ」を覚え、さらには神に逆らう罪に気づいて「つらさ」を覚えていた以上、病人が医者に助けを乞うように、罪を認めて神に助けを乞うべきであった。ところが、エバもアダムと同様、そうはしなかった。そこで、神はこれ以上のやり取りは無駄と判断し、食べたという罪に対して裁きを下されたのである。

❖ 神の裁き

人の罪に対する、神の裁きが下った。それは何と、人の罪を不問に付し、蛇だけを罰するという、まことに驚くべき裁きであった。

「おまえが、こんな事をしたので、おまえは、あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりものろわれる。おまえは、一生、腹ばいで歩き、ちりを食べなければならない。わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。」（創世記 3:14-15）

ここで神は、蛇が二度と悪魔に用いられないよう、人が敵意を覚える姿にすると言われた。実際そうなったので、今日の蛇の姿には誰もが警戒心を覚える。そして、蛇を裏で操っていた悪魔に対しては、神は次のように言われたのであった。

「彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」
（創世記 3:15）

「彼」とは「キリスト」を指し、「おまえ」とは「悪魔」を指す。神はここで、蛇を使い、人を欺いた悪魔をキリストが十字架で滅ぼすことを暗示されたのである。すなわち、神の裁きは、人の中に「死」を持ち込み、「この世の支配者」となった悪魔だけを裁くというものであった。それについてはキリストも、「また、裁きについてとは、この世の支配者が断罪されることである」（ヨハネ 16:11 新共同訳）と言われている。これは、人の罪は悪魔の仕業によったので、「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように」（Ⅱコリント 11:3）、神は人ではなく、悪魔を裁くということである。

このように、神の裁きは悪魔にだけ向けられ、人には向けられなかった。人は罪を犯しはしたが、欺かれてのことだったので、神の目には被害者でしかなかったからであ

る。キリストは、「わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである」（ヨハネ 12:47 新共同訳）と言われたが、その根拠がここにある。したがって、人の罪に対する神の裁きは、何と「無罪」である。

しかし、この驚くべき神の裁きを受け取るには、罪を認め、神の裁きの御座に立たなければならない。それはつまり、罪を知ったことで生じた「つらさ」を認め、医者である神に助けを乞うということである。ところが、アダムとエバは、自分たちの罪（つらさ）を認めなかった。そこで、「神の言葉」は続いた。これは二人に罪（つらさ）を認めさせ、絶望へと追い込み、神に助けを乞えるようにするためであった。そうすることで、二人を神の裁きの御座に立たせ、「無罪」判決を受け取らせるのである。すると、「無罪」とする「赦しの恵み」が、二人を救いの自覚に至らせてくれる。そこで、神は最初にエバを、「神の言葉」で絶望に追い込んだ。

❖ エバを絶望に追い込む

神は、エバに次のことを語られた。

「女にはこう仰せられた。「わたしは、あなたのうめきと苦しみを大いに増す。
あなたは、苦しんで子を産まなければならない。」（創世記 3:16）

「あなたのうめきと苦しみを大いに増す」とは、何を意味するのだろうか。多くの人は、これを神が下した罰だと思ってしまう。それこそが、罪への裁きだと考える。本当にそうなのだろうか。こうした言葉を読み解くには、キリストが罪に対して何と言われたのかを押えておく必要がある。というのも、旧約聖書は、キリストを証しする新約聖書の“影”であって、本体はキリストにあるからである。「これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです」（コロサイ 2:17）。平たく言えば、キリストの言葉が「憲法」であり、その「憲法」に基づいて書かれたのが旧約聖書である。そうである以上、キリストが語られた、人の罪に対する言葉（憲法）に基づいて解釈する必要がある。そのキリストは、人の罪に対し、「わたしはだれをも裁かない」（ヨハネ 8:15 新共同訳）と語られた。それは、人の罪の原因は本人にあるのではなく、入り込んだ「死」にあり、「死のとげは罪であり」（I コリント 15:56）、「罪人」は「病人」と同じだからである。そして、「病人」には医者が必要だということも語られた。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くため

ではなく、罪人を招くために来たのです」(マルコ 2:17)。こうしたキリストの言葉が「憲法」なので、これらに基づいてアダムとエバの記事を読むと意味が分かる。

まず、キリストは、「わたしはだれをも裁かない」(ヨハネ 8:15 新共同訳)と言われた以上、ここでの「あなたのうめきと苦しみを大いに増す」という身体の「苦しみ」は、神からの罰ではない。ならば、「苦しみ」の出所は一体どこなのだろう。それは、アダムの罪によって入り込んだ「死」である。「死」とは滅びる性質であり、人の身体はその性質を帯びてしまったので、痛みを覚え、病を覚え、けがを覚え、老化することになった。これは、身体は「苦しみ」を覚えるようになったということである。加えて女性の場合、出産にまつわる「苦しみ」もあるので、ここでは神がそれを大いに増すと言われたのである。

これは、人が覚えるようになった「苦しみ」を、神なら人が覚えないようにすることもできたが、そうはしないという意味である。あえて何もしないで、「静観」するということを、「わたしは、あなたのうめきと苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない」と、神は言われたのである。全ては人に罪を認めさせ、絶望へと追い込み、医者である神に助けを乞うようにさせるためであった。あの放蕩息子が父親に、「お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません」(ルカ 15:21)と助けを乞うたように、あの取税人が神に、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」(ルカ 18:13)と助けを乞うたように、彼らが助けを乞えるようにするためである。そうすれば、神の裁きである「赦しの恵み」の「無罪」判決を、彼らに受け取らせることができる。それゆえ、神は人の身体の「苦しみ」に対しては、あえて何もしないで「静観」する決断をされたのであった。そして、神はエバに続けてこう言われた。

「しかも、あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる。」

(創世記 3:16)

これは、「死」が入り込んだことで、人と人との関係が「横の関係」から「縦の関係」になってしまったことを言っている。どういうことなのか、説明しよう。

人は三位一体の神に似せて造られたので、三位一体の神が「横の関係」であるのと同様に、神と人の関係も、人と人との関係も、元々は「横の関係」であった。それでイエスは弟子たちに、「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」(ヨハネ 15:15 新共同訳)と言

われたのである。ところが、人の中に入り込んだ「死」によって、人は神の愛を認識できなくなり、そのことの「不安」から「愛されたい」という願望を持つようになった。神はそれを、「あなたは夫を恋慕う」と言われたのである。そして、「愛されたい」という願望を成就するには、相手の期待に応える奴隷になる必要があるのです。そこには「縦の関係」が生まれてしまう。それで神は続けて、「彼は、あなたを支配することになる」と言われた。つまり、人は「死」によって神の愛を認識できなくなった「不安」から、「愛されたい」という願望を持つようになり、人は「横の関係」から「縦の関係」になってしまったということである。確かに、今は誰もが「愛されたい」という願望から、「縦の関係」で生きている。少しでも愛されようと、周りの評価の奴隷となって生きている。それが、心の「苦しみ」の基本になっている。

このように、神はエバに、身体が覚えるようになった「苦しみ」と、心が覚えるようになった「苦しみ」とを話された。食べるという罪を犯したことで「死」が入り込み、その「死」によって、人に生じるようになった「苦しみ」を話された。それを女性であるエバに話されたのは、一般に女性の方が男性よりも弱く、身体に覚える「苦しみ」も、心に覚える「苦しみ」も多くなるからである。こうして、「神の言葉」はエバを絶望へと追い込んだ。それはちょうど、医者が病人に、死に至る病気になったことを告げるようなものである。病人は、そのような説明を受けると絶望に追い込まれ、そのことで医者の治療を受けるようになる。同様に、神はエバに、「死」がもたらした病気の症状を教えることで絶望へと追い込み、神の治療を受けさせようと言われたのである。全ては、神の前で罪を認めさせ、「無罪」とする神の裁きを受け取らせるためであった。さて、神は次に、アダムを絶望に追い込んだ。

❖ アダムを絶望に追い込む

アダムは、自分の罪によって「死」が入り込み、世界がどのようなになったかを知らなかった。そこで、神はアダムには、そのことを話された。

「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。」

(創世記 3:17)

神はアダムに、「土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった」と言われた。それは罪に伴い、人の暮らす世界も「死」に支配され、滅びゆく「虚無」に服したという意味である。というのも、新約聖書はこの時の出来事を、「それは、被造物が虚無に服した

のが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです」(ローマ 8:20) と解説しているからである。ここには「虚無」に服した理由が、「服従させた方による」とあるが、ギリシャ語には敬語がないので、「服従させた方」は「服従させた者」でありアダムを指す。これについては、もう少し説明を加えよう。

人は三位一体の神に似せて造られた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて」(創世記 1:26)。神に似せるために、神は人にご自分の「いのち」を吹き込まれた。「いのちの息を吹き込まれた」(創世記 2:7)。こうして、神と人とは「一つ思い」の関係になった。ということは、人が「神と異なる思い」を持つという罪を犯せば「一つ思い」の関係は崩壊するので、人は神を認識できなくなる。実際、彼らが罪を犯すと、神を認識できない「死の体」(有限の体)になった。すると、人の体は土地のちりで造られていたので、その「死」は土地にも広がり、人の暮らす世界も「死の世界」(有限の世界)になった。神はアダムにそのことを、「土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった」と言われたのである。新約聖書はそれを、「被造物が虚無に服した」(ローマ 8:20) と言い換えたのであった(本書 57 頁「アダムが「死」を招いた経緯」)。では、神がアダムに言われたことの続きを見てみよう。

「あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。」

(創世記 3:17-18)

「あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない」とは、人は永遠の神とは関われない「死の世界」で暮らすことになったので、これからは人が自らの手で生きる糧を得なければならなくなったということである。さらに、「土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ」とは、世界は「死の世界」になったことで、滅びと再生を繰り返すようになり、そのことで日照りや洪水、地震や嵐、そうした天変地異が起きるようになったということである。そうすると、もう豊かな実を安全に実らせる土地ではなく、ときには野の草も食べなければならないことにもなるので、「あなたは、野の草を食べなければならない」と、神は続けて言われたのである。こうして、世界は弱肉強食の世界となり、食物連鎖が起きるようになった。

無論、神は土地がいばらを生えさせないようにすることも、人が野の草を食べないですむようにすることも、弱肉強食を防ぐこともできた。だが、神がこのように言われたということは、神はあえてこの事態を「静観」するということである。それは全て、

アダムとエバが認めなかった彼らの罪を認めさせ、神のあわれみを乞うようにさせるためであった。そうすれば、「無罪」とする神の裁きを、すなわち罪が無条件で赦される「赦しの恵み」を体験でき、再び無条件で愛されている自分の「真実な姿」を知るようになるからである。それが救いの自覚をもたらす。さて、神の話はさらに続いた。

「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」（創世記 3:19）

ついに神は、人の体は「死の体」になったので、土に帰るしかないことを語られたのである。ここにきてようやく、アダムは自分の体がなぜ痛みを覚えるようになり、なぜ以前とは異なる感覚になったのか、その理由を知ることとなった。それは、自分の体が土に帰るしかない「死の体」になったからである。これは実に恐ろしい現実であった。こうして、土に帰る「死の体」になったことを告げられた二人は、「死の恐怖」の奴隷となった。それは避けられないので、聖書はこれを、「一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々」（ヘブル 2:15）と表現している。その後、二人は神が言われた「苦しみ」を体験することになる。そして、その時が来た。

❖ その時が来た

神は、彼らの「苦しみ」を静観されたので、彼らは本当に、「あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない」（創世記 3:17）という「苦しみ」を味わった。その「苦しみ」の中、アダムは妻の名を「エバ」と呼び、彼らは互いに支え合った。

「さて、人は、その妻の名をエバと呼んだ。それは、彼女がすべて生きているものの母であったからである。」（創世記 3:20）

二人は、名前を呼び合うほどに親しい関係を築き、それによって「苦しみ」を少しでも和らげようとした。しかし、神が語られた「苦しみ」からは、逃れることなどできなかった。そこで、今度は「見える安心」を求めるようになり、「苦しみ」を見ないようにした。だが、それは神よりも「見える安心」を優先するということであり、神を優先せよという「神の思い」に逆らっていた。ゆえに、その時の二人は真実に、「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです」（ローマ 7:15）という思いになった。こうして、彼らは蛇に欺かれたとはいえ、自分たちが犯した罪の重大さと向き合

うことになり、ようやく神の前にへりくだることができた。それは、以前は認めることのできなかった罪を認めることができたということの意味する。自分たちは何ということをしてしまったのかと、絶望に追い込まれてしまったということである。そして、その時が来た。彼らは心の中で、「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか」（ローマ 7:24）と叫び、さらに「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」（ルカ 18:13）と叫び、神の裁きの御座に立ったのである。ここに、いよいよ神が裁きを下す「その時」が来た。それは「無罪」判決であり、判決は二人に「皮の衣」を着せることで執行された。

「神である【主】は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。」（創世記 3:21）

彼らは、「死」が入り込んで以来、裸の自分を恐れるようになり、その裸を自分の努力で隠そうとしてきた。「私は裸なので、恐れて、隠れました」（創世記 3:10）。神はその二人に、「皮の衣」を着せられたのである。そのことで、裸であることの「恐れ」を彼らから締め出されたのであった。裸であることへの「恐れ」は、彼らにしてみれば罪の象徴だったので、裸であることの「恐れ」が締め出されたことで、彼らは罪が赦されたことを知った。これこそが、神が人の罪に対して下された裁きであり、それは「無罪」であった。この「無罪」の裁きが「赦しの恵み」であり、その恵みによって、二人は罪が赦された自分を、すなわち救われた自分を自覚することができた。

このように、アダムとエバはようやく罪を認めることができ、そして神が着せてくださった「皮の衣」によって罪が赦される「赦しの恵み」を体験し、救いの自覚に至ったのである。これは、見てきた「神の福音」の「第二ステージ」そのものである。ここでの創世記の記事は、アダムが妻を「エバ」と呼んだという話から、いきなり神が「皮の衣」を着せる話に飛んでしまうが、どうして神が「皮の衣」を着せたのかということに思いを馳せれば、先述した情景が見えてくる（本書 225 頁「着物を着せる」）。さらに言えば、「皮の衣」を作るには動物を犠牲にする必要があったが、それは人の罪を赦すために自らを犠牲にした、キリストの十字架を示した「型」であった。

❖ まとめ

見てきたように、福音の「第二ステージ」を、アダムとエバの話で検証することができた。そのステージは、自分の「真実な姿」を知るようになっていく行程であった。その行程の最初が、「神の言葉」によって罪に気づかされ、絶望に追い込まれ、「赦し

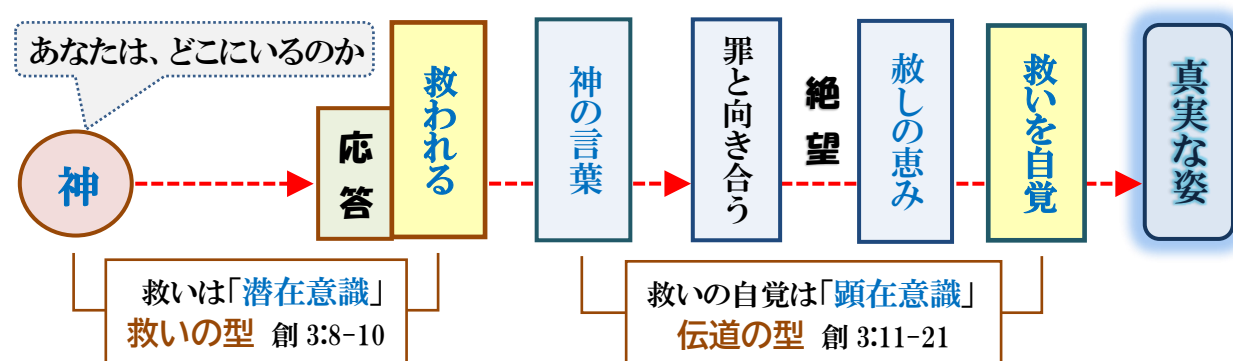
の恵み」を受け取ることで救いの自覚に至ることであったが、それをアダムとエバの話でも検証することができた。加えて、そこには福音の「第一ステージ」と「第二ステージ」を背後で助ける、福音の「第三ステージ」も描かれていた。それは、人の「苦しみ」を神が「静観」し、そのことで人を絶望に追い込み、神が差し出す「赦しの恵み」を受け取れるように助ける福音である。その福音も、ここに描かれていた。そして、二人への「神の言葉」は、人の罪を明らかにし、人をキリストの治療へ導くための養育係であることを示した「型」であった。

「こうして、律法（神の言葉）は私たちがキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」

（ガラテヤ 3:24） ※（ ）は筆者が意味を補足

このように、アダムとエバの話は、罪を犯せば神の「罰」があることを示した「型」ではない。また、ここでは神が人の姿となってアダムとエバに「神の言葉」を語られたが、それは今日「人」がする「伝道の型」でもあった。

さて、ここまでは、神の呼びかけに応答する者が救われる「第一ステージ」から、「神の言葉」で罪に気づかされ、「赦しの恵み」を体験することで救いの自覚に至る「第二ステージ」の初めの段階までが描かれていた。加えて、各ステージを裏で支える、絶望へと追い込む「第三ステージ」の様子も描かれていた。しかし、「第二ステージ」はまだ終わりではない。そこには、救われた者は「永遠のいのち」を持っていて、神から無条件で愛されているという「真実な姿」を知るようにする作業が残っている。とはいえ、その作業を成し遂げるのは福音の「第三ステージ」なので、そのステージをアダムとエバの続きの話で検証してみたい。尚、以下の図は、ここまでの流れである。



－「第三ステージ」の検証－

アダムとエバは、神から「皮の衣」を着せられたことで罪が赦されたことを知り、救われた自分を自覚することまではできた。しかし、「死」から「いのち」に移されていて、「永遠のいのち」を持っている、ということまでの自覚はなかった。それどころか、最後は「土に帰る」（創世記 3:19）と思っていた。だがイエスが、救われた者は「永遠のいのち」を持っていて、すでに「死」から「いのち」に移されていると言われた以上、「わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は（救われた者は）、永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです」（ヨハネ 5:24 私訳）、彼らは「永遠のいのち」を持っていなかったのではなく、彼らの「信仰」がそれを確認できるまでには至っていなかったということである。自分の「真実な姿」を、知らなかったということである。

そこで、福音の「第三ステージ」の出番となる。それは「信仰」を成長させる福音である。「信仰」を成長させるために、神は「神の言葉」を以て罪を明らかにし、加えて患難を「静観」される。同時に、神の「いのち」である「魂」が人の心の戸を叩く。そのようにして、神は人を絶望へと追い込んでいく。そうすれば、人は神が下さる「赦しの恵み」の水をただで飲むことができ、「いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい」（黙示録 22:17）、罪が赦される体験ができる。その体験を繰り返すことで、無条件で愛されている自分の「真実な姿」を知るようになり、人は多く神を愛せるようになる。「多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさに分かる」（ルカ 7:47 新共同訳）。それに伴い、「永遠のいのち」を持っているという「神の言葉」も信じられるようになる。これが「信仰」の成長であり、それを目指すのが福音の「第三ステージ」になる。ここでその福音が、アダムとエバの話の続きに見られるかを検証する。では、先の続きを見てみよう。それは、人の状態を神が考察する場面である。

❖ 人の状態を神が考察する

さて、人の中に「死」が入り込んだことで、人は神からの「いのち」による「肯定」だけでなく、「死」からの「否定」も知るようになった。神からの「肯定」は「善」であり、それを「否定」する「死」の運動は「悪」であるが、人は「善悪」を知る者になった。そして、知った「悪」（否定）のせいで、人は神から与えられていた「肯定」を、すなわち「永遠のいのち」を信じるができなかった。それでも、神から着せられた「皮の衣」によって罪が赦されたことを知り、救いを自覚することはできた。しかし、「永遠のいのち」を持っていることは信じられなかったので、彼らは引き続き

「死の恐怖」に怯えながら、自力での「肯定」を目指し、自分の力で永遠に生きようとした。そこで、こうした人の状態を、神は次のように考察された。

「神である【主】は仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るようになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。」」（創世記 3:22）

神も「善悪」を知っているので、「人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るようになった」と言われた。だが、「善悪」を知っているといっても、神の場合と人の場合では事情が異なる。神は善である「いのち」と、悪である「死」とを知っているが、「死の体」は持っていないからである。そのため、「死」の影響を直接受けることがない。しかし、人は「死の体」を持ったことによって、「善悪を知るようになった」ので、「死」の影響を直接受け、「死の恐怖」の奴隷状態にあった。「死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった」（ヘブル 2:15 新共同訳）。その結果、何としても生きたいという願望を持つようになり、永遠に生きることを自力で目指すようになっていた。そこで、人は思った。自分が食べた「善悪の知識の木」の他に、そこには「いのちの木」もあったので、「園の中央には、いのちの木」（創世記 2:9）、今度は「いのちの木」から取って食べれば、永遠に生きられるのではないかと。こうして、人は「手を伸ばし」、自力で「いのちの木」の実を取って食べ、永遠に生きようとした。ところが、人はすでに救われていて、「永遠のいのち」を持っていたので、この目論見は誤りであった。それで神は、「今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように」と、考察されたのである。

このように、神の考察によれば、人は救いを自覚できても、自分の力に信頼を置き、自らの力で自らを「肯定」しようとする「罪の道」を歩み出していた。無論、神は、この事態を放置されなかった。何としても「罪の道」から人を助けようと、今度はエデンの園から人を追い出す決断をされたのである。

❖ エデンの園から人を追い出す

「善悪」を知った人は、「罪の道」を歩み出していた。そこで、神は何としても人を助けようと、一つの決断をされた。それは、エデンの園から人を追い出すことであった。

「そこで神である【主】は、人をエデンの園から追い出されたので、人は自分がそこから取り出された土を耕すようになった。」（創世記 3:23）

加えて、人が二度と「いのちの木」には近づけないようにすることであった。

「こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。」（創世記 3:24）

こうして、人が「いのちの木」に近づくことは不可能となり、人が考えた、自力で永遠に生きようとする目論見は行き止まりとなった。また、エデンの園から追い出されたことで、人を襲うようになった患難を、神は正式に「静観」することが確定した。その結果、人は自力での「肯定」が、自分に襲いかかる患難にどれだけ有効なのかが試されることになった。そのようにして、「絶望」への道が、神によって整えられた。この処置は全て、自力での「肯定」に対し、「絶望」する勇気を持たせるためであった。「絶望」することができれば、人は神が下さる「肯定」を、すなわち「赦しの恵み」の水を飲むことができ、「神の言葉」を信じる「信仰」が成長するからである。「信仰」が成長すれば、自分の「真実な姿」を知ることができ、「罪の道」は終わる。

このように、人が自分の力で自分を「肯定」する道を、すなわち自力で永遠に生きようとする道を、神は行き止まりにしてしまった。そのことで、神を信じる「信仰」によって、神からの「肯定」を受け取れるようにされたのである。エデンの園からの追放はそのためであり、それは神からの「肯定」、すなわち神による「義」を受け取らせるためであった。間違っても、それは罪に対する「罰」ではない。これは福音の「第三ステージ」と全く同じ話であって、そのことがアダムとエバの話でも検証できた。では、この話をさらに詳しく説明したい。最初は、エデンの園からの追放は、神が人の敵となって立ち上がられた姿であったということについてである。

❖ 人の敵となる

神は、エデンの園から人を追放することで、人の目論見を阻止する人の敵となられた。というのも、昔からずっと神が人を背負って来られたので、人を苦しめる罪を見ると、神は罪に怒りを覚え、罪を愛する人の敵となって、人の罪と戦われるからである。「昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。しかし、彼らは逆らい、主の聖なる御霊を痛ませたので、主は彼らの敵となり、みずから彼らと戦われた」（イザヤ 63:9-10）。そのことの実際が、エデンの園からの追放に描かれているのである。

では、この場合の罪は何だったのか。それは、自らの力を信頼し、自らの力で自らを「肯定」しようとする目論見である。要するに、自分自身の力で自分は生きることができるという「傲慢」がこの場合の罪であった。なぜなら、人は神の被造物であって、神なしでは生きられないからである。そこで神は、この「傲慢」な罪を阻止するために人の敵となり、エデンの園から人を追放されたのであった。それによって、人を「絶望」へと追い込み、自分の「傲慢」の罪に気づかせ、神からの「肯定」をただで受け取らせようとされたのである。「いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい」(黙示録 22:17)。その「肯定」は、罪が無条件で赦される「赦しの恵み」であり、それを受け取ることで「神の言葉」を信じる「信仰」は成長する。その言葉は、救われた者は、すでに「死」から「いのち」に移されていて、「永遠のいのち」を持っているということである。「永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです」(ヨハネ 5:24 私訳)。これが、信じられるようになる。それは、自分の「真実な姿」を信じられるようになるということである。

このように、神は人の敵となって人を「絶望」に追い込み、「永遠のいのち」を持っていることを人が信じられるようにされた。それが、エデンの園から追放である。この処置のおかげで、人は神を信頼する「信仰」が成長する機会を得、与えられている「永遠のいのち」が信じられるようになる道を手にできた。ということは、エデンの園からの追放は、罪への「罰」でなく、不信仰の罪を取り除くための「恵み」であって、神からの「義」を手にする道ということになる。それは、かつてイエス・キリストが弟子たちに示された「義」の道と、全く同じ道であった。次に、その話をしたい。

❖ 神からの「義」

神は、神からの「義」を示すために、人と同じ姿となってこの「死の世界」に来られ、イエス・キリストと呼ばれた。「人となって来たイエス・キリスト」(Ⅰヨハネ 4:2)。その方は、見た目は人であったが、神の油が注がれたキリストであり、まことの神、「永遠のいのち」であった。「この方こそ、まことの神、永遠のいのちです」(Ⅰヨハネ 5:20)。そのキリストは、神の呼びかけに応答すれば(信じれば)、誰であれ「無罪宣言」を受け、「死人」から「生きる者」へと救われる「義」を明らかにされた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです」(ヨハネ 5:25)。それゆえ、その「義」を受け取って神を信じている者は、すでに「永遠のいのち」を持っている。「信じる者は永遠のいのちを持っています」(ヨハネ 6:47 新改訳 2017)。

だが、キリストの弟子たちは、自分が「永遠のいのち」を持っていることが信じられなかった。彼らの「信仰」が、まだキリストの言葉を疑いなく信じられる「信仰」に成長していなかったからである。というより、彼らは「信仰」ではなく、見えるキリストを見て納得することで、キリストを信じようとしていた。

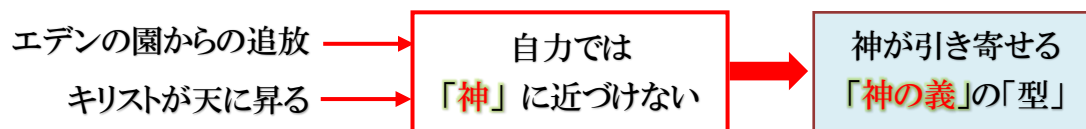
そこで、キリストは彼らとの正しい関係を築くために、十字架で死んで復活し、彼らには見えない天に昇られた。そうすれば、キリストを見て納得するという手段では、もう神との関係が築けなくなるからである。逆に、キリストとの関係は見える納得ではなく、信じる「信仰」に限定される。こうして、キリストが天に昇り、もはや見えなくなることで、彼らと神との関係は「信仰」で築かれることが確定したのであった。

さらに言えば、キリストが天に昇り見えなくなったことで、人が神であるキリストに近づける道は、神に引き寄せてもらうという道だけになった。「わたしが地上から上げられるなら、わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます」(ヨハネ 12:32)。神が人を引き寄せるとは、神が差し出される御手に人が掴まることであり、掴まることを「信仰」という。それは、神と分離した状態の「罪」が取り除かれるということであり、「赦しの恵み」を受け取ることを意味する。これこそが、「信仰」で受け取る神からの「義」である。そして、この「義」の受け取りを繰り返すことで「信仰」は成長し、「永遠のいのち」を持っていることが信じられるようになっていく。それは、ますます神に引き寄せられ、神との距離が縮まっていくということであり、神からは友と呼ばれるようになるということである。「彼は神の友と呼ばれたのです」(ヤコブ 2:23)。したがって、キリストが天に昇り、弟子たちから見えなくなったのは、神からの「義」を弟子たちに明らかにするためであったことが分かる。それでイエスは、ご自分が天に昇り、もはや見えなくなることが「義」であると言われたのである。

「義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること、」(ヨハネ 16:10 新共同訳)

このことの「型」が、まさしくエデンの園からの追放である。なぜなら、エデンの園からの追放と、「いのちの木」には近づかせない壁の建設は、アダムとエバにとっては神が見えなくなることであり、自力では神に近づけなくなったことを意味するからである。キリストは自らが天に昇り、人が自力で神に近づこうとすることを不可能にし、神に引き寄せてもらう神からの「義」を明らかにされたが、エデンの園からの追放は、まさにキリストが明らかにされた「義」の「型」であった。その「義」は「行い」で

はなく、「信仰」によって得るものである以上、「人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです」（ローマ 3:28）、エデンの園からの追放は、紛れもなく神からの「義」の「型」であった。



このように、アダムとエバはエデンの園から追放されたことで、神からの「義」、すなわち「赦しの恵み」は「信仰」によって受け取るようになった。この「赦しの恵み」が「永遠のいのち」を得させ、その「永遠のいのち」を豊かにし、神から友と呼ばれる関係を築かせてくれるのである。以上の話から、エデンの園からの追放は、罪への「罰」ではなかったことが確定した。

❖ 「罰」ではなかった

誰もがエデンの園からの追放の話を、罪を犯したことに對する神からの「罰」として読んでしまう。それは、「罪には罰」という「人間的な標準」があるからである。しかし、エデンの園からの追放は「罰」ではなく、神の呼びかけに応答するだけで、すなわち神が差し出す御手に掴まるだけで（信仰）、神が引き寄せてくれることを示した「型」であった。言い換えれば、エデンの園からの追放は「ただで」受け取れる「赦しの恵み」に導くためのものであった。この「赦しの恵み」を「神の義」という（本書 153 頁「神の義」について）。

とはいえ、アダムとエバは、追放された処置によって「いのちの木」には近づけなくなり、自力で永遠に生きようとする道が閉ざされてしまった。それは、彼らにしてみると、死刑の宣告を受けた思いであっただろう。だが、その処置は、彼らが見える自分自身を頼らず、見えない神を頼る者となるためであった。実はパウロも、神から同じ処置を受けたことを証ししている。

「実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。」（Ⅱコリント 1:9 新改訳 2017）

このように、エデンの園からの追放は、見た目には「死刑の宣告」のように思えても、それは神からの「義」を示した「型」であり、「罰」ではなかった。そして、神がアダムとエバに示された「義」により、自らの行いで獲得しようとする「義」は終わり、「義」を得るための行いの律法は終焉を迎えた。「キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです」（ローマ 10:4）。この終焉こそ、神が人に対して抱いた思い、「今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように」（創世記 3:22）の具現化である。神は、人が目指した行いの律法を終わらせるために、まさしく「神の義」を示されたのである。それが、エデンの園からの追放である。したがって、エデンの園からの追放の真実は、罪への「罰」ではなく、自らの行いで「義」を獲得しようとする罪から、人を救い出すための神の「恵み」であった。さらに言えば、それは「律法」の「型」でもあった。

❖ 「律法」の「型」

先に見たアダムとエバの話には、エデンの園からの追放に加え、「いのちの木」には近づけなくさせる壁の建設もあった。「こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた」（創世記 3:24）。これは、人がどんなに頑張っても自力では永遠に生きられないことを、すなわち「行いの義」を断念するしかないことを明確に示すものであった。それは今日、「行いの義」を断念させるために、人には達成不可能な「律法」を、神は人に突きつけられているが、この壁の建設は、その「律法」の「型」にほかならない。

福音の「第三ステージ」は、神は患難を「静観」されると同時に、人が自力で獲得した「肯定」に早く絶望できるようにするために、神が「律法」を突きつける話であった。それは、神が「魂」を介し、人の内側に響く心の声で、また神が啓示された聖書を介し、人の外側に響く肉の声で、「律法」を突きつける話であった。ただし、その「律法」は「愛せよ！」に集約されるが、その一つの点にでもつまずくなら、その人はすべてを犯した者と見なされてしまうので、「律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです」（ヤコブ 2:10）、人には達成不可能である。なぜなら、人は「死」を背負ったことで「不安」を覚え、自分が「愛される」ことを目指すからである。「愛される」ことを目指す限り、神が突きつけた「愛せよ！」という「律法」を達成することなど不可能でしかない。その「律法」の「型」が、まさに神がされた、「いのちの木」には近づけなくさせる壁の建設であった。

ちなみに、神が突きつける「律法」は、本来の人の姿であれば難なくできることである。そのことは聖書に、「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです」（エペソ 2:10）と書かれている。神は、本来であれば難なくできることを命じることで、人の状態が「病氣」であることに気づかせ、誰もが手に負えない死に至る「病氣」の中であって、キリストの治療が必要であることに気づかせてくださる。したがって、「律法」はキリストに導くための養育係である。「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました」（ガラテヤ 3:24）。

このように、「いのちの木」に近づけなくさせる壁を神が建設した話は、人に罪を認めさせて「絶望」に追い込む神の「律法」の「型」であって、「罰」を示した「型」ではない。神の「律法」は、手に負えない「病氣」に気づかせ、人を「絶望」に追い込み、神の治療を受ける「勇氣」を持たせてくれるので、神は同じ役割をする壁を建設されたということである。ゆえに、それは「律法」の「型」であって、それをアダムとエバにも示されたということである。

以上までが創世記三章の話であるが、キリストの言葉を「憲法」にして読むなら、まことにそこには、キリストが明らかにされた「神の福音」の“影”が描かれていることに気づく。つまり、「旧約聖書」は“影”であって、本体はキリストである。「これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです」（コロサイ 2:17）。では、ここでの簡単なまとめをしよう。

❖ まとめ

悪魔の仕業でアダムは罪を犯し、その罪によって死が入り込んだ。「ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り」（ローマ 5:12）。その結果、人は自力で生きなければならなくなった。「あなたは、顔に汗を流して糧を得」（創世記 3:19）。こうして、人は自分の力を頼り、神を頼らなくなった。これが今日の罪の始まりであり、それは自らの業績によって「いのち」を得ることができるとする、「自己信頼」にほかならない。これを「傲慢」という。というのも、人は神に造られた者であり、人の存在を保証するのは、人を造られた神であって、人の力ではないからである。それゆえ、神は人のそうした姿を、「今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように」（創世記 3:22）と考察された。

そこで、そのことを人に教えるために、神はエデンの園から人を追放された。これは、人が自分を苦しめている罪に気づき、罪が赦される「赦しの恵み」に、すなわち神からの「義」に導くための処置であった。間違っても、それは「罰」を示した「型」ではない。こうして、神は人をエデンの園から追放することで、人の患難を「静観」し、人が神を頼るようになるのを待たれた。そして、罪に苦しむ人を「赦しの恵み」で癒やそうとされた。その変わらない神の思いを、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」(マタイ 11:28) と、キリストは言われたのである。

したがって、「神の福音」は徹頭徹尾「癒やし」となる。その「癒やし」で使われる恵みが「赦しの恵み」であり、それが神からの「義」である。「赦しの恵み」を「信仰」で受け取れば、自分を苦しめてきた「過去」から解放されて癒やされていく。この「癒やし」の治療を受けさせるために、神は人が自分の「病気」に気づけるように助けてくださる。これが福音の「第三ステージ」であり、そのことの「型」を、見てきたようにアダムとエバの話でも検証することができた。しかし、人は聖書を「キリストの標準」ではなく、「罪には罰」という「人間的な標準」で読んでしまうので、エデンの園からの追放を罪への「罰」として解釈してしまう。ここにボタンの掛け違いが起き、「神の福音」に覆いが掛かってしまう。

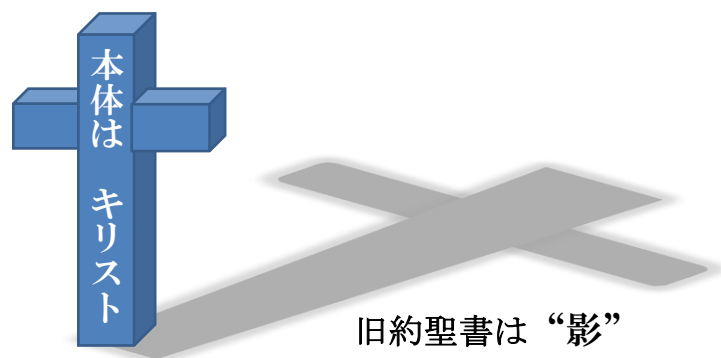
このように、キリストはとこしえに変わらないので、「イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません」(ヘブル 13:8 新改訳 2017)、キリストが明らかにされた「神の福音」は、アダムとエバにも適用されていたはずであるということを検証してきたが、見事に検証することができた。キリストが明らかにされた福音の「第一ステージ」から「第三ステージ」までの“影”を、見事に創世記三章で見ることができた。それは、「神の福音」は昔から変わらないからである。ところが、多くの人々は創世記三章に書かれていることを誤った意味に解釈してしまう。特に、エデンの園からの追放を、自動的に神からの「罰」として解釈してしまう。そうになってしまうのは、聖書の読み方の基本を知らないからである。そこで、この章の本題からは逸れるが、せっかくなので、聖書の読み方の基本を学んでおきたい。

－聖書の読み方の基本－

日本では、法律を定めるのは国会である。毎年多くの法律が作られるが、それらは全て日本の「憲法」に基づいている。「憲法」に違反する法律は作れない。したがって、法律は何であれ、「憲法」の“影”である。そうである以上、「憲法」を基にして法律の意味を知ろうとしない限り、法律は誤った意味に解釈されてしまう。これは、聖書に書かれている意味を知ろうとする場合も同じである。聖書にも「憲法」に相当するものがあり、それを基に聖書の個々の意味を知る必要がある。そうでないと、誤って解釈されてしまう。その代表的な例がアダムとエバの話である。そこにはキリストが明らかにされた福音の“影”が描かれていたが、人はそれを福音ではなく、罪を犯せば神は怒り、罰を与えることを示した話として読んでしまう。そうしたことから聖書には、「確かに今日まで、モーセの書が朗読されるときはいつでも（聖書が読まれるときはいつでも）、彼らの心には覆いがかかっています」（Ⅱコリント 3:15 新改訳 2017 *（ ）は筆者が意味を補足）と書かれている。そこで、改めて聖書の読み方の基本を学んでみたい。まず、聖書にも「憲法」があるということから確認する。

❖ 聖書にも「憲法」がある

聖書は、キリストを証しする書である。「その聖書が、わたしについて証言しているのです」（ヨハネ 5:39）。したがって、聖書に於ける「憲法」は、「キリストが語られた言葉」である。その言葉と照合しながら、聖書を理解しなければならない。「キリストが語られた言葉」は新約聖書が証ししているので、それを本体とし、その“影”として旧約聖書を読まなければならない。「これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです」（コロサイ 2:17）。となれば、モーセが書いた創世記には、キリストが十字架で成し遂げられた福音の“影”が描かれていることになるので、キリストは、「モーセが書いたのはわたしのことだからです」（ヨハネ 5:46）と言われたのである。実際、創世記には、キリストが明らかにされた福音の“影”が描かれていた。



ということは、人類誕生のアダムの中から、同じ福音が与えられていたということになる。全知の神は、人が悪魔に欺かれて罪を犯し、今日の事態を招くことは予測できたので、予め人類を救う計画を、天地創造の前から立てておられたのである。その計画とは、キリストの呼びかけによって人が救われる（選ばれる）計画である。

「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。」

（エペソ 1:4 新共同訳）

救いの計画を立てられた神は、「過去」、「現在」、「未来」といった時間の流れに支配されない永遠（不動）の方なので、私たちからすれば、昨日も今日も、とこしえに変わることのない方である。「イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません」（ヘブル 13:8 新改訳 2017）。神は変わらない方であるがゆえに、アダムとエバのいた昔から、同じ福音が与えられていた。その福音が今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされたということである。

「この恵みは（この福音は）、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされたのです。」（Ⅱテモテ 1:9-10）

※（ ）は筆者が意味を補足）

ところが、私たちは「罪には罰」という「人間的な標準」で創世記を読むので、アダムとエバの話に描かれているのは、神が人の罪に激怒し、人に「罰」を与えた話だと思い込んできた。エデンの園からの追放を、罪に対する神の「罰」として解釈し、そのことに何の疑問も抱いてこなかった。しかし、それは子どもの罪を見て、すぐに激情する愚かな父親と神とを重ねてしまっている。

そこでもう一度言うが、神は、昨日も今日も、いつまでも変わることのない方である。「イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません」（ヘブル 13:8 新改訳 2017）。これを「永遠」という。そして、変わらない神であるイエス・キリストは、人の罪に対して激怒し、「罰」を以て対応するということとはなさらなかった。それどころか、ご自身を殺そうとする罪を人々が犯しても、「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」（ルカ 23:34）と祈られた。そうであれば、それを物差しとしてアダムとエバの話も読まなければならない。

そうすれば、それは紛れもなく、キリストが明らかにされた福音の“影”であったことが分かる。

このように、聖書にも「憲法」がある。それは、「キリストが語られた言葉」である。キリスト・イエスが地上で語られた言葉こそ、聖書に於ける「憲法」である。それゆえ、それを基に聖書を読むというのが正しい読み方である。そうでないと、聖書は好きなように解釈できてしまう。その典型的な例が、見てきた創世記三章の話であり、また、ノアの大洪水の話である（本書 274 頁「ノアの時代の大洪水」）。それらは、正反対の意味に解釈されてきた。では、その「憲法」の中身を、すなわちキリストが語られた言葉の主なものを見ておこう。

❖ 「憲法」の中身

キリストは、次のように語られた。

「それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」
(ヨハネ 3:15)

キリストは、ご自分が来たのは人が「永遠のいのちを持つため」だと言われた。この言葉を受け、弟子のヨハネはキリストが来られた目的を次のように解説した。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。」（ヨハネ 3:16-17）

さらにキリストは、ご自分が差し出す水を飲む者は、すなわち神の呼びかけに応答する者は「永遠のいのち」を得、それを豊かにしていくことを語られた。

「この水を飲む者はだれでも、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」（ヨハネ 4:13-14）

ということは、神の呼びかけに応答した者は「永遠のいのち」を持ち、もう裁かれることはなく、「死」から「いのち」に移っているのです。キリストは次のように語られた。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことなく、死からいのちに移っているのです（**現在完了形**）。」（ヨハネ 5:24）

これは、人を裁かないということを意味するので、キリストは次のようにも語られた。

「あなたたちは肉に従って裁くが、わたしはだれをも裁かない。」

（ヨハネ 8:15 新共同訳）

それは、罪を裁かないで人を救うことを意味するので、キリストはこうも語られた。

「わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。」

（ヨハネ 12:47 新共同訳）

とはいえ、神である「御霊」が差し出す水を飲まなければ救われないので、それは神による裁きではないが、キリストはその事実も次のように語られた。

「だから、わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒涇も赦していただけます。しかし、御霊に逆らう冒涇は赦されません。」（マタイ 12:31）

以上が、キリストが語られた主な言葉であるが、その内容は一貫している。それは「罪には罰」ではなく、「罪にはあわれみ」である。その証しが、キリストの十字架である。というのも、神の願いは三位一体の神が「一つ」であるように、人とも「一つ」になることなので、「それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいらっしゃるに、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです」（ヨハネ 17:21）、それには「罪には罰」ではなく、「罪にはあわれみ」が必要だからである。

そもそも、一体誰が「罰」を与える者と「一つ」になりたいと思うのか。そのような者には、近づきたいとも思わない。その者とは、絶えず距離を取ろうとする。ならば、人はどのような相手となら、「一つ」になりたいと思うのだろう。それは、自分を無条件で受け入れてくれる相手である。罪を無条件で赦し、罪をあわれんでくれる相手で

ある。言い換えれば、罪を責めるのではなく、罪を犯す自分の「弱さ」を十分に理解し、その「弱さ」を自分のこととして苦しみ、共に生きてくれる相手である。その相手ならば、「一つ」になりたいと思う。それが、「罪にはあわれみ」である。そこで聖書は、キリストについては次のように教えている。

「しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることもない祭司の務めを持っておられます。」（ヘブル 7:24）

キリストは変わらない方なので、「永遠に存在される」とある。そのキリストには、「変わることもない祭司の務め」があるという。それが、人の罪を贖う務めであり、「罪にはあわれみ」である。その務めは、アダム時代から変わることがないということであり、変わらないことを証ししたのが、キリストの十字架であった。

このように、キリストが語られた言葉が「憲法」であるが、それは一言でいえば、「罪にはあわれみ」である。というのも、悪魔の仕業で「死」が入り込んで以来、神と人とは分離し、距離ができてしまったので、神は人との距離を「罪にはあわれみ」を以て縮めようとされるからである。それが、キリストが明らかにされた福音である。そこにあるのは徹底した「赦しの恵み」なので、それを基にキリストの“影”となる聖書を読まない限り、その意味を正しく知ることはできない（本書 270 頁「一神と人との距離を縮める」）。そこで次は、このことを誰もがするメールに重ねて説明してみたい。題して、「神からのメール」である。

❖ 「神からのメール」

あなたは、親から次のようなメールを受け取ったとしよう。あなたはそれを読んでどう思うだろうか。

「私の言ったことができなかったのか …」

この文面を読んで、あなたは恐怖を覚えないだろうか。親から何をされるのかと、親を恐れることだろう。人は無意識に、「罪には罰」という眼鏡で読んでしまうので、このメールを読めば、普通であれば親からの罰を恐れることになる。ならば、親から次のようなメールを受け取ったならどうだろう。

「私の言ったことができなかったのか 😊」

この場合だと、恐怖を覚えない。厳しい言葉の中に、親が自分を赦し、何か良い方向に自分を導いてくれるという期待を持つことができる。なぜなら、そこには「スマイルの絵文字」が付いていたからである。この絵文字から、人は相手の本音を知り、そこに書かれていた文面の意味を解釈するので、この場合は良い意味に受け取る。つまり、文面は同じでも、「スマイルの絵文字」を付け加えれば、意味は全く変わってくるということである。何が言いたいかというと、キリストの十字架が、この「スマイルの絵文字」に当たるということである。それは、私たちに「罰」を与えるのではなく、私たちの罪をとりなす「スマイルの絵文字」である。

「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」(ルカ 23:34)

この「スマイルの絵文字」が、聖書には付いている。聖書は神からのメールであり、そこにはキリストの十字架という、神の人に対する「全き愛」の絵文字が付け加えられている。そのことを知れば、神の福音に覆いが掛かることもなく、神の思いを知ることができる。すなわち、神が私たちのために立ててくださっている計画は災いではなく、「平安」を与える計画であり、将来と希望を与えるものなのである。

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――【主】の御告げ――それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」(エレミヤ 29:11)

ここには明確に、キリストが持っている私たちへの計画は罪を裁くことではなく、罪から救い出し、「平安を与える計画」であることが書かれている。その罪というのは、人が神を信じないことであり、「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」(ヨハネ 16:9 新共同訳)、神を信じないとは「神と距離を取る」ことである。なぜそれが罪なのかというと、神は「愛」であり、その「愛」は人と「一つ」になる運動だからである。この罪が人を苦しめているので、罪から人を救い出すことが、「平安を与える計画」である。

具体的には、神が人に呼びかけ、それに応答する者すべてを引き寄せてくださるというものである。「わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます」(ヨハネ 12:32)。それは朽ちない「霊の体」を着せ、「永遠のいのち」を持たせるということである。そのことで、神は人との距離を縮めるルールに人を乗せ、限りなくご自分の所に引き寄

せようとされる。そのようにして、人と「一つ」になることを神の愛は目指す。それは人にしてみると、神と「一つ」である自分の「真実な姿」を知るようになるということであり、「不安」から「平安」に移されていくということである。これが、「平安を与える計画」である。この神の思いは昔から全く以て変わることがないので、見てきたように、キリストが明らかにされた福音の“影”を、アダムとエバの話にも見ることができたのであった。

このように、聖書は神が私たちに啓示された神からのメールであって、そのメールには、必ず最後にキリストが示された十字架の贖いの「スマイルの絵文字」が付いている。それこそが聖書の「憲法」であり、それに基づいて聖書を読むことが、聖書の読み方の基本である。それは、「人間的な標準」で人を知るように、キリストを知ろうとしてはいけないということを意味する。

「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」（Ⅱコリント 5:16）

この読み方が、聖書に書かれていることは聖書で解くという読み方であり、「御霊のことばをもって御霊のことを解くのです」（Ⅰコリント 2:13）、宗教改革で叫ばれた「聖書のみ」の考え方である。

以上で、この章の話、「アダムとエバで検証」は終わる。ここでは、神は不動なので、先に見た「神の福音」の真実は、アダムとエバにも適用されていたはずだということで、そのことの検証をしてきたが、それは見事に検証することができた。したがって、見てきた「神の福音」で間違いない。では、ここまでの総括をしたい。その総括を以て、『福音の回復』第一巻【「神の福音」の真実（基礎編）】の締め括りとしたい。

第八章 総括

アダムは神に似せて造られたので、まことに「良き者」であった。しかし、悪魔の仕業でアダムは罪を犯してしまった。それは、「神と異なる思い」を持つことだったので、罪を犯すと同時に、アダムは神と分離してしまった。この分離が「死」である。つまり、罪によって「死」が入り込み、その「死」は全ての人に及んでしまったのである。「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです」(ローマ 5:12 新共同訳)。その結果、全ての人は二つの問題を抱えることになった。一つは入り込んだ「死」によって「死の体」になり、人は滅びるしかない「死人」になったという「究極の問題」である。もう一つは、入り込んだ「死」によって神に支えられている自分を、すなわち自分の「真実な姿」を認識できなくなり、そのことの「不安」から見える安心を求める「罪人」になったという「現実の問題」である。神はこれらの問題を解決するために、すなわち悪魔の仕業を打ち壊すために来られた。

「罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。」

(I ヨハネ 3:8)

そこで神は、人の「究極の問題」を解決するために「死人」に呼びかけ、それを聞いて応答する者に、滅びない「霊の体」を着せ、生きる者にされる。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は(応答する者は)生きるのです。」

(ヨハネ 5:25) ※ () は筆者が意味を補足

このようにして、神は神の呼びかけに応答する者に、すなわち神を信じる者に「霊の体」を着せることで「永遠のいのち」を持たせ、「死」から「いのち」に移される。「わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです」(ヨハネ 5:24)。これによって、神と人を分離していた「死」の壁は壊れ、神と人とは和解することができる(再結合)。「和解を成り立たせてくださった」(ローマ 5:11)。これが、人の「究極の問題」を解決する福音の「第

一ステージ」である。このステージで大事なことは、人を救うのは神であって、人は救われたことで、イエス・キリストを信じるのが可能になったということである。

ただし、神の呼びかけは人の「潜在意識」に対して行われるので、神の呼びかけに人が応答しても、人には救われたという自覚がない。そのため、「顕在意識」では「不安」が継続し、見える安心をむさぼる「罪人」のままである。それは、救われても自分の「真実な姿」を知らないということを意味する。これが人の「現実の問題」であり、神はこの問題を解決するために、人が自分の「真実な姿」を知ることができるように助ける。人の「真実な姿」は、神に無条件で愛されている姿なので、それを人が知ることができるように罪をあぶり出し、その罪を無条件で赦されるのである。これを「赦しの恵み」という。神はこの恵みを以て、イエス・キリストを信じられる信仰を生起させ、人が救われた自分を自覚できるように助ける。

その後も、神は次々と人の罪を「神の言葉」で明らかにし、その度に「赦しの恵み」の受け取りを人に迫る。それにより、多くの罪を赦される体験をさせ、無条件で愛されている自分の「真実な姿」を人が知るように助ける。これが、神への愛を大きく創造するので、「多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさに分かる」（ルカ 7:47 新共同訳）、神への信頼も増し加わる。すると、キリストを信じている者は「永遠のいのち」を持ち、「死」から「いのち」に移っているという「神の言葉」も信じられるようになっていく。「わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです」（ヨハネ 5:24）。神はこうして神への「信仰」を育て、「不安」を排除し、見える安心をむさぼる「罪人」を終わらせていく。これが福音の「第二ステージ」である。

ところが、神が人の罪を「神の言葉」で明らかにしても、人は「自分には罪がない」と言って神を偽り者にし、「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです」（Ⅰヨハネ 1:10）、神からの「赦しの恵み」を拒むのである。これでは、神に無条件で愛されている「真実な姿」を知ることができない。それゆえ、神は人に襲いかかる患難を静観し、人の心の戸を叩き続けることで人を絶望に追い込み、何としても心の戸を開けさせ、「赦しの恵み」の食事を共にしようとされる。

「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」（黙示録 3:20）

とはいえ、人を絶望に追い込んでいるのは、実際には神ではない。人は生まれながらに絶望という「闇」の中にいるので、その事実を人が認識できるよう、神は「光」で、「闇」を明らかにされるだけである。これが福音の「第三ステージ」であり、その目的は罪が赦される「赦しの恵み」の食事をさせることにある。この「赦しの恵み」が人に「永遠のいのち」を得させ、それを豊かにしていくのであり、この福音の「第三ステージ」は、福音の「第一ステージ」の時から裏で働いている。

このように、「神の福音」の真実は三つのステージに分かれる。だが、そうであっても、どのステージも「神の言葉」を信じる「信仰」を育てる。そのため、「神の言葉」は「神の言葉」を信じない罪をあぶり出し、罪を赦す「赦しの恵み」を、すなわち「神の義」を啓示する。それゆえ、「神の義」は、神の呼びかけに応答する「信仰」から始まり、自分の「真実な姿」を信じることができる「信仰」に進ませてくれる（本書 295 頁「神からの「義」」）。そこで、聖書はこの「神の福音」を次のように教えている。

「福音のうちには神の義（赦しの恵み）が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。」（ローマ 1:17） ※（ ）は筆者が意味を補足

したがって、「神の福音」の真実は、見方を変えれば、神が常に「神の言葉を信じよ！」と、私たちに「信仰」の決断を迫ることでもある。そして、それにより生じる選択が、すなわち神が差し出す救いの御手に掴まるか、掴まらないかという選択が、人にある選択の「自由」ということになる。この「自由」を、『人格』という。

さて、こうした「神の福音」を理解する上で欠かせないのが、「人の造り」を正確に知ることである。神が人をどのように造られたかを知ること、初めて人の「真実な姿」が分かるからである。それが分かれば、人の「現状の姿」と何が違うのかも分かり、違いを埋める「神の福音」も理解できる。これは、車を修理するには、「車の造り」を知らなければならないというのと同じである。本書は「人の造り」を知る話から始めたので、ここでも「人の造り」の総括から始める。とはいえ、「人の造り」に関しては十分述べてきたので、そこに新たな視点を加えた総括をしたい。それを読めば、人の「真実な姿」を知る上で欠かせない「人の造り」の知識は十分に得られる。

－「人の造り」の総括－

人とは「精神」であり、それは意識であり、思考である。意識は、何かを認識することで生まれる。何かを認識できるのは、認識に必要な「物差し」を持っているからである。「体」によって収集された情報が、予め持っていた「物差し」を通過することで認識が生まれ、それが意識を形成する。言ってみれば、「物差し」は人が向かうべき目的地であり、目的地に対して意識が生まれる。その意識が思考に発展するには、意識を覚えた「精神」が目的地に向かって動き出す必要がある。目的地に向かって動かされるから、目的地に到達するにはどうすればよいとなり、思考が生まれる。

となると、人である「精神」が機能するには、予め備えられた「物差し」と、「物差し」が提示する目的地に向かって「精神」を動かし続ける運動と、認識に必要な情報を持ち込む「体」とが必要である。聖書は、その「物差し」と、「精神」を動かし続けている運動を兼ね備えた部署を「魂」と呼ぶ。つまり、人である「精神」（霊）は、「魂」と「体」から成り、「あなたがたの霊（精神）も魂も体も」（Ⅰテサロニケ 5:23 新共同訳 ※（ ）は筆者が意味を補足）、「魂」は目指す目的地を神とする。「神よ、わたしの魂はあなたを求める」（詩篇 42:2 新共同訳）。その「魂」は、大地のちりで造られた「体」に貸し出された神の「いのち」であり、それで人は生きるものとなったとする。

「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。」（創世記 2:7 新改訳 2017）

したがって、人は神によって生かされ、神に向かって動かされている存在なのである。「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです」（ローマ 11:36 新共同訳）。

こうした認識の仕組みを最初に明らかにしたのが、プラトン（BC427-347）である。彼は、予め持っていた「物差し」を「イデア」（観念）と呼んだ（『パイドン』）。このプラトンの人間理解が、今日に至っても人間理解の公理になっている。とはいえ、プラトンのそれは概要にすぎず、その概要に肉付けをし、揺るぎない話にまで昇華させたのはカント（1724-1804）である。そのカントによって開花した「ドイツ観念論」の哲学者たちは、引き続き人の認識の仕組みを論じ、それによって「人の造り」はより明確になった。そこで、その成果に耳を傾け、「人の造り」はどうなっているかを見たのが本書の最初の話であったが、ここではその話を別の角度からも見ていき、それを参

考に聖書の教える「人の造り」を総括する。さらには、その「人の造り」に関連する新たな話を展開し、「人の造り」の総括とする。では、哲学者たちが見出した「人の造り」の話から始めよう。

❖ 哲学者たちが見出した「人の造り」

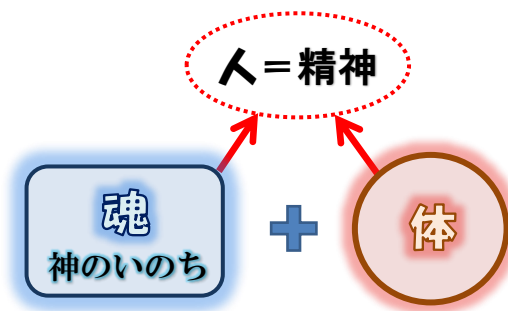
デカルト（1596-1650）は、「われ思う、ゆえにわれあり」と述べ、思考すること自体が自己の存在を証明しているとした（『哲学の原理』）。そこでデカルトは、思考する主体を「精神」と呼び、それは独立した実体とした。つまり、「自己を意識」する単独の実体（装置）があるとしたのである。この考えを批判し、さらに発展させたのがカントである。彼は、「われ思う、ゆえにわれあり」が正しければ、思考する主体の「精神」が先にあることになるが、それは誤りであるとした。何かを認識することにより、その認識を統合する過程の中で「われ思う」という自己意識が成立するとした。認識の対象がなければ、自己意識も成立しないとした。分かりやすく言うと、目の前にバラがあり、そのバラを認識することで、バラを認識している自分が存在するということである。認識するものが何もなければ、「われ思う」もないということである。つまり、「何かを認識するがゆえに、われあり」である。ゆえにカントは、思考する主体の「精神」は単独では存在しないとした。それは、何かを認識する過程を通じて成立するとした（『純粋理性批判』）。

ならば、何かを認識できるのは、すなわち「意識」が生じるのは、どうしてなのだろう。目の前にあるものを意識し、それがバラだと認識できるのはどうしてなのだろうか。カントは、そうした認識の仕組みを正確に解き明かし、「ドイツ観念論」と呼ばれる哲学を開花させた。このカントの考えを基に、フィヒテ（1762-1814）は認識の仕組みをさらに分かりやすく説明した。それによると、人の中には誰にも止められない「普遍的な運動」があるという。あるものとの統合に向かって、一定の方向に動き続ける誰にも止められない運動があるという。そこに「体」が情報を持ち込んでくるので、誰にも止められない運動は持ち込まれた情報とぶつかり、その刺激が意識であるとした。そして、その運動は誰にも止められないので、ぶつかった情報を乗り越えようとし、そこに思考が生まれるという。そのようにして、「自己を意識」する「精神」が機能するとした（『知識学への第一序論』、『知識学への第二序論』）。

そうすると、この「普遍的な運動」の正体は何かとなる。それは普遍である以上、神と同族の「いのち」であるとフィヒテは言う。これはプラトン以来の考えであって、プラトンの弟子であるアリストテレスは、そうした運動の特性を「不動の動者」と呼

び、それを神とした（『形而上学』第十二卷）。そして、その運動を展開する場所を「魂」とした（『靈魂論』第二卷 第一章）。

つまり、神の「いのち」による「魂」が人を動かす「普遍的な運動」を展開し、そこに「体」が情報を持ち込むことで刺激が起き、それが意識となって思考ができる。ここに、「自己を意識」する「精神」が機能する。そうであれば、人である「精神」は、「魂」と「体」とに支えられているということになる。これが、「ドイツ観念論」の哲学者たちが見出した「人の造り」のあらましである（本書 23 頁「統合運動」の正体）。



この人間理解に触発されたのが、キェルケゴールであった。そこで彼は、「人間は、精神によって組成され担われている心〔魂〕と身との総合である」（387）※₁とした。さらには、その身体である「体」は「時間的なもの」であり、「魂」は「永遠なもの」なので、「人間は心〔魂〕と身との総合であった、だが同時に時間的なものと永遠なものとの総合である」（391）※₂とした。そうすると、人は「時間的なもの」（体）と「永遠なもの」（魂）という相反するものに支えられているので、それを「不安として自らを表現」（397）※₃するとした。そして、この「不安」が罪に先行する心理状態であるとした。「不安は、罪に先行する心理的状态」（399）※₄（『不安の概念』「キェルケゴール著作全集 第三卷（下）」創言社 ※₁ 551 頁、※₂ 556 頁、※₃ 565 頁、※₄ 566 頁）。

このように、哲学者たちの見出した「人の造り」は、人とは「自己を意識」する「精神」であり、「自己を意識」できるのは何かを認識できるからである。何かを認識できるのは、神の「いのち」による「魂」が「普遍的な運動」を展開し、そこに「体」が情報を持ち込んでくるからである。したがって、人である「精神」は、「魂」と「体」からなる総合であって、それは意識なので、体のような実体は存在しない。あくまでも「精神」は、「魂」と「体」とが織りなす機能である。「精神」である人は、「魂」と「体」とに生かされている存在であって、単独で存在しているわけではない。では、聖書が教える「人の造り」を見てみよう。

❖ 聖書が教える「人の造り」

聖書によると、神は人をご自分に似せて造られた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて」(創世記 1:26)。神に似せて造ることで、人と友になれるようにされた。「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」(ヨハネ 15:15 新共同訳)。そこで神は、人を次のように造られたという。

「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。」(創世記 2:7 新改訳 2017)

聖書によれば、神は最初に人の「器」を、すなわち「体」を大地のちりで造られた。それから、その「体」に「いのち」の「息」を吹き込まれたという。ここで「いのち」と訳されているのは、ヘブライ語の「ハイイーム」[חַיִּים]で、これは複数形である。複数形にすることで、三位一体の神の「いのち」を言い表している。また、ここで「息」と訳されているのは、ヘブライ語の「ネシャーマー」[נֶשְׁמָה]で、それは「霊」、「魂」とも訳せる。したがって、「いのちの息」とは、先述した「普遍的な運動」を展開する神と同族の「いのち」、「魂」のことを言い表している。

さらに聖書は、その「魂」が「体」に吹き込まれたことで、人は「生きるものとなった」という。このヘブライ語聖書をギリシャ語に訳した七十人訳聖書は、この箇所を「人は生ける魂になった」と訳している。それは、神の「いのち」による「魂」が活動を開始したということであり、この「魂」のおかげで、「体」が持ち込む情報を認識できるようになったことを言い表している。つまり、「魂」は神の「いのち」によるので「神の思い」を発信し、その思いを確認するために「体」は情報を収集し認識が生じるということである。また「魂」は神の「いのち」なので、神を目的地にし「精神」を動かす。「神よ、わたしの魂はあなたを求める」(詩篇 42:2 新共同訳)。そのおかげで思考が生じる。こうして、人である「精神」は機能するということである。そうである以上、人は「魂」と「体」とに支えられているというのが聖書の教える「人の造り」であり、これは先の哲学者たちが見出した「人の造り」と完全に一致する。

このように、人とは「精神」であり、それは「体」と「魂」の二つの実体から成るので、聖書も「人の造り」を、「**体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな**」(マタイ 10:28 新共同訳)と教えている。また、人である「精神」は、体のような実体を持たない意識なので、聖書は「精神」を「**霊**」という言葉で言い表し、「人の造り」を、「**あなたがたの霊も魂も体も**」(I テサロニケ 5:23 新共同訳)としても教

えている。これは、哲学者たちの見出した「人の造り」と同じである。そして、この「人の造り」で重要な点は、「精神」は生かされている存在であって、「精神」という単独の実体は存在しないということである。

❖ 「精神」という単独の実体は存在しない

聖書が教える「人の造り」を見る限り、人である「精神」には実体がない。実体としてあるのは、神の「いのち」の部分である「魂」と、大地のちりで造られた「体」だけである。単独で何かを思惟できる「精神」が存在しているわけではない。それは、あくまでも「魂」と「体」とが織りなす機能である。カントも同様に考えたので、彼は思惟（思考）する「精神」については、「思惟は、それ自身としてみれば、単に論理的機能である」とした（『純粹理性批判』B429 「カント全集5」岩波書店 122 頁）。あくまでも実体としてあるのは、「体」と「魂」であり、この二つがあって「精神」が機能するとした。そうすると、「体」と「魂」、そのどちらが欠けても人は存在できないことになる。そして、「体」は「魂」の運動によって動かされ、その「魂」は神の「いのち」によるので、つまるところ、人は「神」の中に生き、動き、また存在しているということになる。そこで聖書は、次のように教えている。

「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。」（使徒 17:28）

したがって、神が「木の幹」であれば、人は「木の幹」によって生かされる「枝」になる。それでイエスは、「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」（ヨハネ 15:5）と言われたのである。これは、人は神の「部分」であることを意味する。「私たちはキリストのからだの部分だからです」（エペソ 5:30）。「部分」であれば、人は絶えず神とつながっていることになるので、人は母の胎内にいるときから神に担がれていて、これからも担がれ続けていくことになる。そのため、人に何か起きれば、神は人を背負って救い出してくださる。人への「否定」に対しては、何があっても神は「否定」される。聖書はこのことを、次のように教えている。

「ヤコブの家よ、わたしに聞け。イスラエルの子孫のすべての残りの者よ。胎内にいたときから担がれ、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたが白髪になっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。わたしは運ぶ。背負って救い出す。」

（イザヤ 46:3-4 新改訳 2017）

神が私たちを「背負って救い出す」のであれば、「神の愛」から私たちを引き離せるものは何もないことになる。これについても、聖書は次のように教えている。

「高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」（ローマ 8:39）

この「神の愛」を発信するのが「魂」であり、それは神の「いのち」であるというのが、聖書が教える「人の造り」である。

このように、人である「精神」には実体がない。「精神」は「魂」と「体」によって機能する意識であり、「魂」が「精神」（人）ではない。しかし、「魂」は「精神」として、すなわち自分自身として捉えられるのが常である。例えば、日本語で「魂」は、「大和魂」、「魂が叫ぶ」、「魂を込めた作品」、「船乗りの魂」、「鏡は女の魂」といったように、自分自身の真実な思いを言い表す言葉として使われている。それだけではない。「魂」は神の「いのち」であり永遠であることを、人は「潜在意識」に於いてうすうす感じ取っているので、人は「魂」を自分と見なすことで、自分は死んでも「魂」として永遠に生き続けられると思ひ込もうとする。それゆえ、「輪廻転生」を信じる人々は昔から絶えない。これを「靈魂不滅」の思想という（本書 87 頁「靈魂不滅」）。

こうした誤解は、「人の造り」を知らないために起きる。再度述べるが、“塵”で造られた「体」と、その「体」に貸し出された神のいのちの“息”、すなわち「魂」とによって機能するのが「精神」（意識）であり、この「精神」が人である。そのため、「体」である“塵”が大地に帰ると、「魂」である“息”も神に帰るので、「塵は元の大地に帰り、息はこれを与えた神に帰る」（伝道者 12:7 聖書協会共同訳）、「精神」は消滅してしまう。「精神」という単独の実体は存在しないので、それは「魂」と「体」に支えられているので、「体」と「魂」を失うと「精神」は消滅する。そのため、人が生き続けるには朽ちない「霊の体」を生きている間に着せてもらう必要がある。着せられれば「魂」は神に帰ることもないので、人である「精神」は機能し続けることができる。そこで、「霊の体」を着せるのが、「神の福音」の第一ステージであった。

さて、人が神に支えられていることは、人が「言葉」を持っていることから知ることもできる。

❖ 「言葉」を持っている

神は、人にだけご自分の「いのち」を貸し出された。「いのちの息を吹き込まれた」（創世記 2:7）。それゆえ、神の「いのち」が「物差し」となり、すなわち「神の思い」が「体」の持ち込む情報を認識する運動となり、人は認識できるようになった。その「神の思い」は、一言でいえば「愛」である。「神は愛です」（Ⅰヨハネ 4:16）。「愛」とは、「一つ」になろうとする「統合運動」である。「それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです」（ヨハネ 17:22）。「隔ての壁」を打ち壊し、二つのものを「一つ」にする運動である。「二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし」（エペソ 2:14）。それゆえ、「愛」は「体」が収集する情報を「一つ」にしようとする。

具体的には、「神の思い」が人の「精神」に働きかけ、収集された異なる対象の情報から共通点を見出させることで、「一つ」に結びつけようとする。その際に知った共通点が「概念」となり、それに呼び名を付けることで「言葉」が誕生する。例えば、様々な花の共通点を見出させ、様々な花を「一つ」に結びつける「概念」を形成させ、そこに「植物」といった具合に呼び名を付けさせることで「言葉」を持たせる。このように、神の「いのち」が「一つ」にする「愛」の運動を人のうちで展開しているので、「体」が収集する情報から共通の「概念」を持てるようになり、「言葉」による認識が生まれる。その認識を受け持つ部署が「精神」であり、それが人である。

そして、人の「体」に貸し出された神の「いのち」が発信する「愛」のゴールは、人を神と「一つ」にすることなので、その「愛」の中には目指す神の「概念」が初めから含まれている。それは「永遠」や「自由」の「概念」であり、「愛」と「正義」の「概念」である。そこから様々な「言葉」が生まれる。人は、こうした「一つ」になろうとする「統合運動」（愛）に支えられているので、その運動を「肯定」することが「善」であり、それを「否定」することが「悪」となる。神が造られた当初の世界には「悪」はなく、「善」しかなかった。しかし、悪魔の仕業によって「死」が入り込んで以来、神と人とが「一つ」になろうとする「善」を「否定」する「悪」の運動が展開されるようになった。その結果、神と人とが「一つ」になる運動で手にした「言葉」に対し、それを「否定」する正反対の「言葉」も手にすることになり、人は「善」と「悪」の「言葉」を知るようになった。

このように、人の土台は神の「いのち」であり、それは「統合運動」を展開する「愛」なので、人は「言葉」を持つことができる。つまり、神が「言葉」である。「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった」（ヨハネ 1:1）。

そして、人が「言葉」を持てるのは、神の「いのち」の部分である「魂」が、「神の思い」を「精神」の潜在意識に訴えるので、それを「意識化」しようと、「精神」が「神の思い」を自分の経験に重ね合わせるからである。その経験は、各々暮らす環境によって異なるので、人は異なる表現の「言葉」を持つのである。それでも同じ民族は同じような経験をするので、民族毎に独自の「言葉」を持つようになる。そうであっても、異なる「言葉」の背後にある「概念」は共通なので、異なる「言葉」であっても、互いにその意味を他の「言葉」に翻訳できる。例えば、「愛」は「Love」という「言葉」に翻訳でき、それによって意思疎通ができる。これは全て、人の土台がみな同じ「神」であるからこそ可能となる。したがって、人が「言葉」を持っているということ自体が、人の土台は神の「いのち」であることを証ししている。そのことは、愛他行動からも知ることができる。

❖ 「愛他行動」

人とは何者なのか。その答えは、神の部分である。人はキリストの体の部分として造られたので、「私たちはキリストのからだの部分だからです」（エペソ 5:30）、神を土台として生きる者である。その神は愛なので、「神の愛」を土台として生きる者である。そのため、人は何の見返りも求めず、自らの命を犠牲にすることができる。キリストが十字架で示されたのと同じ「神の愛」を、人も実践できる。見も知らぬ人のために、命を捧げることができる。そのことは、次の話から分かる。

ある時、川に車が落ちたのを見て、とっさに人を助けようと川に飛び込み、飛び込んだ人は亡くなってしまったというニュースを見た。彼は何の見返りも求めず、見知らぬ人を助けようと自らの命を犠牲にしたのである。こうした類いのニュースはたくさんある。駅のホームから線路に落ちた人を見て、電車が近づいて来ているにもかかわらずとっさに線路に飛び降り、その人を助けるも、自らは電車にひかれて命を落とした人のニュース。川で溺れている人を見て、とっさに助けようと飛び込み、自らの命を失った人たちのニュース。火事で逃げ遅れた人を助けるために殉職した消防士の人たちのニュースなど、それはたくさんある。

そうした話の中には、2011年に起きた東日本大震災での出来事もある。そこでは多くの人が津波に呑み込まれたが、その中には自らの命を顧みず、他の人の命を救おうとした人たちが大勢いた。多くの人が、近所に住む一人暮らしのお年寄りや体の不自由な人を避難させようとし、自らも津波に呑み込まれてしまったのである。

身近な例を挙げるなら、目の前で子どもが道に飛び出したなら、「危ない！」と叫び、人は道に出て、その子を助けようとする。これも、自らの危険を顧みず、何の見返りも求めないで人が人を助けようとする行動である。こうした行動を「愛他行動」というが、なぜそのようなことが人にできるのか。それをしたのが敬虔なクリスチャンであったというのであれば、少しは合理的な説明がつかだろう。しかし、そうではない。普通の人たちが、とっさに「愛他行動」に出る。

ところが、心臓移植をしなければ助からない人がいると聞いたなら、一体誰が進んで自らの心臓を差し出せるというのか。親であれば差し出せたとしても、見も知らぬ人のために差し出せるような人はいない。そうした私たちが、とっさの時には自らを犠牲に、見知らぬ人を助ける行動を取ってしまうのである。聖書に、「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです」(Ⅰヨハネ 3:16) とあるが、この最もレベルの高い愛の行動を、クリスチャンでなくても簡単に実行してしまうのは、なぜなのか。

このことに於ける唯一合理的な説明は、人は誰であれキリストの体の部分として造られた、ということしかない。誰もが、一つの身体を構成する器官である、ということである。そのため、誰もが自分の身体を守ろうとし、そのような行動に出るとしか説明のしようがない。人は転びそうになると、身体を守ろうとして受け身を取るが、それと同じである。それはつまり、人の土台は同じ神であって、同じ「神の愛」を持っているということを証ししている。そうであるからこそ、いざという時、キリストが十字架で示されたのと同じ「神の愛」を実践することができる。普段、「神の愛」は「肉の思い」に邪魔されているが、緊急時には「神の愛」が姿を現し、「愛他行動」を取るのである。というのも、「肉の思い」は時間に支配され、それが働くには時間を有するが、「神の愛」は時間に支配されない不動なので、「肉の思い」が働く時間が来る前に危険を察知すれば、「神の愛」が姿を現して「愛他行動」を取ることになる。その行動が本来の人の姿なので、聖書はその姿を次のように教えている。

「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」(エペソ 2:10)

このように、人とは神の「いのち」によって生きる者であり、神を土台に持つ者であることは、人が「言葉」を持っていることから、「ことばは神であった」(ヨハネ 1:1)、「愛他行動」からも知ることができる。ということは、人は神との関わりを実感できるということである。それは単なる想像ではなく、神に対しては現実性(リアリティー)のある信仰が持てるということである。それを、「神の言葉」が「受肉」という。

❖ 「神の言葉」が「受肉」する

「神の思い」は「魂」を介し、人の「精神」の「潜在意識」に伝えられる。しかし、それは意識できない領域なので、「神の思い」は「潜在意識」のほかに、だれも知らない。

「いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊(潜在意識)のほかに、だれが知っているでしょう」(I コリント 2:11) ※ () は筆者が意味を補足

「神の思い」は「潜在意識」以外には知らないで、それは「顕在意識」の「言葉」にならない。「言葉」にならなくても、「潜在意識」は「神の思い」を「概念」という形で知っている。例えば、「神の思い」は「愛」なので、「潜在意識」は「愛」の「概念」を知っている。だが、「愛とは何か？」と聞かれても、「言葉」では上手く説明できない。そうであっても、「愛」の「概念」を知っているので、愛については何となく分かる。これは、「神の思い」が人の意識できる「言葉」になっていないことを示している。

そこで、「潜在意識」は自分が知った「概念」を、何としても人が意識できる「言葉」にしようとする(意識化)。その「潜在意識」の働きを助けるために、神は「聖書」を用意された。それは神の靈感によって書かれたもので、「神の思い」が人の意識できる「言葉」として綴られている。神は、この聖書の「言葉」を体験させることで、「言葉」にならない「神の思い」の「概念」を、人が意識できる「言葉」にするのである。そのようにして、神は聖書に書かれている「言葉」を、人が意識できる「神の言葉」にすることで、人との間に「リアリティー」のある関係を築こうとされる。これを、「神の言葉」が「受肉」という。

例えば、「潜在意識」に伝えられた「神の思い」の中に、「神」ご自身の自己紹介がある。それは「潜在意識」だけが知るので、人の意識では、「神」は「概念」でしかない。だが、それが「聖書」の証しする「イエス・キリスト」についての「言葉」と結びつくことで、人は「イエス・キリスト」が「神」であることを実感できるようになる。

「このキリストは万物の上にあり、とこしえにほめたたえられる神です」(ローマ 9:5)。こうして、聖書の「言葉」が意識できる「神の言葉」となり、人の中で「受肉」する。

他にも、「潜在意識」に伝えられた「神の思い」の中には、神が実行する「愛」の情報がある。それは「潜在意識」だけが知るので、人の意識では、「愛」は「概念」ではない。だが、それが「聖書」にある「愛」についての「言葉」と結びつくことで、人はキリストの十字架に「愛」を実感できるようになる。「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです」(I ヨハネ 4:9)。こういう流れで、聖書の「言葉」が意識できる「神の言葉」となり、人の中で「受肉」する。

このように、人の土台は神なので、神は人の無意識（潜在意識）の中だけではなく、人が実感できる意識（顕在意識）の中でも交わろうとされる。そのおかげで、人は神との関わりを実感できる。これを、「神の思い」の「意識化」といい、「神の言葉」が「受肉」するという。そして、この「受肉」にこそ、「永遠の契約」の成就がある。

❖ 「永遠の契約」の成就

「神の思い」の「意識化」が十分に実現すると、人は「神を信じていますか？」という問いに対しては、「私は神を信じてはいません」と答えるようになる。その理由を、「私は神を現実に知っているから」と答えるようになる。それは「概念」であった「神」が、現実に知る「神」になったということであり、「信じる」という希望的な関係から、「知っている」という「リアリティー」のある関係になったことを意味する。そこに「安息」がある。これこそが、神の立てられた「永遠の契約」の成就である。

「これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである（中略）わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、『【主】を知れ』と言って教えることはない。彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ——【主】のことば——。わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」(エレミヤ 31:33-34 新改訳 2017)

この「永遠の契約」の中には、「わたしを知るようになる」からもう「【主】を知れ」と言って教えることがなくなることが書かれている。これこそ「リアリティー」のある信仰であり、その信仰を持てるようになることが神の「永遠の契約」である。

まことに、人の土台は神なので、神は、人が「リアリティー」を以て神を体験できるようになることを目指す。その体験をすると、「私はまだ見ぬ神を信じます」という希望的観測が、「私は神を知っている」という現実に変化する。それは、この「永遠の契約」にあるように、私たちの不義が赦され、「もはや彼らの罪を思い起こさない」という「神の愛」を、すなわち神の「肯定」である「赦しの恵み」を、実感を以て受け取れるからである。こうした体験が、「神の思い」の「意識化」であり、「神の言葉」の「受肉」であり、そこにこそ「永遠の契約」の成就がある。それは、無条件で愛されている自分の「真実な姿」を知ることにほかならない。ここにこそ、「神の福音」がある。それは、神と人との距離を縮めることである。

このように、人とは、神の「いのち」を土台に持つ者である。神の「いのち」に動かされ、生きる者である。その神の「いのち」は、人を「肯定」する「愛の運動」を展開し、神と人とを「一つ」にしようとする。その運動は誰にも止められないので、その「肯定」を「体」が持ち込む情報が「否定」するなら、その「否定」を乗り越え、「愛の運動」は直接「精神」に働きかけようとする。そのことが「信仰」を開花させ、「神の言葉」の体験を求めさせ、「神の言葉」を「受肉」させる。こうして、人は神との関わりを実感できるようになり、「リアリティー」のある信仰を持つようになる。それは、神が人を引き寄せるということであり、人との距離を縮めるということである。それを「愛」という。人を支え動かしているのは、まさしく神から出た「愛」である。「神の愛が私たちの心に注がれているからです」（ローマ 5:5）。

以上が、見てきた「人の造り」に、新たな視点を加えた総括である。この総括から、人の「真実な姿」も確定する。それは、人の土台は神であって、神の部分としての姿が人の「真実な姿」であるということである。その神は「永遠」なので、「永遠」に生きられるのが人の「真実な姿」である。また、神は「善」なので、罪を犯さないのが人の「真実な姿」である。ところが、人の「現状の姿」はどうだろう。それは「永遠」には生きられない姿であり、罪を犯す姿である。そこで次は、人の「現状の姿」に於ける「罪の有様」を総括する。新たな視点を加え、本書で見てきた「罪の有様」を総括する。そうすれば、より深く「神の福音」を理解することができる。

－「罪の有様」の総括－

人の土台は神であり、人は単独で生きているのではない。人は、神によって生かされている存在であり、神がいなければ何もできない。喩えるなら、神が「ぶどうの木」の幹であれば、人はその「枝」である。幹がなければ「枝」は何もできないように、人も神を離れては、何もすることができない。

「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」

(ヨハネ 15:5)

つまり、人は神の部分なのである。「私たちはキリストのからだの部分だからです」(エペソ 5:30)。それゆえ、神の価値はそのまま人に投影されていて、神は人を無条件で愛しておられる。これが人の「真実な姿」である。したがって、愛される努力も、自分の価値を獲得する努力も、人には無用である。

ところが、悪魔の仕業で人は罪を犯し、それに伴い「死」が入り込んだ。「罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がった」(ローマ 5:12)。「死」が入り込むとは、人の「体」も人が暮らす世界も滅びに向かう「有限性」になったということである。そうすると、人は「永遠性」である神を認識できなくなるので、人は心を神に向けられなくなり、自分は単独で生きていると錯覚するようになった。その錯覚から、人は愛される努力を、愛されるために必要な自分の価値の獲得を、自力で目指すようになった。これが「罪の有様」である。それは入り込んだ「死」に起因する。「死のとげは罪であり」(I コリント 15:56)。本書では、この有様を述べてきたが、それに新たな視点を加えての総括をする。まずは、二種類の「罪の有様」である。

❖ 二種類の「罪の有様」

人の中に、神と人を分離する「死」が入り込み、人は神を認識できなくなった。その結果、人は神抜きで単独に生きていると錯覚するようになった。その錯覚から、人は自分の価値を自分で獲得するようになった。すなわち、自分で自分を「肯定」するようになった。それは、愛される者になるということであった。というのも、人は神を認識できなくなっても、神は人を無条件で愛し支えていたので、人の潜在意識は愛さ

れる喜びを知っていたからである。それゆえ、その喜びを再び認識しようと、周りから愛されることを目指し、それを自分の価値とし、自分への「肯定」とした。

その有様は赤ちゃんのときから始まり、赤ちゃんは親から愛されることを目指す。そして、成長するにつれ、無条件では愛されないことに気づき始める。愛されるには、自分が良く思われなければならないことに気づき始め、良く思われるために、「この世の心づかい」を目指すようになる。つまり、周りから良く思われることで自分の価値を確認し、自分を「肯定」しようとするのである。かくして、誰が良く思われるかを巡って人は争うようになった。そうすると、ますます心は神ではなく、自分が良く思われることに向いてしまうので、神からの「肯定」を綴った御言葉が耳に入らなくなってしまう。これこそが、一つ目の「罪の有様」である。

二つ目の「罪の有様」は次のとおりである。入り込んだ「死」は滅びに向かう運動なので、そこからは何としても生きたいという願望が生まれる。というのも、人の「潜在意識」は神からの思いを受け、滅びることのない「永遠」を、すなわち生きることの喜びを知っているからである。だが、生きるには衣食住が必要になるので、それを手に入れることを目指すしかない。そうすると、目指すのは富となるので、人は手に入れた富を以て自らの存在を「肯定」し、自らの価値とするようになる。かくして、生きるのに必要な富の獲得を巡っても人は争うようになった。これを「富の惑わし」に生きるという。この「富の惑わし」に生きれば、神からの「肯定」を綴った御言葉が耳に入らなくなる。それゆえ、これが二つ目の「罪の有様」である。そこでイエスは、「罪の有様」を次のように言われた。

「また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。」

(マタイ 13:22)

ここでイエスは、「この世の心づかい」と「富の惑わし」の二つが、御言葉を拒む「罪の有様」だと断言された。御言葉を拒むとは、神からの「肯定」を拒むということであって、それは紛れもなく神を信じない罪である。「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」(ヨハネ 16:9 新共同訳)。さらに言えば、それは「肉に頼る」ということであり、それが「罪の有様」となるので、聖書は正しい生き方を、「キリスト・イエスを誇り、肉に頼らない私たち」(ピリピ 3:3 新改訳 2017) とする。しかし、人は肉に頼り、自分が良く思われる「肯定」(この世の心づかい) や、「富」による「肯定」

(富の惑わし)を求めてしまう。だが、手にした「評判」も「富」も消えていくので、それは「否定」でしかない。つまり、人は「否定」の着物をまとうことで、自分は価値ある「肯定」になったと錯覚するのである。そこでイエスは、「しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした」(マタイ 6:29)と言われたのであった。

このように、人は自分の価値を自分で獲得し、それによって自分を「肯定」するようになり、「この世の心づかい」と「富の惑わし」に邁進するようになった。それが二種類の「罪の有様」である。こうして、「死」という「否定」が入り込んで以来、誰もが見せかけの「肯定」(価値)を目指し、そこに「安心」の根拠を置くようになった。神にではなく、肉に信頼を置くようになった。それは、神なしでも生きることができるという人間の傲慢であり、その傲慢が、「律法」の行いで自分の正しさ(義)を証しさせ、神の恵みを拒否させてしまう。「律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです」(ガラテヤ 5:4)。ゆえに、「罪」とは、自分は神抜きで単独に生きていると錯覚することである。自分が神の被造物であることを忘れ、自分の存在を自分で根拠づけようとする、そのようにして、自分の力で永遠に生きようとするのが「罪」である。そこで神は、アダムがそうした生き方を始めたのをご覧になると、「今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように」(創世記 3:22)と言われたのであった。では、この二種類の「罪の有様」を別の切り口で説明したい。

❖ 二種類の「罪の有様」を別の切り口で説明

人の存在を完全に「否定」する「死」が人の中に入り込んで以来、人は自分を支えている神を認識できなくなった。その結果、人は自分が何者なのかが分からなくなった。加えて、自分はどこから来て、どこに行くのかも分からなくなった。その有様は、風のようなのである。「風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない」(ヨハネ 3:8)。人は自分が何者で、どこから来て、どこに行くのかも分からないので、「不安」を覚えるようになった。だが、その「不安」に人は耐えられないので、まずは自分が何者なのかを知ろうとする。では、どのようにして、自分が何者なのかを知ろうとするのだろうか。

人は、世間の尺度で自分が何者なのかを知ろうとする。「みんな」が当たり前だと思う物差しで、自分が何者なのかを知ろうとする。そのため、世間に認められれば認められるだけ自分は偉い者ということになり、自分が何者なのかが分からなくなった「不

安」を、それによって排除しようとする。それは、世間の目で自分を規定し、自分を見るということなので、これを「律法」（規定）で自分を見るという。その結果、世間の規定（律法）からは出ることができなくなり、いつも世間の目を気にするようになった。自分の考えは、「みんながそうするなら…」となり、いつも「みんな」に合わせるようになった。平たく言えば、いつも周りの空気を読んで生きるようになったということである。

例えば、権威ある人が、「この絵は素晴らしい」と言うと、「まことに、この絵は素晴らしい」と思ってしまう。権威ある人が、「これはおかしい」と言うと、「まことに、これはおかしい」と思ってしまう。無論、ある者はこれに反発し、自分は空気など読まずに自分らしく生きると豪語し、アウトローに生きる人たちもいる。だが、それとて多くの人が選択する道であり、同じアウトローの人たちの空気を読んでいるにすぎない。さらに言えば、アウトローに生きることで、「みんな」から「わーすごい」と認めてもらおうとしているのであって、やはりそれとて「みんな」の一員あり、世間の規定（律法）からは出ていない（参考：ハイデガー『存在と時間』）。

このように、誰もが「みんな」に合わせ、「みんな」と同じように語る。これが日常会話であり、その会話を通して、自分は「みんな」の一員であるということを確認する。それによって、人は自分が何者であるかを確定させ、「安心」しようとする。そうすると、「みんな」に認められれば認められるだけ自分の存在価値を強く意識できるので、「安心」も増す。ゆえに、誰もが「みんな」から良く思われようと、「この世の心づかい」に走り、さらには「みんな」の関心を得ようと、「富」で自分を着飾ろうとする。つまり、誰もが「この世の心づかい」と「富の惑わし」に生きるのである。この生き方が二種類の「罪の有様」なので、イエスは、「また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです」（マタイ 13:22）と言われたのであった。

そこで聖書は、誰もが「みんな」に合わせて生きようとする有様を「肉に属する人」（Ⅰコリント 3:1）と呼ぶ。この有様がなぜ御言葉をふさぐ罪かといえ、そこには御言葉によって自分が何者であるかを知ろうとする信仰が全くないからである。神が語る言葉を信じようとする信仰が全くないので、罪である。「信仰から出ていないことは、みな罪です」（ローマ 14:23）。神の目には、神の言葉を信じないことが罪なのである。「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」（ヨハネ 16:9 新共同訳）。

それは「死」に脅され、自分自身の価値を「値引き」し、神の「肯定」を拒む有様にほかならない。では次に、神の「肯定」を拒む有様を見てみよう。

❖ 神の「肯定」を拒む有様

見てきたように、人は世間から借りてきた「律法」で自分を判断するので、「律法」を達成することを自分の価値とし、それによって自分を「肯定」しようとする。そこで、イスラエルの人たちは神から「律法」を受け取ると、その「律法」の行いを以て自分たちの「肯定」(義)の認証を神に求めた。しかし、神は無条件で人を「肯定」するので行いは不要であった。それは、ただで受け取ればよかった。「いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい」(黙示録 22:17)。これを「信仰」で受け取るという。この「信仰」での受け取りを明らかにされたのが、イエス・キリストである。したがって、イエスの教えは、行いでの「肯定」(義)を求めていたイスラエルの人たちにとっては「つまずきの石」となった。

「しかし、イスラエルは、義の律法を追い求めながら、その律法に到達しませんでした。なぜでしょうか。信仰によって追い求めることをしないで、行いによるかのように追い求めたからです。彼らは、つまずきの石につまずいたのです。」(ローマ 9:31-32)

神が無条件で人を「肯定」する理由は、神が人の土台であって、すでに人を背負い、初めから人を「肯定」しておられるからである。「彼らを背負い、抱いて来られた」(イザヤ 63:9)。それゆえ、神は人の中に人を「否定」する「死」が入り込み、その制約のせいで、人が「良い行い」をできなくなっても、その人を以前と変わりなく愛し、どのような罪でも赦すと言われたのである。「まことに、あなたがたに告げます。人はその犯すどんな罪も赦していただけます」(マルコ 3:28)。

しかし、この神の無条件の「肯定」を人が受け取り、それによって「安心」を得るとなれば、それまで手にしてきた「安心」は不要になる。それはつまり、「みんな」の一員として生きる「肉に属する人」(I コリント 3:1) から、「御霊に属する人」(I コリント 3:1) として生きることを意味する。喩えるなら、神の無条件の「肯定」は、神が用意してくれた「安心」の「ボート」なので、その「ボート」に乗り換えるということである。乗り換えるには、それまで乗っていた肉の「安心」の「ボート」から降りる必要がある。だが、「律法」を達成する行いを以て「安心」の糧を得てきた者にとっては、今さらそれを捨てて神の「安心」の「ボート」に乗り換えることなど、とて

も恐ろしくてできないのである。なぜなら、それは自分の生き方の終局を意味し、獲得してきた富の終わりを意味するからである。この世の「安心」に対し、死ぬことを意味するからである。それはとても恐ろしいことなので、人は神からの「肯定」を拒んでしまう。

ならば、彼らは神からの「肯定」をどのように手にしようとするかといえば、イスラエルの人たちがそうであったように、何としても「律法」の行いによって得ようとする。「律法」の行いによって自らの「肯定」を手にしてきたので、平たく言えば、「みんな」に認められる行いで「安心」を得てきたので、同様の手段で、神の「肯定」となる「義」(価値)を獲得しようとする。そうすることで、これまでの生き方が終わることを回避しようとする。それで、人は神に対して、「私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております」(ルカ 18:12) と訴える。しかし、神はそれを認めない。あくまでも無条件での受け取りしか認めないので、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」(ルカ 18:13) と叫んだ「罪人」に、神は「義」を与えと言われたのである。「あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました」(ルカ 18:14)。こうして、キリストは人が目指してきた「律法」の行いによる「義」を終わらせ、ただで受け取ればよい信仰による「義」を明らかにされたのであった。「キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです」(ローマ 10:4)。

このように、「罪の有様」は、神の「肯定」を拒む姿である。それは、これまで手にしてきた「肯定」を、すなわち「律法」の行いによって自分の「肯定」を得るという手段を、手放せない姿である。手放せないから、無条件の神の「肯定」を拒んでしまう。これが「罪の有様」である。それはつまり、人の「真実な姿」は「義人」であったが、入り込んだ「死」によって、「義人」が「罪人」になったということである。「死のとげは罪であり」(I コリント 15:56)。

以上が、見てきた「罪の有様」の、新たな視点を加えた総括である。その有様は、人を「否定」する「死」に起源があるので、「死」を何とかするのが「神の福音」ということになる。では続けて、新たな視点を加え、見てきた「神の福音」の総括をしたい。

－「神の福音」の総括－

神は「愛」である。「神は愛です」(Ⅰヨハネ 4:16)。「愛」とは、「一つ」になろうとする「統合運動」である。「それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです」(ヨハネ 17:22)。その神の「いのち」が人の土台であり、それは「魂」と呼ばれている。「魂」は「統合運動」を展開し、統合先となる「神の思い」を発信する。そこに「体」が情報を持ち込むので、その情報と「神の思い」を統合しようとする。ここに認識が起き、思考が始まる。そうした意識の総合体が「精神」であり、人である。つまり、人が存在するには「魂」と「体」は不可欠である。ところが、悪魔の仕業で「死」が入り込み、人である「精神」が機能するのに欠かせない「体」は滅びに向かう「有限性」となった。その結果、「体」の滅びる時が人の滅びる時となり、人は実質「死人」になった。これが人の「究極の問題」である。

また、神の「いのち」が人の土台であるが、その意味するところは、人は神に無条件で愛されているということである。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛しておられるということである。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し」(Ⅰヨハネ 4:10)。つまり、人の「真実な姿」は、人には愛される価値があるという姿である。ところが、「死」が入り込み、「有限性」の「体」になったことで、自分の土台である神の「いのち」、すなわち「永遠性」が全く見えなくなった。そのため、人は神抜きで単独で生きていると錯覚するようになり、愛されるための価値は自力で獲得しなければならないと思うようになった。こうして、人は自分の価値の獲得を、自分の力で目指すようになった。それがそのまま、心を神に向けられない「罪の有様」となった。この有様が、人の「現状の問題」である。

したがって、解決すべきは、人の「究極の問題」と人の「現状の問題」である。前者は、「有限性」の「体」に代わる朽ちない「霊の体」を着せることで解決を図り、後者は自分の「真実な姿」に気づかせることで解決を図る。「真実な姿」に気づかせるとは、神は人のためならご自分を生け贄に捧げても惜しくないほどに、人には真に愛される価値があることを知るようにすることである。神からは「うわべ」に関係なく、無条件で愛されている自分の「真の価値」を、人が知るようにするのである。

そこで神は、人の「究極の問題」を解決するために、人に救いの御手を差し伸べてくださる。しかし、人はそれを掴もうとしないので、神は人に「苦しみ」を覚えさせ、絶望へと追い込む。正確には、神は人のうちに「光」を照らし、人の現状が「闇」の

絶望でしかないことに気づかせるのである。気づけば、神が差し出す救いの御手を掴むことも可能になるからである。この作業を「神の呼びかけ」というが、それは人の「潜在意識」の中で行われる。こうして、神の呼びかけに応答し、神の御手を掴む者は「赦しの恵み」によって「霊の体」が着せられ、「生きる者」になる。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」（ヨハネ 5:25）

しかし、人の暮らす世界は死が支配する「闇」の世界なので、神は引き続き人のうちに「光」を照らし、人の現状が「闇」の絶望でしかないことに気づかせる。ただし、今度は「顕在意識」に於いて気づかせる。それは、「罪の行為」をあぶり出すということである。神は人の内側で「光」を照らすと同時に、神が人の「顕在意識」に啓示した「神の律法」を以て「罪の行為」をあぶり出す。そのことで「罪責感」の苦しみに追い込み、神にあわれみを乞うように誘導する。そうすれば、「赦しの恵み」を受け取ることができ、無条件で愛されている自分の「真の価値」を知り得るので、自分の価値の獲得を自分の力で目指す「現状の問題」（罪の有様）は解決する。

このように、人の「究極の問題」と人の「現状の問題」を解決するのが、「神の福音」である。その福音は「赦しの恵み」であり、その恵みの受け取りは、神が呼びかけに人が応答するという形で進んでいく。こうした人の側の応答を「信仰」という。しがたって、「赦しの恵み」は「信仰」に始まり、「信仰」に進ませるのである。

「福音のうちには神の義（赦しの恵み）が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。」（ローマ 1:17） ※（ ）は筆者が意味を補足

つまり、福音の中心は「赦しの恵み」である。そこで、「神の福音」の総括は、「赦しの恵み」を人に受け取らせるために、すなわち神への「信仰」が人に働くようにするために、神がなさることの総括から始めよう。

❖ 神がなさること

神が無償で与える「赦しの恵み」を人が受け取れるように、神は人の患難を「静観」される。あのヨブの時のように。加えて、入り込んだ「死」によって生じるようになった罪を、「神の律法」を突きつけることであぶり出す。それは第一に、神が人に据えた「魂」を介し、内なる声で人の心の奥底（潜在意識）に「神の律法」を突きつける

ことで、罪をあぶり出す。その様はまるで、神が戸の外に立って叩くようである。「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく」(黙示録 3:20)。そして第二に、神はご自分が啓示された「聖書」を介し、「顕在意識」に「神の律法」を突きつけることで罪をあぶり出す。このようにして、神は内側と外側の両方から「神の律法」で人を責め立て、人に自分の罪を認めさせる。それだけでなく、神は人の患難を「静観」することで、人に絶望する勇気を持たせる。そうすれば、絶望の「闇」を照らす真の「光」に気づき、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」(ルカ 18:13)となり、「赦しの恵み」を受け取る「信仰」が働くようになるからである。

まことに神は、人を絶望へと追い込まれる。言い換えれば、神は人を苦しめる。それは、自らが手にした安心など何の役にも立たないことを思い知らされるということである。そうなれば、人は神の差し出す安心を受け取れるようになる。その安心が「赦しの恵み」であり、この恵みの最初の受け取りで「霊の体」を着せられる。しかし、「霊の体」を着せられても、神を認識できない「有限性」の「体」は健在なので、不安は継続し、見える安心をむさぼる罪の行為を犯してしまう。そこで、その後も神は人を絶望に追い込まれる。そのおかげで、自らの罪の行為を言い表せるようになり、罪が無条件で赦される「赦しの恵み」を受け取ることができる。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」(Ⅰヨハネ 1:9)

ここで注意しなければならないのは、「自分の罪を言い表す」というのは、何も罪の行為だけではなく、それは「自分の苦しみを言い表す」ことでもある。なぜなら、「苦しみ」は何であれ、人の存在を否定する「死」に起因し、その「死」が「罪」だからである。「死のとげは罪であり」(Ⅰコリント 15:56)。それゆえ、神に「苦しみ」を訴えることは、「自分の罪」を言い表すことになる。そうなれば、「神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます」(Ⅱコリント 1:4)ということを経験できる。このことは、中風で苦しんでいた人がイエスのもとに運ばれて来て、声なき声で「苦しみ」を訴えた時、イエスが「子よ。あなたの罪は赦されました」(マルコ 2:5)と言われたことから分かる。アダムも、「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました」(創世記 3:10)と「苦しみ」を述べたことで罪が赦され、救われた(本書 278 頁「―「第一ステージ」の検証―」)。

このように、「赦しの恵み」を人に受け取らせるために神がなさることは、患難の「静観」と、人の内側と外側からの神の呼びかけによる罪のあぶり出しである（神の律法）。これらを以て、神は人を絶望に追い込み、「赦しの恵み」を人が受け取れるように助けてくださる。しかし、正確には、神が人を絶望に追い込んでいるわけではない。神は「光」なので、ただ人の中で「光」を輝かせ、人を苦しめている「闇」を明らかにされているだけである。言い換えれば、人は心の奥底で「闇」に苦しんでいるのに、その「苦しみ」に気づいていないので、神が人の「苦しみ」を負い、それを人に訴えているのである。こうして、心の奥底に隠れていた「闇」は、神によって人が意識できる「苦しみ」となる。これを、心に「光」が照らされるという。この「苦しみ」により、人は自らが誇ってきた「肯定」（価値）に絶望する勇気を持つことができ、神が用意された無償の「肯定」を受け取ることが可能となる。だが、それは可能となるというだけで、「赦しの恵み」を受け取る選択は人がしなければならない。これが福音の「第三ステージ」の流れであった（本書 247 頁「－「第三ステージ」の流れ－」）。そして、この「赦しの恵み」が「過去」を白紙にし、神が与える「未来」に心を開かせてくれる。

❖ 神が与える「未来」

「この世」にいる限り、人は滅びに向かって生きるしかない。その滅びが来ると、それまでの月日は歴史となり、「過去」になる。どんなに「未来」を夢見ても、やがて「肉体の死」という滅びが来れば、夢見た「未来」は消滅し「過去」になる。「この世」は、まさしく人を「過去」に閉じ込めてしまった。そこには「未来」がない。そうなったのは、悪魔の仕業で「この世」に「死」が入り込み、人の体が滅びに向かう「死の体」になったからである。そこでパウロは、「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだだから、私を救い出してくれるのでしょうか」（ローマ 7:24 新改訳 2017）と述べている。「死の体」となった以上、人は消えていくのであって、必ず「過去」になり、「未来」はない。これでは、人の実体は「死人」と全く変わりがない。「アダムにあってすべての人が死んでいるように」（Ⅰコリント 15:22）。

そこで、神は「死の体」を背負っている「死人」に呼びかけ、それに応答する者に朽ちない「霊の体」を無償で着せ、「死人」を「生きる者」にしてください。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです」（ヨハネ 5:25）。これは、「死の体」を白紙にする「赦しの恵み」であり、この恵みによって人は「永遠のいのち」を持つことができ、「未来」を持つことができる。加えて、着せられた「霊の体」は「神の国」に属す

る体なので、聖霊の助けを得られるようになり、キリストについての御言葉を聞くと、聖霊によって「イエスは主です」と言えるようになる。

「ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ」と言わず、また、聖霊によるのであれば、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません。」

(Ⅰコリント 12:3)

したがって、「イエスは主です」と言う者は、すでに「霊の体」を着せられていて、「永遠のいのち」を持っている。「永遠のいのちとは、(中略) イエス・キリストとを知ることです」(ヨハネ 17:3)。「永遠のいのち」を持っているのであれば、その者はもう裁きに会うことがなく、すでに「死」から「いのち」に移った状態にあるということになるので、イエスは、「わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです」(ヨハネ 5:24 私訳)と言われたのである。さらにイエスは、イエス・キリストを信じている者は、「死」から「いのち」に移った状態にあることを明らかにするために十字架に架かり、三日目によみがえられた。そのよみがえりを「普遍の原理」とするために、十字架で「死」の力を持つ悪魔も滅ぼされた。「その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし」(ヘブル 2:14)。こうして、イエスは自らの十字架の死によって「死」を根源から滅ぼし、ご自分を信じている者は「死」から「いのち」に移った状態にあることを明らかにし、信じる者に於ける「いのち」と「不滅」を明らかに示されたのであった。

「それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされたのです。キリストは死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました。」(Ⅱテモテ 1:10)

そうである以上、信じている者は必ずキリストの復活とも同じようになり、「もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです」(ローマ 6:5)、いつまでもキリストと共に生きるのである。ここに、神が与える「未来」がある。

このように、神が与える「未来」は、人に朽ちない「霊の体」を与え、それを以て人がいつまでも神と共に生きるようにすることである。その「未来」は無償であって、

ただ受け取りさえすればよい。しかし、「霊の体」を着せられてもなお、人は「この世」での安心を求め続ける。というのも、「霊の体」を着せられても、キリストの復活と同じようになるまでは「死の体」も所持するからである。そのため、「不安」は継続し、人は引き続き自らの手による「肯定」を、つまり周りから良く思われる安心と富による安全を「律法」の「行い」で求めてしまう。その結果、救われても神による「肯定」を拒んでしまう。それは、神のことを思わないで人のことを思ってしまう生き方なので、イエスはこうした生き方をしていたペテロに、「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」(マタイ 16:23)と言われたのであった。このペテロの生き方こそ、私たちの生き方の型である。そこで神は、引き続き私たちを絶望に追い込まれる。ますます患難を「静観」し、ますます「神の律法」で罪をあぶり出して人を苦しめる。そのようにすることで、多くの罪を告白させ、多くの罪を赦し、神への愛を多く創造させるのである。『この女の多くの罪は赦されている』と言います。それは彼女がよけい愛したからです(ルカ 7:47)。この愛の創造が、神が与える「未来」への確信を築かせ、「平安な義の実」(ヘブル 12:11)を結ばせてくれる。ここにこそ、真の「喜び」がある。

❖ 真の「喜び」

欲しいものが手に入ることを、人は「喜び」として感じる。そのため、欲しいお金、欲しい点数、欲しい評価、欲しい健康、そうしたものを手にすることに「喜び」を覚える。しかし、こうした類いの「喜び」は一過性であり、やがて消えてしまう。ゆえに、それは「快樂」と呼ぶのが妥当であって、真の「喜び」では決してない。さらに言えば、そうした「喜び」が一過性であるということは、手にしたものは真に人が欲していたものではなかったということになる。ならば、真に欲しているものは何なのか。それは無条件で愛されることにほかならない。というのも、人は無条件で人を愛する神を土台として生きているので、無条件で愛される「喜び」を知っているからである。ゆえに、知っている「喜び」を求め、この世界をさまようのである。そこで、神がこの世界に用意されたのが、罪が無条件で赦される「赦しの恵み」である。この恵みを受け取れば、無条件で愛される自分を体感できる。それは、自分の「真実な姿」と出会うことであり、これだけが真の「喜び」となる。

したがって、その「赦しの恵み」が「神の福音」の中心である以上、「神の福音」の真実は、人が欲してきたものを神が与え、人を真の「喜び」に導くことなのである。言い換えれば、その「喜び」が人の心を癒やすので、「神の福音」の真実は「癒やし」である。それは、人が自分の「真実な姿」に気づけるようになることである。その姿は、

人の土台は神であって、神に無条件で愛されている姿にほかならない。聖書は、こうした神と人との関係を「夫婦」に譬えている。

❖ 「夫婦」の関係

聖書によると、神はご自分と人との関係を次のように言われた。

「わたしはあなたと永遠に契りを結ぶ。正義と公義と、恵みとあわれみをもって、契りを結ぶ。わたしは真実をもってあなたと契りを結ぶ。このとき、あなたは【主】を知ろう。」（ホセア 2:19-20）

ここで神が「契りを結ぶ」と言われた相手は、神の呼びかけに応答する人たちを指す。そして、「契りを結ぶ」は「アールス」[אַרַס]を訳したもので、「婚約する」ことを意味する。ここではそれが「完了形」になっているので、「婚約した」ということであり、実質「夫婦」になったことを意味する。神はそれを三度も語り、神の呼びかけに応答する者とは実質「夫婦」の関係とした。新約聖書は、これを次のように教えている。

「あなたがたに対して、神が抱いておられる熱い思いをわたしも抱いています。なぜなら、わたしはあなたがたを純潔な処女として一人の夫と婚約させた、つまりキリストに献げたからです。」（Ⅱコリント 11:2 新共同訳）

では、婚約した者は、いつ小羊であるキリストと正式な「夫婦」になるのだろうか。それは復活する時であり、その時が婚姻の時となって、顔と顔を合わせることになる。それゆえ、復活する時を、「私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意ができたのだから」（黙示録 19:7）と聖書は綴っている。

このように、神と人とは元来「一つ」なので、その関係を「夫婦」に譬えている。ただ入り込んだ「死」によって、その関係が見えなくなったので、再びそれが見えるように神が人に呼びかけ、それに応答する者と「再結合」をされるということである。「再結合」が婚約であり、「再結合」した者は復活するので、その時が婚姻の時である。このことは、全てのものを、神は人と共有されることを意味する。

❖ 全てのものを共有する

神と人との関係を、神は「夫婦」に譬えた。全てのものを共有する「夫婦」に譬えた。したがって、神である夫は、人である妻の財産を自分のものとし、人である妻は、神

である夫の財産を自分のものとするができる。これこそ、神が創造された際の人の「真実な姿」である。そこで、夫である神は、妻である人が悪魔の仕業で「罪」という負の財産を背負わされたので、その「罪」を自分のものとして背負ってくださった。「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました」（Ⅰペテロ 2:24）。そのことで、私たちを責め立ててきた「債務証書」を無効にしてくださった。

「私たちに不利な、様々な規定で私たちを責め立てている債務証書を無効にし、それを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。」

（コロサイ 2:14 新改訳 2017）

まさに、神と人とは「一体」であって「夫婦」の関係にあるので、神は人の負の財産を当たり前のように肩代わりしてくださる。人を裁くことなく、人を助けてくださる。それだけではない。人の方はといえば、夫である神の財産を持つことができる。いや、「夫婦」である以上、すでに持っている。だが、人はそのことに気づかない。気づかないから、自分と周りを比べ、自分は神に愛されていないとつぶやく。あの「放蕩息子の譬え」に登場する兄のように。そこで、譬えの中の父親は兄にこう言った。

「子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。」（ルカ 15:31）

ここで父親は、「私のものは、全部おまえのものだ」と言った。つまり、神と人とは「一体」であって、全てのものを共有する関係にあるということである。そうであるからこそ、神は人が苦しむときは、いつも共に苦しみ、人を贖われる。

「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。」（イザヤ 63:9）

このように、神と人とは全てのものを共有する関係にある。それは、人の土台が神だから、そのようになる。それゆえ、神は何としても人を助けようとされる。何があっても、人を弁護してくださる。そのことを人に教え、それを実践してくださったのが、神が人として来られたイエス・キリストである。

「わたしの子たちよ、これらのことを書くのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。」（Ⅰヨハネ 2:1 新共同訳）

まことに、神と人とは「一つ」である。人は、神の「いのち」による「魂」に背負われ、生かされている。そうであるからこそ、神は人との関係を「夫婦」に譬え、全てのものを人と共有されることを教えられたのである。つまり、人は神が持つ価値を持っているので、自分の価値のことは何も心配する必要がないということである。この事実を知るようにすることが、「神の福音」の真実である。それは、何があっても、人を「肯定」し続けることにほかならない。

❖ 人を「肯定」し続ける

人は自分の体の器官が病気になれば、どう対応するだろう。「役に立たない器官だ！」と言って、その器官を切り捨てるのか。そのようなことは断じてしない。むしろ自分の体の器官を攻撃し、「否定」してくる病気と戦い、自分の器官を何としても「肯定」しようとする。同様に、人は「神の器官」なので、「ひとりひとは各器官なのです」（Ⅰコリント 12:27）、人に何かが起きれば神は助けてくださる。神は人を「否定」するものをご自分への「否定」として捉え、その「否定」と戦われる。「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ」（イザヤ 63:9）。そのようにして、何があろうとも人を「肯定」し続けられる。それゆえ、「神の器官」である私たちが病気になり、神の言われることができなくなったのなら、神は私たちではなく、私たちの病気に怒りを覚え、必死にそれを「否定」し、癒やそうとされる。

しかし、人はよく、「神に言われたことができない自分は、神に愛されるはずがない」と落ち込む。あるいは、神の言われることができないからと自分を責め、「自分は神の罰を受ける」と落ち込んでしまう。だが、人は「神の器官」であることが分かれば、それは見当違いも甚だしいことに気づく。自らを「否定」するのは、ただの独りよがりであることに気づく。

このように、人は「神の器官」なので、「神の福音」は人を「肯定」し続ける話になる。私たちが罪を犯そうとも、それを弁護してくださる話になる。「たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます」（Ⅰヨハネ 2:1 新共同訳）。それは、神と人が「一つ」であり、譬えるなら「夫婦」であり、「神の器官」であり、全てのものを共有するからである。そこで聖書は、こう教えている。

「キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。」

(エペソ 4:16)

このことから、神が直接人を救うことが確定する。

❖ 神が直接人を救う

伝統的な神学では、神はご自分の外に、粘土細工をするかのように人を造られたとし、神は人の外にいるとする。そこには、神と人との一体としてのつながりはないとする。そうしたことから、神は外から人に働きかけることで人を救われるとする。具体的には、神が啓示された「神の言葉」（聖書）を使って人に働きかけ、その「神の言葉」を人の側が理解し、それを受け入れることで人は救われるとする。

すると、ここに疑問が生じる。それは、「聖書」に書かれている「神の言葉」を理解できない者はどうなるのか、である。神は人の外から「神の言葉」を以て人に働きかけるのであれば、「神の言葉」を理解できない者は、神の働きかけを理解できないので、いつまで経っても神とは赤の他人のままであり、その者は救われないことになる。例えば、幼子や言語理解が難しいような重度の障がい者は、「神の言葉」が理解できないので救われないことになる。他にも、「聖書」を見たことも聞いたこともない者たちも同じである。彼らは啓示された「神の言葉」を知りようがないので、救われないことになる。ならば、そうした人々は初めから神に見捨てられているのか。昔は、幼子のままで亡くなる者たちが大勢いたが、彼らは救われない者たちだったのか。

この疑問に首尾よく答えたのが、行いによる救いを説く「異端」であった。つまり、神を人の外に位置づける伝統的な神学では救われない人たちが続出するので、これでは「異端」に隙を与えてしまうのである。

しかし、聖書が教える「人の造り」は、人の土台は神であり、神と人との間には連続性がある。神が「ぶどうの木」であれば、人はその「枝」の関係にある。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」（ヨハネ 15:5）。すなわち、神はご自分の外に、粘土細工をするかのように人を造られたのではなく、あくまでもご自分の「いのち」を人に貸し出すことで、「いのちの息を吹き込まれた」（創世記 2:7）、ご自分が人の土台

となって人を造られたのであり、ご自分の部分として人を造られた。「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」(I コリント 12:27 新共同訳)。この理解に立つと、救いの話は全く違った景色になる。なぜなら、神が人の土台であれば、神は人に直接働きかけ、人のうちに願いを起こさせることができるからである。そこで、その願いを人が選択すれば、御心の実現が見られるからである。

「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。」

(ピリピ 2:13 口語訳)

この御言葉は、神が人の土台なので、人の「体」から来る制約には関係なく、神は人に直接働きかけができることを教えている。神は人の「体」を介することなく、人である「精神」の「潜在意識」に直接呼びかけることができることを教えている。そうであれば、誰であれ神の呼びかけを聞くことができるので、その呼びかけに応答すれば救われるという福音が見えてくる。幼子であろうが、重度の障がい者であろうが、「聖書」を知らない者であろうが、そうした「体」の制約とは無関係に、誰であれ救われる機会を平等に持つ様子が見えてくる。誰であれ「潜在意識」の中で神の呼びかけを聞くことができるので、その呼びかけに応答して「生きる者」になるのか、応答せずに「滅びる者」になるのかの選択を、誰でも神から迫られているということである。しかし、応答しない者たちが大勢いたので、聖書には次のことが書かれている。

「わたしが呼んだのに、あなたがたは拒んだ。わたしは手を伸べたが、顧みる者はない。あなたがたはわたしのすべての忠告を無視し、わたしの叱責を受け入れなかった。」(箴言 1:24-25)

こうした神の呼びかけは、「知恵」と呼ばれる。「私は知恵の道をあなたに教え、正しい道筋にあなたを導いた」(箴言 4:11)。そこで、「知恵」に耳を傾けるようにと神は教えている。「わが子よ。私の知恵に心を留め、私の英知に耳を傾けよ」(箴言 5:1)。このように、神の呼びかけに応答するのか、しないのかを問うことで、神は直接人を救われるのである。これは人の能力に全く依存せず、また、人の行いにも全く依存しないので、このことが分かれば、行いによる救いを説く「異端」に隙を与えることもない(本書 110 頁「応答すれば救われる」)。

そうすると、「聖書」に書かれている「神の言葉」は必要ないのだろうか。そうはいかない。救われることと救いの自覚は別の話なので、神によって救われて「永遠のいのち」を受けても、その救いを自覚するには「神の言葉」が必要となる。別の言い方をすると、「神の国」での暮らしが必要となる。その「神の国」を具現化したのが「教会」での暮らしであり、そこでは「神の言葉」を聞くことができるので、救いの自覚を持つことができる。これはちょうど、自分が日本人であることの自覚を持つには、日本語を聞きながら日本人の中で暮らす必要があるのと同じである。日本語がなければ日本人であることを自覚できないように、「神の言葉」がなければ、そしてそれを教えてくれる「教会」がなければ、自分が神の子であることも自覚できないのである。

したがって、「神の言葉」が綴られた「聖書」は、神の子としての救いを自覚するのに欠かすことができない。しかし、救われても「神の言葉」を聞くことができない者もいる。その場合は、神の被造物を通して神の愛を知り、救いの自覚に至る道も用意されている。ただ、そこではイエス・キリストの名は知り得ない。そうであっても、世界を創造された神の存在は知ることができるので、そこから神に愛されている自分を知るように聖霊に導かれ、救いを自覚することもできる。

「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。」（ローマ 1:20 新共同訳）

このように、神と人とは他人ではなく「一つ」である以上、「神の福音」は、神が直接人を救う話なのである。そこで、このことを聖書の話で見たい。それは、エチオピア人の高官が救われ、イエス・キリストを信じられるようになり、救いを自覚するに至り、水のバプテスマを受けるまでの話である。

－水のバプテスマを受けるまでの話－

本書は、人の救いに的を絞り見てきた。そこで、これまでの話の総括を兼ね、エチオピア人の高官が救われ、水のバプテスマを受けるまでの話を見ていきたい。それは、次のような出来事であった。

ペンテコステの日の出来事以降、弟子たちは大胆に、イエスが約束のキリストであったことを証しするようになった。彼らは迫害され、捕らえられても、イエス・キリストを宣べ伝え続けた。その中の一人ピリポは、主の御使いに導かれ、エルサレムからガザへと向かった。すると、エチオピア人の高官に出会った。彼は、礼拝のためにエルサレムに行き、帰る途中であった。

当時、エチオピア人はユダヤ人ではなかったので、エルサレムに礼拝に行っても、神殿の外の「異邦人の庭」にまでしか入れず、教えを直接聞くことはできなかった。そのため、聖書（この時代は旧約聖書しかない）を手に入れ、読むことしかできなかった。そこで彼は、帰りの馬車の中でイザヤ書を読んでいた（使徒 8:26-28）。

- ここで押さえておくことは、エチオピア人の高官は、なぜ礼拝に行きたいと思ったかである。なぜ聖書の神を求めるようになったかである。

その時、御霊がピリポの心に、「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい」（使徒 8:29）とささやいた。その声を聞いてピリポが走って行くと、高官がイザヤ書の預言を読んでいるのが聞こえたので（イザヤ書 53:7-8）、ピリポは高官に、その意味が分かるのかと尋ねた。すると高官は、導く人がいないので分からないと答えた。そこでピリポは、そこに書かれている預言者はイエスのことであり、預言にあったように迫害を受け殺されてしまったことを教えた。ところが、その方は復活し、ご自分が主でありキリストであることを示されたと、ピリポは高官に証しした。

すると高官は、イエスが主であり、キリストであることを信じた。つまり、死んだがよみがえったことを信じ、それを告白した。これで高官は、自分が水 of バプテスマを受けるのに何か差し支えることはあるのか、とピリポに言った。そして、直ちに馬車を止め、水 of バプテスマを受けたのであった。「馬車を止めさせ、ピリポも宦官も水の中へ降りて行き、ピリポは宦官にバプテスマを授けた」（使徒 8:38）。すると、彼は喜んで帰って行った。「喜びながら帰って行った」（使徒 8:39）。

- ここで押さえておくことは、高官はキリストについての御言葉を聞くと、キリストへの信仰が芽生えたということである。その信仰を告白することで、救われた自分を自覚したということである。それゆえ、いてもたってもいられなくなり水のバプテスマを受け、喜んだのである。

そこで、この出来事の背景を探ってみたい。そのことで、これまでの話の総括を試みてみたい。最初は、どうして高官は礼拝に行きたいと思ったのか、その背景から探っていく。結論から言うと、神によって捕らえられたからである。神の呼びかけに応答し、救われたからである。ただし、これを理解するには、人の土台は「神」であることを知る必要があるので、話はそこから始めよう。

❖ 人の土台は「神」である

人とは、「体」が持ち込む情報を認識できる「精神」である。ならば、なぜ「精神」は認識できるのだろうか。それは、「体」が持ち込む情報に意味づけができる不変の物差しがあるからである。その物差しが「魂」であり、「魂」が人の認識を可能にしている。つまり、人とは「精神」であり、それは「体」と「魂」によって支えられている。これが、アリストテレス以来の人の構造の概略である。

すると関心は、その「魂」の起源に向かう。「体」はこの大地に起源があったことは分かるので、その「体」に宿る「魂」は、どこから来たのか、となる。この問いに、聖書は次のように答えている。

「神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。」（創世記 2:7 新改訳 2017）

聖書は、「魂」の起源は神の「いのち」であるとする。神は人を造る際、人の「体」を先に造り、そこに神の「いのち」を吹き込まれたが、その「息」が「魂」であるとする。そして、「体」に「魂」が吹き込まれたことで、人は生きる者になったという。つまり、人を支えている人の土台は、神の「いのち」である。別の言い方をするなら、人の土台となる人の「岩」は、神である。「神こそ、わが岩」（詩篇 62:2）。これは、人は神に背負われているということである。「昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた」（イザヤ 63:9）。ならば、土台の神とは誰のことなのか。それは、イエス・キリストであることを聖書は教えている。

「というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。」

(I コリント 3:11)

聖書は、すでに据えられている土台は、「イエス・キリスト」だと言い切っている。つまり、「神の子」が人の土台となり、人を支え動かしているということである。ちなみに、この手前でパウロは、「与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました」(I コリント 3:10) と述べているが、これは、すでに据えられていた土台が「イエス・キリスト」だったので、そのことを自分は教えたということである。ピリポがあの高官に教えたように、である。

このように、人の土台は神である。その神は「イエス・キリスト」であり、「神の子」である。正確に言えば、人を支えている土台は神の「いのち」の息であり、それは「魂」と呼ばれている。その「魂」は、「神の子」の思いを発信する場所なので、人の土台は「神の子」であるという。そして、「魂」が「神の子」の声を発信するので、その声が人の認識の物差しになっている。このことから、「神の子」が人を救うことが分かる。

❖ 「神の子」が人を救う

人は神に似せて造られたので、神と同じ認識ができるように、神と同じ物差しが、神から貸し出された。それが「魂」であり、それは「神の子」である「イエス・キリスト」の声を発信する場所である。この「魂」が人の土台であるおかげで、人は「神の子」の声により認識ができる。それ故、人は誰にも教えられなくても、生まれながらに何が善いことで悪いことなのかを、おぼろげに知っている。

ところが、悪魔の仕業で、神と人を分離する「死」が入り込み、人の「体」もこの世界も、「永遠性」の神と分離する「有限性」となった。そのため、人の「体」は朽ちる運命となった。とはいえ、朽ちるまでは、そこに「魂」は留まることができるので、人である「精神」も認識はできる。しかし、「体」が朽ちれば、神からの「息」であった「魂」は居場所を失うため、神のもとに帰ることになる。「塵は元の大地に帰り、息はこれを与えた神に帰る」(伝道者 12:7 聖書協会共同訳)。そうになると、人は認識ができなくなるので、消滅するしかない。

そこで神は、人の「体」が朽ちる前に、何としても人を救おうと、実質「死人」となった人に対し、「わたしの御手に握まりなさい。わたしが生きる者にするから」という呼びかけを開始された。その呼びかけは、人の土台である神が直接行われる。その神とは「イエス・キリスト」であり、すなわち「神の子」である。

つまり、こういうことである。「死」が入り込み神との関係が壊れ、人は滅びるしかない「死人」になった。それでも、人の「体」が生きている間は、そこに吹き込まれた「魂」があるので、それを介し、「死人」は「神の子」の声を聞くことができるということである。その声は、「わたしの御手に握まりなさい」であったので、その呼びかけに応答し、御手に握まったなら、人は生きる者になれるのである。それでイエスは、このことを次のように教えられた。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:25)

ここでイエスは、「神の子の声を聞く」と言われたのである。なぜなら、人の土台は「イエス・キリスト」だからである。それゆえ、土台の「神の子」の声を聞き、それに応答するなら生きる者になれると言われたのである。これが人の救いであり、これを、神はキリストによって、私たちをご自分と和解させたといい、「神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ」(Ⅱコリント 5:18)、それはすべて神から出ている。「これらのことはすべて、神から出ているのです」(Ⅱコリント 5:18)。

ただし、土台からの声は「体」を介さないため、それを聞くのは「潜在意識」である。「体」を介して聞くのが「顕在意識」である。それゆえ、土台の「神の子」の声を聞き、それに応答して救われても、人には自覚はない。

このように、神が人に据えた土台は「イエス・キリスト」、すなわち「神の子」なので、「死人」であっても土台の「神の子」の声を聞くことができる。それゆえ、その声に応答し、救いの御手に握まる者は「生きる者」になれる。正確に言えば、「神の子」の声を伝えるのが聖霊であり、神の“霊”(聖霊)が呼びかけるということになるので、イエスは聖霊の呼びかけを拒むなら救われなかった。「しかし、聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます」(マルコ 3:29)。こうして、「神の子」が人を救うことになった。ここから神との関係が築かれていくことになる。

❖ 神との関係が築かれていく

神が人の土台であり、その土台は「魂」と呼ばれている。「魂」は、「神の子」の声を発信する場所なので、人の土台は「イエス・キリスト」であるという。そして、「魂」から発信される「神の子」の声を、人の「精神」に伝えるのが聖霊である。「神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです」(I コリント 2:10)。つまり、聖霊は「キリストの霊」(ローマ 8:9 新共同訳)であり、聖霊は聞くままを語るなのである。

「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。」

(ヨハネ 16:13)

そのため、聖霊の呼びかけに応答するなら、救われるというのが正確な言い方になる。それは、朽ちない「霊の体」を着せることである。「霊の体」が復活させられている」(I コリント 15:44 私訳)。そうすれば「魂」は、人の現在の「体」が朽ちても、新たな「霊の体」に留まり続けられるので、人は生きることができる。それは、引き続き認識ができるということである。そこで、これを「永遠のいのち」が与えられるといい、ここに神との霊的な関係が回復する。すると神は、その人を神のもとに引き寄せることができるようになるので、その者を最後は、着せておいた「霊の体」でよみがえらせることができる。このことを、イエスは次のように言われたのである。

「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」

(ヨハネ 6:44)

どのように引き寄せるかということ、その人に働きかけ、願いを起こさせ、土台の神を求めさせることで引き寄せる。今風に言えば、招待状のメールを何度でも送り、繰り返し招きの声を届け、神のもとに来させようとする。

「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。」

(ピリピ 2:13 口語訳)

このように、神（聖霊）の呼びかけに応答し、救われたなら、その時点から神との関係が築かれていく。神がその人を引き寄せるからである。その人の心に働きかけるからである。これで、どうしてエチオピア人の高官はエルサレムまで礼拝に行ったのか、その謎が解ける。彼は、神の呼びかけに応答し、神に捕らえられたからこそ、神からの願いを起こされ、神を求め、エルサレムまで礼拝に行ったのである。つまり、彼は「永遠のいのち」を与えられたからこそ、その「永遠のいのち」の源である「イエス・キリスト」を知ろうとし、エルサレムにまで礼拝に行き、聖書も読むようになったということである。聖書の神を求めるようになった。

しかし、その聖書には「イエス・キリスト」の名は書かれてはいなかった。なぜなら、当時の聖書は旧約聖書しかなかったからである。そこで、「イエス・キリスト」を知り、その方を信じる信仰を芽生えさせるには、誰かが「イエス・キリスト」のことを彼に伝える必要があった。キリストについての御言葉を聞く必要があった。

❖ 御言葉を聞く必要がある

このエチオピア人の高官は、神に捕らえられ、「永遠のいのち」を与えられたことで、その「永遠のいのち」を知ろうと、イザヤ書を読んでいた。そこにピリポが来て、その意味が分かるのかと尋ねられた。高官は、導く人がいないので分からないと正直に答えると、ピリポがそこに書かれていることの意味を教えた。そのことで、そこに書かれている預言者はイエスであり、その方がよみがえった主キリストであることを高官は知った。

すると高官は、イエスが主であり、キリストであること、そして彼は死んだがよみがえったことを信じますと告白し、水のバプテスマを受けたという出来事であった。ただし、聖書には彼が信仰を告白したという記事はない。しかし、水のバプテスマを受けたということが、そのことを物語っているのである。

では、高官はキリストについての御言葉を聞くと、なぜキリストへの信仰が芽生えたのだろう。それは、「永遠のいのち」が与えられていたからである。「永遠のいのち」が、イエス・キリストを知るように導いたからである。

「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」（ヨハネ 17:3）

無論、「イエス・キリストを知る」には、すなわち信じるようになるには、キリストについての御言葉を聞く必要がある。「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです」(ローマ 10:17)。キリストへの信仰を持つには、誰かがキリストについての御言葉を伝える必要がある。そこで神は、ピリポをエチオピア人の高官の所まで導き、キリストについての証しをさせたのであった。すると、キリストへの信仰が芽生え、その信仰を告白することで、ようやく救われた自分を自覚できるようになった。そこで聖書は、次のように教えている。

「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです（救いの自覚に至るということ）。」(ローマ 10:9)

※ () は筆者が意味を補足

なぜこの御言葉が、救いの話ではなく、救いの自覚に至る話なのかは、この続きを見れば分かる。

「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」

(ローマ 10:10)

「心に信じて」とは、神の呼びかけに応答することであり、「潜在意識」の話をしている。すると、「義と認められ」とある。これは、神から正しい人として認定されることであり、「永遠のいのち」が与えられる救いを意味する。次に、キリストへの信仰を告白できるようになったなら、「救われる」とある。つまり、ここでは救われることを意味する正式な言葉「義」と、「救われる」とは、区別されているのである。そして、口で告白するのは「顕在意識」なので、「口で告白して救われる」とは、救いの自覚に至ることを意味していることは明らかである。

このように、神の呼びかけに応答し、救われるという話は「潜在意識」での出来事なので、その救いを自覚するには、キリストについての御言葉を聞く必要があるということである。しかし、聞く必要があっても、宣べ伝える人がいなければ聞くことができない。「しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう」(ローマ 10:14)。そこで必要になるの

が、宣べ伝える人である。伝道する人である。それがこの場合、ピリポであったということである。

❖ 伝道する人が必要

伝道というのは、神が救った人を、刈り取ることである。刈り取られると、その人は水のバプテスマへと導かれることになる。あのエチオピア人の高官のように。イエスは、そのことを農業に重ね、次のように言われた。

「あなたがたは、『刈り入れ時が来るまでに、まだ四か月ある』と言ってはいませんか。さあ、わたしの言うことを聞きなさい。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。」（ヨハネ 4:35）

ここでイエスは、伝道は「刈り取り」であると言われた。何を刈り取るかという、神が救った人たちを刈り取るのである。それで、イエスは続けて言われた。

「すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに入れられる実を集めています。それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。」（ヨハネ 4:36）

刈る者とは伝道する者であり、その者はすでに「報酬」を受けているという。その「報酬」とは、「永遠のいのち」のことであり、そこから救いの自覚に至ったことが受けた「報酬」である。つまり、キリストへの信仰を告白できるようになった者たちを指し、「すでに、刈る者は報酬を受け」と言っている。

次に、その者は、「永遠のいのちに入れられる実」を集めるという。「永遠のいのちに入れられる実」とは、「永遠のいのち」を持った者は、「永遠のいのち」であるイエス・キリストを知ろうとするので、「永遠のいのちとは、（中略）イエス・キリストとを知ることです」（ヨハネ 17:3）、イエス・キリストを知ろうとしている人たちを集めるということである。そして、イエスは次の言葉で締め括られた。

「こういうわけで、『ひとりが種を蒔き、ほかの者が刈り取る』ということわざは、ほんとうなのです。わたしは、あなたがたに自分で労苦しなかったものを刈り取らせるために、あなたがたを遣わしました。ほかの人々が労苦して、あなたがたはその労苦の実を得ているのです。」（ヨハネ 4:37-38）

「ひとりが種を蒔き、ほかの者が刈り取る」とは、神が人を救い（永遠のいのちを与え）、人がその実を刈り取るということである。大事なことは、神が人を救うことなので、イエスは続けて、「わたしは、あなたがたに自分で労苦しなかったものを刈り取らせるために、あなたがたを遣わしました」と言われた。そして、その神は三位一体の神であるから、イエスは「ほかの人々が労苦して、あなたがたはその労苦の実を得ている」という言葉で締め括られたのである。

つまり、こういうことである。神は、「神の子」であるキリストによって、私たちをご自分と和解させてくださった。それはすべて、神から出ていた。そして、私たちは神と和解したので、キリストについての御言葉を聞くことで、和解した事実を自覚できるようになった。そこで今度は、私たちが、神と和解している者たちにキリストを宣べ伝えることで、その者たちが和解を自覚できるようにする務めを、神が与えてくださったということである。

「これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。」（Ⅱコリント 5:18）

ただし、誰が神と和解しているかは分からないので、私たちは全世界に出て行き、キリストの福音を宣べ伝えるのである。

「それから、イエスは彼らにこう言われた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」（マルコ 16:15）

このように、神が人を救っても、その救いは人の土台の「神の子」とのやり取りで起きたことなので意識できない。人の土台は「潜在意識」の領域であるため、朽ちない「霊の体」を着せられ、「永遠のいのち」が与えられても意識できない。しかしながら、「永遠のいのち」を持つと、その者は「永遠のいのち」であるイエス・キリストを求めようになるので、その者にキリストについての御言葉を伝えれば、その者はキリストへの信仰を持ち、その信仰を公に告白し、水のバプテスマを受けるのである。この御言葉を伝える作業を「伝道」といい、それは人がする必要があるということである。

以上が、エチオピア人の高官が救われ、水のバプテスマを受けるまでの話の背景である。その背景は、本書で述べてきた救いの話と見事に一致する。というより、述べて

きた救いの話から見ないと、エチオピア人の高官に起きた出来事は説明できない。なぜ彼はエルサレムにまで行き、そこで礼拝をし、聖書を読むようになったのか、そのことの説明がつかない。

大事ななのは、神が人を救い、人は救われた人たちに御言葉を届け、水のバプテスマに導くということである。エチオピア人の高官のように、すんなりとキリストを信じる者もいるが、普通はそうはいかない。キリストの信仰が芽生える「顕在意識」には、神に逆らう「肉の思い」があるからである。そのため、キリストの信仰が芽生えるには、「肉の思い」との激しい葛藤が起きる。その葛藤のせいで、救われても水のバプテスマにまでは至らない人たちもいる。そうであっても、彼らは救われているので、すなわち「永遠のいのち」を持っているので、「神の国」に行くことはできる。

さて、ここでは新たな視点を加えた「神の福音」の総括をしているが、「神の福音」の中で最も大切なことは、キリストを信じている者は、すでに「死」から「いのち」に移されていて、「永遠のいのち」を持っているということである。だが、多くの人には、「永遠のいのち」を持っていることの意味を知らない。そこで、総括の最後は、キリストを信じている者は、「永遠のいのち」を持っていることを述べ、『福音の回復』第一巻【「神の福音」の真実（基礎編）】を閉じたい。

－「永遠のいのち」を持っている－

イエスの弟子であったヨハネは、キリストを信じている者たちに、イエスから教えられた福音を書き送った。その手紙の締め括りに、次のことが書かれている。

「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。」（Ⅰヨハネ 5:13）

この手紙から、キリストを信じている者たちに、神が最も伝えたかったことは何かが分かる。それは、「永遠のいのちを持っている」ということである。そこで、ここでは「永遠のいのち」を持っているということは、一体何を意味するのかを考察する。最初の考察は、「永遠のいのち」を持っているというのは、「この世」が限りなく「**ゼロ**」になる、ということである。

❖ 「この世」が限りなく「ゼロ」になる

初めに数学の話をしたい。1000、100、1、これらは異なる数字であり、1000は100よりも大きく、100は1よりも大きい。数字には範囲があるので、こうした区別ができる。そして、範囲があることを「有限」という。しかし、この数字に対し、範囲のない「無限」という分母が付くとどうなるだろう。分子の1000も100も1も「無限」の分母に対しては限りなく「**ゼロ**」になり、全ては「同じ」になってしまう。「無限」の前では、「有限」の区別はなくなって「同じ」になり、「**ゼロ**」になる。

$$\frac{1000}{\text{無限}} = \frac{100}{\text{無限}} = \frac{1}{\text{無限}} \dots \rightarrow 0$$

ならば、人を支えている分母はどうなっているのだろう。80歳の人の分母は80年であり、40歳の人の分母は40年であり、5歳の人の分母は5年である。生きた年数が、その人を支えてきた分母になる。その分母の上に、日常の出来事が分子として乗っかっている。そのため、長く生きれば生きるだけ分母が大きくなるので、幼かった頃の時間は、あっという間の出来事になる。しかし、幼かった頃は、自分の分母が短かったので、それは長く感じられた日々であった。このことが意味するのは、長生きをし、人生を支える分母が長くなればなるだけ、過去のことは一瞬の出来事になっていくと

いうことである。人生を支える分母が長くなれば、その時々にあった区別もなくなっていくということである。そこで次に、キリスト者の人生を支える分母を見てみよう。

キリストを信じている者は、「死」から「いのち」に移された者である。「死からいのちに移っているのです」(ヨハネ 5:24)。それゆえ、キリストを信じる者は「永遠のいのち」を持っている。「信じる者は永遠のいのちを持っています」(ヨハネ 6:47 新改訳 2017)。それはつまり、自分の人生を支える分母が「無限」になったということである。分母が「無限」になれば、先述したように、「有限」の出来事の区別はなくなり、限りなく「**ゼロ**」になってしまう。「この世」の「有限」の出来事は何であれ「瞬間」になり、何もかもが「同じ」になる。そこでは 100 年生きようが、50 年生きようが、10 年生きようが、そうした時間の差は限りなく「**ゼロ**」でしかない。ただ、1 回生きたということしか残らない。こうして、「この世」は限りなく「**ゼロ**」になる。

このように、「永遠のいのちを持っている」ということは、自分の人生を支える分母が「無限」になったということであり、「無限」になったので、「この世」での出来事は限りなく「**ゼロ**」になったということである。それは、「この世」での「苦しみ」も「失敗」も「**ゼロ**」になるということであり、これを「万事が益となる」という。

❖ 「万事が益となる」

「この世」では、「苦しみ」も「失敗」も存在する。それは数えることができる。だが、自分を支える分母が「有限」から「無限」に変わったことを知るなら、その数はもはや「**ゼロ**」である。「有限」の体を脱ぎ捨てる「終わりの時」が来れば、予め着せられていた朽ちない「霊の体」(永遠のいのち)だけとなるので、そこには「無限」の分母しかないので、数えることができた「苦しみ」も「失敗」も「**ゼロ**」になり、もはや存在しない。こうして、キリスト者には「万事が益となる」ように働くのである。

「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」

(ローマ 8:28 新共同訳)

私たちは、「永遠のいのちを持っている」ことを信仰で「知っています」と言う以上、「万事が益となる」ことへの確信を投げ捨ててはならないのである。「無限」の分母となる「霊の体」(永遠のいのち)だけになる時が来たなら、「苦しみ」も「失敗」も、もはや存在しなくなるというのが神の約束なので、「もはや死もなく、悲しみ、叫び、

苦しみもない」(黙示録 21:4)、その約束のものを実際に見るまでに必要なのは、まさに「忍耐」である。

「ですから、あなたがたの確信を投げ捨ててはなりません。それは大きな報いをもたらすものなのです。あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です。」(ヘブル 10:35-36)

つまり、「霊の体」が暮らす「神の国」に移り住めば、「この世」に於ける「有限」の差は消え去ってしまうということである。身体の差、能力の差、そうした「有限」の差はなくなってしまう。差を持ったのは一回の出来事、「瞬間」になってしまい、差は何であれ「神の国」では消えてしまい「同じ」になる。イエスはまさにそのことを教えるために、朝早くから働こうが、昼から働こうが、夕方の 5 時から働こうが、「神の国」では「同じ」一回の労働でしかないとし、そこでは誰もが一デナリしかもらえないことを譬えで話されたのである(マタイ 20:1-16)。

ということは、生きる分母に「永遠のいのち」を据えられたキリスト者が、「苦しみ」や「失敗」を数え、自分を「ダメな者」と思ってしまうのは誤りでしかない。また、自分が手にした物と人が手にした物とを比べ、自分の方が少ないと嫉妬するのも誤りでしかない。こうした誤りは、自分を支えている「無限」の分母に気づかず、自分が関わる「有限」の分子(出来事)だけを見るために起きてしまう。そこでイエスは、放蕩息子の譬えの中で、父親と一緒にいた兄の話をされた。兄は、畑仕事から疲れて帰ってくると、そこでは放蕩した弟が帰ってきたことを喜び、祝宴が催されていた。兄は、その光景に嫉妬し、腹を立て、家には入らなかった。それで父親が出てきて兄を慰めるが、兄は、自分はこんなに苦勞して父親のために働いているのに、何もくれなかったと訴えた。すると、父親は兄に次のことを言ったのである。

「父は彼に言った。『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』」(ルカ 15:31-32)

ここでの「父親」は神に譬えられ、ここでの「兄」は、神と一緒にいるキリスト者に譬えられている。つまり、神はキリスト者に、「子よ。おまえはいつも私といっしょにいる」と言われたのである。「いっしょにいる」と言われた神は永遠なる方なので、キ

リスト者は「永遠のいのち」を持っているということであり、神であるキリストを着たということである。「キリストをその身に着た」(ガラテヤ 3:27)。それゆえ、神は続けてキリスト者に、「私のものは、全部おまえのものだ」と言われたのであった。

これは、嫉妬して腹を立てるキリスト者に対し、「永遠のいのち」を持っていることを忘れるなという警告である。なぜなら、「永遠のいのち」の前では「有限」の区別はなく、全てが「同じ」だからである。どんなに「有限」の祝福を受け、富を持っていようが、逆に、どんなに嫌われ、貧しかろうが、神が共にいる「永遠のいのち」の前では、差は「**ゼロ**」であり、「同じ」だからである。これを「**万事が益となる**」という。イエスはそのことを、放蕩息子の譬えに出てくる兄の話で教えられたのである。

このように、「永遠のいのちを持っている」ということは、自分の人生を支える分母が「無限」になったということであり、それゆえ、「この世」の全ては「同じ」になり、「**万事が益となる**」ということである。そうである以上、互いの「うわべ」を比べ、比べることで自分の価値を知ろうとすることは無駄でしかない。となれば、「永遠のいのち」という「新しいぶどう酒」は、「新しい皮袋」に入れる必要がある。そこでイエスは、次のような譬えを話された。

❖ 「新しいぶどう酒」は「新しい皮袋」に

「また、だれも新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、ぶどう酒は皮袋を張り裂き、ぶどう酒も皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるのです。」

(マルコ 2:22)

「新しいぶどう酒」とは、何なのだろう。それは「イエス・キリスト」であり、その方による「永遠のいのち」である。「すなわち御子イエス・キリストのうちにいます。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです」(Iヨハネ 5:20)。つまり、この譬えの意味はこうである。キリスト者はキリストを着せられ、「キリストをその身に着た」(ガラテヤ 3:27)、「永遠のいのち」(新しいぶどう酒)を手にしたので、これは「新しい皮袋」に入れなければ、その恵みは何も発揮されないということである。

ならば、「新しい皮袋」とは何なのか。それは、「永遠のいのち」を人生の分母にして生きるということである。そうすれば、「永遠のいのち」の恵みは発揮され、「この世」

の出来事はみな「同じ」になり、「万事が益となる」からである。嫉妬は消え、「苦しみ」も「失敗」も「**ゼロ**」になる。これを「罪が赦される」といい、この恵みを「赦しの恵み」という。要するに、「永遠のいのち」を人生の分母にして生きることが、「新しいぶどう酒」を「新しい皮袋」に入れることであって、それが「赦しの恵み」の中で生きることなのである。

では、手にした「永遠のいのち」を「古い皮袋」に入れるとどうなるのか。「古い皮袋」とは、これまでどおり、生きてきた年数を人生の分母にして生きることである。そのような分母で生きれば、「この世」での「苦しみ」も「失敗」も数えることができ、その大きさも比べられるので、放蕩息子の兄のように嫉妬や怒りを覚えることになる。これでは、「永遠のいのち」の恵みは目の目を見ることもなく、その「宝」は隠されたままとなる。そのことをイエスは、「だれも新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、ぶどう酒は皮袋を張り裂き、ぶどう酒も皮袋もだめになってしまいます」（マルコ 2:22）と言われたのである。

このように、「新しいぶどう酒」である「永遠のいのち」は、「新しい皮袋」に入れなければならない。それは、この世と調子を合わせてきた「古い皮袋」の生き方を捨て、これからは「永遠のいのち」を人生の分母とし、心を新たにすることを意味する。そうすれば、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けられるようになる。

「この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。」

（ローマ 12:2 新改訳 2017）

「完全であるのかを見分けるようになります」というのは、「新しいぶどう酒」である「永遠のいのち」によって、「苦しみ」も「失敗」も「**ゼロ**」になり、「万事が益となる」ことを知ることである。したがって、「永遠のいのちを持っている」ということは、「この世」の「避難場所」を持ったことを意味する。

❖ 「この世」の「避難場所」

「永遠のいのち」（無限）の前では、「この世」での「苦しみ」は限りなく「**ゼロ**」になり、「瞬間」になってしまう。それゆえ、「この世」で「苦しみ」を覚えたなら、直ちに「永遠のいのち」に避難し、自分の身を守るべきである。そうでないと、徹底的に

打ちのめされ、倒されてしまう。しかし、それは倒されたように見えるだけであって、実際は倒されてはいない。かすり傷一つ負わされてはいないので、滅びることはない。というのも、「永遠のいのち」が人生の分母になっているので、見える「有限」の「苦しみ」は限りなく「ゼロ」になり、最後は消えてしまうからである。

「私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。」

(Ⅱ コリント 4:8-9)

まことに「永遠のいのち」が、「この世」の「避難場所」である。このことを知るなら、苦難に襲われたなら、御翼（永遠のいのち）の陰に身を避ければよい。「神よ。あなたの恵みは、なんと尊いことでしょう。人の子らは御翼の陰に身を避けます」(詩篇 36:7)。身を避けなければ、「苦しみ」の中で生涯を終わることになる。そうであっても、「苦しみ」という火の中をくぐりながら、天国には行ける。「もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります」(Ⅰ コリント 3:15)。それは、「永遠のいのち」を持っているからである。そして、「避難場所」に身を避けるというのは、神にあわれみを乞い、神に引き寄せてもらうことである。

このように、「永遠のいのち」は、「この世」の「避難場所」である。この「避難場所」に身を隠し、「永遠のいのち」である「イエス・キリスト」と交わって生きれば、「この方こそ、まことの神、永遠のいのちです」(Ⅰ ヨハネ 5:20)、「この世」の「苦しみ」は「ゼロ」になっていく。しかし、「イエス・キリスト」に身を隠さなければ、「苦しみ」のまま世を去ることになる。無論、「苦しみ」のまま世を去っても、「永遠のいのち」を持っているので天国には行けるが、それはまるで神から頂いた「宝」を地の中に隠しておくようなものである。「あなたの一タラントを地の中に隠しておきました」(マタイ 25:25)。それでもキリスト者は「永遠のいのち」を持っているので、「この世」での生が終われば、「この世」での出来事は限りなく「ゼロ」になって消えていくので、そこには涙も悲しみもない。

❖ 涙も悲しみもない

生きていると、「苦しみ」は終わらない気がする。しかし、それは惑わしであり、真実ではない。真実は、「苦しみ」が幻であって、存在しないということである。神からの

「永遠のいのち」が、「苦しみ」を全て呑み込んでしまうからである。このことは、「この世」と別れを告げ、永遠が支配する「神の国」に移り住めば分かる。そこには、もはや死はなく、悲しみも叫びも「苦しみ」もない。「神の国」に移り住んだことで、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。

「そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」」（黙示録 21:3-4）

そして、キリスト者は、もう「死」から「いのち」に移され、「死からいのちに移っている」（ヨハネ 5:24）、「神の国」のただ中に移り住んでいる。「いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」（ルカ 17:21）。これを、「永遠のいのち」を持っているという。「永遠のいのちを持っている」（Ⅰヨハネ 5:13）。神の目には、これが真実であり、キリスト者にとってもそれが真実である。つまり、見える「この世」は単に幻にすぎない。ただ生まれ持った「死の体」が、しばらくの間「この世」で暮らしているのです、その事実が見えないだけである。よって、この真実は「信仰」で知るしかなく、それを知れば「苦しみ」は解決する。これこそ、神が用意してくださった「脱出の道」であり、神は耐えられないほどの試練に遭わせることはなさらないということである。耐えられるように、試練とともに、「脱出の道」も備えてくださっている。その「脱出の道」が、信仰で知る「永遠のいのち」なのである。

「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」（Ⅰコリント 10:13）

このように、「永遠のいのち」を持っているということの意味は、「苦しみ」は「瞬間」になったということであり、「この世」での「避難場所」を持ったということであり、涙も悲しみもなくなったということなのである。それは、「この世」での「苦しみ」は幻であって、「永遠」の前では、もはや存在しないということである。

❖ 「苦しみ」は幻

神は、なぜ人の罪を赦されるのだろうか。それは、罪は「この世」での出来事だからである。「この世」は「有限」であり、「有限」は「永遠」である神の前では存在しないので、神は人の罪を赦される。その神と、キリスト者はいつも共にいるので、「いつもあなたがたと共にいる」(マタイ 28:20 新共同訳)、神は彼らの罪を赦される。正確に言うと、神の呼びかけに応答し、「永遠のいのち」を与えられてキリスト者になった時、「有限」である「死」は過ぎ去ったので、「死」のとげである罪も過ぎ去り、「死のとげは罪であり」(I コリント 15:56)、罪が赦された。

つまり、「永遠」の中に「有限」の居場所はないのと同様に、キリスト者は「永遠のいのち」を持っているために、「有限」の出来事の罪を所有することができないのである。そこで神は、「わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ」(エレミヤ 31:34) と言い、キリスト者は罪を二度と所有できないことを示された。イエスが次のように言われたのも、「まことに、あなたがたに告げます。人はその犯すどんな罪も赦していただけます」(マルコ 3:28)、そうした理由からである。

そして、「苦しみ」は何であれ神の命令に従えない罪と紐付いているので、「苦しみ」の頂点は紐付いている罪を意識する「罪責感」である。しかし、罪は「有限」の出来事なので、「永遠のいのち」を持つキリスト者には、「苦しみ」はもう幻にすぎない。だが、幻であっても「苦しみ」を覚えるので、それを消すには「永遠のいのち」に、すなわち「イエス・キリスト」に避難しなければならない。これを、神の前で罪を言い表すといい、避難した状態を罪が赦されるという。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」(I ヨハネ 1:9)

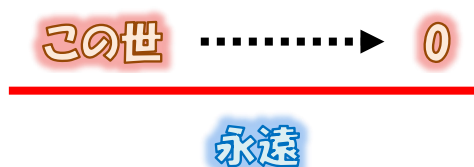
このように、キリスト者は「永遠のいのち」を持った以上、「苦しみ」は幻となった。いつまでも残るものは、「永遠」だけとなった。その「永遠」を、神は朽ちない「霊の体」をキリスト者に着せることで持たせたので、その時点で「有限」の「この世」は「ゼロ」となり、「この世」の「苦しみ」は幻となったのである。

要するに、「この世」でいくら「苦しみ」を積み上げようとも、「この世」でいくら富を積み上げようとも、「この世」でいくら力を獲得しようとも、それは「有限」なので、「永遠」である天よりも高くなることは決してないということである。「有限」は、

何をしても「永遠」には届かないということである。というより、「永遠」から「有限」を見るなら、それはみな同じであり、そこには何の差もない。譬えるなら、地球には高い山も低い山もあり、地球の住人であれば誰もがその違いが分かっても、月から地球を見たなら、その違いはまるで分からないのと同じである。さらに遠くの金星から地球を見たなら、それは「点」でしかない。同様に、「永遠」から「有限」を見れば、それはただの「点」であって、そこには何の差別もない。この地球で確認できる差は、「ゼロ」になる。したがって、地球で見ているものは何であれ幻であり、「この世」は「映画」と同じである。

❖ 「この世」は「映画」と同じ

キリスト者を支える分母は「永遠」であり、キリスト者が生きている「この世」は「永遠」の分母の上に乗る分子であって、それは「有限」なので必ず終わりが来る。であれば、それは「映画」と同じであり、虚構の世界であって実存しないことになる。



「この世」は「映画」と同じように、いつかは全て消えなくなる。「この世」で何を手に入れようとも、それを「神の国」に持っていくことはできないので、「この世」のものは「ゼロ」になる。見ていた太陽も、星も、この地の動きも消えてなくなる。「天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます」(Ⅱペテロ 3:10)。それゆえ、「この世」は「映画」と同じなのである。「この世」という「映画」を観ているときは、自分が「映画」の中の主人公になったかのような気分になるが、その「映画」は必ず終わり、消えてなくなる。

そうである以上、「この世」での「苦しみ」は幻なので、キリスト者からは何も奪い取ることはできない。というより、「この世」でいかなる「苦しみ」に遭おうとも、キリスト者はもう「神の国」のただ中にいるので、「この世」という「映画」の世界で何を失おうとも、髪の毛一筋も失ってはいないのである。「しかし、あなたがたの髪の毛一筋も失われることはありません」(ルカ 21:18)。たとえ何かを奪われたとしても、それは「この世」という「映画」の中で手にしたものが奪われるのであって、奪われたものは初めから幻にすぎない。幻でないのは、神から与えられた「永遠のいのち」であって、それは誰にも奪い去ることはできない。

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」

(ヨハネ 10:28)

とはいえ、現実には、「この世」で手にした安心が奪われると「苦しみ」を覚える。しかし、その「苦しみ」は、キリスト者の中にあつた、神を信頼できないという不純物を取り除き、神により頼む者にしてくれる。それはちょうど、「金」を溶かす「火」と同じある。「火」は「金」を溶かして苦しめるが、「金」自体を奪うことはできず、それどころか、「金」の中にあつた不純物を取り除き、純粋な物にするからである。同様に、「この世」という「映画」を見ている中で生じる「苦しみ」は、その「火」と全く同じ働きをする。「苦しみ」は人を絶望に追い込み、死をも覚悟させるが、「この世」を信頼するという不純物を取り除き、神により頼む者としてくれるからである。

「ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。」

(Ⅱコリント 1:9)

こうして、「苦しみ」は、人の中にあつた不信仰という不純物を取り除いてしまう。それゆえ、「この世」での「苦しみ」は、不純物を溶かす「火」と同じであり、それは信仰を試す燃えさかる「火の試練」である。この「火の試練」のおかげで、「この世」の暮らしの「映画」が終われば、キリストと共に喜びおどる者になれる。

「愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びおどる者となるためです。」

(Ⅰペテロ 4:12-13)

まことに私たちは、「映画」の中の主人公と同じなのである。「映画」の主人公は苦しめられ、死を覚悟するほどに絶望に追い込まれるが、必ず勝利を得て「映画」が終わるからである。私たちも、「この世」では苦しめられるが、最後は喜びおどるほどの圧倒的な勝利が待っている。「しかし、これらすべてにおいても、私たちを愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です」(ローマ 8:37 新改訳 2017)。その

ため、「この世」で「苦しみ」を覚えても、それは私たちの中にあった不信仰を取り除き、神を信頼する者にしてくれるだけであって、私たちからは何も奪い取れない。それで神は、「苦しみ」を「恐れることはない」と励ましてくださる。

「恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな、わたしはあなたの神。勢いを与えてあなたを助け／わたしの救いの右の手であなたを支える。」（イザヤ 41:10 新共同訳）

このように、キリスト者は「永遠のいのち」をすでに着せられた勝利者なのであって、「神の国」に生きている。そのため、「この世」を「恐れることはない」と神は言われる。つまり、キリスト者にとって「この世」は「映画」の主人公と同じであり、必ず勝利者となって「この世」は終わる。それが「復活」である。「復活」と同時に、「この世」の一切は消えてなくなる。それはまるで、「映画」が終わるように、である。そうである以上、キリスト者は「この世」では旅人であり、寄留者なのである。

「これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。」（ヘブル 11:13）

「この世」では旅人であり寄留者であれば、キリスト者にとって「この世」の「苦しみ」は軽い患難でしかなく、むしろ神の重い永遠の栄光をもたらしてくれる架け橋である。

「今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。」（Ⅱコリント 4:17）

「重い永遠の栄光をもたらす」とは、「苦しみ」となる「患難」は、「希望」を得させる架け橋であるということである。なぜそうなのか、次にそれを説明したい。

❖ 「患難」は「希望」を得させる

私たちは「永遠」なるものを、実は朽ちない「霊の体」（永遠のいのち）を着せられる以前から持っている。それは神の「いのち」となる「魂」であり、それが私たちの土台である。その土台の「永遠」が、この「有限」の体の中に隠されている。正確に言えば、それは隠されているのではなく、悪魔の仕業で「死」が入り込み、人の体が「有

限」になったため、土台の「永遠」が見えなくなったのである。見えないだけで、誰もが、自分の内側に「永遠」という「宝」を持っている。

そして、その「宝」は、神の友と呼ばれる関係を築かせる、「彼は神の友と呼ばれたのです」（ヤコブ 2:23）、「いのちの木」の「種」である。ただし、その「種」は、神が人の体に吹き込まれた「いのちの“息”」なので、「いのちの息を吹き込まれた」（創世記 2:7）、もし“息”が芽を出さないまま、「有限」となった塵の体が大地に帰れば、「種」である“息”は神に帰る。「塵は元の大地に帰り、息はこれを与えた神に帰る」（伝道者 12:7 聖書協会共同訳）。すると、人はその時点で土台を失い消滅する。それゆえ、体が大地に帰るまでに、「種」を発芽させてもらう必要がある。それは、朽ちない「霊の体」を着せてもらうということである（本書 83 頁「一究極の問題一」）。ならば、何が「種」を発芽させるのだろうか。

植物の「種」の場合は、水が外部からの「**圧力**」となって「種」を発芽させるように、誰もが自分の内側に初めから持っている「永遠」という「種」を発芽させるには、外部からの「**圧力**」が必要になる。その「**圧力**」が「患難」である。「患難」が、それまで聞こえていた「この世」の様々な音を消し、自分の内側の「永遠」から発せられている音を聞こえるようにしてくれるので、そこに発芽のチャンスが訪れる。どういうことなのか、もう少し丁寧に説明しよう。

「この世」からは、様々な音が聞こえてくる。「これを手にすれば、幸せになれる」、「こうすれば成功する」、「これを買えば災いに遭わない」、「これをすれば罰が当たる」といった具合に、様々な音が聞こえてくる。テレビからも、友達のメールからも、家族の会話からも、様々な音が聞こえてくる。普段は、それが当たり前であり、そうした音を聞きながら生きることが人の楽しみになっている。しかし、その楽しみの中では、自分の内側の「永遠」には目が向かないので、内側にある「種」は発芽しない。それゆえ、「種」からすると、「この世」から聞こえてくる音は「雑音」であり、「種」が発芽するには「雑音」を消す外部からの「**圧力**」が必要になる。植物の「種」を発芽させるには外部からの**圧力**が必要なように、「この世」から聞こえてくる「雑音」を消す「**圧力**」が必要になる。それが「患難」である。

「患難」は、まさしく人を苦しめる外部からの「**圧力**」であり、「この世」の「雑音」を消してしまう。というのも、「患難」に遭うと、それまでは楽しかった「この世」の音が、もう耳には入らなくなるからである。「患難」の「**苦しみ**」によって、「この世」

の音はどうしてもよい「雑音」になる。例えば、命の危険を覚えれば、「この世」の音はどうしてもよくなる。すると、自分の内側にある「種」、すなわち「いのちの“息”」である「魂」からの呼びかけが聞こえてくる。心の奥から、「この御手に握まりなさい。そうすれば大丈夫だから」という呼びかけが聞こえてくる。この呼びかけを信じ、御手に握まるなら「種」が発芽する。それは「種」に、朽ちない「霊の体」（永遠のいのち）が着せられるということである。こうして、神に捕らえられキリスト者になる。

ところが、キリスト者になっても「この世」で暮らしているのだから、再び「この世」の音が聞こえてくる。すると、それを聞いて生きることが再び楽しみとなる。そうになると、再び心の奥からの神の呼びかけが聞こえなくなる。しかし、再び「患難」に出遭うと、「患難」による「苦しみ」が「**圧力**」となって、再び「この世」の音を「雑音」にし、それを聞こえなくさせてくれる。そのことで、「この御手に握まりなさい。そうすれば大丈夫だから」という、心の奥からの神の呼びかけが再び聞こえてくるので、それに握まることで先に発芽した「種」は成長を開始する。それは、神の友と呼ばれる関係を目指し、「彼は神の友と呼ばれたのです」（ヤコブ 2:23）、神と人との距離が縮まっていくということである。これを、着せられた「永遠のいのち」が豊かになっていくという。それでイエスは、「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」（ヨハネ 10:10）と言われたのである。着せられた「永遠のいのち」は、まさに「患難」によって豊かになっていく。

したがって、キリスト者は「永遠のいのち」を持っただけでいるが、それが豊かに成長し、神と人との距離が縮まっていくには、「患難」という「**圧力**」が必要である。それはちょうど、水を高く押し上げるには「**圧力**」が必要なのと同じである。その「**圧力**」が「患難」であり、「患難」によって苦しめられれば苦しめられるほど、人は自分の「弱さ」を知り、神にあわれみを乞うことができるので、その「弱さ」のうちに神が働き、人は高く押し上げられ、強くされるのである。「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」（Ⅱコリント 12:9）。それゆえ、「患難」に出会ったなら喜ばばよい。それが忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が「希望」を得させるからである。

「そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」（ローマ 5:3-4）

このように、「永遠のいのち」を持つ者に於ける「患難」は、すなわち「苦しみ」は、「希望」を得させる養育係である。それゆえ聖書には、「私は苦しみの中に【主】を呼び求め、助けを求めてわが神に叫んだ」（詩篇 18:6）とあり、「この苦しみのときに、彼らが【主】に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救い出された」（詩篇 107:6）とあり、「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」（詩篇 119:71）とあり、「苦しみのうちに、私が【主】に呼ばわると、主は私に答えられた」（詩篇 120:1）とある。このことが分かれば、福音の「第三ステージ」で述べてきた、神は「患難」を静観される話にも納得がいくはずである（本書 250 頁「「患難」を「静観」する」）。つまり、「患難」は「順風」になる。

❖ 「逆風」は「順風」になる

人は「患難」を「逆風」と呼び、どうすればこの「逆風」が「順風」になるかと考える。人はこれを、「ピンチはチャンス」と言い、必死になって「逆風」を乗り越えられる道を模索する。問題は、その道を「この世」に、すなわち「時間性」の中に見つけようとするものである。例えば、金銭に困るという「逆風」に遭うと、どうすればお金が手に入るかと考え、金銭の「逆風」を乗り越えようとする。周りから悪く言われる「逆風」に遭うと、どうすれば良く思われるかと考え、悪く言われる「逆風」を乗り越えようとする。仕事に行き詰まる「逆風」に遭うと、どうすればお仕事が上手くいくかと考え、行き詰まる「逆風」を乗り越えようとする。そのようにして、人が暮らす「時間性」の中に新たな道を探し、見える「逆風」を「順風」にしようとする。しかし、それは誤りである。そこで、少しその話をしたい。

「逆風」を「順風」にするのは、「時間性」の中に新たな道を見つけることではない。そうではなく、それは「向きを変える」ことである。というのも、自分が進む向きを 180 度変えさせれば、「逆風」は一瞬にして「順風」になるからである。つまり、「逆風」か「順風」かを決定するのは人生の「目標」である。人生の「目標」が何であるかで、その風は、「逆風」にも「順風」にもなるのである。そして、人が目指す「目標」は多くあるようだが、実は二種類しかない。

一つは、「時間性」を目指すことである。例えば、人は「この世」での成功を目指す。「この世」で評価され、愛されることを目指す。そのために、自分は何ができるかを考え、それを自分の「目標」にする。こうした「目標」は何であれ、「この世」に於ける「時間性」での出来事なので、それを「時間性」を目指すといい、「この世」の富を目指すという。それを、人は自力で目指すのである。しかし、「時間性」の中の何を「目

標」にしようとも、最後は必ず死という行き止まりにぶつかってしまうので、それはただ滅びに向かっているにすぎない。

二つ目の目標は、「永遠性」を目指すことである。それは、神の規定に従って生きることである。その規定は、「あなたがたはキリストのからだ」（Ⅰコリント 12:27）であり、神がぶどうの木であれば、「あなたがたは枝です」（ヨハネ 15:5）である。それはつまり、あなたはもう「神の国」の住人であるということである。「神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」（ルカ 17:21）。この規定に従って生き、神に近づくことを「永遠性」を目指すという。その「永遠性」である神の具現化が「教会」なので、「教会はキリストの体」（エペソ 1:23 新共同訳）、それは「教会」を愛する「目標」である。また、その「永遠性」である神は「愛」なので、「神は愛です」（Ⅰヨハネ 4:16）、神と人を愛する「愛」を「目標」にすることである。

見てきたように、目指す「目標」は二種類しかない。一つは滅びに向かう「時間性」に於ける「目標」であり、もう一つは神に近づく「永遠性」に於ける「目標」である。とはいえ、人が生まれながらに目指す「目標」は「時間性」である。誰もが滅びに向かう「時間性」に支配されているので、誰もが自力で生きることを目指し、富の獲得を「目標」に生きている。しかし、「この世」を支配する「時間性」は、人が手にした富を少しずつ奪っていくので、例えば健康を奪い、可能性を奪い、お金を奪い、評判を奪っていくので、人はそれを「患難」と呼び、「逆風」と呼ぶ。人は、この「逆風」に苦しむ。ところが、「永遠性」が「目標」になると、その「逆風」は「順風」になる。なぜなら、獲得した富を失えば失うだけ、心は目指す「永遠性」に向けられるようになるからである。それでイエスは、何かを失う「患難」は「逆風」に見えても、「永遠性」を目指す者には幸いであり、それは「順風」だと言われたのである。

「貧しい者は幸いです。神の国はあなたがたのものだから。いま飢えている者は幸いです。やがてあなたがたは満ち足りるから。いま泣く者は幸いです。やがてあなたがたは笑うから。人の子のため、人々があなたがたを憎むとき、あなたがたを除名し、辱め、あなたがたの名をあしざまにけなすとき、あなたがたは幸いです。その日には喜びなさい、おどり上がって喜びなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。彼らの父祖たちも、預言者たちに同じことをしたのです。」（ルカ 6:20-23）

逆に、「この世」で安心できる富を獲得できることは「順風」に思えるが、それは心を神に向けさせなくするので「逆風」であり、哀れでしかないといエスは言われた。

「しかし、あなたがた富む者は哀れです。慰めをすでに受けているから。いま食べ飽きているあなたがたは哀れです。やがて飢えるようになるから。いま笑うあなたがたは哀れです。やがて悲しみ泣くようになるから。みなの人々がほめるとき、あなたがたは哀れです。彼らの父祖たちも、にせ預言者たちに同じことをしたのです。」(ルカ 6:24-26)

イエスはさらに続けて、「目標」は「永遠性」であるべきことを話された。それは、いつまでも残る「愛」を「目標」にして生きることだと言われた。

「しかし、いま聞いているあなたがたに、わたしはこう言います。あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行いなさい。あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい。」(ルカ 6:27-28)

そしてイエスは、「愛」を「目標」に生きることの具体例を続けて話された。そうすれば、「この世」で「患難」に遭っても、それは「順風」になるということである。

このように、「逆風」か「順風」かを決めるのは「目標」である。「永遠性」を「目標」とし、いつまでも残る「愛」を目指すなら、獲得した何かを失う「この世」での「患難」は、「逆風」ではなく「順風」となる。「患難」の「苦しみ」が、「希望」を得させることになる。それゆえ、「この世」で、何かを失う「苦しみ」に遭ったなら、心の向きを「永遠性」に向ければよい。人が暮らす「時間性」の中に新たな道を探すのではなく、心を神に向ければよい。

具体的には、いつまでも残る「愛」を「目標」にすればよい。キリスト者は「永遠のいのち」を持っていて、その「永遠のいのち」は神に向かっているので、「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっている」(ローマ 11:36 新共同訳)、すなわち「愛」を目指しているので、「神は愛です」(Iヨハネ 4:16)、そのことに気づけばよい。キリスト者は「永遠のいのち」という「イエス・キリスト」の舟に乗ったので、否が応でも「神の国」に行くので、「神の国」とその義を求めればよい。「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい」(マタイ 6:33)。そうすれば、「この世」で現実に遭遇する「患難」による「苦しみ」は、「希望」に向かう「順風」にな

る。「この世」での「苦しみ」（患難）は、神に対する信仰への不純物を溶かす「火」となり、そこに純粋な信仰が生まれ、揺るぎない「希望」が生まれる。

「そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」（ローマ 5:3-4）

こうして、「患難」という「**圧力**」によって心を神に向けると、「苦しみ」をもたらす「逆風」であった「患難」は一変し、「希望」をもたらす「順風」となる。そうになると、「この世」はどうでもよくなる。

❖ どうでもよくなる

何をしようとも、何を体験しようとも、何を持っていようとも、キリスト者は「イエス・キリスト」の舟に乗ったので、その舟が向かう先にしか行けない。それは「神の国」であり、そこでは顔と顔を合わせてキリストに出会う。その「神の国」は「永遠性」なので、「時間性」のものは何も持ち込めない。「この世」で獲得した富は、全て捨てなければならない。そうである以上、ゴールの「神の国」に心を向けるなら、「この世」で獲得した富はどうでもよくなる。それはちょうど、医者から、あと一日しか生きられないと告げられたなら、「この世」での思い煩いはどうでもよくなるのと同じである。なぜなら、思い煩ったからといって、「この世」のものは何であれ失うからである。それでイエスは、何もかも失うことが確定している私たちに対し、次のように言われたのである。

「だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦労は、その日一日だけで十分である。」

（マタイ 6:34 口語訳）

さらに言えば、キリスト者の場合、「この世」のものを、すなわち「時間性」のものを全て失うことは、自分の姿が「永遠性」だけになることを意味する。それは、主と同じ栄光を輝かせた姿になるということである。それゆえ、キリスト者は「患難」によって「時間性」のものを少しずつ失っても、さらには肉体の死を以て全てを失っても、それは栄光の姿に付いていた泥が少しずつ洗い流され、栄光から栄光へと、主と同じ姿が現れるということなのである。「栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます」（Ⅱコリント 3:18）。そうならば、見えなかったキリストが見えるよ

うになる。そのことの喜びが、失うことで覚えた「苦しみ」の一切を払拭してしまうので、イエスはこう言われたのであった。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたは泣き、嘆き悲しむが、世は喜ぶのです。あなたがたは悲しむが、しかし、あなたがたの悲しみは喜びに変わります。女が子を産むときには、その時が来たので苦しみます。しかし、子を産んでしまうと、ひとりの人が世に生まれた喜びのために、もはやその激しい苦痛を忘れてしまいます。」(ヨハネ 16:20-21)

これは、イエスがご自分は十字架で殺されるが、よみがえり、再び会う日が来ることの喜びを語ったものである。私たちも、よみがえられた主と「神の国」で会えるので、正確に言うと、自分を支えてくださっている神が見えなかったのが、見えるようになるので、イエスが言われるように、主と会える喜びは「この世」で覚えた一切の「苦しみ」を凌駕してしまう。そうである以上、「この世」で体験する「苦しみ」だけでなく、「この世」で体験する能力の違いによる「差別」、「この世」で体験する「賞賛」、「この世」で獲得する「富」、そうしたものの全てが主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさゆえに、ちりあくたに思えてくるのである。

「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。」(ピリピ 3:8)

ここにこそ、「この世」に於ける思い煩いの解決がある。それは、与えられた「永遠のいのち」に心が向くなら、すなわちイエス・キリストに心が向くなら、「この世」の出来事は「ちりあくた」となり、どうでもよくなるということである。心を「主」に向けるなら、思い煩いの覆いを取り去られるということである。「主の方に向き直れば、覆いは取り去られます」(Ⅱコリント 3:16 新共同訳)。

そこでもう一度言うが、キリスト者は「死」から「いのち」に移された者である。朽ちない「霊の体」を着せられ、「永遠のいのち」を持っている者である。平たく言えば、死後に天国へ行くことが確定した者である。「死」に勝利し、復活することが確定した者であり、主キリスト・イエスによって、勝利を与えられた者である。聖書はそれを、次のように教えている。

「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」死のとげは罪であり、罪の力は律法です。しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」（Ⅰコリント 15:55-57）

したがって、私たちは、今すでに神の子どもなのである。キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることが分かっている。なぜなら、その時、私たちはキリストのありのままの姿を見るからである。

「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」（Ⅰヨハネ 3:2）

このように、キリスト者に用意されているゴールは、「キリストに似た者となる」ことであり、「キリストのありのままの姿を見る」ことなので、そのことの喜びによって、「この世」の出来事は「ちりあくた」となる。「この世」のことは、どうでもよくなる。これこそが、「万事が益となる」である。「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ

を、わたしたちは知っています」（ローマ 8:28 新共同訳）。全ては、「永遠のいのち」を持っているからそうなる。しかし、キリスト者はこの「永遠のいのち」の恵みに気づかない。

❖ 恵みに気づかない

見てきたように、「永遠のいのち」を持っているというのは素晴らしい恵みであって、その恵みに気づけば、「この世」のものはどうでもよくなる。「永遠のいのち」は、まさしく何かを奪う「患難」を、「希望」を得させる養育係にし、「患難」という「逆風」を「順風」にしてしまう。そのことで、「この世」の思い煩いを取り去ってしまい、「この世」での「苦しみ」を「ちりあくた」にしてしまう。

すると、自分の現状は、どうでもよくなる。自分の現状をどれだけ嘆こうとも、この「血肉の体」では、「神の国」に一步たりとも入れないからである。「血肉のからだは神の国を相続できません」（Ⅰコリント 15:50）。入れるのは、着せられた「霊の体」だけであり、それは比べようのない完璧な「キリストの体」の部分であり、このキリストを着た者だけが「神の国」に入れる。そこには、「血肉の体」による姿は全く存在し

ない。そうであれば、「血肉の体」の現状を嘆くだけ時間の無駄である。「血肉の体」を少しでも良く見せようとし、そこで何を着ようか、何を食べようかと思い煩ったところで無駄である。それでイエスは、こう言われたのであった。

「だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。」（マタイ 6:25）

しかし、キリスト者はこの「永遠のいのち」の恵みに気づかない。そのため、何を着ようか、何を食べようかと思い煩ってしまう。では、どうすれば気づけるのだろう。それは、心の向きを変えるしかない。「時間性」から「永遠性」に変え、「神の国」とその義をまず第一に求められるしかない。それでイエスは続けて、「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい」（マタイ 6:33）と言われたのである。

このように、私たちは「永遠のいのち」が与えられた恵みに気づいていないので、日々思い煩って生きてしまう。何かを失う「患難」に「苦しみ」を覚え、それを「逆風」として捉えてしまう。すると今度は、「時間性」の中に新たな道を探し、それを以て「逆風」を乗り越えようとしてしまう。だが、「逆風」の「苦しみ」は、人生の「目標」が間違っていることを教える「心の声」である。それは、神が発信する「神の声」である。ゆえに、「心の声」に聞き従い、「目標」の舵を「永遠性」に取れば、途端に「逆風」は「順風」になる。暴風は、なぎになる。「苦しみ」を覚えたなら、心の向きを変える「心のハンドル」を、「永遠性」に向けるのである。

しかし、「心のハンドル」を回すのはあまりにも重く、とても自力では不可能であることに人は気づく。だが気づけば、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」（ルカ 18:13）と祈ることができ、それこそが心を「永遠性」に向けることを意味する。なぜなら、祈ることで神が「心のハンドル」を一緒に回し、「逆風」を「順風」に変えてくださるからである。そのようにして、神は人の心を「永遠性」に向け、神の方に引き寄せてくださる。すなわち、神にあわれみを乞うことが、そのまま「（心の）向きを変える」ことになる。これこそが重要なので、「（心の）向きを変えよ」と、イエスは繰り返し言われたのであった。

❖ 「向きを変えよ」

イエスの言われた「向きを変えよ」は、「メタノエオー」[μετανοέω]の命令形であり、昔から「悔い改めよ」という意味に訳されてきた。「反省せよ」という意味に訳されてきた。そしていつの間にか、「罪を悔い改めよ」という話になった。だが、新約聖書のどこにも、「罪を悔い改めよ」というフレーズはない。あるのは、ただ「(心の) 向きを変えよ」である。イエスが言われたことは、「神の国」が来たので、心の向きを変え、福音を信じなさいである。これこそ、イエスが宣教を開始された際の第一声であった。

「時が満ち、神の国は来た。(心の) 向きを変えて、福音を信じなさい。」

(マルコ 1:15 私訳) ※ () は筆者が意味を補足

この第一声は一般に、「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ 1:15)と訳されるが、「悔い改めて」と訳された箇所は「メタノエオー」であり、それは物理的に向きを変えるという意味でしかない。ただそれは人の力ではできないので、イエスは、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」(ルカ 18:13)と祈る者が心の向きを変えられ、義とされると言われた。「あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました」(ルカ 18:14)。

そもそも「神の福音」は「永遠性」なので、「時間性」を「目標」に生きる限り、「永遠性」の福音を信じることなどできない。「永遠性」の福音を信じるには、「時間性」を「目標」に生きることをやめ、「永遠性」を「目標」に生きるしかない。であれば、イエスが言われた「福音を信じなさい」とは、これまでの「時間性」から「永遠性」へと「(心の) 向きを変えなさい」という意味である。それでイエスは、命令形で「メタノエオー」と言われたのであった。「(心の) 向きを変える」(メタノエオー)ことが、そのまま「神の福音」を信じることになるからである。言い換えれば、「罪を反省する」ことが、「罪を悔い改める」ことが、「神の福音」を信じることなのではない。「神の福音」を信じるとは、ただ神にあわれみを乞うことなのである。

実際、イエスを裏切ったユダは、大いに自分の罪を後悔した。「そのとき、イエスを売ったユダは、イエスが罪に定められたのを知って後悔し、銀貨三十枚を、祭司長、長老たちに返して、「私は罪を犯した。罪のない人の血を売ったりして」と言った」(マタイ 27:3-4)。しかし、ユダはイエスが言われた、罪が赦される福音を信じなかった。ので、イエスのもとには帰らず、自らの命を絶った。

ちなみに、ここで「後悔し」と訳されているギリシャ語は「メタメロマイ」[μεταμέλομαι]であり、立ち返ること（向きを変えること）を意味する「メタノエオー」とは違う。「メタメロマイ」は、「後悔する」、「悔い改める」を言い表す言葉であるため、この言葉の命令形であれば「悔い改めよ」と訳せる。しかし、イエスが言われたのは「メタノエオー」の命令形であり、それは「(心の) 向きを変えよ」であって、「悔い改めよ」ではない。聖書は、この二つの言葉を明確に使い分けている。ところが、「(心の) 向きを変えよ」の「メタノエオー」は、「悔い改めよ」の「メタメロマイ」として訳されるのが日常化してしまった。そのために、誤解が生じるようになった。それについては、『福音の回復』第二巻で詳しく説明する。

このように、大事なことは「(心の) 向きを変える」ことである。それは、神にあわれみを乞うことである。それによって、心は神の「永遠性」に向き、神を愛することを目指せるようになる。そうすると、「この世」の全ては逆さになってしまう。「逆風」は「順風」になり、「貧しい者」は「富む者」になり、「罪人」は「義人」になる。この逆さになった世界こそ、真実な世界であることを知るようになる。それを教えてくださったのが、イエス・キリストである。そして、真実な世界を見せてくれるのは、神によって着せられた「霊の体」であり、「永遠のいのち」なのである。

以上が、「永遠のいのち」を持っているということの考察である。では、その考察の総括をしたい。

❖ 考察の総括

「永遠のいのち」を持っているというのは、このとおり驚くべき恵みである。それで、弟子のヨハネは神の霊に導かれて書き綴った手紙の目的を、「あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです」（Ⅰヨハネ 5:13）と書いたのである。この驚くべき恵みに、私たちは気づいているだろうか。あの放蕩息子の譬えの兄のように、気づいてはいないのではないだろうか。未だに「新しいぶどう酒」を、「古い皮袋」に入れているのではないだろうか。もしそうなら、それは未だに「肉に属する人」として生きている。これを、キリストにある「幼子」という。

「さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました」（Ⅰコリント 3:1）

自分が「肉に属する人」かどうかは、簡単に見極められる。それは、ねたみや争いがあれば「肉に属する人」である。「あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているではありませんか」(Ⅰコリント 3:3)。どうしてそうなのかと言え、キリスト者は、人生の分母が「永遠のいのち」という「無限」になったので、「この世」は「**ゼロ**」になり、「同じ」になり、もう違いを比べられなくなったからである。にもかかわらず、未だに互いを比べ、ねたみや争いがあれば、「永遠のいのち」という「新しいぶどう酒」を「古い皮袋」に入れているのである。

「古い皮袋」に入れるとは、神から頂いた「新しいぶどう酒」である「永遠のいのち」を分母にして「この世」を見るのではなく、これまでどおり、「有限」の命を分母にして「この世」を見ることである。これを、心に覆いが掛かっているという。「いつでも彼らの心には覆いが掛かっています」(Ⅱコリント 3:15 新共同訳)。しかし、この覆いも、心を主に向けるなら取り去られる。「しかし、主の方に向き直れば、覆いは取り去られます」(Ⅱコリント 3:16 新共同訳)。心を主に向けるとは、心を「イエス・キリスト」に向けるということであり、それは持っている「永遠のいのち」に目を向けるということである。「すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです」(Ⅰヨハネ 5:20)。

ただし、それは自力ではできないので、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」(ルカ 18:13)と祈り、神に助けをもらうことが心を主に向けることになる。さらに言えば、それは「**苦しみ**」を主に言い表すことであり、「苦しみ」は罪の意識化なので、それは自分の罪を言い表すことでもある。

いずれにせよ、「神の福音」の中で最も大切なことは、キリストを信じている者は、すでに「死」から「いのち」に移されていて、「永遠のいのち」を持っているということである。すでに、「死」から「いのち」に移った状態にあるということである。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、すでに死からいのちに移った状態にあるのです。」

(ヨハネ 5:24 私訳)

このように、キリスト者は「永遠のいのち」を持っている。それは、驚くべき恵みを持っているということである。それは、「この世」を「**ゼロ**」にする恵みであり、これを「赦しの恵み」という。

この素晴らしい恵みに気づき、それを書き綴ったのが、キェルケゴールであった。それゆえ、この恵みの素晴らしさを書くに当たっては、特にキェルケゴールの以下の書籍が大いに参考になった（『キェルケゴールの講話・遺稿集 5』の中の「キリスト教的講話 2」新地書房）。キェルケゴールは実存主義哲学の先駆者であり、実存主義とは、人間の実存を哲学の中心に置く思想である。ただ注意がいるのは、キェルケゴールに於ける人間の実存とは、神の存在が人間の実存の基盤であるとする考えであって、サルトルのように神を否定する実存ではない。

これで『福音の回復』第一巻、【「神の福音」の真実（基礎編）】は終了する。そこで、「神の福音」の真実を最後に一言で言い表すなら、それは、「否定」の「否定」である。人の価値を「否定」するものを神が「否定」すること、それが福音の真実である。

「神の福音」の真実 → 否定 の 否定

次は第二巻、【「神の福音」の真実（応用編）】である。そこでは、第一巻で述べてきた「神の福音」の真実を別の視点から深く掘り下げ、論じていく。